佐賀県文化財調査報告書第123集

筑後川下流用水事業に係る
文化財調査報告書 4

吉野ヶ里遺跡

吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区（吉野ヶ里丘陵遺跡）

吉野ヶ里地区Ⅴ区（馬郡遺跡４区）

太田本村遺跡３区

原の町西遺跡

1994年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第123集

筑後川下流用水事業に係る
文化財調査報告書４

吉野ヶ里遺跡

吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区（吉野ヶ里丘陵遺跡）
吉野ヶ里地区Ⅴ区（馬郡遺跡４区）

太田本村遺跡３区

原の町西遺跡

1994年3月
佐賀県教育委員会

序

この調査報告書は、佐賀県教育委員会が水資源開発公団の委託を受けて、昭和56年度から実施している筑後川下流用水事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録の一部で、昭和60・61・62年度及び平成２年度に発掘調査を行った神埼町・三田川町・諸富町・千代田町に所在する吉野ヶ里遺跡・太田本村遺跡３区・原の町西遺跡に関するものです。

調査の結果、弥生時代から近世にかけての住居・墳墓等の遺構が明らかになったほか、土器・石器・木製品等の当時の暮らしぶりを生々しく伝える多数の遺物が出土しました。

調査の成果は本書に詳しいところですが、その内容が学術文化の向上に寄与するとともに、県民の皆様が郷土の歴史と文化財を愛し、守っていくための資料として広く活用して頂ければ幸いに存じます。

なお、発刊にあたり、地元の皆様をはじめとする関係各位から賜った深い御理解と多大な御協力に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成６年３月

佐賀県教育委員会

教育長　堤　清行

例　　言

1．本報告書は筑後川下流用水事業に伴う事前調査のうち、昭和60・61年度及び平成２年度に発掘調査を行った、神埼郡三田川町・神埼町所在の吉野ヶ里遺跡、佐賀郡諸富町所在の太田本村遺跡３区、神埼郡千代田町所在の原の町西遺跡の調査報告書である。

2．発掘調査は水資源開発公団の委託を受けて佐賀県教育委員会が実施した。

3．発掘調査にあたって、三田川町・神埼町・諸富町・千代田町の各教育委員会・土地改良課、並びに地元の方々の協力を得た。

4．本書の執筆分担は、次のとおりである。

○ 太田本村遺跡３区Ⅲ－１.遺構・・・高瀬哲郎

○ 第Ⅰ章 調査の概要、原の町西遺跡Ⅱ－２.遺物・・・川副麻理子

○ その他・・・ 市川浩文

5．調査記録の整理と報告書作成作業は佐賀県文化財課で行った。

遺構実測：梅野澄子・陣内康光・東中川忠美・宮武正登・三好文子・森田孝志

遺物整理：田中ハルミ・中島美須三・中村三千代・馬場泰子・毛利美代子・山本美代子

遺物実測：市川浩文・岩井祥子・梅野澄子・江島美恵子・鹿子知美・神田浩子・久保泰枝・上瀧光子・鳥谷智子・三好文子・山口美佐子・江副朋子・鶴田啓子・光石逸子・村里育子・吉田雅子

製　　図：市川浩文・江島美恵子・江副朋子・鶴田啓子・光石逸子・三好文子・村里育子・山口美佐子

遺構写真撮影：東中川忠美・宮武正登・森田孝志

遺物写真撮影：市川浩文・古賀栄子・高瀬哲郎・久山高史・松尾直子

写真現像焼付：黒木優子・古賀栄子

6．報告書作成に際して下記の方々から指導・助言・協力を得た。

桑原幸則・草野誠司・七田忠昭・徳永貞紹・宮武正登・森田孝志・吉本健一

（順不同、敬称略）

7．遺構は遺跡毎に一連番号を付け、ＳＢ：住居跡、ＳＥ：井戸、ＳＤ：溝、ＳＫ：土壙、ＳＪ：甕棺墓、ＳＰ：土壙墓、Ｐ，Pit：柱穴・小穴、ＳＸ：不明遺壙の略号を用いて標記した。

8．寸法の表示に用いた単位は、遺構がｍ、遺物がcmである。

9．方位は、太田本村遺跡が座標北（G.N.）、他は総て磁北である。

10．遺物実測図のうち、断面塗り潰しは須恵器、断面トーンは瓦器、器面トーンは黒色土器あるいは赤色顔料等を塗布したものを表す。

11.本書の編集は、百崎正子の協力を得て、市川・川副が行った。

目　　次

第Ⅰ章．調査の概要
1．調査の経過 ……2
2．調査の組織 ……2
3．発掘調査の概要 ……3
第Ⅱ章．遺跡各説 ……5
吉野ヶ里遺跡 ……5
Ⅰ.地理的・歴史的環境 ……6
Ⅱ.遺跡の概要 ……11
Ⅲ.調査の内容 ……14
［吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区］
1．吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区の遺構と遺物 ……14
（1）溝 ……17
（2）墳墓 ……46
（3）竪穴住居・土壙 ……61
（4）その他の出土遺物 ……68
［吉野ヶ里地区Ⅴ区］
2．吉野ヶ里地区Ⅴ区の遺構と遺物 ……77
（1）遺構 ……77
① 竪穴住居・掘立柱建物 ……81
② 掘立柱建物 ……82
③ 土壙 ……83
（2）遺物 ……87
① 土壙出土遺物 ……87
② 小穴出土遺物 ……90
③ 検出面出土遺物 ……94
Ⅳ．結語 ……97

太田本村遺跡３区 ……103
Ⅰ．遺跡の立地と環境 ……104
Ⅱ．遺跡の概要 ……105

Ⅲ．調査の内容 ……109
1．遺構 ……109
2．遺物 ……116
Ⅳ．結語 ……139

原の町西遺跡 ……141
Ⅰ．遺跡の立地と環境 ……142
Ⅱ．調査の内容 ……145
1．遺構 ……145
2．遺物 ……147
Ⅲ．結語 ……149

挿　図　目　次

吉野ヶ里遺跡

Fig.1 周辺遺跡分布図 ……7
Fig.2 吉野ヶ里遺跡調査区配置図 ……11
Fig.3 神埼工業団地造成に伴う発掘調査南半部概要図 ……12
Fig.4 吉野ヶ里地区Ⅴ区・吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区周辺地形図 ……14
Fig.5 吉野ヶ里地区Ⅴ区・吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区調査区位置図 ……15

［吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区］

Fig.6 吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区遺構配置図 …19・20
Fig.7 吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区導水路調査区周辺遺構配置図 …19・20
Fig.8 SD035・036・040溝 ……21・22
Fig.9 SD035・040溝出土土器1 埋葬専用土器 ……23
Fig.10 SD035・040溝出土土器2 甕(1) ……24
Fig.11 SD035・040溝出土土器3 甕(2) ……25
Fig.12 SD035・040溝出土土器4 甕(3) ……26
Fig.13 SD035・040溝出土土器5 甕(4) ……27
Fig.14 SD035・040溝出土土器6 壺(1) ……29
Fig.15 SD035・040溝出土土器7 壺(2) ……30
Fig.16 SD035・040溝出土土器8 壺(3) ……31
Fig.17 SD035・040溝出土土器9 底部 ……33
Fig.18 SD035・040溝出土土器10 高坏 ……34
Fig.19 SD035・040溝出土土器11 鉢(1) ……36
Fig.20 SD035・040溝出土土器12 鉢(2) ……37
Fig.21 SD035・040溝出土土器13 器台(1) ……38
Fig.22 SD035・040溝出土土器14 器台(2) ……39
Fig.23 SD035・040溝出土土器15 支脚・土錘 …40
Fig.24 SD036溝出土遺物 ……42
Fig.25 SD052溝 ……43
Fig.26 SD052溝出土遺物1 ……44
Fig.27 SD052溝出土遺物2 ……45
Fig.28 SJ038・039甕棺墓 ……47
Fig.29 SJ043・044甕棺墓 ……48
Fig.30 SJ045・047甕棺墓 ……49
Fig.31 SJ048・049・050甕棺墓 ……50
Fig.32 SJ055・056・057甕棺墓 ……51
Fig.33 SJ039甕棺 ……52
Fig.34 SJ043・047甕棺 ……53
Fig.35 SJ045・049・056甕棺 ……54
Fig.36 SJ038・044・048・050甕棺 ……55
Fig.37 SJ055・057甕棺 ……56
Fig.38 SP041土壙墓 ……59
Fig.39 SP042石蓋土壙墓 ……60
Fig.40 SP059土壙墓 ……60
Fig.41 SB031竪穴住居 ……61
Fig.42 SB031竪穴住居出土遺物 ……62
Fig.43 SK021土壙 ……62
Fig.44 SK021土壙出土遺物 ……63
Fig.45 SK025土壙 ……64
Fig.46 SK025土壙出土遺物 ……64
Fig.47 SK030土壙 ……65
Fig.48 SK030土壙出土遺物 ……65
Fig.49 SK051土壙 ……66
Fig.50 SK060・061土壙 ……67
Fig.51 その他の出土遺物1 ……67
Fig.52 その他の出土遺物2 ……68

［吉野ヶ里地区Ⅴ区］

Fig.53 吉野ヶ里地区Ⅴ区遺構配置図 ……79･80
Fig.54 SB012・013竪穴住居 ……81
Fig.55 SB014・015掘立柱建物……82
Fig.56 SB016・017掘立柱建物……83
Fig.57 SK001･002･003･004･005･006土壙 ……84
Fig.58 SK007・008・009土壙 ……85
Fig.59 SK010・011土壙 ……86
Fig.60 土壙出土遺物1 ……88
Fig.61 土壙出土遺物2 ……89
Fig.62 小穴及び検出面出土遺物 ……91
Fig.63 小穴出土遺物 ……92
Fig.64 検出面出土遺物 ……93

［結 語］

Fig.65 吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区･吉野ヶ里地区Ⅴ区溝遺構配置図 ……98
Fig.66 吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区調査区周辺甕棺墓･土壙墓配置図 ……99

太田本村遺跡

Fig.1 周辺遺跡分布図 ……104
Fig.2 調査区位置図 ……106
Fig.3 太田本村遺跡3区遺構配置図 ……107･108
Fig.4 溝跡・溝状遺構断面図 ……107･108
Fig.5 SK01・04・07・09土壙 ……110
Fig.6 SK08・10・11土壙 ……111
Fig.7 SK14・15・16・17土壙 ……112
Fig.8 SK18・19土壙 ……113
Fig.9 SK22土壙・SE12井戸 ……114
Fig.10 SK01・04・07・10出土遺物 ……117
Fig.11 SK03出土遺物 ……118
Fig.12 SK09・14・16・18・22出土遺物 ……119
Fig.13 SK11出土遺物 ……120
Fig.14 SE12出土遺物 ……121
Fig.15 SD06出土遺物 ……122
Fig.16 SD20出土遺物 ……123
Fig.17 SD21出土遺物 ……124
Fig.18 遺物包含層出土遺物1 ……125
Fig.19 遺物包含層出土遺物2 ……126
Fig.20 遺物包含層出土遺物3 ……127
Fig.21 遺物包含層出土遺物4 ……128
Fig.22 遺物包含層出土遺物5 ……129
Fig.23 遺物包含層出土遺物6 ……130
Fig.24 遺物包含層出土遺物7 ……131
Fig.25 遺物包含層出土遺物8 ……132
Fig.26 遺物包含層出土遺物9 ……133

原の町西遺跡

Fig.1 周辺遺跡分布図 ……142
Fig.2 調査区位置図 ……143
Fig.3 原の町西遺跡遺構配置図 ……144
Fig.4 SD006・005土層図 ……144
Fig.5 SK001土壙 ……145
Fig.6 SK002土壙 ……145
Fig.7 SK003土壙 ……146
Fig.8 SE004井戸……146
Fig.9 SE004出土遺物 ……147

表　目　次

吉野ヶ里遺跡

［吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区］

Tab.1 吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区遺構一覧表 ……69
Tab.2 出土土器観察表 ……70～76
Tab.3 出土土製品観察表 ……76
Tab.4 出土石製品観察表 ……76

［吉野ヶ里地区Ⅴ区］

Tab.5 吉野ヶ里地区Ⅴ区遺構一覧表 ……78
Tab.6 出土土器観察表 ……95･96
Tab.7 出土土製品・ガラス製品観察表 …… 97
Tab.8 出土石製品観察表 ……97

太田本村遺跡３区

Tab.1 遺構一覧表 ……109
Tab.2 出土土器観察表 ……134～138
Tab.3 出土土製品観察表……138
Tab.4 出土木製品・石製品観察表 ……139

原の町西遺跡

Tab.1 SE004出土遺物観察表 ……148

図　版　目　次

吉野ヶ里遺跡

［吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区］

図版1　1.調査区全景（西より）2.調査区西端部（北より）3.SD040溝（西より）4.SD040溝（北より）
図版2　5.SD040溝床面直上出土遺物 6.SD035溝（南東より）7.SB031竪穴住居（南東より）
図版3　8.SD052溝（北より）9.SJ049･050甕棺墓（東より）10.SJ039甕棺墓（北東より）11.SJ043･044甕棺墓（南西より）図版4
12.SJ039甕棺墓（北東より）13.SJ047甕棺墓（北より）14.SP041石蓋土壙墓（西より）
図版5　15.SK020土壙（北より）16.SK025土壙（南東より）17.SK030土壙（北より）
図版6　18,19.SJ039甕棺 20,21.SJ043甕棺 22,23.SJ049甕棺
図版7　24,25.SJ047甕棺　26.S J 056甕棺 27.SJ045甕棺 28,29.SJ038甕棺
図版8　30,31.SJ044甕棺 32.SJ055甕棺 33.SJ048甕棺 34～37.SD035･040溝出土遺物
図版9　38～44.SD035･040溝出土遺物
図版10 45～54.SD035･040溝出土遺物

図版11　55～63.SD035･040溝出土遺物
図版12　64～68.SD052溝出土遺物 69.SD040溝出土遺物 70.撹乱土中出土遺物 71.SK030土壙出土遺物
71.SK030土壙出土遺物
図版13　72～78 SK025土壙出土遺物 79.出土遺物(石器･土製品) 80.出土遺物(石器)
[吉野ヶ里地区Ⅴ区]
図版14　1.調査区遠景(北西より) 2.調査区遠景(南より) 3.調査区全景(北より)
図版15　4.調査区全景(西より) 5.調査区全景(東より) 6.SB015掘立柱建物(北西より)
図版16　7.SB015掘立柱建物柱穴内横木跡(北西より) 8.SK001土壙(西より) 9.SB013竪穴住居(南より)
図版17　10.SK007土壙出土遺物　11～13.検出面出土遺物　14～16 SK004土壙出土遺物

太田本村遺跡３区
図版18　1.調査区遠景(調査前:南より) 2.調査区遠景(調査後:東より)
図版19　3.調査区全景(北より) 4.調査区全景(上方が南)
図版20　5.SK01土壙(南より) 6.SK04土壙(南より) 7.SK07土壙(西より)
図版21　8.SK09土壙(南西より) 9.SK10土壙(北東より) 10.SK11土壙(北より)
図版22　11.SK14土壙(南より) 12.SK15土壙(東より) 13.SK17土壙(東より)
図版23　14.SK18土壙(北より) 15.SK22土壙(南より) 16.SK19土壙(西より)
図版24　17.SE12井戸(南より) 18.SE12井戸(東より) 19.SD20溝跡(西より) 20.SD20溝跡木器出土状況
図版25　21～28.土壙･井戸出土遺物
図版26　29～36.溝跡･遺物包含層出土遺物
図版27　37～45.溝跡･遺物包含層出土遺物
図版28　46～49.遺物包含層出土遺物

原の町西遺跡
図版29　1.遺跡全景(北東より) 2.SK01土壙(西より) 3.SK02土壙(北より) 4.SE04井戸(西より) 5.SD05･06溝(北から)
図版30　1～14 SE004出土遺物
図版31　15～22 SE004出土遺物

第Ⅰ章　調査の概要

調　査　の　概　要

1．調査の経過

筑後川下流用水事業(佐賀東部導水路・大宅間幹線水路)に伴う埋蔵文化財調査は、昭和56年度から始まり、関係市町村は佐賀市、佐賀郡諸富町、神埼郡神埼町・三田川町・千代田町、三養基郡北茂安町・上峰町の１市６町に及んでいる。

このうち、発掘調査を行った地区については、整理作業が進み次第順次報告書を刊行してきており、これまでに３冊を作成した。今回は４冊目にあたり、平成２年度までに発掘調査を行った地区について報告を行う。

今回報告を行うのは、昭和６０年度調査の神埼町馬郡遺跡４区、昭和６１年度調査の三田川町吉野ヶ里丘陵遺跡・諸富町太田本村遺跡３区、平成２年度調査の原の町西遺跡の４遺跡に関するものである。このうち、神埼町馬郡遺跡４区・三田川町吉野ヶ里丘陵遺跡については、昭和62～63年にかけて行われた神埼工業団地に係わる発掘調査により一連の遺跡であることが明らかとなったため、神埼工業団地調査時の調査区割りに即して、前者を「吉野ヶ里地区Ⅴ区」、後者を「吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区」とし、両者を包括して『吉野ヶ里遺跡』として報告する。

平成３年度以降の調査については、平成３年度に上峰町坊所三本松遺跡(760m²)で発掘調査を行い、佐賀市久保泉地区、三田川町中部地区で確認調査を行った。平成４年度は三田川町下中杖遺跡(980m²)で発掘調査を行い、北茂安町千栗地区で確認調査を行った。また、平成５年度は佐賀市久保泉南部地区・三田川町中部地区で確認調査を行った。

なお、平成３年度以降の調査については次回に報告を行う。

2．調査の組織

［発掘調査］

調査主体

佐賀県教育委員会

事務局

総括　志岐 常文　佐賀県教育長(昭和60～平成２年度)

局長　北村 一義　文化課長(昭和60・61年度)

	高島　忠平	文化財課長（平成２年度～）
次長	高島　忠平	文化課参事（昭和60年度）
	尾形　善郎	文化課長補佐（昭和60・61年度）
	宮原　義幸	〃　（昭和60・61年度）
	中牟田　賢治	文化財課長補佐（平成２年度～）
	西村　貞幸	〃　（平成２～４年度）
庶務会計	菊地　文夫	文化課庶務企画係長（昭和60・61年度）
	永松　和久	〃　〃　（平成２年度～）
	山下　行夫	〃　主査（昭和60・61年度）
	濱野　清子	〃　〃　（平成２年度～）
	小林　宣洋	〃　〃　（平成２～４年度）
	鶴田　明美	〃　主事（昭和60・61年度）
	松瀬　弘	〃　〃　（平成２～４年度）

調査員

調査主任	木下　巧	文化課文化財調査第二係長（昭和60・61年度）
	高瀬　哲郎	文化財課調査係長（平成２年度～）
調査員	東中川　忠美	文化課文化財調査第二係　文化財保護主事（昭和61年度）
	森田　孝志	〃　〃　（昭和60年度）
	宮武　正登	〃　〃　（平成２・３年度）
	種浦　加代子	〃　嘱託（昭和60・61年度）
	陣内　康光	〃　嘱託（平成２年度）

［報告書作成：平成５年度］

事務局

総括	堤　清行	佐賀県教育委員会
局長	高島　忠平	文化財課長
次長	中牟田　賢治	文化財課長補佐
	瀬戸　廣明	〃
庶務会計	永松　和久	文化課庶務企画係長
	濱野　清子	〃　主査
	鷺崎　義彦	〃　主査
	池田　学	〃　主事

調査員

調査主任 高瀬 哲郎　文化財課調査係長

川副　麻理子　文化財課調査係　文化財保護主事
市川　浩文　〃　〃
百崎　正子　文化財課嘱託

［調査協力］

水資源開発公団筑後川下流用水建設所　佐賀県農林部
神埼町・三田川町・諸富町・千代田町各教育委員会・土地改良課　地元各位

3．発掘調査の概要

吉野ヶ里遺跡

吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区（吉野ヶ里丘陵遺跡）　［略号：ＹＳＧ］

所　在　地　神埼郡三田川町大字田手字三本杉
調 査 期 間　昭和61年４月14日～５月31日
調 査 面 積　900m²
遺跡の内容　弥生時代の溝・墳墓・住居・土壙・小穴、奈良時代の土壙

吉野ヶ里地区Ｖ区（馬郡遺跡４区）　［略号：ＭＧＩ－４］

所　在　地　神埼郡神埼町大字鶴字下の辻
調 査 期 間　昭和60年８月26日～10月31日
調 査 面 積　320m²
遺跡の内容　弥生時代の土壙・小穴、古墳時代の住居・掘立柱建物・土壙・小穴
奈良時代の土壙・小穴、鎌倉時代の土壙・小穴

太田本村遺跡３区（太田本村遺跡Ⅱ区）　［略号：ＯＨＭ－３］

所　在　地　佐賀郡諸富町大字大堂字太田
調 査 期 間　昭和61年９月16日～10月22日
調 査 面 積　1,720m²
遺跡の内容　弥生時代～古墳時代の溝・土壙・小穴、奈良～平安時代の溝・土壙

原の町西遺跡　［略号：ＨＭＮ］

所　在　地　神埼郡千代田町大字境原字七本松
調 査 期 間　平成３年３月５日～３月７日
調 査 面 積　62m²
遺跡の内容　近世の溝・井戸・土壙

第Ⅱ章　遺跡各説

吉野ヶ里遺跡

吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区（吉野ヶ里丘陵遺跡）

吉野ヶ里地区Ⅴ区（馬郡遺跡４区）

遺跡名：吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区［吉野ヶ里丘陵遺跡］（略号ＹＳＧ）

所在地：神埼郡三田川町大字田手字三本杉

遺跡名：吉野ヶ里地区Ⅴ区［馬郡遺跡４区］（略号ＭＧＩ－４）

所在地：神埼郡神埼町大字鶴字馬郡

Ⅰ．地理的・歴史的環境 (Fig.1)

有明海沿岸の最奥部に位置する佐賀平野は、東は筑後川を挟んで筑後平野と、西は六角川を隔てて白石平野と分割される東西約35km、南北15～20kmの範囲に広がる。その景観的な大きな特徴は佐賀平野の北側に位置する脊振山系の山々と、有明海を取り巻く広大な沖積平野との対比であろう。この脊振山系は有明海沿岸地域と玄海灘沿岸地域を南北約60kmにわたって隔てており、標高1055.2mの脊振山を始め、標高500～800m級の山々が数多く連なり、その基盤は主に花崗岩からなる。佐賀平野においては、この脊振山系山麓部から平野部に向かって、後期洪積世に形成された段丘が南側に低く長く幾筋も伸びており、その南端はほぼ国道34号線を越えた付近にあたる。これらの段丘は高位・中位・低位の三つに区分され、花崗岩の基盤上に河床堆積物(礫層)が厚く堆積し、その上面には後期洪積世末期の火山活動による火山灰層が不整合に載っている。脊振山系南麓より伸びる段丘の標高は概ね40～50mを最高位とするが、脊振山系の山々は最も平野に接近した部分でも標高200m前後の急峻な尾根が連なり、山地と段丘部の高低差は大きい。これらの段丘の間には、比較的大きな河川によって形成された扇状地が広がり、さらに小河川は段丘を細かく開析し複雑な谷状地形を生み出している。このような段丘と扇状地・谷底平野の繰り返しからなる起伏に富む地形は、特に鳥栖市の西方から大和町付近まで顕著に認められ、中でも吉野ヶ里遺跡を中心とした神埼町、三田川町、東脊振村、上峰町、中原町、北茂安町を含む旧神埼郡・三根郡付近が最も発達していると言えよう。また、平野部と段丘部は、東西方向においてはその標高差によって明瞭に区別できるが、段丘南側は漸移的に低くなりつつ平野部に没し、現況ではその端部を視認することは困難である。この段丘部と平野部との境が不明瞭になる部分、城原川・田手川流域で言えば国道34号線付近より南側には、標高2.0～5.0mの平坦低地が南北約15kmの幅を持って有明海との間に横たわる。この平坦低地は河川堆積物と海進時における海性粘土の堆積を主な成因としており、近世以降に干拓された部分も含めて広大な水田地帯を形成している。現在、この水田地帯に大きな地形的変化を認めることは難しいが、実際には微妙な起伏を持つ複雑な地形がその下面に埋没しており、遺跡の分布・立地と密接に関わっている。

吉野ヶ里遺跡は佐賀平野に南面する脊振山系の支峰、標高515.9mの大高山から南に伸びる吉野ヶ里段丘上を中心に位置し、その範囲は神埼郡神埼町、三田川町、東脊振村の三つの行政区にまたがっている。吉野ヶ里段丘を中心とした城原川・田手川流域周辺は、佐賀平野全体においても特に遺跡の分布密度が濃い地域であり、それはまた各時代にわたっても同様である。城原川・田手川流域周辺における旧石器時代の生活の痕跡は、神埼町船塚遺跡(1)及び東脊振村山古賀遺跡２区(2)において確認されている。船塚遺跡では多数の石器群及び集石が検出され、在地系の石器群と共伴して瀬戸内系のナイフ形石器が出土し、山古賀遺跡においても、黒曜石

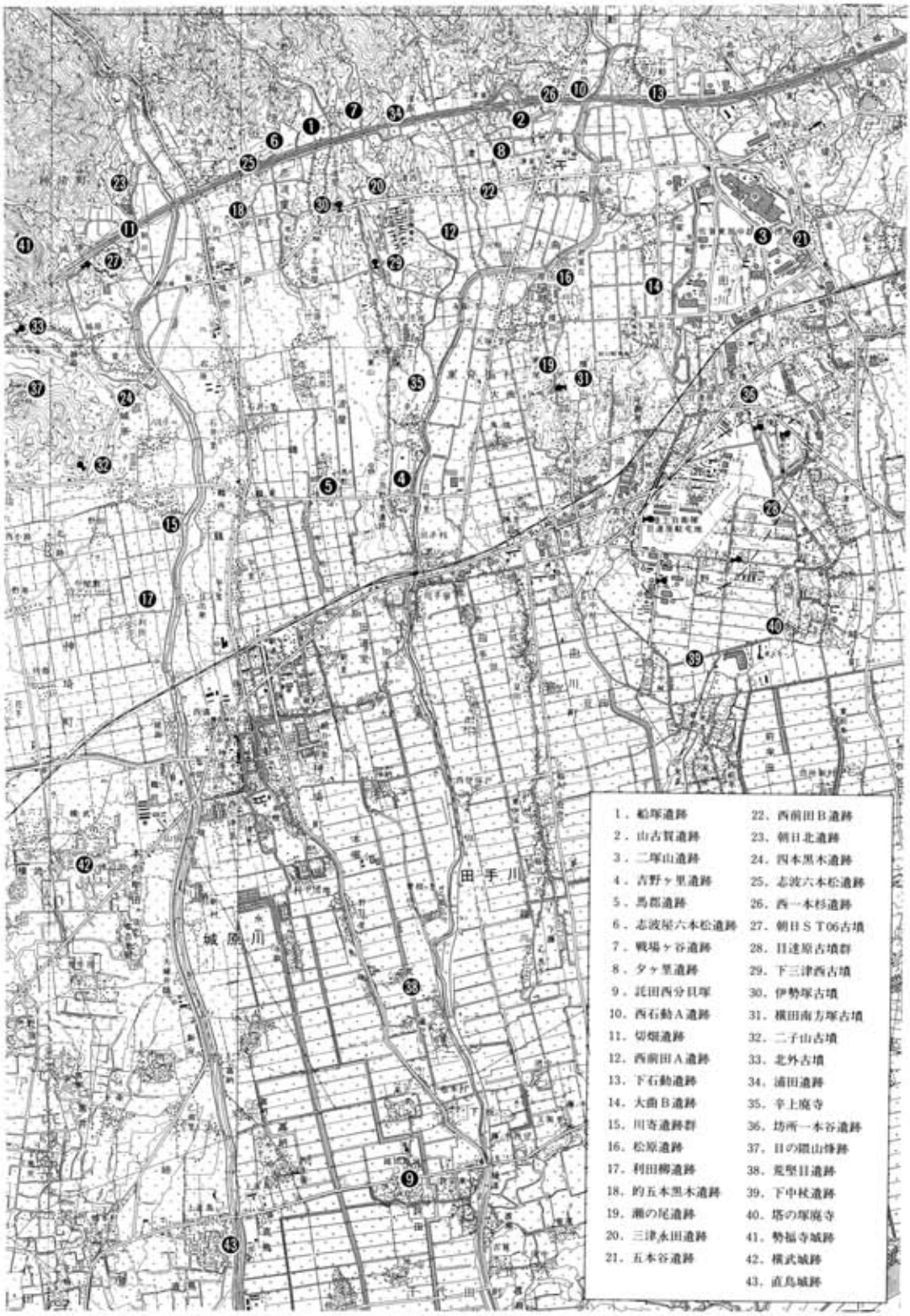


Fig.1　周辺遺跡分布図（1/50,000）

製・サヌカイト製のナイフ形石器が集中して検出されている。この他、東脊振村二塚山遺跡(3)や吉野ヶ里遺跡(4)においても、ナイフ形石器・台形石器・角錐状石器等が表面採集や後世の遺構への混入により出土している。確認された遺跡数としては未だ少数ではあるが、山麓部より段丘上にわたって、当該期の遺跡が存在している可能性は高い。

縄文時代に入っても遺跡の分布状況は大きくは変わらない。早期の遺跡としては、押型文土器を伴う集石遺構を検出した神埼町志波屋六本松遺跡(6)・船塚遺跡の他、「戦場ヶ谷式土器」として学史的に著名な東脊振村戦場ヶ谷遺跡(7)がある。前期の轟・曽畑式段階の遺物はほぼ早期の遺跡と重複して検出されているものの、量的には少ない。また、中期についても同様であり、志波屋六本松遺跡など、山麓部を中心に阿高式土器の小片が幾らか確認されているのみである。後期には円形の竪穴住居が志波屋六本松遺跡や東脊振村夕ヶ里遺跡(8)において検出されており、前者は山麓部に、後者は扇状地の扇端部近くに立地する。晩期、特に晩期末の遺跡については、志波屋六本松遺跡において土器棺墓が検出された他、山古賀遺跡1区等の山麓部の遺跡において確認例が増えてきているが、なお資料的には不足している。また、船塚遺跡では晩期後半代に位置づけられる円形の竪穴住居が1棟検出されている。

弥生時代には遺跡数が著しく増加し、分布域も拡大する。前期前半に溯る生活遺構は吉野ヶ里遺跡及び千代田町託田西分貝塚(9)で検出されているが、集落としてある程度のまとまりを見せ始めるのは前期末以降である。東脊振村西石動A遺跡(10)、神埼町切畑遺跡(11)、吉野ヶ里遺跡においては前期末～中期前半にかけて、また少し遅れて中期前半に集落の形成が始まるものとして、東脊振村松原遺跡(16)・西前田A遺跡(12)・下石動遺跡(13)・大曲B遺跡(14)等が挙げられる。このうち、大規模に展開しながら後期まで存続する吉野ヶ里遺跡や松原遺跡等の拠点集落が営まれる一方、中期前半のうちに活動を終える切畑遺跡、大曲B遺跡、下石動遺跡等がある。またその立地状況については主に標高15m以上の段丘上あるいは扇状地上に占地するが、神埼町川寄遺跡群(15)・利田柳遺跡(17)、あるいは託田西分貝塚等、標高5.0～7.0m前後の微高地付近に掘立柱建物を中心とした集落が形成される。後期には吉野ヶ里遺跡、松原遺跡等では大規模な環濠を巡らしさらに大きく展開する。中期に形成され後期まで存続する的五本黒木遺跡(18)、西前田A遺跡等の集落認められる一方、瀬の尾遺跡(19)、夕ヶ里遺跡等は後期後半より営まれるものである。墓地については、前期前半の壺棺墓が山麓部を中心に散在するのみだが、前期後半及び前期末より後期前半にかけて無数の甕棺墓を主体とする墓地が地域を問わず広く分布する。大規模なものとしては、東脊振村三津永田遺跡(20)・二塚山遺跡・上峰町五本谷遺跡(21)・松原遺跡・瀬の尾遺跡、及び2基の墳丘墓を含んだ吉野ヶ里遺跡があり、これらの墓地からは青銅製品を始め、多数の副葬品を出土している。また、これに対して前期後半、あるいは中期前半から中期中頃の比較的短期間に遺墓を終えるものとして、東脊振村西前田B遺跡(22)・神埼町四本黒木遺跡(24)等、段丘上の平坦地に営まれるものと、神埼町朝日

北遺跡(23)・志波屋六本松乙遺跡(25)等、山裾の痩せ尾根上に位置するものがある。なお、埋葬形態は後期前半以降には甕棺墓から土壙墓・石棺墓へと移行し、その数も減少する。

古墳時代には、弥生時代後期より引き続いて夕ヶ里遺跡・西前田A遺跡・瀬の尾遺跡等田手川流域を中心に古墳時代前期まで集落が営まれる。この時期には東脊振村西一本杉遺跡(26)・山古賀遺跡、神埼町朝日ＳＴ06古墳(27)等の山麓部、あるいは吉野ヶ里遺跡群等の段丘上に古式の古墳が築造されるが、中期までは連続しない。中期における集落は的五本黒木遺跡で確認されているのみだが、古墳の造営自体は５世紀後半～末にかけて、山麓部に数基からなる群を形成し始め、後期における群集墳の祖形となっている。その一方、田手川右岸域の段丘南端部付近に中期より後期にかけて前方後円墳５基を中心とした目達原古墳群(28)が形成される。さらには６世紀前半代を境にその首長権は吉野ヶ里段丘付け根に位置する、東脊振村下三津西古墳(29)、神埼町伊勢塚古墳(30)等の志波屋古墳群へと移行するようである。また、平野を臨む山麓部に築かれる小円墳は、特に６世紀後半代よりその造墓活動が活発化し、７世紀後半代に至るまで群集墳を形成する。後期に位置づけられる集落は前代より連続せず、切畑遺跡・志波屋六本松遺跡・東脊振村浦田遺跡(34)・下石動遺跡・夕ヶ里遺跡等、背面に群集墳を控えた山裾を中心に立地する。

奈良時代に吉野ヶ里遺跡は郷９所を持つ神埼郡に含まれ、吉野ヶ里段丘西側の竹原の集落付近は郡衙跡と推定されている。吉野ヶ里遺跡においても、志波屋三の坪・四の坪地区では、駅屋と関連すると思われる、総柱の高床倉庫を含む多数の掘立柱建物が規則性を持って配置されていた状況が確認され、また、日吉神社裏の段丘を南北にカットする切通しが、駅路跡であることが明らかとなった。これらは神埼町日の隈山烽跡(37)、東脊振村辛上廃寺(35)の存在ともあいまって、当該地が神埼郡の中心地であったことを示唆する。その一方、田手川を挟んで吉野ヶ里段丘と対峙する二塚山段丘上では、段丘南端部に奈良時代寺院塔の塚廃寺(40)が築かれる他、奈良期～平安時代前期の竪穴住居群及び大規模な掘立柱建物跡群からなる上峰町坊所一本谷遺跡[1] (36)が存在する。なお、この他浦田遺跡、下石動遺跡では古墳時代のものと重複して竪穴住居を主体とする集落が形成され、前者は平安時代初頭まで継続する。　平安時代以降、神埼郡はその生産性の高さから皇室領に取り込まれ神埼庄となったが、神埼町荒堅目遺跡(38)、三田川町下中杖遺跡(39)で出土した多数の輸入陶磁器からは、その地理的重要性についても窺い知ることができる。なお、平安時代末期には田手川の上流域に山岳仏教寺院、霊仙寺が築かれ、昭和53～54年の発掘調査では経塚・火葬墓等が発見されている。

中世、特に南北朝期から室町・戦国期には、中世武士団によって丘陵部は勿論のこと、湿地性の平坦低地においても城館築造が行われる。前者は急峻な山頂部を利用する山城で、神埼町勢福寺城(41)などが挙げられる。後者はその低湿地性を防御機能に活かしたもので、館の周り及びその内部まで水を引き込み堀としている。神埼町横武城跡(42)や千代田町直鳥城跡(43)な

どが挙げられる。また吉野ヶ里遺跡内には日吉城の存在が知られており、平野部を臨む段丘上という立地状況において、上述の両者とはまた異なった在り方を示している。

註　1）平成５年度に上峰町教育委員会が調査。

参考文献（1）八尋　実『姫塚遺跡』神埼町文化財調査報告書第10集　神埼町教育委員会　1984

（2）藤井伸幸『山古賀遺跡』『西原遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（3）佐賀県教育委員会　1983

（3）石隈喜佐雄・七田忠昭編『二塚山』佐賀東部中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　佐賀県教育委員会　1979

（4）七田忠昭他『吉野ヶ里』神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　佐賀県教育委員会　1992

（5）八尋　実・緒方祐次郎『志波屋六本松遺跡』神埼町文化財調査報告書第９集　神埼町教育委員会　1983

（6）久保伸洋「ダヶ里遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告１』佐賀県教育委員会　1983

（7）森田孝志・徳富則久『託田西分貝塚』千代田町文化財調査報告書第２集　千代田町教育委員会　1983

（8）久保伸洋「石動遺跡群」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告６』佐賀県教育委員会　1988

（9）堤　安信「西石動遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査概報第４集』佐賀県教育委員会　1981

（10）西田和己「切畑遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査概報第６集』佐賀県教育委員会　1983

（11）久保伸洋『大曲遺跡群Ⅱ』東脊振村文化財調査報告書第９集　東脊振村教育委員会　1985

（12）岩永政博『利田柳遺跡第Ⅲ区』神埼町文化財調査報告書　神埼町教育委員会　1980

（13）天本洋一『川寄吉原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第61集　佐賀県教育委員会　1981

（14）緒方祐次郎『的五本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第11集　1985

（15）久保伸洋『西前田B遺跡』東脊振村文化財調査報告書第６集　東脊振村教育委員会　1982

（16）高島忠平他『四本黒木遺跡』佐賀県教育委員会　1977

（17）高瀬哲郎他『朝日北遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書15　1992

（18）高瀬哲郎他『志波屋六本松遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書13　1991

（19）松尾吉高『西一本杉遺跡』『西原遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（3）佐賀県教育委員会　1983

（20）立石泰久・堤　安信『浦田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（3）佐賀県教育委員会　1983

（21）『吉野ヶ里遺跡－佐賀県神埼郡三田川町・神埼町に所在する吉野ヶ里遺跡の確認調査報告書』佐賀県文化財調査報告書第100集　佐賀県教育委員会　1990

（22）田平徳栄『霊仙寺跡』東脊振村文化財調査報告書第４集　東脊振村教育委員会　1980

Ⅱ．遺跡の概要

吉野ヶ里遺跡は脊振山麓より伸びる吉野ヶ里段丘上を中心として、神埼郡神埼町・三田川町・東脊振村の３町村にまたがり、その総面積は約60haに及ぶ。もともとは「吉野ヶ里遺跡」という遺跡名自体は、「佐賀県遺跡地図」中の神埼町大字鶴字日吉、下の辻に所在する一遺跡の名称であり、遺跡地図上では、その他吉野ヶ里丘陵遺跡、田手一本黒木・二本黒木遺跡、志波屋三の坪・四の坪遺跡等の各遺跡が所在する。昭和61～63年度にかけて行われた神埼工業団地開発に伴う発掘調査では、これらの各遺跡が段丘上を中心として展開する一連の遺跡であることが明らかとなり、現在では調査区を19地区に区分しつつ（Fig.2）、全体としては「吉野ヶ里遺跡」と総称している。本報告は筑後川下流用水事業(佐賀東部導水路)に伴い昭和60年度・61年度に行われた吉野ヶ里遺跡内の２地点における調査報告であるが、発掘調査の行われた段階では、それぞれ、馬郡遺跡４区(略号：ＭＧⅠ-Ⅳ)[1]、吉野ヶ里丘陵遺跡（略号：ＹＳＧ)[2]、として報告されている。これらの２地点は、上述の調査区区分に換れば、前者が「吉野ヶ里地区Ⅴ区」、後者が「吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区」に含まれ、本報告書ではこの区分に従い、吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区として報告を行う。また、調査内容の説明にあたっては、佐賀東部導水路関連の調査分と工業団地調査分の区域との混同を避けるため、吉野ヶ里地区Ⅴ区における調

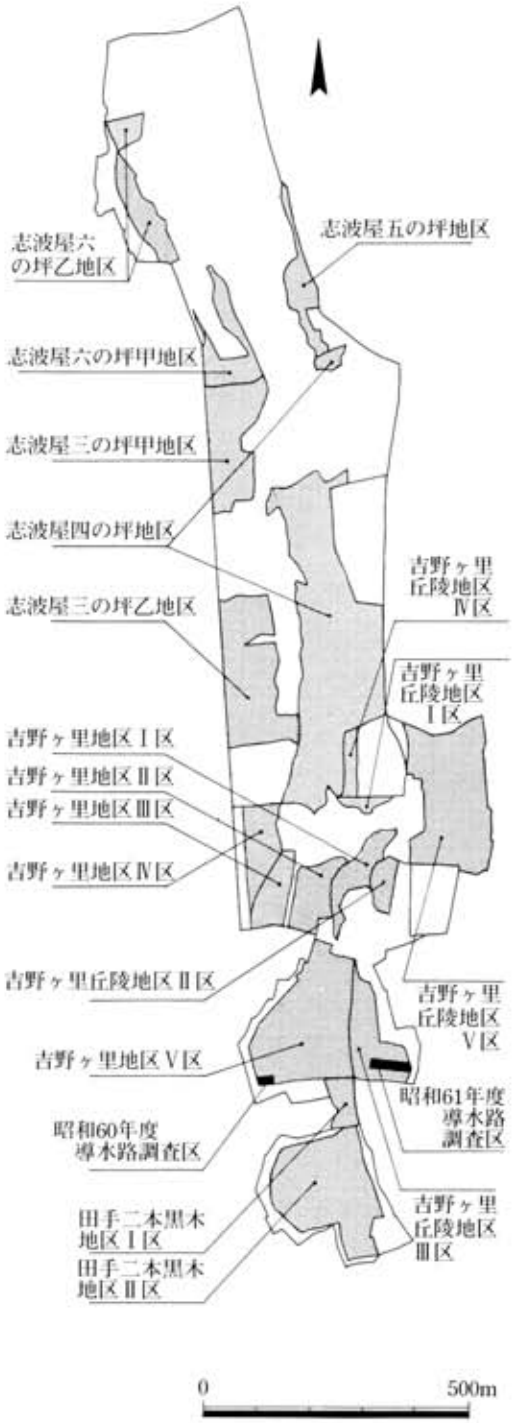


Fig.2　吉野ヶ里遺跡調査区配置図

査区を「昭和60年度導水路調査区」、吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区における調査区を「昭和61年度導水路調査区」として、あるいは両者を単に「導水路調査区」として述べることとする。なお、「佐賀県遺跡地図」上では、それぞれ吉野ヶ里遺跡(遺跡地図番号神埼町1031,2081)、吉野ヶ里丘陵遺跡(遺跡地図番号三田川町1001,2014,3013)に相当する。

吉野ヶ里遺跡における埋蔵文化財発掘調査は、本報告である筑後川下流用水事業(佐賀東部導水路)に伴うものの他、昭和55年度に県営農業基盤整備事業に伴い神埼町教育委員会が吉野ヶ里地区Ⅴ区について、また、昭和56～57年度には同じく農業基盤整備に伴い、三田川町教育委員会によって田手二本黒木地区について調査が実施されている[3]。

吉野ヶ里遺跡の全貌を明らかにしたのは、昭和61～63年度にかけて約30haを対象に行われた神埼町神埼工業団地開発に伴う発掘調査である[4] (Fig.3)。この3ヵ年に渡る発掘調査では、全国最大規模の弥生時代の環濠集落・有柄銅剣を含む五本の銅剣やガラス製管玉を出土した墳丘墓や2500基以上の墳墓の他、奈良～平安時代における、官衙的要素の強い建物群と駅路跡など重要な遺構・遺物が多数確認された。その第一級の資料的価値より遺跡の保存への要望が高まり、平成元年6月には約22haが文化財保存活用区域として保存されることが決定した。その後、仮整備事業と並行して史跡指定のための

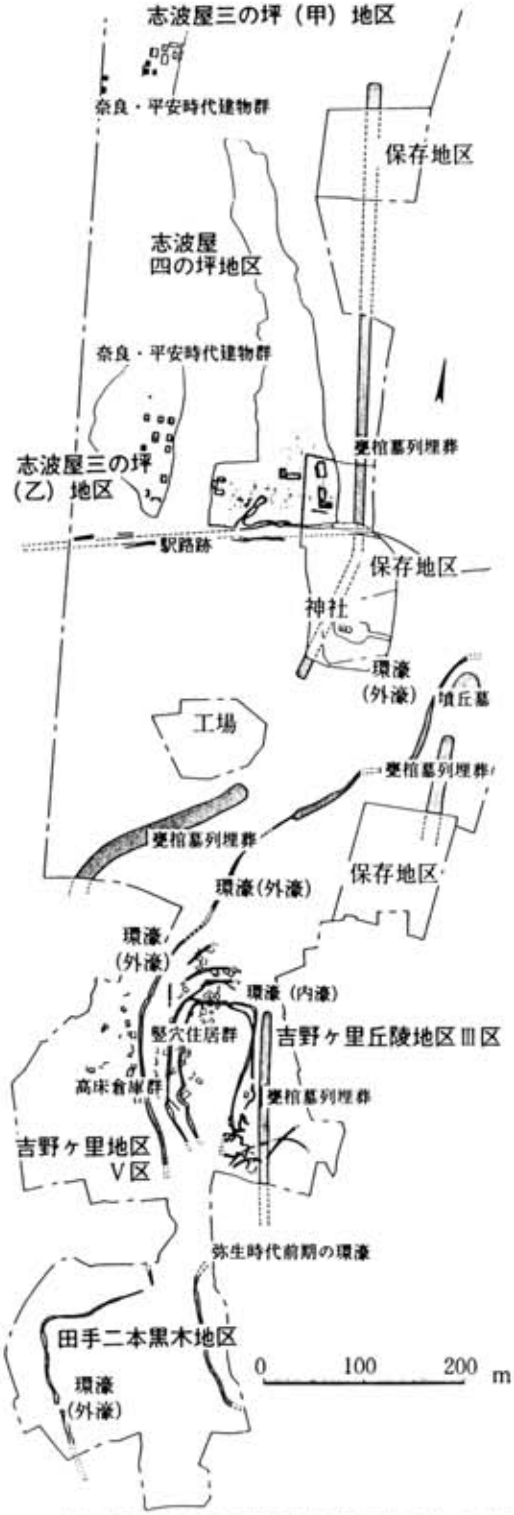


Fig.3　神埼工業団地造成に伴う発掘調査南半部概要図（文献21より転載）

範囲確認調査が続けられ、平成３年５月には国の特別史跡に指定、さらには平成４年度より奈良県の「国営飛鳥歴史公園」に次ぐ国営歴史公園としての整備及び範囲確認のための発掘調査が続けられている。

吉野ヶ里遺跡では旧石器時代から中世に至るまでの各時代における遺物あるいは遺構が確認されている。特に弥生時代の遺構は前期から後期の終末に至るまで認められ、集落と墓地の変遷を考える上で重要な資料を提供している。弥生時代の主な遺構は、集落跡として、南北二つの内濠を取り巻いて、南北１km以上、東西0.5kmの規模を持つ巨大な環濠跡、竪穴住居跡290基以上[5]、穴倉（貯蔵穴）跡約150基、掘立柱建物跡約100基以上など、あるいは墳墓跡として、墳丘墓２基、甕棺墓2,213基以上、土壙墓・木棺墓316基以上、箱式石棺墓約11基、またこれらに伴う祭祀土壙約50基などが検出されている。また、遺物としては、銅剣６本（把頭飾付き有柄銅剣を含む）、把頭飾１点、漢式鏡破片３点、小形仿製鏡５面・鉄製刀子の素環頭などの青銅器に加え、銅剣・銅鉾の鋳型５点、巴型銅器の鋳型１点など青銅器鋳造に関わる資料が注目される。その他、舶載品と思われる鋳造鉄斧・青銅製素環頭を持つ鉄刀子などを含む豊富な鉄製品が出土している。

一方弥生時代以降では、古墳時代前期に小規模な集落と墳墓を築くのみで、古墳時代中期～後期の遺構は概して少なく、数軒程度からなる住居群が散在的に分布する。これに対し、奈良時代においては、駅路跡と思われる切り通しを伴う道路状遺構の他、主に志波屋三の坪・四の坪地区を中心として大規模な掘立柱建物群が検出され、その多くが企画性を持って配置されている。検出された掘立柱建物は約204基以上に上り、その他井戸跡40基、土壙約202基が確認されている。また出土遺物の中には志波屋二の坪遺跡から出土した青銅製帯金具を始め、木簡、墨書・箆書土器、陶硯、水滴など官衙的な性格を持つものが多く認められる。おそらくこれらの掘立柱建物群は、現在志波屋三の坪甲地区・乙地区の西側に推定されている神埼郡衙、及び駅家に関係する施設であったと考えられる。なお平安時代の遺構は、吉野ヶ里地区Ⅱ区からⅤ区にかけて平安時代前期の掘立柱建物群及び井戸跡・土壙などが集中して検出された以外は、散在的かつ量的にも少なく、奈良時代末～平安時代前期において駅路が南へ二里移転された点点と関連があると推察される。

中世には、正確な位置は不明であるが日吉城と呼ばれる中世城郭が存在していたと考えられており、実際に北墳丘墓周辺は地元では「城」と呼称されていた。吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区の調査では、この北墳丘墓の四方を土壙状の溝跡でカットされていることが判明し、その出土遺物が15～16世紀に位置付けられていることより、日吉城に関連した施設である可能性が高い。この他にも、区画溝と思われる南北・東西方向の直線的の溝跡が、吉野ヶ里地区Ⅴ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅲ区で検出されている。また、志波屋三の坪乙地区では当該期の土壙墓・木棺墓が27基まとまって検出されている。

註1）森田孝志「馬郡遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書5』佐賀県教育委員会　1987

2）東中川忠美「吉野ヶ里丘陵遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書6』佐賀県教育委員会　1988

3）草野誠二　編『田手二本黒木遺跡』三田川町文化財調査報告書第3集　三田川町教育委員会　1990

4）七田忠昭ほか『吉野ヶ里』神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　佐賀県教育委員会　1992

5）遺構の数は註4)の文献による。

Ⅲ．調査の内容

1．吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区(吉野ヶ里丘陵遺跡)の遺構と遺物

吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区は吉野ヶ里段丘の段丘尾根上、標高20ｍ付近に立地し、神埼町－三田川町の町境によって吉野ヶ里地区Ⅴ区と段丘上を東西に分割されるが、遺構自体は連続している。段丘部は、この付近において東側と西側で地形的に様相が異なる。西側は段丘尾根上から段丘裾部まで緩やかに傾斜し、埋没谷を挟んで馬郡集落の立地する微高地と対峙するのに対し、

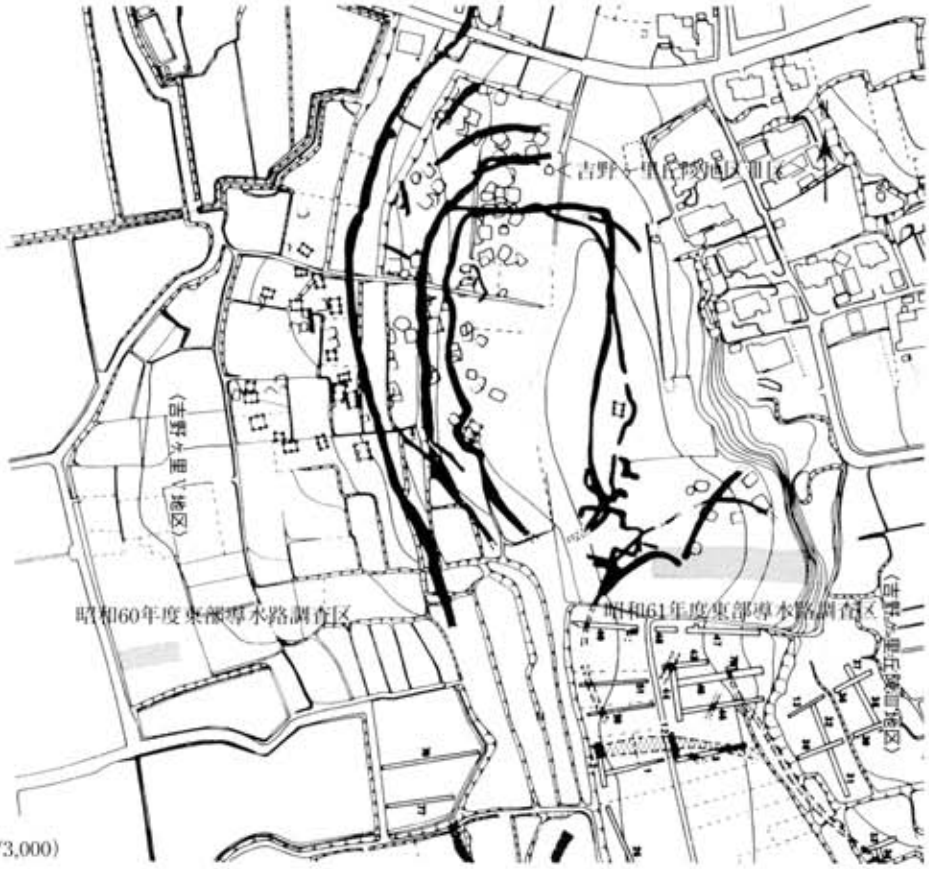


Fig.4　吉野ヶ里地区Ⅴ区・吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区周辺地形図（文献21より転載、一部加筆）

Fig.5　吉野ヶ里地区Ⅴ区・吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区調査区位置図（1/3,000）

東側は田手川の旧河道に侵食され比高差約10mの崖面となっている。

昭和62～63年度の神埼工業団地開発に伴う発掘調査において、吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区と吉野ヶ里地区Ⅴ区では、両地区にまたがる形で弥生時代から中世に至るまでの遺構が検出されたが(Fig.4)、その中心は弥生時代の環濠集落と大規模な墳墓群である。環濠集落はいわゆる「南内郭」と呼称されるもので、段丘中央部を南北120～130m、東西80～90mの規模で二重に囲む環濠(内濠)によって区画される。集落は弥生時代後期前半～終末期にかけて存続するが、内濠の掘り直しに従い、後期後半を挟んで二時期に分かれる。環濠内からは、物見櫓を含む掘立柱建物、竪穴住居などが検出されたが、集落の面積に対する遺構の数は少なく、その多くが削平を受け消滅した可能性が高い。内濠は上述の二時期とも、その外側南東部には眉状に弧を描く溝、ＳＤ0651・0653及びＳＤ0650が位置する。内濠は二時期とも南東部に出入り口と思われる空間を持っており、これら眉状の溝もまた、同一方向に同様の空間を持つことから両者の関連性が指摘される。また、内濠の西側、吉野ヶ里地区Ⅴ区では、この内濠に囲まれた集落を更に取り巻く形で断面Ｖ字形の外濠ＳＤ0925が南北に走る。このＳＤ0925をほぼ境に、その西側は段丘裾部の緩斜面となり、高床倉庫と思われる掘立柱建物が多数存在する。一方、吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区のみならず、段丘東側ではＳＤ0925に対応する外濠の存在は明らかになっておらず、防御機能という点に限れば、あるいは崖面そのものがこれに代わっていたと考えられる。

弥生時代の墳墓としては吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区を南北に伸びる列埋葬が挙げられる。この列埋葬は更に南側の田手二本黒木地区の北部まで続くことが確認されており、その長さは南北約220m、甕棺墓300基以上、土壙墓・木棺墓約20基、祭祀土壙約10基の存在が明らかになっている。時期的には前期末の金海式から、城ノ越式、汲田式、須玖式を経て中期後半の立岩式まで存続するが、そのほとんどが汲田式、須玖式の甕棺墓によって占められる。この他、５～10基からなる小規模の墓地が環濠集落の内外に営まれる。

古墳時代の遺構としては、古墳時代前期の墳墓群と５～６世紀の住居跡が検出されている。墳墓群は吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区の南側に位置し、前方後方形の周溝を持つものが２基、方形周溝墓が３基確認されている。これら墳墓の周溝からは二重口縁壺を含む古墳時代前期(３世紀末～４世紀初頭)の土器が出土しており、北方の山麓部に営まれる同時期の古式古墳との関係が注目される。住居跡は吉野ヶ里地区Ⅴ区のみで９基が確認されているが、その分布状況は散在的である。

奈良～平安時代の遺構には掘立柱建物跡７基と井戸跡10基が検出されている。掘立柱建物は段丘尾根上に３基、西側の段丘裾部緩斜面上に４基が、また井戸は段丘裾部上に存在する。井戸はそのほとんどが平安時代前期のものであり、掘立柱建物についてもほぼ当該期のものと考えられる。

中世の遺構としては、東西及び南北に伸びる区画溝(ＳＤ0835・0970)と、断面Ｖ字形をなす

山城関係の空堀と思われる大溝(ＳＤ0621)などがある。

昭和61年度導水路調査区は吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区の南東隅にあたり(Fig.6,7)、調査面積は約900m²、遺構検出面の標高は海抜18.5～20.2ｍである。導水路調査区で検出された遺構には、弥生時代の溝３条・竪穴住居１基・土壙５基・甕棺墓12基・土壙墓３基、奈良時代の土壙１基、奈良時代以降に位置付けられる溝１条などの他、多数の小穴がある。ほとんどの遺構が調査区の西側に集中しており、溝１条(ＳＤ052)のみが調査区東端部付近に位置する。当調査区で検出された遺構の内、弥生時代の溝ＳＤ035・040は工業団地調査分の吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区において確認された環濠集落南東側の眉状に弧を描く溝ＳＤ0653とＳＤ0651に、奈良時代以降に位置付けられる溝ＳＤ036はＳＤ0875に対応し、弥生時代の甕棺墓・土壙墓は列埋葬の一部に含まれることが判明している。以下に遺構別に概要を述べる。

(1)溝

吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区において検出された溝には、ＳＤ035・036・040・052の４つがある。このうち、昭和61年度に行われた神埼工業団地開発に伴う吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区の調査において検出された溝に対応するものとして、ＳＤ035(ＳＤ0651)、ＳＤ040(ＳＤ0653)、ＳＤ036(ＳＤ0875)の３つが挙げられ、ＳＤ052については現在のところ導水路調査区のみで確認されている。また、調査段階においてＳＤ046・059とした溝状遺構が調査区の西端に位置しているが、昭和61年度の調査においてそれぞれが方形周溝墓ＳＴ0825の周溝東辺・北辺にあたることが明らかになったため、本報告では除外した。

導水路調査区において検出された溝のうち、ＳＤ035・040・052は弥生時代のものである。このうち、ＳＤ035は北北東方向より若干湾曲しながら延び、調査区内西側で途切れる。一方、ＳＤ040は南西方向より孤を描いて延び、ＳＤ035と幅約6.0ｍの空間をあけて同じく途切れる。また両者は幅・深さなどの規模及び形態等が類似し、出土遺物の時代幅も一致するため、この２つの溝については陸橋部を挟んで繋がる一連の溝であると考えられる。また調査区内東端部で検出されたＳＤ052は南北9.5ｍ程の狭い溝であるが、埋土中から完形の壺形土器１点をはじめ比較的残りの良い土器が出土している。このＳＤ052については、規模・形態及び出土遺物等より、工業団地分の調査区内で検出されたＳＤ0650と関連する可能性がある。この他、ＳＤ036は北西から南東に延びる幅広で浅い溝であるが、出土遺物が僅かであり、時期については明確にし難い。

ＳＤ０３５［ＳＤ０６５１］・０４０［ＳＤ０６５３］(Fig.8)

共に調査区内西側に位置する。ＳＤ035は北北東－南南西方向に延びるものであり、調査区内では延長6.0～8.0ｍ、幅3.5～3.8ｍが確認されている。断面形はほぼ台形、立ち上がりはかなり急で深さは0.5～1.0ｍ程度残存する。調査区外に続くあたりで弥生時代前期末～中期初頭の

住居址ＳＢ032を切る。一方、ＳＤ040は南西方向から東に向かって弧を描く様に延びるものであり、調査区では延長19.0ｍ、幅3.4～3.8ｍが確認されている。同様に断面形は台形を基調とするが、部分によっては堀り返しに伴うと思われる段部を持ち、底面までの深さは0.4～0.8ｍである。弥生時代中期前半～中頃の甕棺墓群と重複するため、特に調査区西端付近では堀り方は明確でない。このＳＤ040は甕棺墓群と重複する部分あたりで幅1.8～2.0ｍ程の陸橋を持つ。この陸橋は溝の一部を堀り残すことによって造り出されており、ほぼ南北方向の通行を目的としたものと考えられる。また、ＳＤ035・040は共に北西方向に向かって膨らむような弧を描くため、両者が接近する部分は南東方向に向かってすぼまるような形状をなす。この部分でＳＤ035・040はほぼ幅6.5～7.0ｍの間隔を空けており、同様に通路として機能していたと推定される。この二つの通路はほぼ10ｍ離れて位置するが、二か所の出入り口を近接させて配置させる状況はＳＤ0601・0650においても認められ、ＳＤ035・040においても出入り口を併設していたものと考えられよう。

ＳＤ０３５・０４０出土遺物

ＳＤ035・040からは弥生時代中期前半から後期後半にかけての多量の土器片及び土製品が出土した。その量はコンテナ80個分に及び、ここでは実測を行った327点の内、160点について図化した。ここでは、ＳＤ035・040より出土した土器について一括して器種毎に述べるが、出土遺構の内訳については出土遺物観察表を参照されたい。なお、出土土器については、型式の前後が必ずしも層位の上下に対応せず、幾度か堀り返しが行われたことが予想されるため、調査段階では全て一括出土遺物として取り上げている。

［埋葬専用土器］（Fig. 9）ＳＤ035・040からは甕棺墓の棺体に用いられた埋葬専用土器の破片が多数出土している。これらは同一個体と思われるものを省いて換算すると、おおよそ20個体程度が認められ、時期的には弥生時代中期前半～中頃を主体とし、一部後期前半のものを含む。このうち、後述する甕棺墓の棺体と同一個体と考えられるものも含まれ、溝掘削の際に甕棺墓が破壊され混入したものも多いと理解される。このことは、甕棺墓群と重複しないＳＤ035においてはこれらの埋葬専用土器がほとんど認められないことからも明らかである。

１は口縁部がほぼ断面三角形をなすもの。口縁部上面は平坦に整形され、端部は明瞭に稜を持つ。器面全体に丁寧なナデ調整が施され、特に口縁部上面から外器面にかけてが顕著である。

４・５は口縁端部を一度外反させ、さらに内器面に粘土を貼り付けて口縁部を形作るもの。４は口縁端部の内器面に断面三角形の細い粘土紐を貼り付けるもの。口縁部は端部に向かって僅かに肥厚し、端面は凹面をなす。また、口縁端部の上下端には刻み目が施される。５は粘土紐が分厚くなり、内側により長く突出する口縁部を形作るもの。口縁端部の上・下端にはほぼ１cm間隔で刻み目が施される。４・５共に胴部はあまり膨らみを持たないようである。

２・３・６・10は内側により長く突出する逆Ｌ字形口縁を持つもの。２・６は口縁部上面が

Fig.6　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区遺構配置図（1/200）

Fig.7　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区導水路調査区周辺遺構配置図

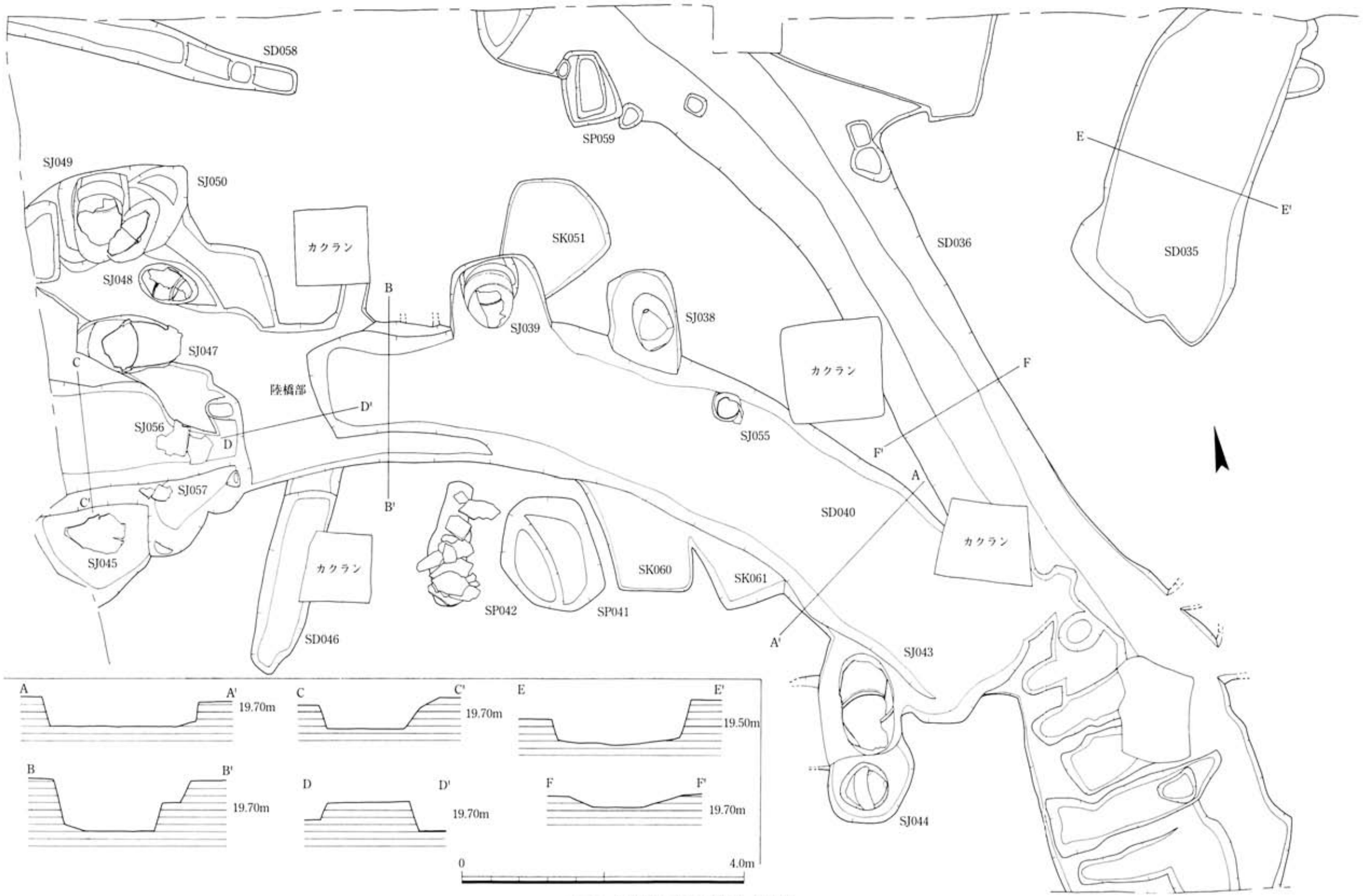


Fig.8　S D035・036・040溝（1/60）

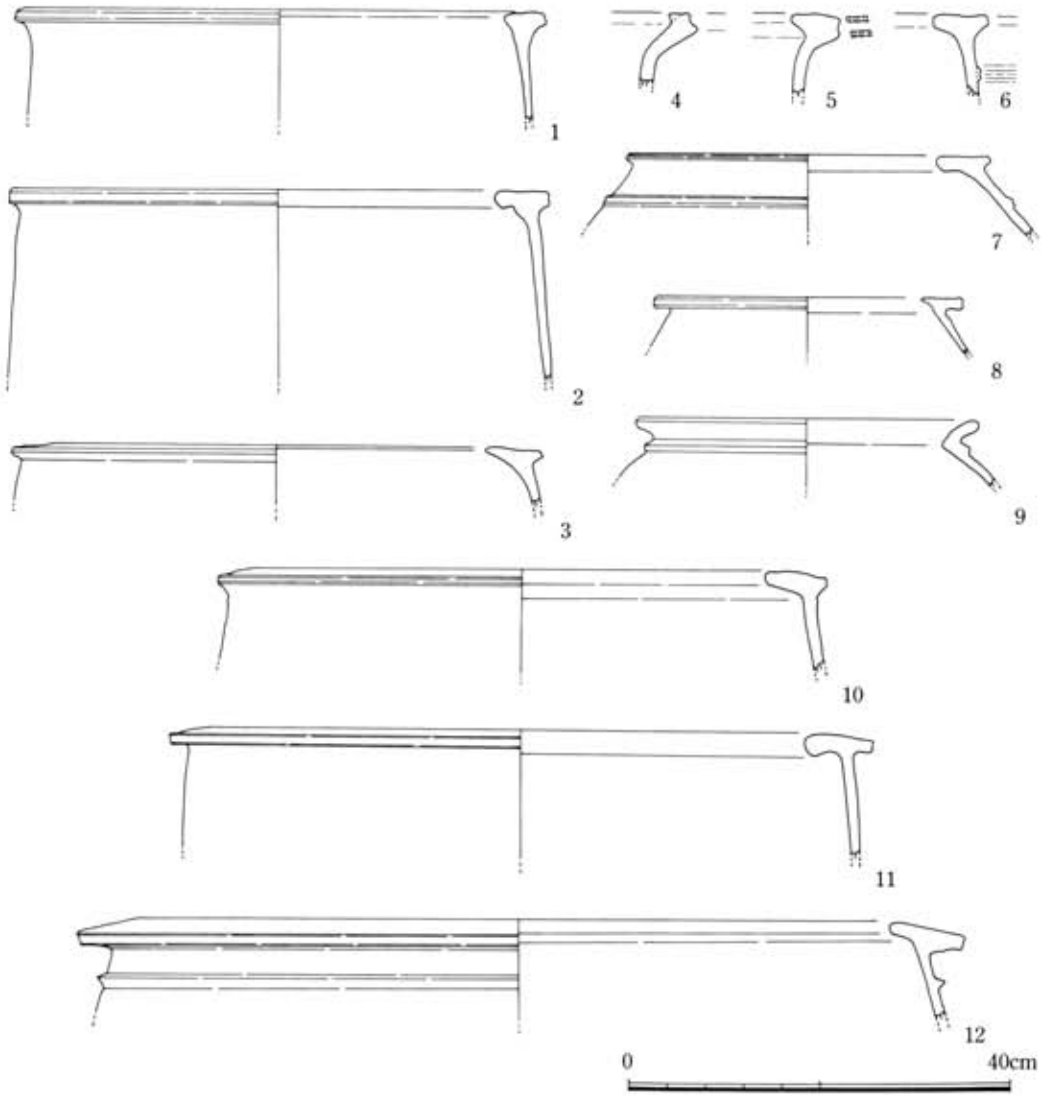


Fig.9　ＳＤ035・040溝出土土器１　埋葬専用土器（1/8）

ほぼ水平になり、口縁端部の突出は短めで端部は丸く収められる。２は口縁部上面から胴部にかけて橙褐色の胎土の上に褐色の化粧土を塗布している。６は口縁部下の外器面に断面Ｍ字の突帯を貼り付ける。３は口縁部上面がやや外傾し、内器面では胴部から口縁部にかけて内湾して稜を持たず、端部に向かって器壁が薄くなるもの。10は同様に口縁部上面が外傾するが、内器面に明瞭な稜を持ちつつ、内側に長く伸びる。

11・12はＴ字形口縁を持つもの。11は口縁部上面がやや外傾しつつ内側・外側共に長く伸び、外側から内側に向かって厚みを増す。12は口外径90cm以上になる大型品。口縁部上面がさらに外傾し、外側に向かってより長く伸びるもの。口縁部下に細い山形突帯を持つ。

７・８・９は丸みを帯びて大きく膨らむ胴部を持つもの。７は口縁端部が内側により長く突

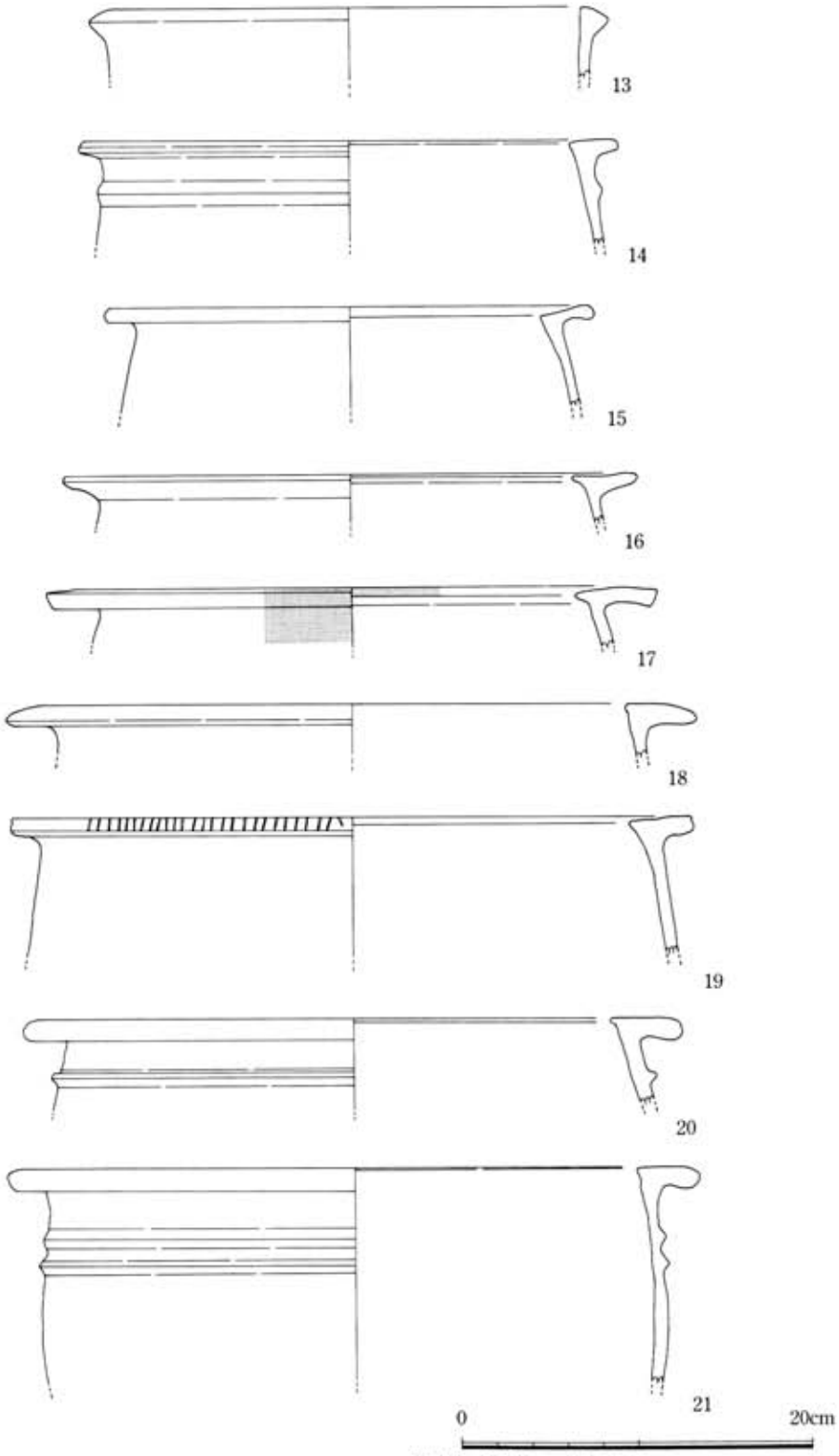


Fig.10　S D035・040溝出土土器２　甕（1/4）

出させるもので、端部は内側では丸みを持つが、外側は平坦面を作り出す。外器面に断面M字の薄い突帯を貼り付ける。8は外側にのみ口縁端部が伸びて逆L字形をなすもの。9はくの字形に外反する口縁を持ち、内器面は明瞭に稜をなして折れ曲がる。

1・4・5は城の越式、2・3・6・7・10・11は汲田式、8・12は須玖式、9は桜馬場式に相当する。1～12はいずれも胎土中に多量の砂粒・小石を含む他、相当量の雲母片を混入している。また、色調は1・5が赤褐色、4・9が淡褐色を呈する他は概ね橙褐色である。

[甕] (Fig.10～13) 13は断面三角形に肥厚する口縁部を持つもの。口縁端部はやや丸みを帯びる。外器面は丁寧にヨコナデを施す。

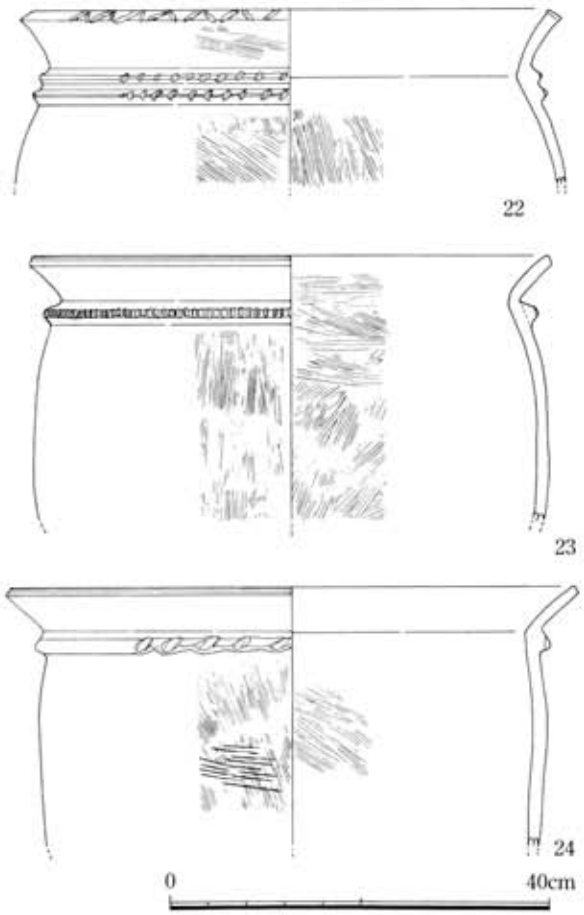


Fig.11　SD035・040溝出土土器3　甕(2) (1/8)

14～21は逆L字形をなすもの。14・19は口縁部が短く伸びるもので、14は口縁端部が丸みを持つが、19は明瞭に角を持つ。14は口縁部下に断面三角形をなす幅広の突帯を貼り付ける。18は口縁部が長く伸びるもので、口縁端部に向かって器壁が薄くなり端部は丸みを帯びる。15・20・21は口縁端部が肥厚するもの。口縁部上面は平坦に撫でられ、端部は丸みを帯びて下方に膨らむ。15は口縁部上面がやや内傾するが、20・21は水平である。20・21は口縁部下に断面三角形の突帯を貼り付ける。

16・17は内側にも突出して鋤先形口縁状をなすもの。16は口縁部が水平に伸びるが、17は湾曲し端部が垂れぎみになる。17は口縁部上面から外器面にかけて丹を塗布する。

22～39はくの字形に屈曲する口縁部を持つものである。法量によって大きく大・中・小に分けられるが、小型品は形態のバリエーションが豊富である。

22～24・32・33は口径40～60cmの大型品。22・23・32は口径と胴部径がほぼ等しいか、胴部径が若干上回るものである。口縁部は緩やかに外反し、かなり立ち上がりぎみである。くびれ部分は内外器面共に概ね明瞭に稜を持つ。22は口縁部端面にW字形を連続させたような刻み目

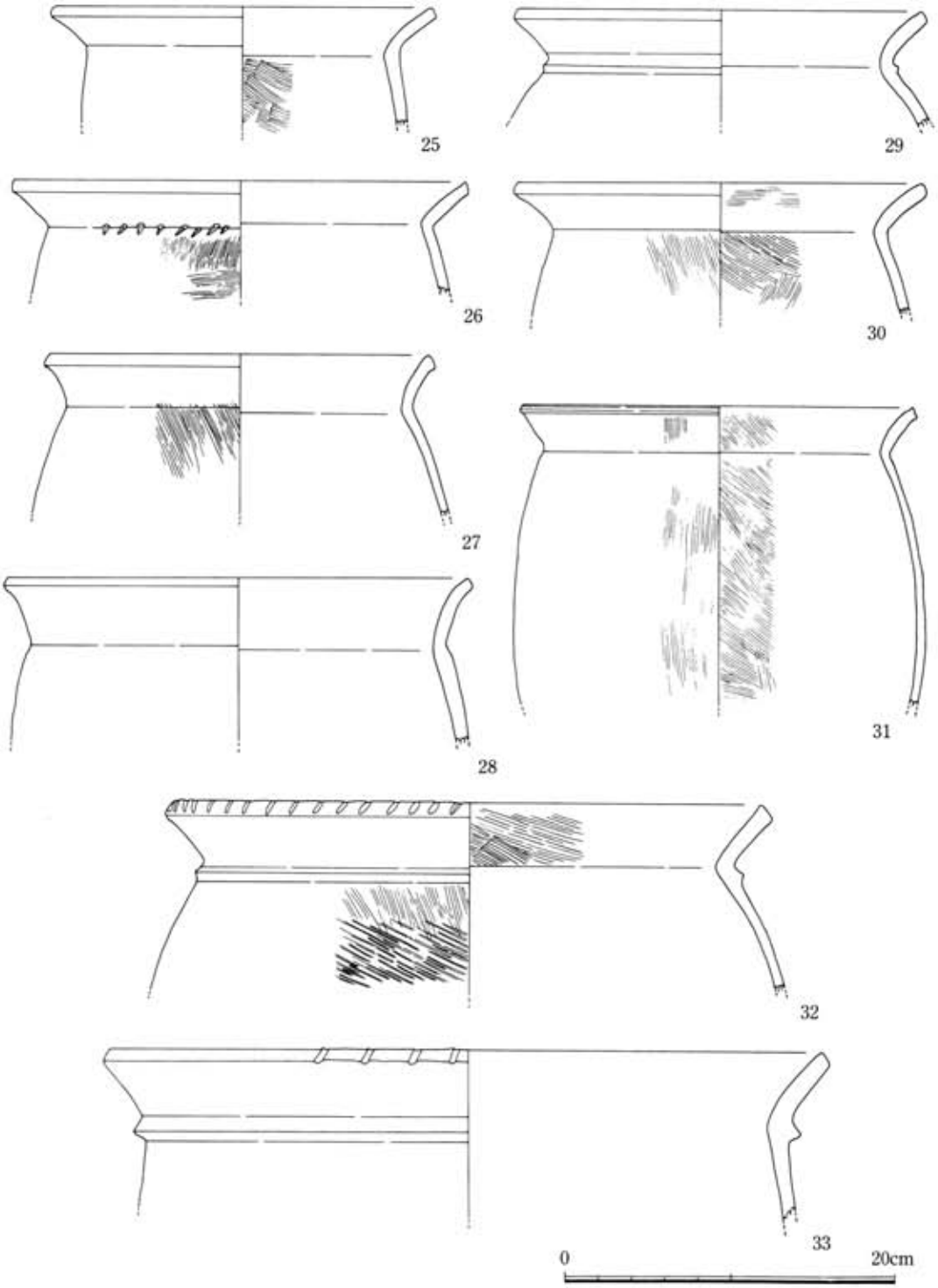


Fig.12　S D035・040溝出土土器 4　甕(3)（1/4）

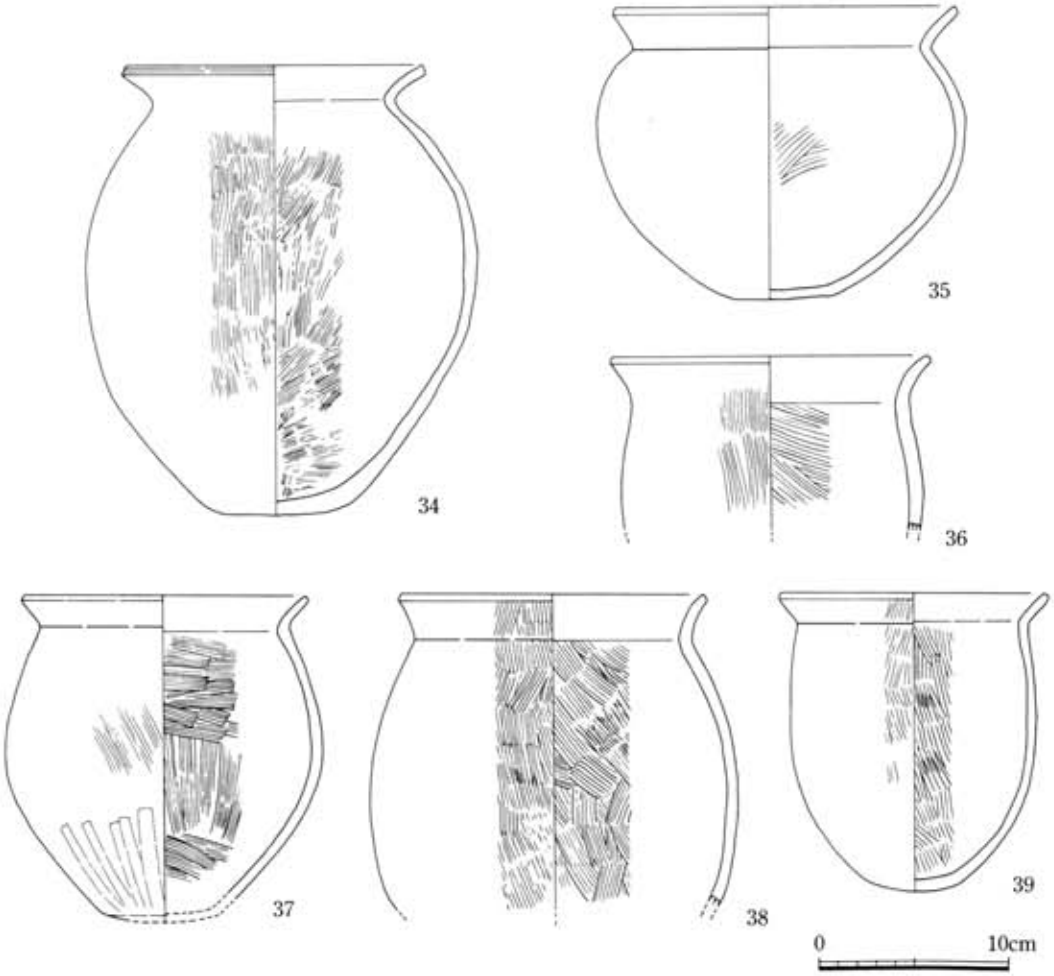


Fig.13　S D035・040溝出土土器５　甕(4)（1/4）

を施す。また、くびれ部には断面三角形の突帯を二条貼り付け、ヘラ状工具により斜め方向に刻み目を施す。頸部の刻み目は、上下二条のそれが直線的に並ぶことより、二条同時に刻まれたものと推定される。器面調整は、口縁部内外面については横方向にナデを行い、胴部内外器面はハケ目調整を施した後撫で消しは行わない。23は頸部に断面台形の幅広の突帯を持ち、ヘラ状工具による縦方向の刻み目を連続させる。口縁部内外面については横方向のナデ、胴部外器面はハケ目調整を施した後粗くナデを行うが、ハケ目はかなり明瞭に残る。また、内器面についてはハケ目調整の後ナデは行わない。32は口縁部端面に斜め方向の刻み目を連続させる。また、くびれ部には断面三角形の突帯を一条巡らせる。内外器面共にハケ目調整を行い、胴部外器面にはタタキの痕跡が認められる。22・32はいずれも口縁端部に向かって僅かに厚みを増す。24·33は胴部径が口径を下回り、胴部があまり膨らまないものである。口縁部は直線的により長く伸び、立ち上がりも大きい。24・33ともにくびれ部に断面三角形の突帯を貼り付ける。

23には突帯上に斜め方向に刻み目を施すが、一単位の幅は比較的大きく、相互の間隔も広い。口縁部内外器面はナデ調整、胴部外器面は叩きの後ハケ目調整を施し、さらにハケ目を撫で消す。内器面にはハケ目が明瞭に残る。33は口縁部端面に刻み目を施し、くびれ部に断面三角形の突帯を持つ。25～31は口径25～30cmの中型品。27・28・31は口径と胴部径がほぼ等しいか、胴部径が若干上回るものである。いずれも口縁部がかなり立ち上がる。内外器面共に胴部はハケ目調整、口縁部はハケ目調整の後ナデを行う。25・26・30は胴部径が口径を下回り、胴部があまり膨らまないもの。26はくびれ部分に刻み目を連続させる。調整技法は内外器面共に胴部はハケ目調整、口縁部はハケ目調整の後ナデを行う。29は口径に比べて胴部が大きく膨らむものである。口縁部は大きく外反し、くびれ部分の稜もあまり明瞭でない。くびれ部に断面三角形の突帯を貼り付ける。

34～39は口径15～20cm、器高25cm以下の小型品。34・37は口径に比べて胴部が大きく膨らむもので、胴上部は緩やかに湾曲する体部を持つ一方、胴下半部は直線的にすぼまり、底部は34はほぼ平底に、37はややレンズ底ぎみになる。内外器面共にハケ目調整を行い、外器面の胴下半部はヘラ状工具を用いて粘土を強く掻き取る。36・38は緩やかに外反する口縁部を持つもので、口縁はかなり立ち上がり、くびれ部分の稜は不明である。内外器面共にハケ目調整を施す。39は直線的な体部を持つもので、胴部はほとんど膨らまず、底部は丸底である。35は大きく膨らむ胴部を持ち、口径に対して器高が低い短胴系のものである。形態的には鉢との区別は難しいがプロポーションより甕に含めた。胴部上位に最大径が位置する。くびれ部から大きく湾曲しつつ底部へと続き、底部は平底となる。

［壺］（Fig.14～16）40・41は水平に長く伸びる口縁部を持つ広口壺。端部に向かうに従い厚みを増す。いずれも口縁部の全形は窺えないが逆L字形をなすものと思われる。41は外器面及び上面に丹を塗布する。42は口縁部が断面三角形に肥厚する広口壺である。端部は丸みを帯び、内器面にはほとんど突出しない。43は鋤先形口縁を持つ広口壺。口縁部が水平に長く伸び、内側にも突出する。口縁端部は平坦に面取りされ、細かい刻み目を連続して施す。45～59は複合口縁を持つ一群である。45・46は、稜を持たず丸みを帯びて内湾する袋状口縁の名残りを持つもの。47～49,58は明瞭な複合口縁をなし、頸部がほぼ垂直に伸びるもの。口縁上半部は内湾する。58は胴上半部が遺存しており、肩の張らない丸みを帯びた胴部を持つ。頸部と胴部の境及び胴部最大径の部分に断面三角形の突帯を貼り付ける。51～54・56・57・59もまた、明瞭な複合口縁をなすものであり、頸部の付け根から口縁部に向かって大きく開くものである。口縁上半部は内湾するものと、直線的に伸びるものの両者がある。またその立ち上がり方も51・52のようにかなり垂直に近づくものや逆に54のごとくややつぶれぎみになるものも含まれる。51～54は口縁部の屈曲部に細かい刻み目を連続させる。56は口縁上半部の外器面に櫛描波状文を施す。また、屈曲部の刻み目は薄く貼り付けた粘土紐上に刻まれる。59はほぼ完形品。口縁部は

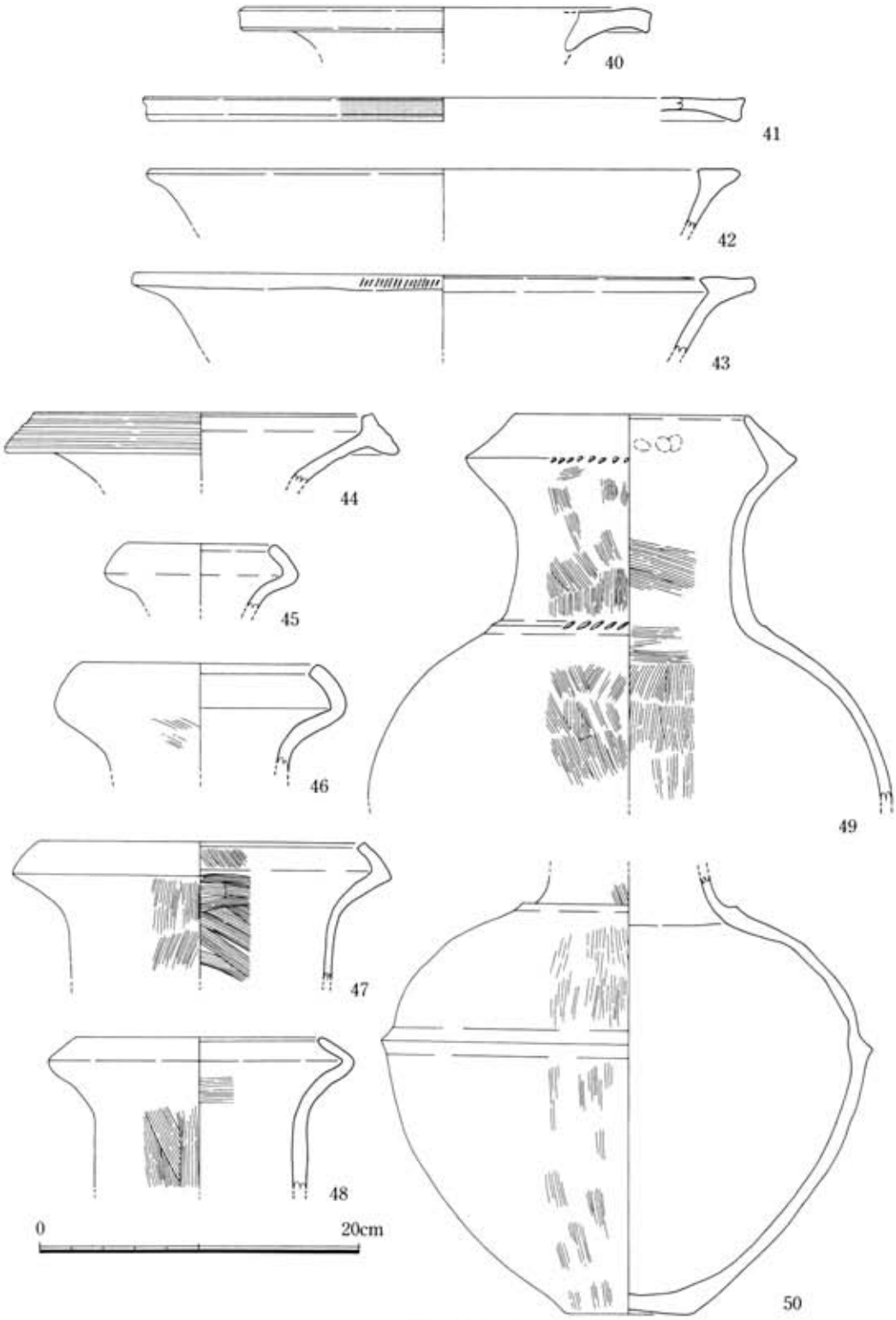


Fig.14　SD035・040溝出土土器6　壺(1)（1/4）

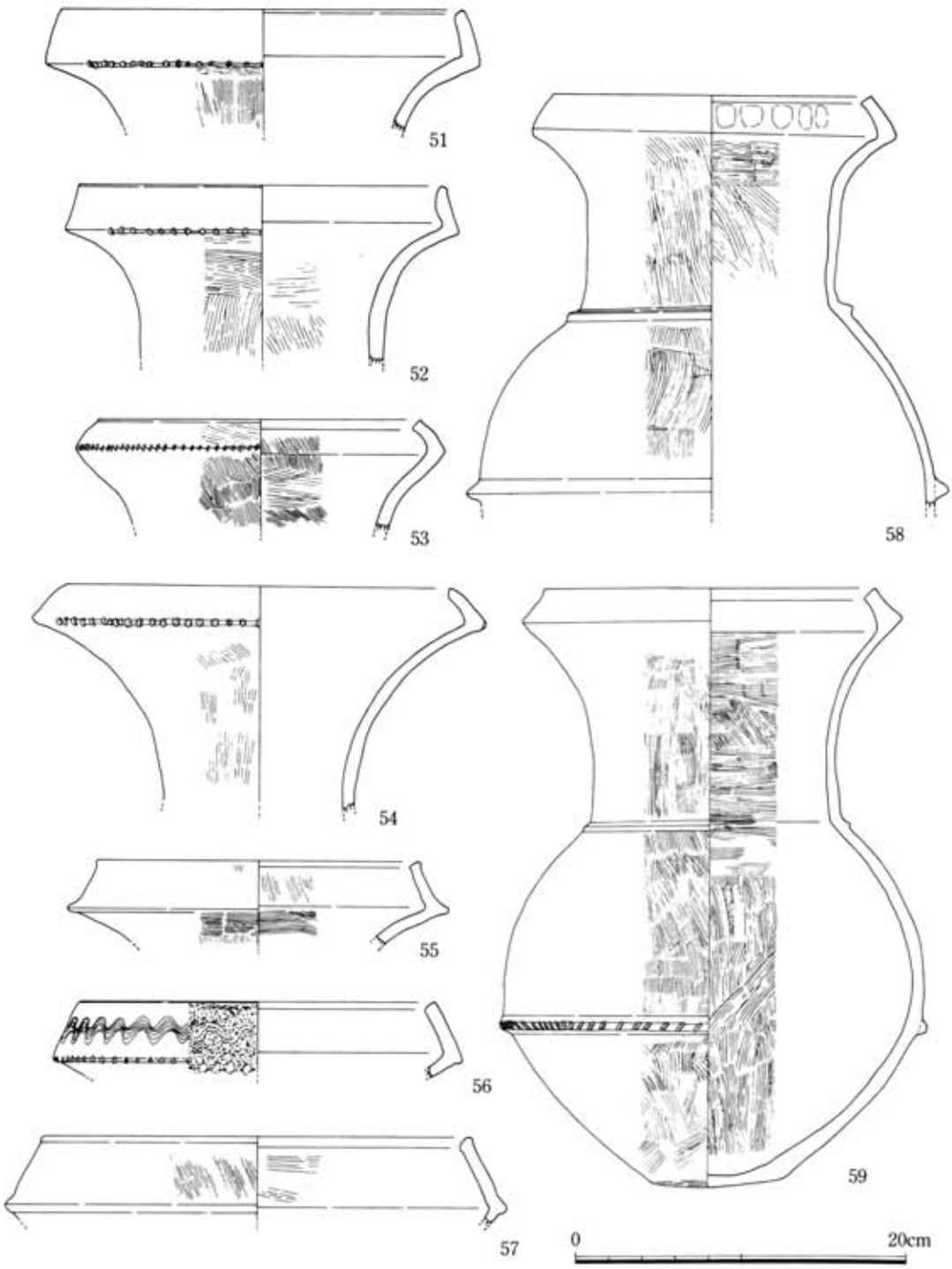


Fig.15　S D035・040溝出土土器７　壺(2)（1/4）

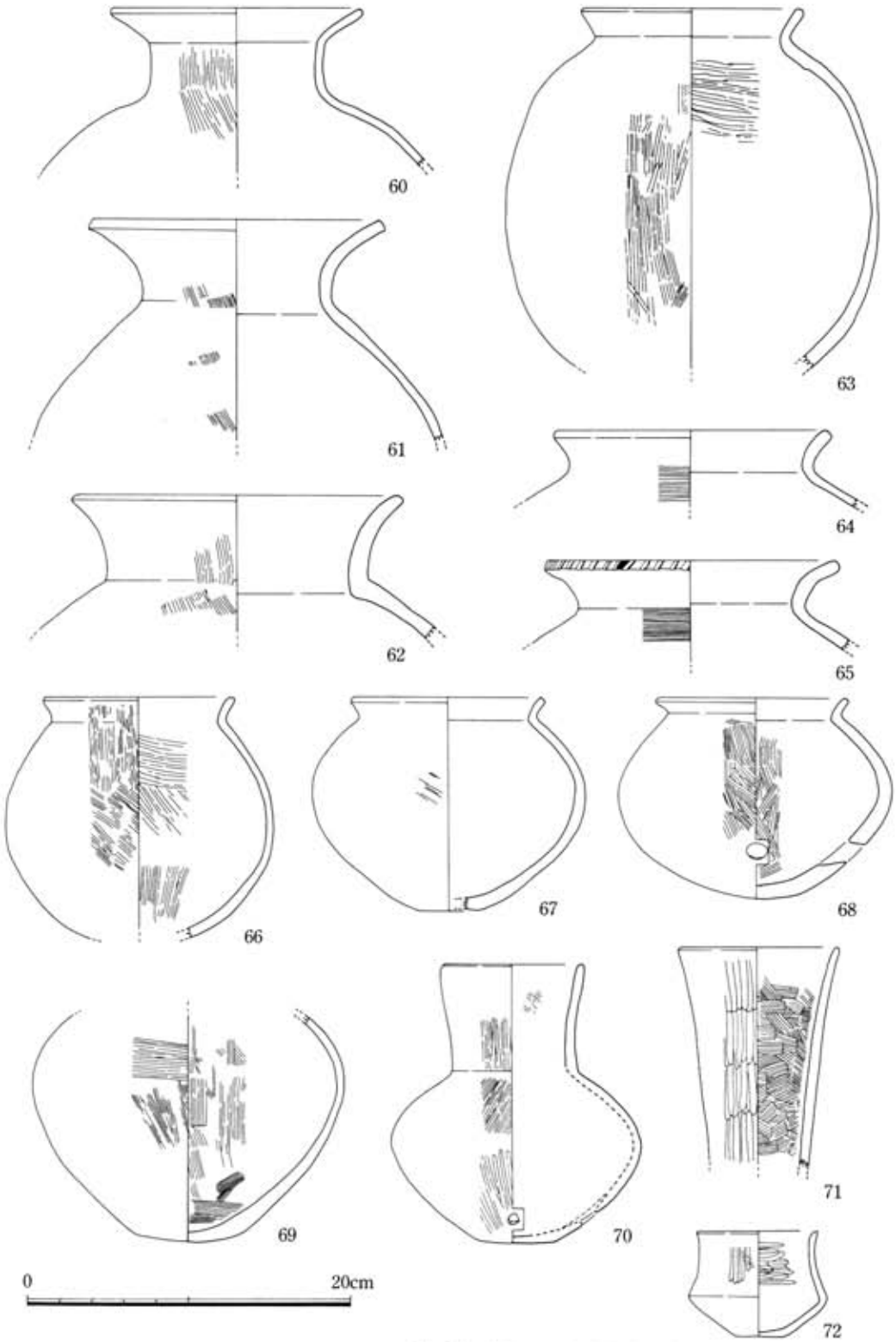


Fig.16　S D035・040溝出土土器８　壺(3)（1/4）

胴部と同程度まで大きく開き、球形に近い胴部を持つ。58に比べ、胴部径に対する頸部径の割合が大きい。胴部最大径のやや下位に断面台形の突帯を貼り付け、突帯上には刻み目を施す。底部はややレンズ底ぎみになる。いずれも口径20～25cm前後に収まる。

55は口縁上半部が内湾し、口縁部下端がつまみ出すように外側に伸びるものである。頸部はかなり大きく開く。

この他複合口縁壺に含まれるものとして50がある。50は胴部のみ遺存するもので、頸部径に比べて大きく張った肩を持ち、底部に向かってはややすぼまりぎみになる。胴部の最大径は中央やや上寄りに位置し、この部分に断面三角形の突帯を貼り付ける。底部はやや凹面をなす。44は口縁端部が上下に拡張され、端面に5条の凹線を巡らす瀬戸内系の二重口縁壺と思われるが、器台の可能性もある。口縁部は凹線施文後に横方向のナデ調整が施されるため、凹線は凹部に対して凸部は明瞭に稜をなさない。口縁部は直線的に大きく開き、頸部との境付近で破損しているようである。口縁上端は面取りを施すのに対し、下端部はやや丸みを持つ。色調は黄橙色を呈し、胎土中に0.5～1.0mm程度の砂粒を多量に含む他、3.0mm程の小石や雲母を若干混入する。色調・胎土ともに在地のものと大きな違いは認められない。

60～69は外反する単口縁を持つ一群。形態・法量共にバリエーションが豊富である。60～62は大きく外反する口縁を持つもの。全形は不明だが、肩の張らない撫で肩の胴部を持つものと思われる。垂直に立ち上がる頸部から外反するもの(60・61)と胴部からそのまま外反するもの(62)のがある。いずれも口縁端部は平坦面を持ち明瞭に稜をなす。63・64・65は短く外反する口縁を持つもの。63は口径に対して胴部が大きく膨らみ、且つ長く伸びる長胴型のものである。口縁部が直線的に伸びるもの(63)と外反するもの(64・65)の両者がある。65は口唇部に刻み目を施す。66～69は短く外反する口縁を持つ短胴型のもの。胴部中位のやや下寄りに胴部の最大径が位置するもの(66)、ほぼ胴部の中位に最大径が位置するもの(67・68)、胴部中位のやや上寄りに最大径が位置するもの(69)と様々である。底部の作りも、67が平底、69がレンズ底、68が丸底とバリエーションに富む。68は胴下半部に一か所、焼成前に穿孔を施される。

70・71は長頸壺。70はソロバン形に膨らむ胴部と直線的に立ち上がる頸部を持つもの。底部は平底で胴下半部の下寄りには焼成前に穿孔が施される。内外器面にはハケ目調整を行うが、外器面の胴下半部には細いヘラ状工具よりナデ調整がなされる。71は緩やか開きつつ、長く伸びる口縁部を持つもの。頸部～口縁部のみが遺存する。外器面は縦方向の丁寧なヘラミガキ、内器面はハケメ調整を施す。

72は直口する口縁部を持つ広口壺。器高6.5cm程度の小型品で完形である。底部は平底、頸部から口縁部にかけての内外器面にヘラミガキを施す。

[底部] (Fig.17) 底部を一括して記述する。73～85は甕。73・76は大きくくびれるもので、底面は上げ底。74・75・77・78は直線的な胴部から底部が短くすぼまるもの。78は平底、74・

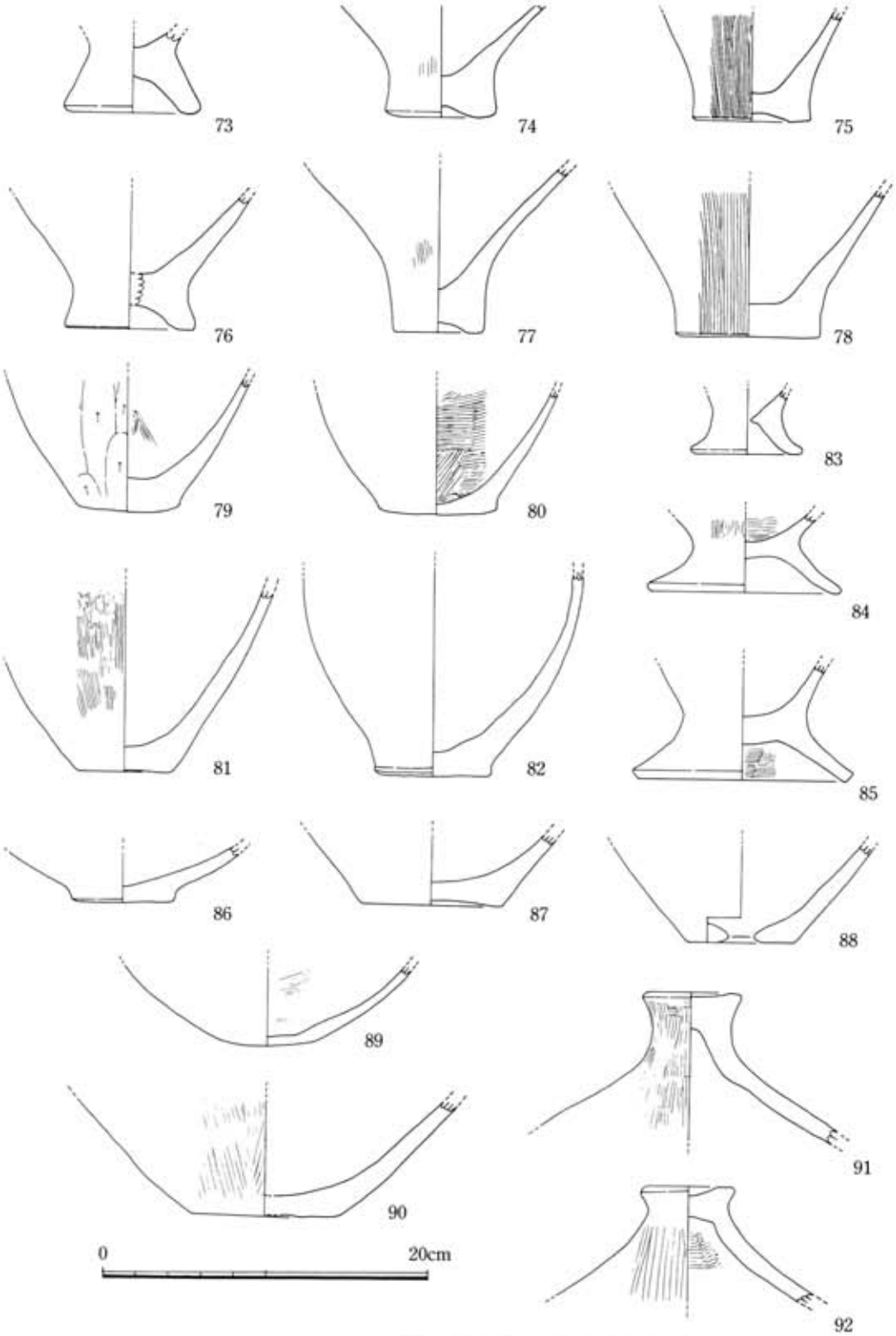


Fig.17　S D035・040溝出土土器９　底部・蓋（1/4）

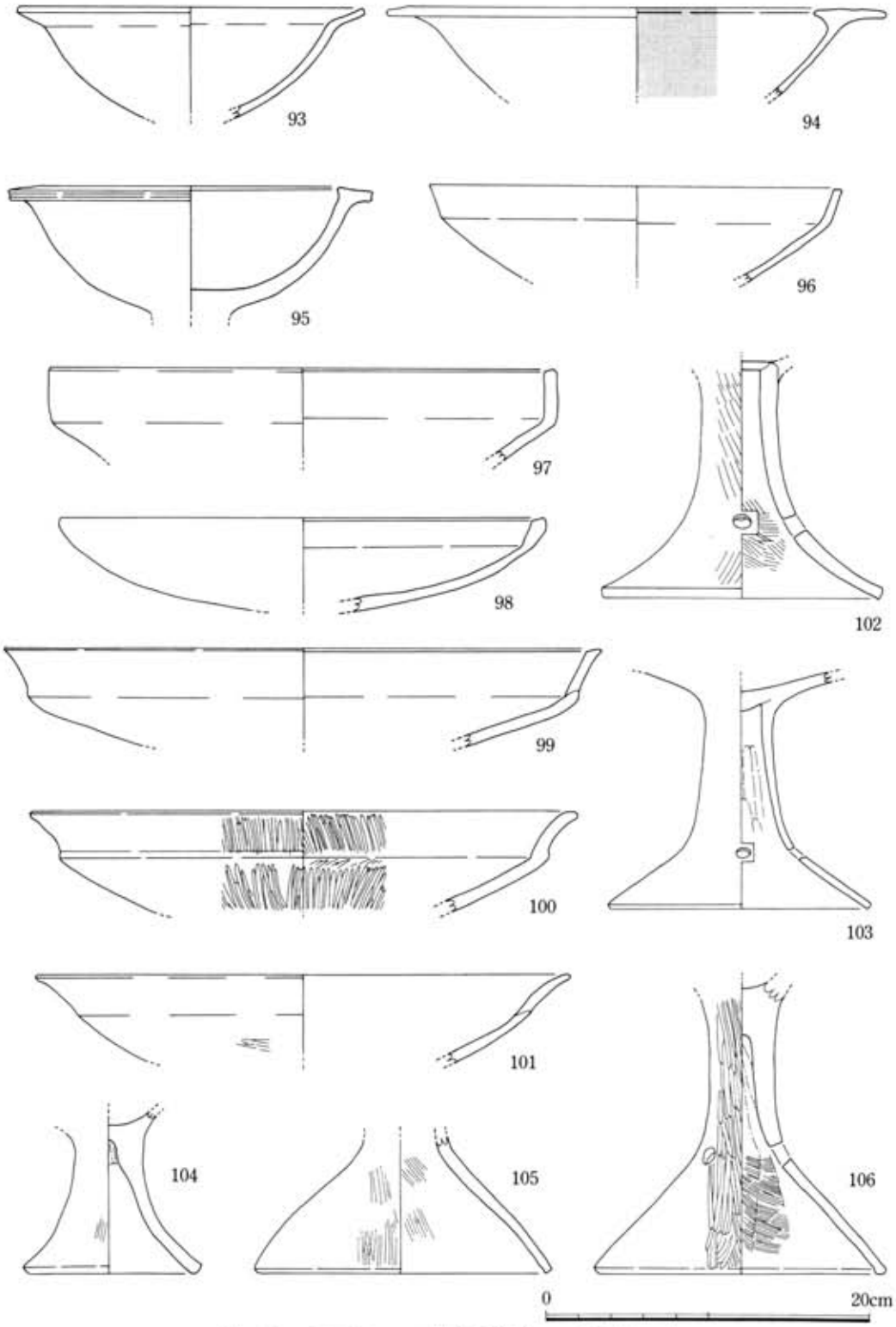


Fig.18　S D035・040溝出土土器10　高坏（1/4）

75・77は底面が凹形に上げ底になる。75・78は逆L字形口縁を持つ甕の底部かと思われる。79～82は緩やかに湾曲する胴部を持つもので、くの字形口縁をなす小型甕の底部かと思われる。底面が僅かに凸面をなすもの(79・80)及び平底になるもの(81・82)がある。79は外器面にヘラ状工具によるナデ調整を施す。83～85は台付甕の脚台部、86～90は壺の底部かと思われる。86・88・90は平底、87は底面がやや凹面になるもの、89は丸底である。88は底面に焼成前に穿孔を施す。

［蓋］(Fig.17) 91・92は蓋、2点のみ出土している。91・92共に頂部が短くくびれるもので、上面はやや凹面をなす。

［高坏］(Fig.18) 95は逆L字形口縁を持つもの。口縁部は水平に伸び、端部は平坦面をなす。94は鋤先形口縁を持つもの。口縁部は水平になり、外側への突出は薄く長く伸び、端部は丸みを帯びる。内器面に丹塗りの痕跡が認められる。

96・97・99・100・101は口縁部が屈曲して立ち上がるもので、その立ち上がり方は、直立するものから外反するものまで様々である。97は口縁部が直立するもの。口縁端部は面取りされて平坦面を持つ。96・99は口縁部が直線的に伸び外傾するもの。口縁端部は97と同様に面取りされる。100・101は口縁部が外反するもの。口縁端部は丸みを帯びる。100は内外器面共にヘラミガキが施される。93は口縁部が外側に折れつつ、やや内反するもの。鉢である可能性も考えられる。98は体部から口縁部にかけて緩やかに内湾するもの。外器面では口縁部と体部の境が不明瞭だが内器面には稜を持つ。口縁部は肥厚し、端部は面取りを行う。同様の形態をなすものは認められず1点のみの出土である。

その他、高坏の脚部を一括して述べる。102・104は裾部が外湾するもの。器壁はかなり厚めで、102は四方向に向かって焼成前に穿孔されている。103は裾部が直線的に伸びるもの。器壁は102に比べてかなり薄く、同様に四方向に向かって焼成前に穿孔が施される。105・106は裾部がやや内湾するもの。105は裾端部が一点のみで接地しているが、106は裾端部全体が面的に接地する。106もまた四方向に穿孔され、外器面は縦方向にヘラミガキがなされる。

［鉢］(Fig.19～20) 最もバリエーションの豊富な器種であり、小型品になる程、一定した形態を持つ群を抽出することは困難である。

107・110は逆L字形口縁を持つものである。107は外側に向かって水平に太く短く伸びるもので、口縁端部は丸みを持つ。口縁下に断面三角形の突帯を一条貼り付ける。110は口縁部上面がやや外傾するもので、内側にも僅かに突出する。

108・109・111～116は単口縁を持つもの。口径40cm程度のものから口径6cm程度のものまで大小様々である。112・114・116は口径30～40cm程度の大型品である。112は複合口縁壺の胴下半部のみをカットしたものか。底部はほぼ平底、内外器面共にハケメ調整を施す。116は口径に比べてやや浅めの器形をなす。口縁端部は水平に面取りされ、器壁はかなり厚めである。

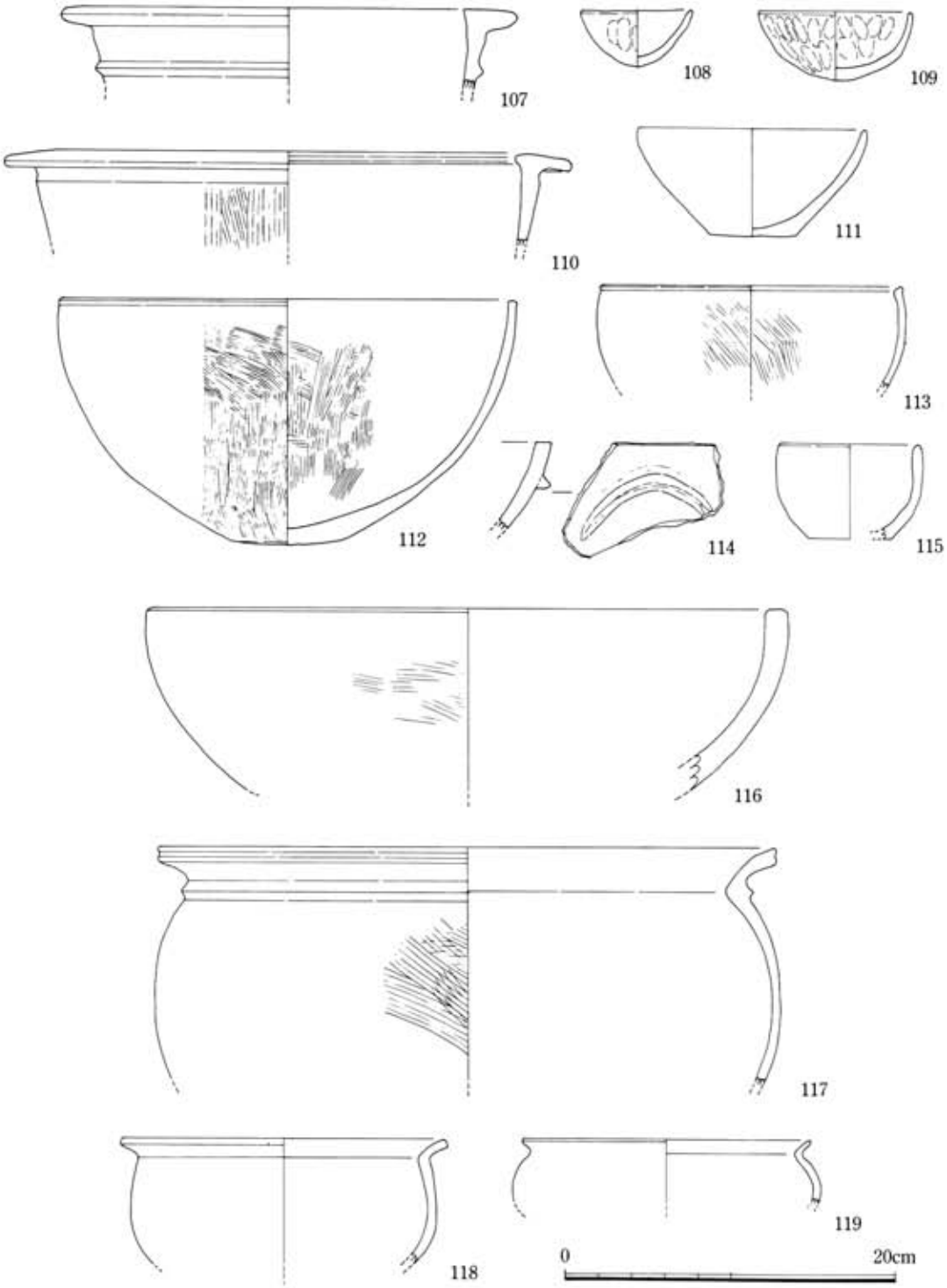


Fig.19　S D035・040溝出土土器11　鉢(1)（1/4）

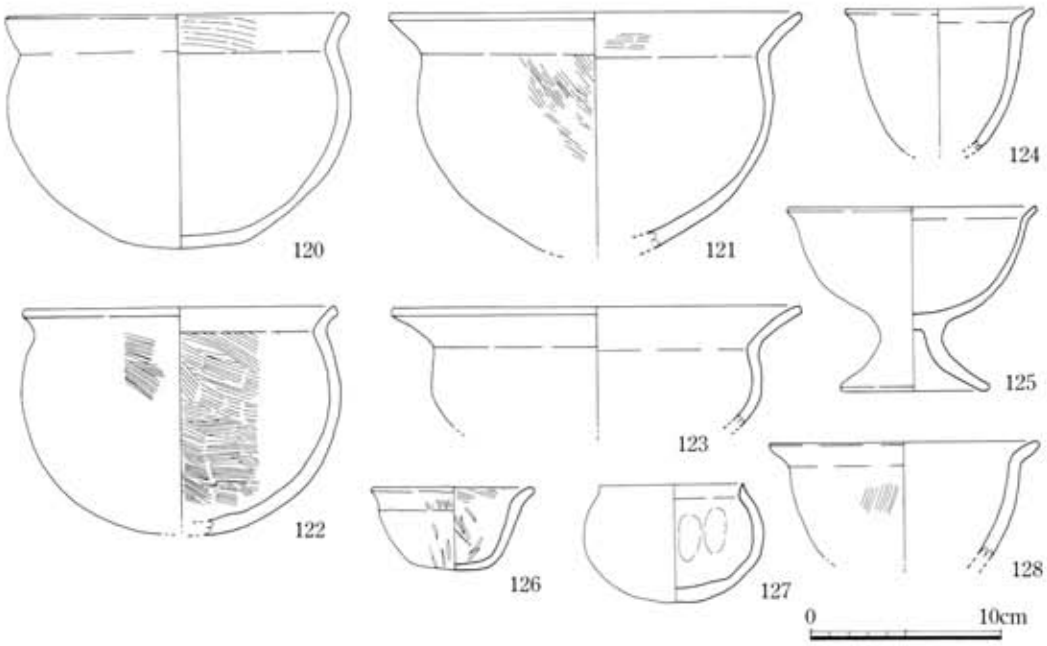


Fig.20　ＳＤ035・040溝出土土器12　鉢(2)（1/4）

114は外器面の口縁部下に半月形に粘土紐を貼り付ける。111・113は口径15～20cm程度のものである。111は体部がほぼ直線的に伸びるのに対し、113は体部がボール形に膨らむ。108・109・115は口径10cm未満の小型品である。115は口縁部が直立して平底をなし、108・109は体部が丸底を呈するもので、手捏ね風に荒く成型される。

117～125・128は屈曲して外反する口縁部を持つものである。117は口径35cm以上の大型品。口径と胴部径はほぼ等しい。口縁部と胴部の境のくびれ部分に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁部は端部に向かってやや厚みを増し、端部は凹面をなす。118～123は口径20cm前後のもので器形はバリエーションに富む。118は胴部があまり膨らまず、深い器形をなすもの、119は逆に胴部が大きく膨らみ、底の浅い器形をなすものである。120は直線的に伸び、かなり立ち上がりぎみの口縁部を持つもので、膨らんだ胴部から底部に向かってややすぼまりぎみになる。底部底面は僅かに凸面である。122はほぼ球形の胴部をなすもの。底部は丸底である。121･123は口縁部が直線的に長く伸び、かつ大きく開くもの。胴部はあまり膨らまず、121は底部に向かって直線的にすぼまる。124・125・128は口径10～15cm程度の小型品。124は口径に対して深みのある器形をなすもの。125は脚台を持つが、128も同様に脚台を持っていた可能性が高い。いずれも口縁部は短く外に折れ、胴部はほとんど膨らまない。

126は手捏ね風のミニチュア品である。短く外に折れる口縁部と直線的な胴部をなし、底部はほぼ平底。内外器面にはヘラ状工具によるナデの痕跡が認められる。127は丸く膨らむ椀形の器形をなす小型品。口縁部と胴部の区別はなく、端部を面取りして口縁とする。

［器台］(Fig.21・22)器台には筒形器台の他、口縁部径と裾部径が等しく開くもの、大型化し、体部の上位でくびれて口縁部と裾部が大きく開くものの3種がある。

129～132は大型の筒形器台である。鍔部を持たないもの(129・130)、鍔部を持つもの(131・132)がある。130の外器面には横方向にヘラミガキの痕跡が遺存するが、その他のものは器面の荒れがひどく、調整技法及び丹塗りの有無等は不明である。

133～146は口縁部径と裾部径が等しく開くもの。133は緩やかに湾曲する体部を持つもので、口縁部はあまり大きく広がらない。134は体部の中央部分でくびれ、上下に大きく開くものである。外器面にはヘラ状工具による荒いナデ調整が施される。137は体部が円筒形をなすもので、口縁部・裾部は短く外反する。器壁はかなり厚めで重量感がある。135・138は共にくびれ部分は上位に移っているが、体部中央は未だ円筒形をなすもの。135は外器面をヘラ状工具によって粗く整形し、内器面はハケ目調整を行う。138は内外器面共にハケ目を残す。139・142・143・145は裾部がやや外反して伸びるもの。くびれ部分から緩やかに外湾していくもの(139・143・145)と、直線的に伸びて端部が外反するもの(142)がある。いずれも外器面に丁寧なハケ目調整を施す。140・144は裾部がくびれ部分から真っすぐ伸びて接地するもの。140は外器面にタタキ目を、144はハケ目を残す。146はくびれ部分から緩やかに外湾するもの。裾部は器壁がかなり薄くなる。体部下半部の外器面にはタタキ目、上半部にはハケ目を残す。136は口径に対して器高が低いつぶれぎみのプロポーションをなすもの。口縁部は直線的に開き、裾部は緩やかに外湾する。この他、特徴的なものとして、口縁端部が内側に屈曲して複合口縁状をなす141がある。

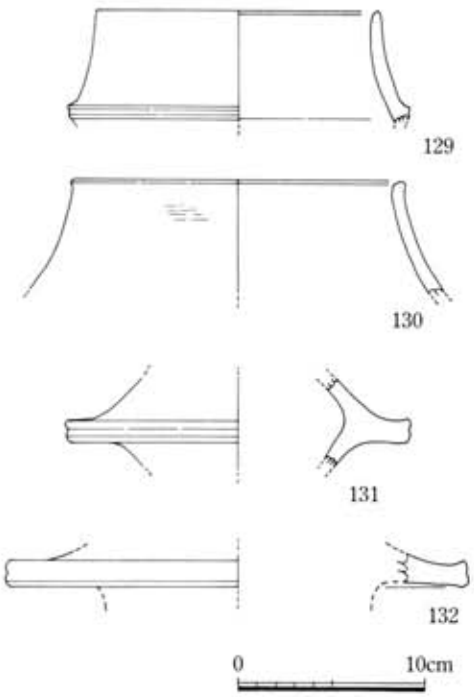


Fig.21　SD035・040溝出土土器13　器台(1)(1/4)

［支脚］(Fig.23)147・149・150は上面が水平になるものであり、裾部が直線的に伸びるもの(147、150)と、外反するもの(149)の両者がある。外器面にはタタキ目、内器面にはヘラ状工具によるナデの痕跡が認められる。

151・152・155・156は上面が斜めに傾斜するもの。上面の一端が突出するもの(151・152)と突出しないもの(155・156)がある。突出するタイプのものは、口縁部が内側に突出して中央部に穿孔が施されるのに対し、突出しないタイプのものは口縁部が直口する。両者とも外器面に

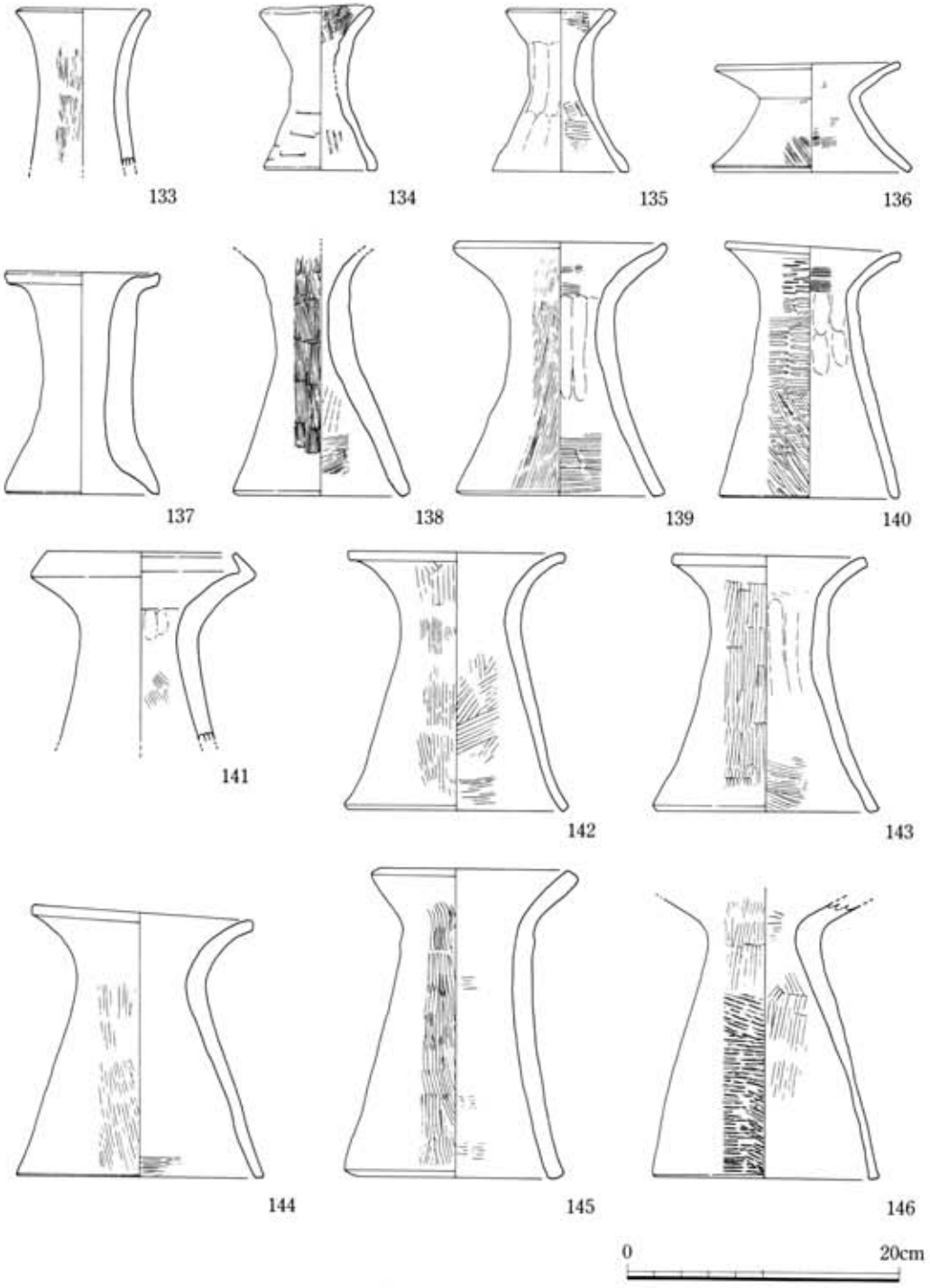


Fig.22　S D035・040溝出土土器14　器台(2)（1/5）

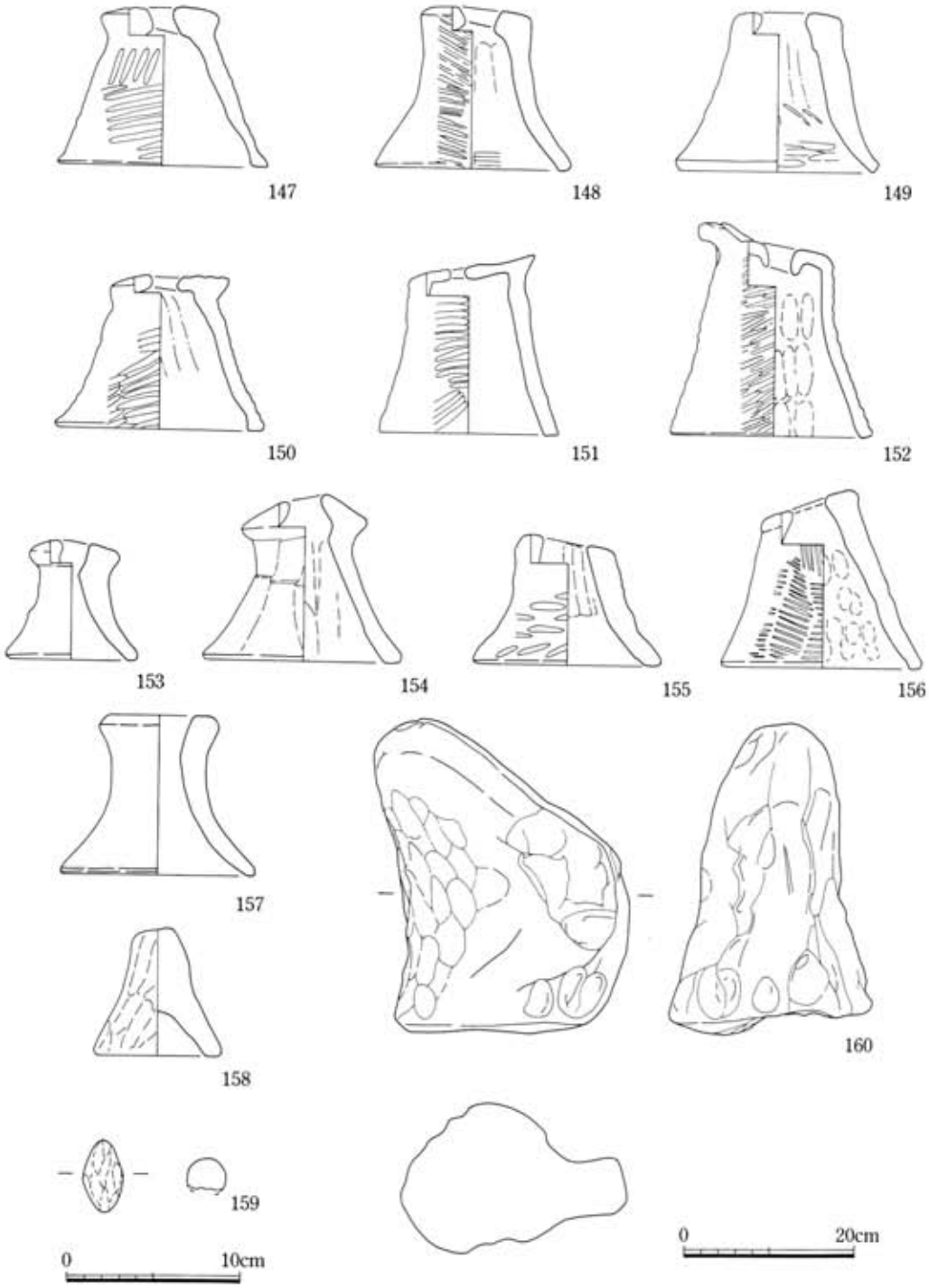


Fig.23　ＳＤ035・040溝出土土器15　支脚・土弾（160のみ1/8、他は1/4）

タタキ目が明瞭に残り、内器面にはヘラナデの痕跡あるいは指頭圧痕が認められる。

153・154は上面が凸面になるもの。外器面は153・154共にヘラ状工具によって粗く整形され、タタキ目は認められない。

この他、外反する口縁部から裾部にかけて緩やかに湾曲するものとして157がある。器面はナデ調整を行い、叩きは行わない。形態から器台として使用された可能性もある。また、158は、孔を持たない円錐形のものであり、手捏ね風で整形は荒い。160は器高約23cmの大型品。裾部に向かって広がる器形をなすが、底面は凹凸が激しく安定しない。粘土塊を繋ぎ合わせ、指で整形しただけの荒い作りである。煤あるいは強火を受けたような色調の変化等は認められない。157・158・160はいずれも一点のみの出土である。

[土製品](159) いわゆる土弾と呼称されるもの。一部欠損するが断面形はほぼ円形である。

以上、ＳＤ035・040出土土器について器種毎に述べたが、次に出土土器の時期について考察する。出土土器は大きく弥生中期前半～中頃(一部前期末～中期初頭のものを含む)、後期前半～後半の二時期に分けられる。その内弥生中期前半～中頃に含まれるものは、主に甕棺墓に用いられる大型甕や丹塗りを施した甕・壺、あるいは高坏・筒形器台等の祭祀土器によって占められる。これら中期に含まれる土器には完形のものは全く認められず、いずれも小片・細片であり、また、その多くがローリングを受けて摩耗している。おそらく溝掘削時に当該期の甕棺墓・祭祀土壙等の遺構を破壊し混入したもの、あるいは周辺部からの流れ込みによるものと判断される。それに対して後期の土器は、相対的な出土量は中期のものより少ないものの、ほぼひと通りの器種を揃えた日常生活用土器からなり、完形品についても概ねこの時期に絞られる。特に形態的な変化を追い易い、甕・壺・高坏を中心として時期的により詳しく見るならば、甕は口縁部の屈曲具合、胴部のタタキ目をハケ目で撫で消す点、底部は平底のものが主体で丸底・尖底のものがみられない点、また、壺のうち、複合口縁壺については、口縁部が明瞭に稜をなして内傾する形態をとりつつも、端部が外反する二重口縁状になるものを含まず、底部も平底あるいはレンズ状底のものを主体とする点、さらに高坏についても口縁部が屈曲して外反するも、長伸化の傾向を示していない点など、出土土器の中心は北部九州の弥生土器編年における下大隈式の範疇のものが主体となり、一部高三潴式段階のものを含みつつ、西新町式段階までは下らない。またその埋没時期については、ＳＤ040床面より出土した複合口縁壺(Fig.15－59：PL.2－5)が下大隈式の中でも新相を示し、出土土器中でも最も新しい段階に位置付けられることから、おそらくＳＤ035・040は、弥生時代後期後半のある時期、比較的短期間のうちに埋没したものと考えられる。

参考文献　柳田康雄「高三潴式土器と西新町式土器」『弥生文化の研究４』 1987

ＳＤ０３６［ＳＤ０８７５］(Fig.８)

調査区西側、ＳＤ035・040の間を抜けて北西ー南東方向に延びる。工業団地関係の調査では、北側はカーブを描いて北西から北へと、また南側はさらに南東方向へと続くことが明らかになっている。平面形は北側・南側が幅広でＳＤ035・040に挟まれる中央部付近の幅が一部狭くなるが、だいたい3～5ｍ程の幅で遺存している。断面形は上部が大きく開く逆台形をなし、底面の幅は0.8～1.2ｍ、深さは約0.3ｍと浅い。ＳＤ040・ＳＰ059を切り、埋土中より弥生土器・土師器・須恵器の小片が出土している。

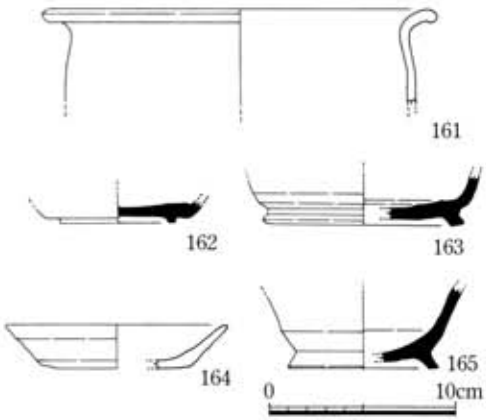


Fig.24　ＳＤ036溝出土遺物（1/4）

出土遺物（Fig.24）161・164は土師器。161は大きく外反する口縁を持つ小型の甕。口縁端部は丸く仕上げられ、胴部はほとんど膨らまない。164は直線的に伸びる体部を持つ坏。底部はヘラ切り離しである。162・163・165は須恵器の坏身。162は断面方形の低い高台を貼り付けるもの。底部と体部の境には明瞭に稜を持つ。163は外方にやや踏ん張りぎみの高台を貼り付けるもの。165も同様に踏ん張りぎみの高台を持つが、より長く伸び、端部に向かって薄くなるもの。内外器面ともに底部から体部へは緩やかに湾曲し、明瞭な稜は持たない。162・163・165共に胎土中に砂粒・小石を少量含む。

ＳＤ０５２（Fig.25）

調査区西端に位置する。南北方向に真っすぐ延びる溝で、南側は調査区外に続くが、北側は調査区北辺から5ｍ程の所で途切れている。長さ9.5ｍ、幅は北端部で0.9ｍ、調査区南壁付近で1.2ｍで、深さも北端部で0.35ｍ、調査区南端付近で0.65ｍと、南に向かって次第に深くなる。断面形は逆台形で、若干ではあるが底面に向かってややすぼまりぎみになる。底面の幅は狭い所で0.1ｍ程度で、概ね0.2～0.35ｍである。出土遺物には、弥生土器・土製品・石器があるが、弥生土器は比較的残存状況が良好である。

出土遺物（Fig.26・27）166～181は弥生土器。166・168～171・176・177は甕である。166は逆Ｌ字形口縁を持つもの。口縁部は水平に長く伸び、端部は丸みを帯びる。168～171はくの字形口縁を持つもので、口縁部は長く直線的に開く。胴部最大径は胴部の中央付近に位置し、底部は丸底である。器壁は薄く、内外器面にハケ目調整を施す。176もくの字形口縁をなし、胴部から口縁部に向かってすぼまりぎみの体部を持つ小型品。177は緩く外反する口縁を持つ短胴型のもので、器種の区分は難しいが一応甕に含めた。口縁部と胴部のくびれ部分は内外器面共に

稜を持たない。167・174・175は壺。167は鋤先形口縁を持つもので、口縁部上面は平坦で、端部は丸く仕上げられる。174・175は共に大きく外反する口縁をなすもの。174は胴上半部が丸みを帯びるのに対し、胴下半部は底部に向かって直線的にすぼまる。底部底面は凸面をなす。175は174に比べ、口縁部が長く、より大きく開き、胴上半部はややなで肩ぎみである。172・173は鉢。172は緩く外反する口縁を持ち、厚手で深みのある器形をなす。くびれ部分に断面台形で幅広の突帯を貼り付け、この突帯上と口唇部にヘラ状工具による刻み目を施す。173は単口縁の浅鉢で、底面から口縁部にかけて緩やかに湾曲する。口縁端部は丸みを帯びる。178～180は高坏。178は浅い体部から大きく開く口縁部を持つもの。口縁部と体部の境はやや不明瞭ながら稜をなす。器壁は薄く、胎土はあまり混入物は含まず比較的精良である。179・180は高坏の脚部。180は裾部の四方向に穿孔を施す。181は器台。口縁部は大きく外反し、端部は若干厚みを増す。

182は砥石。四方向に研磨面が認められる。ほぼ半分程度が欠損していると思われるが、破面部分も磨耗しているため、欠損後も使用されていたようである。183は土弾。砂粒を多く含む粘土を用いて成型し、さらに精良な粘土を化粧土として薄く塗布する。184は土製の紡垂車。表面は平坦に撫でられ、ほとんど凹凸は認められない。

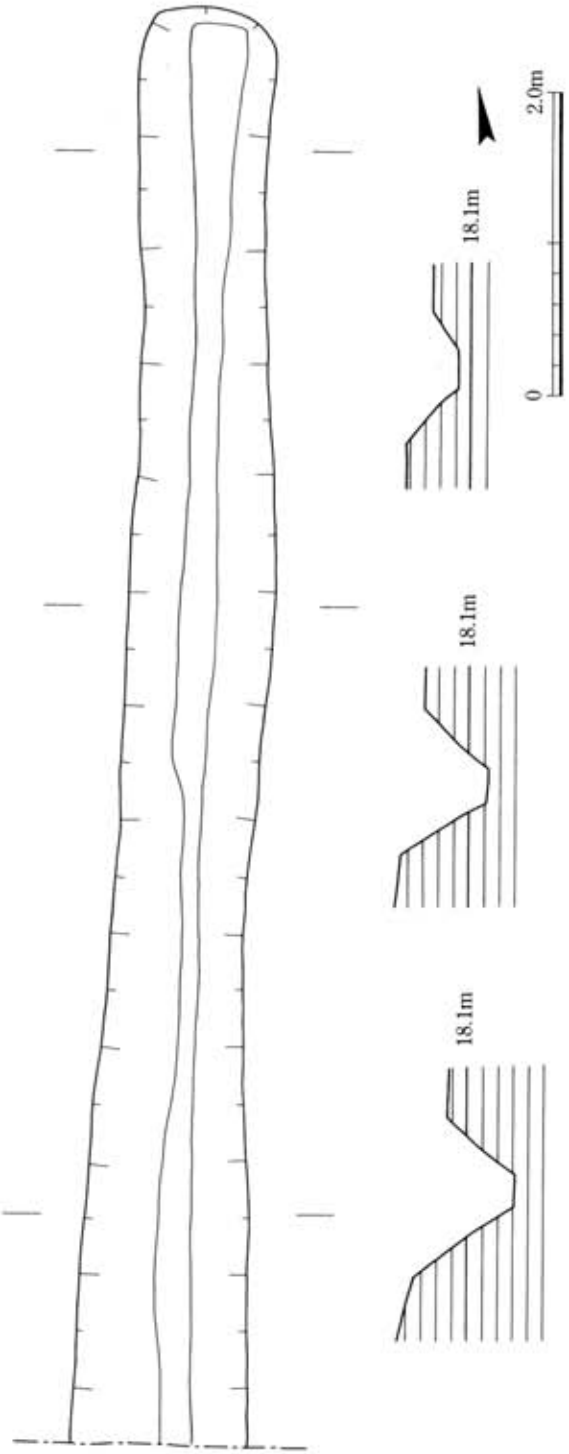


Fig.25　ＳＤ052溝（1/50）

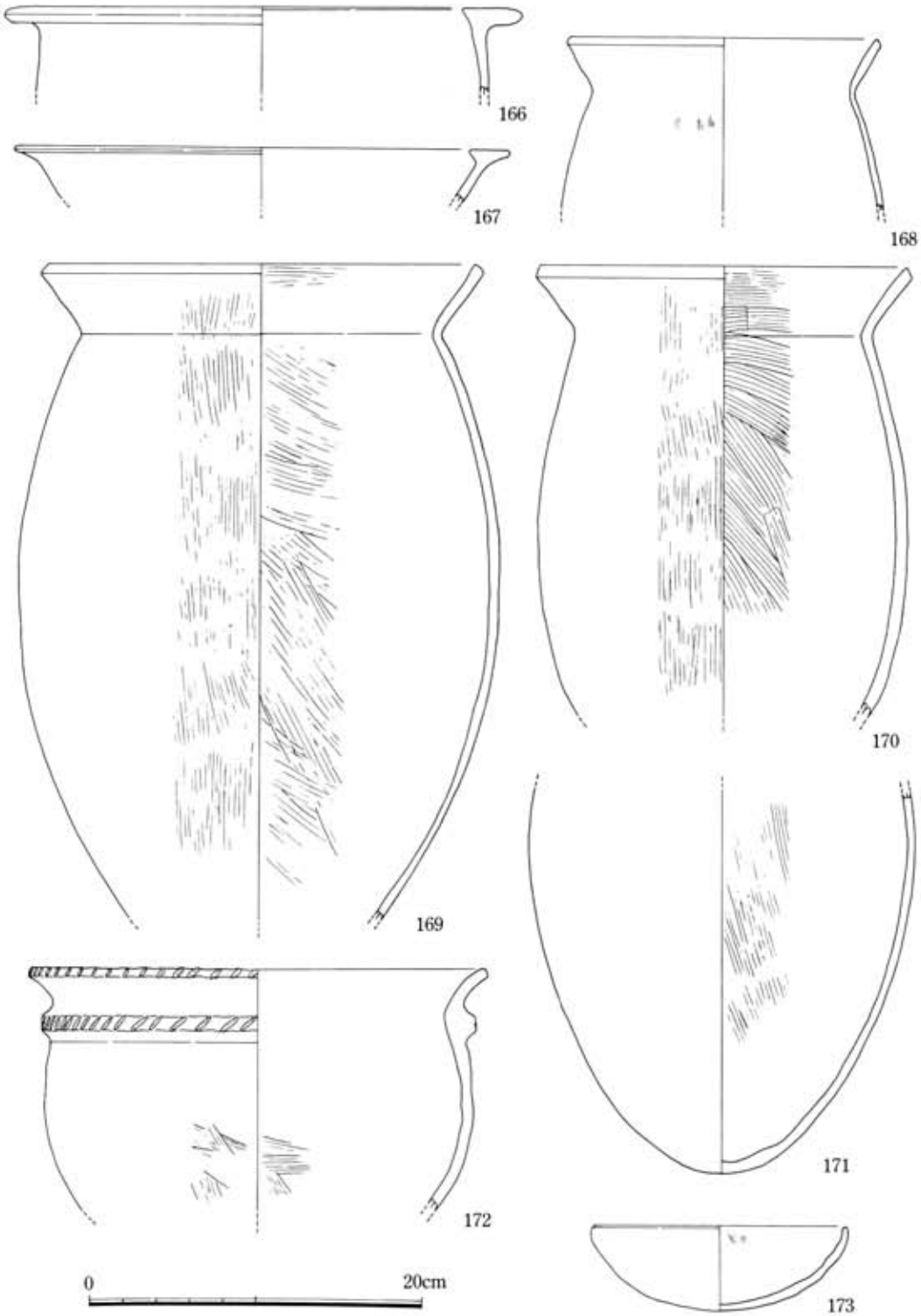


Fig.26　ＳＤ052溝出土遺物１（1/4）

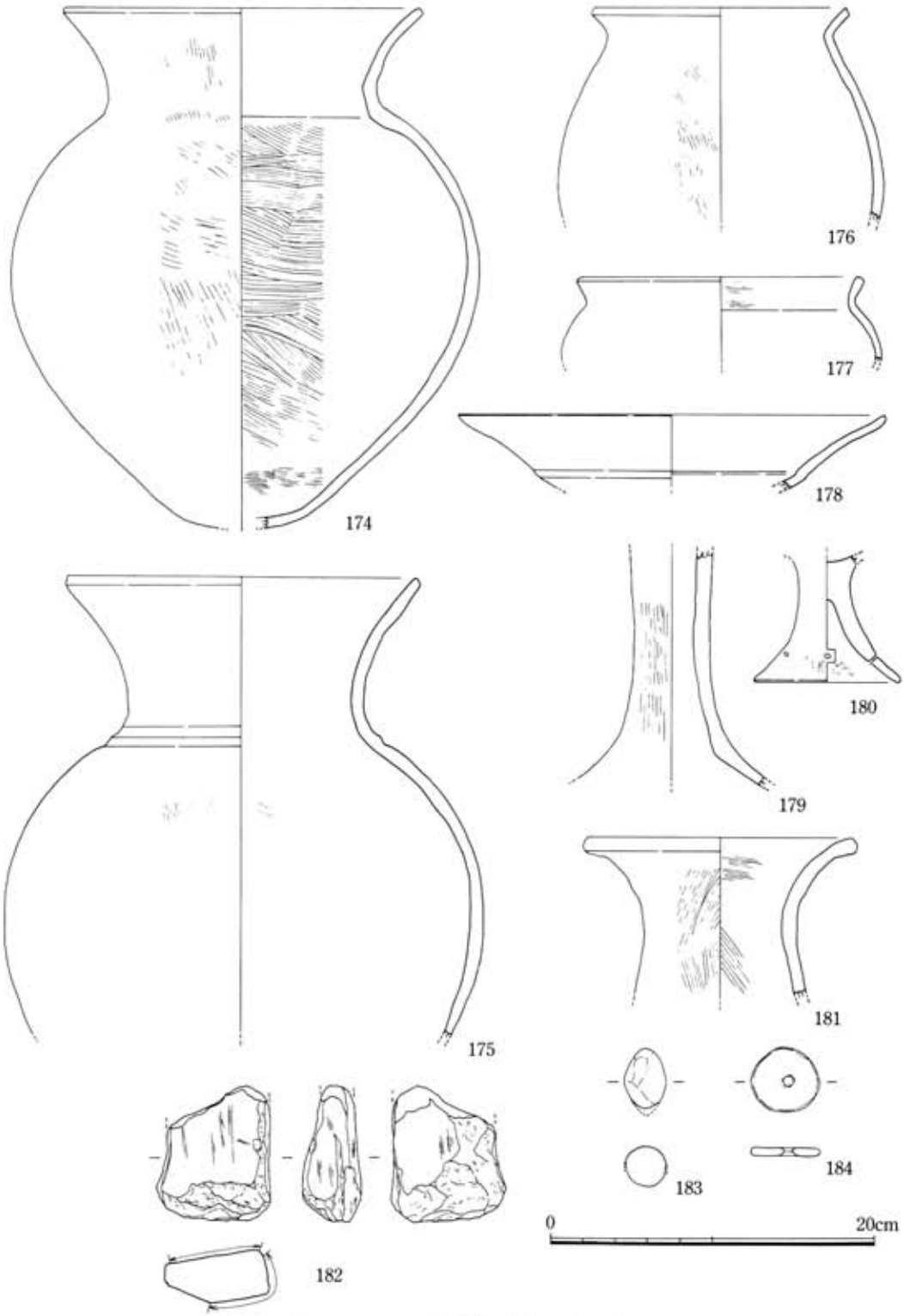


Fig.27　ＳＤ052溝出土遺物２（1/4）

(2)墳墓 (Fig.8)

当調査区では、墳墓として甕棺墓12基の他、土壙墓2基・石蓋土壙墓1基が検出されており、すべて弥生時代のものと考えられる。これらの墳墓は丘陵頂部を南北約220m・東西幅10～15mの規模で帯状に延びる列埋葬に含まれる。この列埋葬については、吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区南側の田手二本黒木地区Ⅱ区においても甕棺墓・土壙墓からなる墳墓群が確認されていることより[1]、さらに南側へ伸びることが予想され、全体的な規模はより大きくなるものと考えられる。吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区において調査された限りでは、この列埋葬は甕棺墓205基・土壙墓及び木棺墓16基の他、墳墓群に伴うと思われる祭祀土壙約10基からなっている。その配置状況については、全体としては帯状の墓域を構成するものの、その分布はかなりバラつきが認められ、十数基が著しく切り合って密集する群もあれば、数基が相互に間隔を持って列状に並ぶものも存在しているものの、志波屋四の坪地区などにおけるような、いわゆる明確な“二列埋葬”は呈していない。甕棺墓より推定される墳墓の時期については、前期末の金海・城ノ越式より、後期前半の三津式までの長い時期幅を持つが、その主体となるのは中期前半(汲田式)～中期中頃(須玖式)であり、全体のほぼ9割以上がこの時期によって占められている。

註 1)『吉野ヶ里遺跡－佐賀県神埼郡三田川町・神埼町に所在する吉野ヶ里遺跡の確認調査結果報告書』佐賀県文化財調査報告書第100集 佐賀県教育委員会 1990

①甕棺墓 (Fig.28～32)

甕棺墓は12基が検出されており、そのうち、成人棺は5基、小児棺は7基である。これらはすべて調査区の西端部分に集中し、その分布状況は、SJ038・039・043・044・055及び土壙墓3基を含んだ、ほぼ南北方向を主軸とする列状に並ぶグループと、SJ045・047・049・050・056など、東西方向の主軸を基本として密集するグループに分けられる。甕棺墓群は後にSD040の掘削によって破壊され、溝内からは多くの甕棺の破片が出土したことより、さらに数基以上の甕棺墓が存在していたことが窺える。遺構の残存状況は、SD040との重複による破損、及び後世の削平によって上甕の一部まで破壊が及んでいるものの、それより下部については良好に遺存しており、1基を除く他は上下の組み合わせについて把握できた。以下に個別の所見を述べる。

ＳＪ038甕棺墓

位　　置　ＳＤ040と重複し、西側にＳＪ039、南東側にＳＪ055が位置する。北側3.5ｍにはほぼ主軸を等しくしてＳＰ059土壙墓が並ぶ。

墓壙の特徴　一次墓壙南側を溝掘削時に破壊されており全形は窺えないが、平面形はほぼ隅丸の長方形をなすものと考えられる。墓壙の残存長約2.0ｍ、幅1.3～1.5ｍ、深さ0.45～0.5ｍ。二次墓壙は、一次墓壙底面よりさらに深さ0.6ｍ、奥行き約0.4ｍで棺を斜めに据える。

棺の特徴　甕＋甕の小型複式棺。棺の全長は約1.0ｍ。上甕より下甕の方が口径・器高でやや上回る。接口式で、接合部は粘土によって目張りを施す。主軸方位はＮ－10°40′－Ｗで、ＳＪ038と埋置方向がほぼ正反対となる。埋置角度は＋35°。

ＳＪ039甕棺墓

位　　置　ＳＤ040と重複し、東側にＳＪ038が並行して位置し、ＳＫ060を切る。南側4.0ｍにはほぼ主軸を等しくしてＳＰ041土壙墓が存在する。

墓壙の特徴　一次墓壙南側の半分以上を溝掘削時に破壊されている。残存部分からほぼ隅丸の方形あるいは長方形であったと推定される。墓壙の残存長1.5ｍ、幅1.5～1.8ｍ、深さ0.9ｍ。二次墓壙は、一次墓壙底面よりさらに深さ1.0ｍ、奥行き0.5ｍで棺を斜めに据える。

棺の特徴　甕＋甕の大型複式棺。接口式で、接合部は粘土によって目張りを施す。主軸方位はＳ－1°40′－Ｅで、埋置角度は＋51°と、検出された甕棺墓の中で最も立てて据えられている。

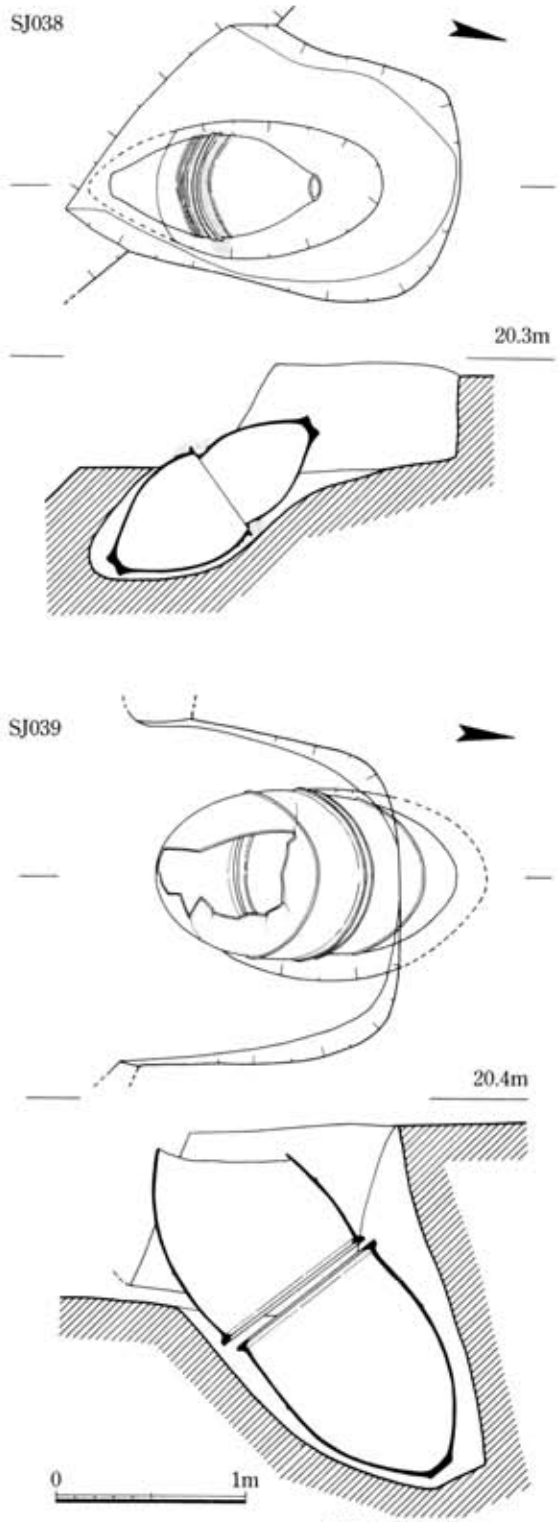


Fig.28　ＳＪ038・039甕棺墓（1/30）

ＳＪ043甕棺墓

位　　置　ＳＤ040の東端部に位置し、墓壙北側がＳＤ040と重複する。また、墓壙南側はＳＪ044と重複する。

墓壙の特徴　一次墓壙の北側・南側共に別遺構と重複するため平面形は不明。墓壙の幅約1.10ｍ、深さ1.0ｍ、二次墓壙の深さは0.7ｍで棺を斜めに据える。

棺の特徴　甕＋甕の大型複式棺。接口式で粘土による目張りは行わない。主軸方位はほぼ磁北と等しく、埋置角度は＋44°。

そ　の　他　切り合い関係よりＳＪ044より古いと考えられる。

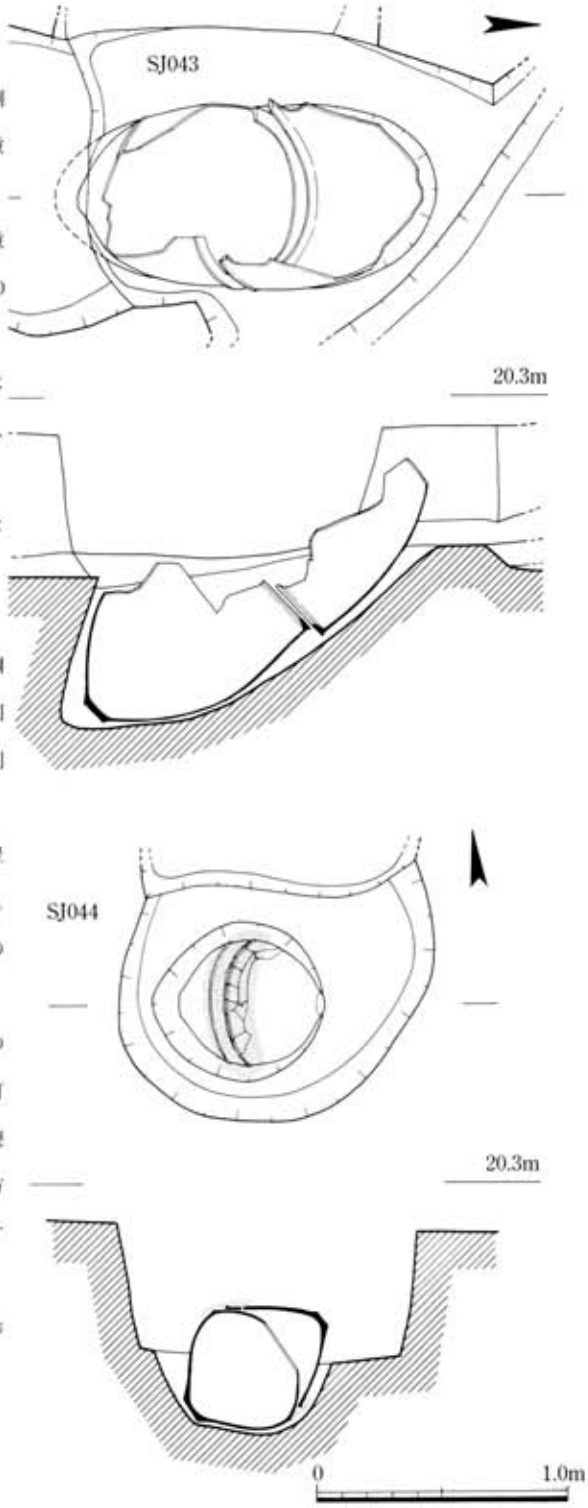
ＳＪ044甕棺墓

位　　置　ＳＪ043の墓壙南側と重複する。本調査区外ではあるが、すぐ南側にはＳＪ043の主軸と同一方向に、甕棺墓・甕棺の抜き跡と思われる土壙が列状に連なる。

墓壙の特徴　現状では平面形は不定形の楕円を呈する。長軸は最大1.2ｍ、短軸は1.0ｍ、深さは0.5ｍ。甕棺は平面楕円形の二次墓壙に斜めに埋置され、その長軸は0.75ｍ、短軸は0.65ｍ、深さは0.3ｍ。

棺の特徴　甕(上甕)＋壺(下甕)の小型複式棺。棺の全長は約0.65ｍ。覆口式で上甕は中甕の胴上半部を打ち欠いたものを用い、大型壺の頸部を打ち欠いた下甕に被せる。接合部に粘土による目張りを行う。主軸方位はＮ－86°40′－Ｅでｓ Ｊ043の主軸とほぼ直交する。埋置角度は＋35°。

そ の 他　墓壙掘削時にＳＪ043の甕棺を破壊しており、ＳＪ043より新しい。



アミ部は粘土を表す。

Fig.29　ＳＪ043・044甕棺墓（1/30）

ＳＪ045甕棺墓

位　　置　調査区西端に位置し、ＳＤ040と重複する。北東側にほぼ主軸方向を等しくしてＳＪ056・057が近接する。

墓壙の特徴　一次墓壙はほとんど破壊されており、二次墓壙が一部残るのみ。棺はほぼ水平に置かれている。

棺の特徴　下甕のみ残存する大型棺。推定される主軸方位はＳ－76°20′－Ｅ。

ＳＪ047甕棺墓

位　　置　調査区西端に位置し、ＳＤ040と重複する。北側にＳＪ048・049・050が近接する。

墓壙の特徴　一次墓壙はほとんど破壊されており、二次墓壙が残るのみ。一次墓壙底面からの深さは約0.6ｍ。棺は斜めに据えられる。

棺の特徴　甕＋甕の大型複式棺。上甕の胴半分と底部は失われている。接口式で粘土による目張りは施されない。主軸方位はＳ－80°00′－Ｅ、埋置角度は＋27°

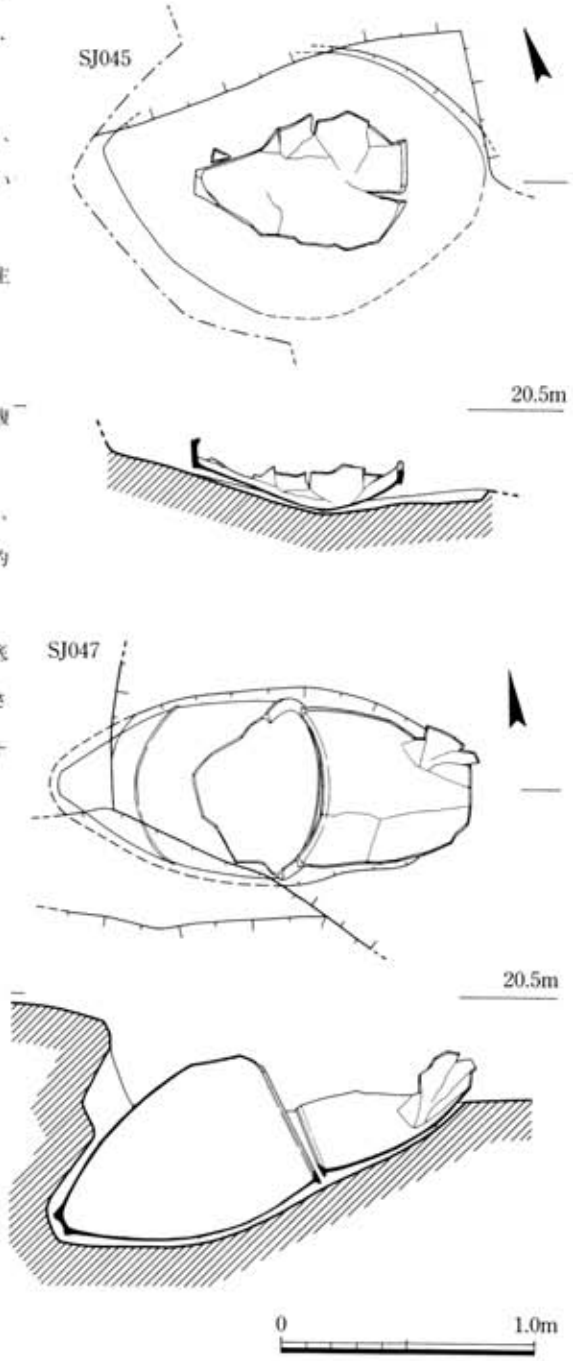


Fig.30　ＳＪ045・047甕棺墓（1/30）

ＳＪ048甕棺墓

位　　置　調査区西端に位置し、ＳＤ040と墓壙の一部が重複する。北東側に近接してＳＪ049・050が位置し、南側にはＳＪ047が並列する。

墓壙の特徴　一次墓壙は全て破壊されており、二次墓壙が残るのみ。埋置部分の穴は長楕円形を呈しており、長軸約0.85ｍ、短軸0.5ｍ、深さは墓壙底面より約0.3ｍ。棺はやや斜めに据えられる。

棺の特徴　鉢（上甕）＋甕の小型複式棺。棺の全長は0.73ｍ。接口式で接合部の下側部分のみ粘土による目張りを施す。主軸方位はＳ－85°00′－Ｅ、埋置角度は＋12°。

ＳＪ049甕棺墓

位　　置　調査区西端に位置し、ＳＪ050と重複する。南側1.5ｍ離れた場所にＳＪ047が主軸を直交させて存在する。

墓壙の特徴　一次墓壙は西側が一部残るのみ。二次墓壙は、一次墓壙底面からの深さ約0.6ｍ、奥行きは0.45ｍ。棺は斜めに据えられる。

棺の特徴　甕＋甕の大型複式棺。上甕の胴下半失われている。接口式で接合部に粘土による目張りを施す。主軸方位はＳ－9°00′－Ｅ、埋置角度は＋36°。

そ　の　他　ＳＪ050との前後関係は不明だが、甕棺の形態からＳＪ049が先行するものと思われる。

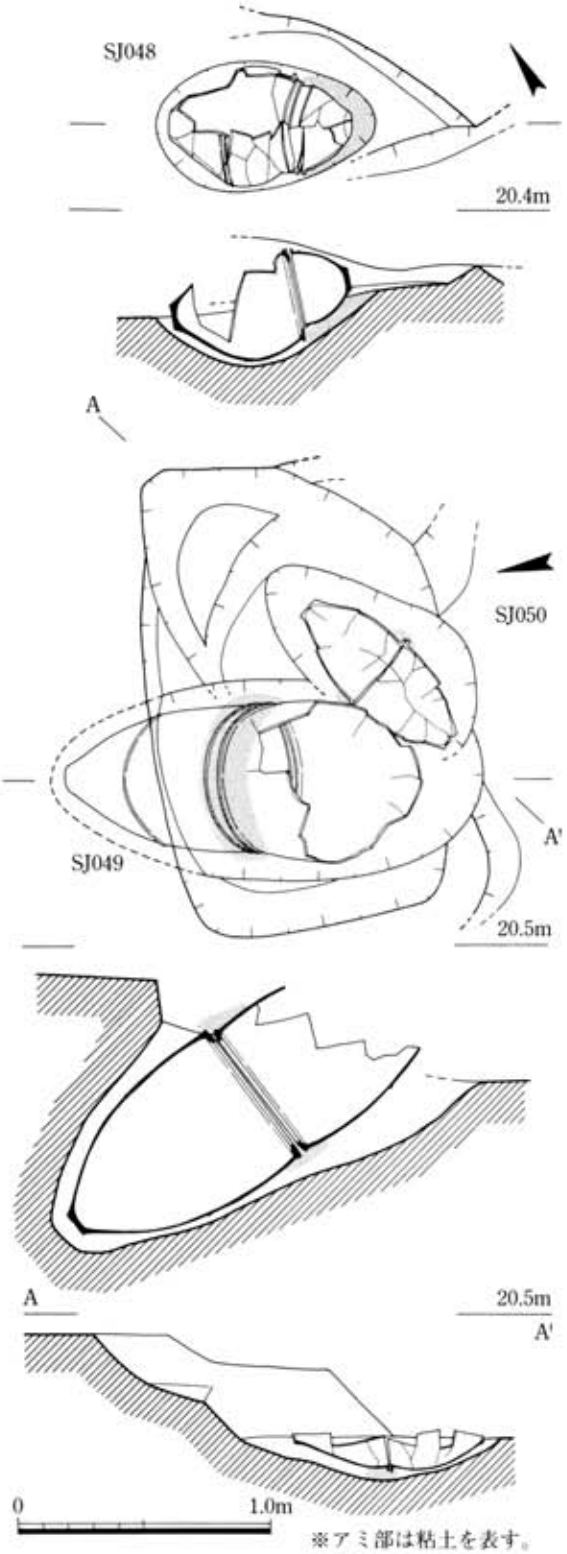
ＳＪ050甕棺墓

位　　置　調査区西端に位置し、ＳＪ049と重複する。南東側にＳＪ048が位置する。

墓壙の特徴　墓壙の残存部分は長楕円形を呈し、長軸は不明だが、短軸は約1.3ｍである。棺は水平に据えられる。

棺の特徴　甕＋甕の小型複式棺。棺の全長は1.0ｍ。接口式で接合部に粘土による目張りを施す。主軸方位はＮ－53°20′－Ｅ、埋置角度は±0°。

そ　の　他　ＳＪ049より新しい。



※アミ部は粘土を表す。

Fig.31　ＳＪ048・049甕棺墓（1/30）

ＳＪ055甕棺墓

位　　置　ＳＪ039南東側1.0ｍに位置し、ＳＤ040と重複する。南東側にＳＪ048が位置する。

墓壙の特徴　一次墓壙はＳＤ040掘削時に破壊されており、下甕と二次墓壙が残存する。墓壙は深さ0.2ｍ，奥行き0.1ｍである。棺は斜めに据えられる。

棺の特徴　甕＋甕の小型複式棺。下甕は口縁部を打ち欠いており、覆口式であったと思われる。目張りの粘土等は認められない。主軸方位はＳ－20°00′－Ｅ、埋置角度は＋54°。

ＳＪ056甕棺墓

位　　置　調査区の西端、ＳＤ040の西側陸橋部のすぐ西に位置する。南西側にＳＪ045・057が、北西側にＳＪ047が並列する。

墓壙の特徴　墓壙は二次墓壙に至るまでＳＤ040掘削時に破壊されている。棺はほぼ水平に据えられていたようである。

棺の特徴　鉢(上甕)＋甕(下甕)の大型複式棺。接口式であったと思われる。目張りの粘土等は認められない。主軸方位はおよそＳ－70°20′－Ｅ。

ＳＪ057甕棺墓

位　　置　ＳＪ045とＳＪ056に挟まれて位置する。

墓壙の特徴　ＳＪ056と同様、二次墓壙に至るまでＳＤ040掘削時に破壊されている。棺はほぼ水平に据えられていたようである。

棺の特徴　甕＋甕の小型複式棺。接口式であったと思われる。目張りの粘土等は認められない。主軸方位はおよそＳ－54°00′－Ｅ。

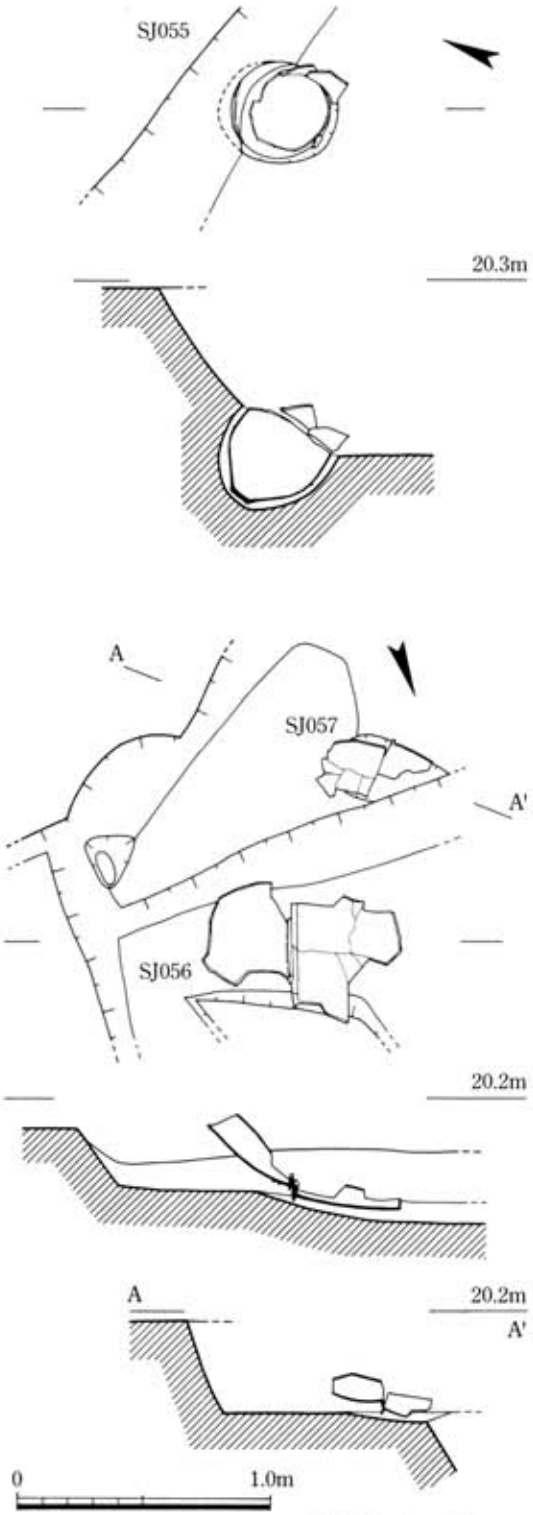


Fig.32　ＳＪ055・056甕棺墓（1/30）

甕棺墓に使用した土器（Fig.33～37）

甕棺墓の棺体として用いられた土器には、甕20個体・壺１個体・鉢２個体があり、その中には埋葬専用土器として製作されたものと、日常用土器を転用したものの二通りがある。

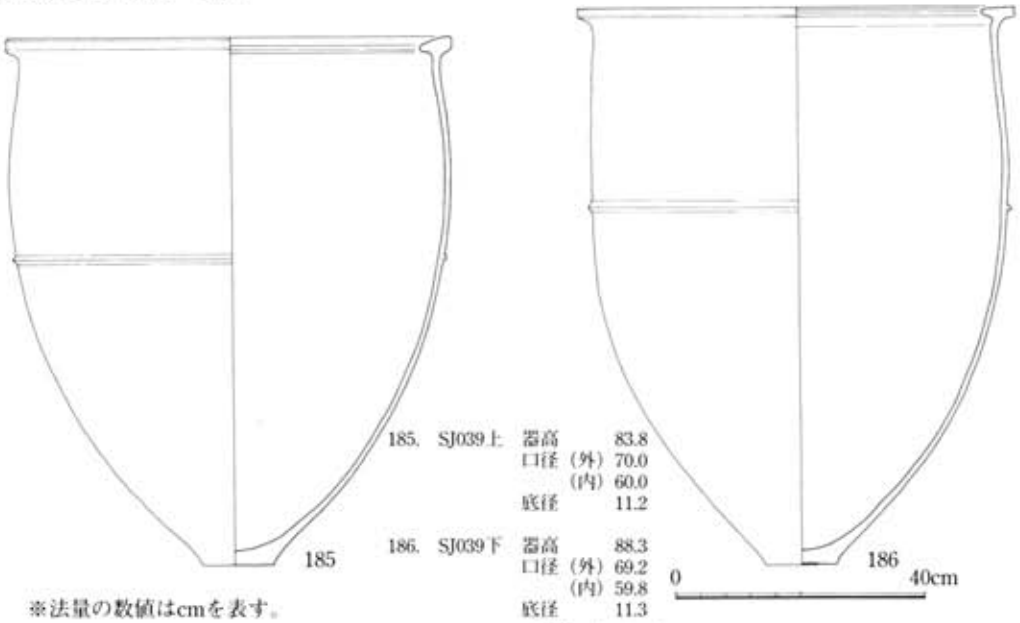
ＳＪ038甕棺(196・197)

上甕(196)・下甕(197)共に日常容器である小甕を用いる。口縁部は上面が平坦な逆Ｌ字形口縁をなす。端部は太く短く外側に伸び、胴部最大径が口縁部外径とほぼ等しくなる。口縁部下には断面三角形の凸帯を一条(上甕)あるいは二条(下甕)貼り付ける。強くすぼまる底部は、底面付近で僅かに外側に開きくびれ底となる。底面は、中央部が凹面をなす上げ底。内器面はハケ目を撫で消すが、外器面はハケ目を残す。焼成は硬質で、色調は橙色を呈する。

ＳＪ039甕棺(185・186)

上甕(185)・下甕(186)共に大型の埋葬専用甕を用いる。口縁部は、上面がやや内傾する断面Ｔ字形をなす。口縁部の突出する幅は内側・外側共にほぼ等しい。胴上部から口縁部に向かって僅かにすぼまりぎみになり、断面三角形の突帯を胴部中央のやや上寄りに一条貼り付ける。口縁部の成形には、端部を一旦強く外反させ、その内器面に再び粘土板を貼り付けて厚みを増す手法をとっている。底部底面は平底で、内器面では底部と胴部の境が不明瞭である。ＳＪ039の上甕と下甕は、形態的にはほぼ同じだが、下甕の口縁部上面がより水平に近くなり、また内外への突出幅がより長いなど、若干の相違点がある。調整は内外器面ともに主に丁寧なナデ調整を行う。上甕・下甕共に焼成は硬質で、色調は赤みを帯びた黄褐色を呈する。

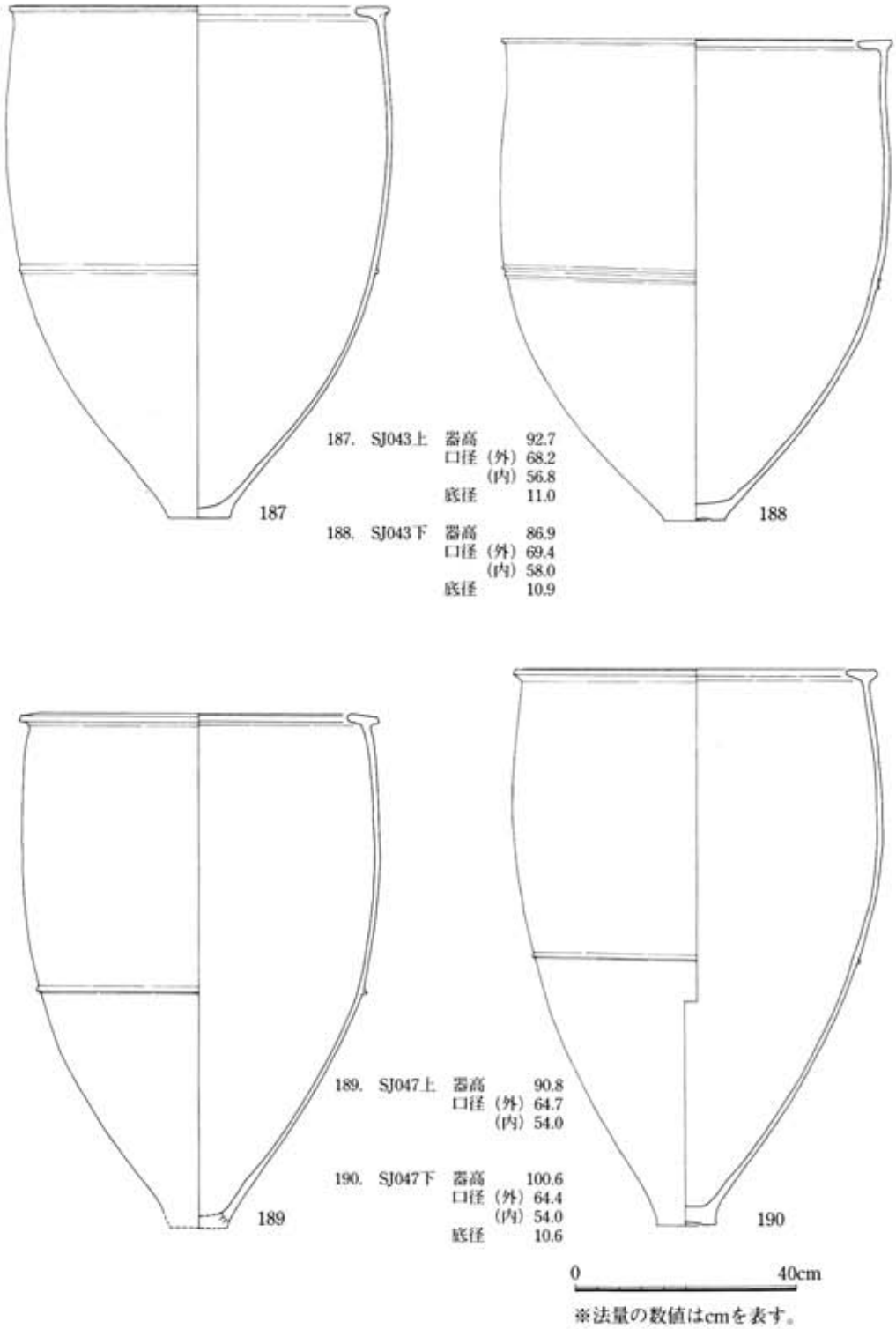
ＳＪ043甕棺(187・188)



185.	SJ039上	器高	83.8
		口径（外）	70.0
		（内）	60.0
		底径	11.2
186.	SJ039下	器高	88.3
		口径（外）	69.2
		（内）	59.8
		底径	11.3

※法量の数値はcmを表す。

Fig.33　ＳＪ039甕棺（1/12）



187. SJ043上 器高 92.7
口径（外）68.2
（内）56.8
底径 11.0

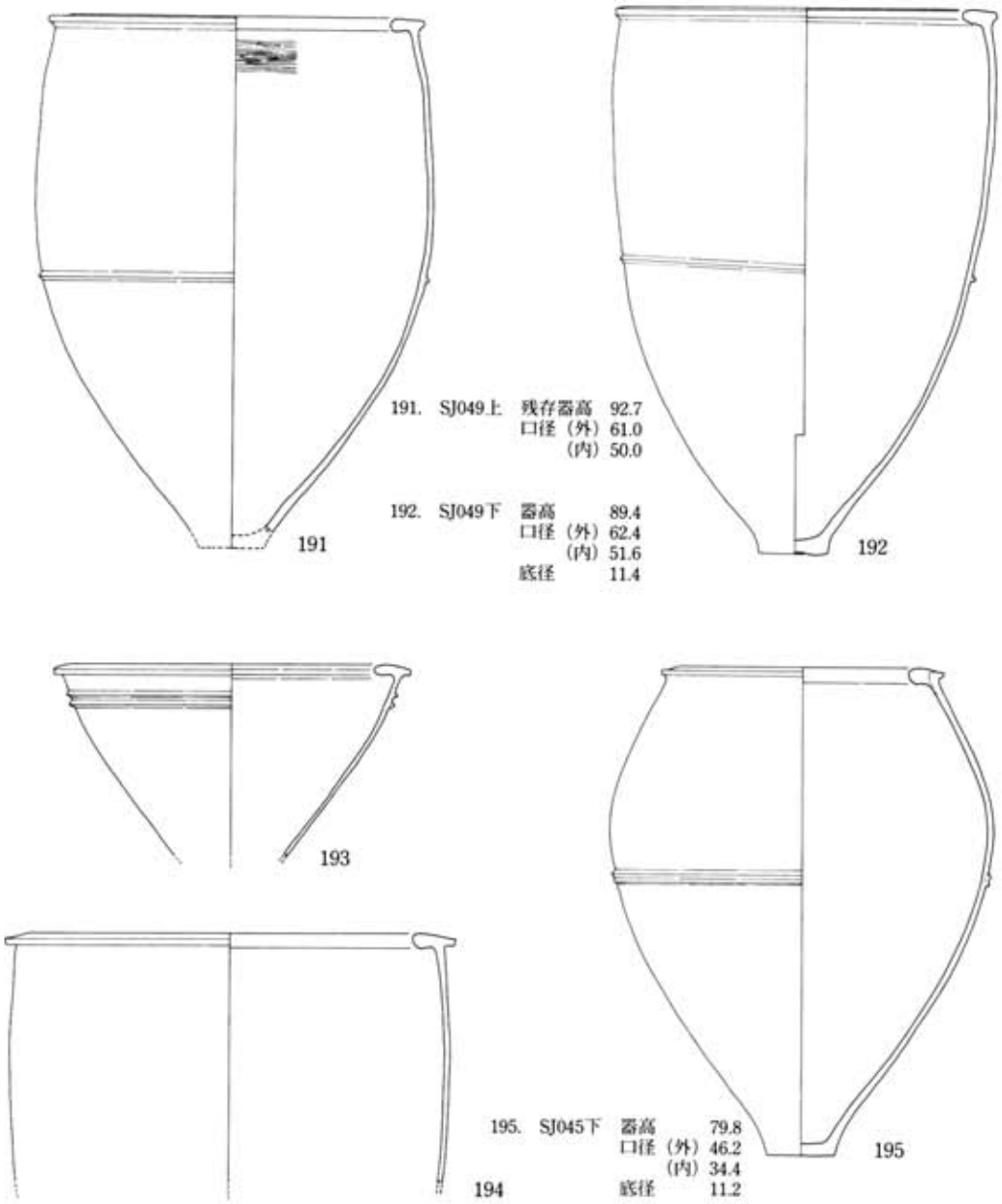
188. SJ043下 器高 86.9
口径（外）69.4
（内）58.0
底径 10.9

189. SJ047上 器高 90.8
口径（外）64.7
（内）54.0

190. SJ047下 器高 100.6
口径（外）64.4
（内）54.0
底径 10.6

※法量の数値はcmを表す。

Fig.34　S J 043・047甕棺（1/12）



191. SJ049上　残存器高　92.7
口径（外）61.0
（内）50.0

192. SJ049下　器高　89.4
口径（外）62.4
（内）51.6
底径　11.4

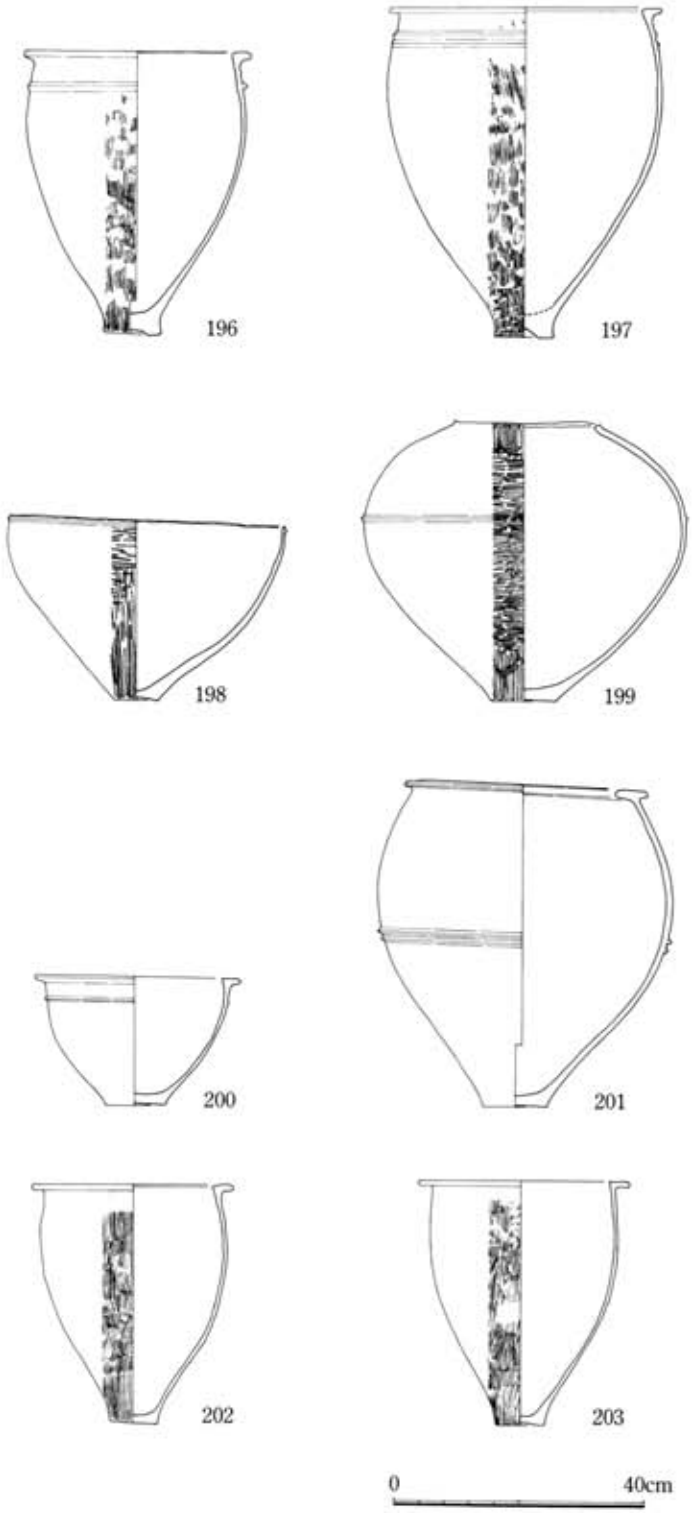
193. SJ056上　残存器高　46.4
口径（外）58.0
（内）46.0

194. SJ056下　残存器高　41.0
口径（外）73.0
（内）59.6

195. SJ045下　器高　79.8
口径（外）46.2
（内）34.4
底径　11.2

※法量の数値はcmを表す。

Fig.35　S J 045・049・056甕棺（1/12）



196. SJ038上 器高 45.4
口径（外）36.0
（内）30.0
底径 9.0

197. SJ038下 器高 53.2
口径（外）42.8
（内）36.8
底径 9.3

198. SJ044上 残存器高 28.8
口径（打ち抜き）44.2
底径 7.0

199. SJ044下 残存器高 44.0
口径（打ち抜き）23.2
底径 10.3

200. SJ048上 器高 20.2
口径（外）33.0
（内）28.0
底径 9.0

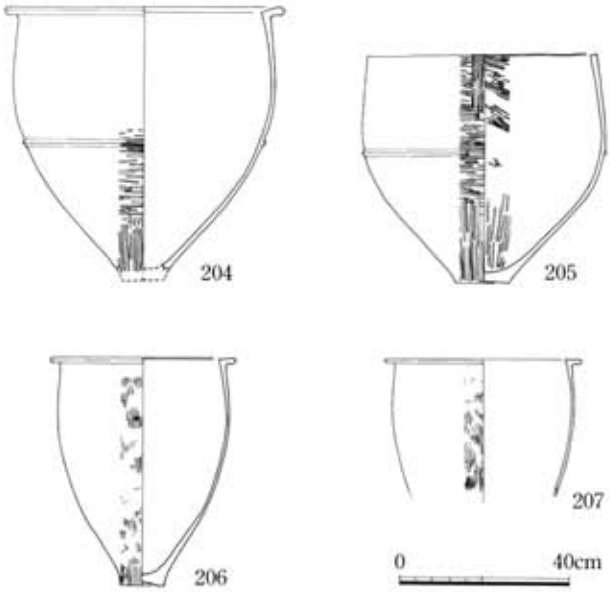
201. SJ048下 器高 52.2
口径（外）37.6
（内）29.2
底径 10.2

202. SJ050上 器高 38.0
口径（外）32.0
（内）25.6
底径 7.6

203. SJ050下 器高 38.8
口径（外）31.6
（内）28.0
底径 7.6

※法量の数値はcmを表す。

Fig.36 S J 038・044・048・050甕棺（1/12）



204.	SJ055上	残存器高	42.2
		口径（外）	44.0
		（内）	37.2
205.	SJ055下	器高	36.5
		口径（打ち欠き）	36.1
		底径	7.0
206.	SJ057上	残存器高	36.0
		口径（外）	29.0
		（内）	24.0
		底径	7.0
207.	SJ057下	器高	40.8
		口径（外）	31.2
		（内）	25.6
		底径	7.6

※法量の数量はcmを表す。

Fig.37　ＳＪ055・057甕棺（1/12）

上甕(187)・下甕(188)共に大型の埋葬専用甕を用いる。内側に突出する逆Ｌ字形の口縁部をなすもの。口縁部上面はほぼ水平で、内側に長く突出し、外側にはあまり伸びない。口縁部の成形はＳＪ039甕棺と異なり、積み上げた胴部の粘土板と口縁部の粘土板を直交させて貼り付ける。胴部中位よりやや下がったところに断面三角形の突帯を貼りつけ、下甕は二条、上甕には一条貼り付ける。調整は内外器面ともに丁寧なナデ調整を行う。焼成は良好で色調は黄褐色を呈する。

ＳＪ044甕棺（198・199）

上甕(198)・下甕(199)共に日常容器である壺を用いる。頸部より上を打ち欠いて使用してあるために全形は窺えないが、口縁部が大きく開く広口壺と思われる。胴部中位よりやや上よりに胴部最大径がくるもので、この部分に断面三角形の突帯を貼り付ける。胴下半部は直線的にすぼまり、底面はほぼ平底になる。内器面において胴部と底部の境は不明瞭である。外器面はほぼ全面にヘラミガキが施される。焼成は硬質で、色調は赤みを帯びた暗褐色を呈する。

ＳＪ045甕棺（195）

下甕(195)のみの出土である。丸みを帯びて大きく膨らむ胴部を持つ中型の埋葬専用甕である。口縁部の形態は内側に長く、また、分厚く伸び、外側には短く伸びるＴ字形をなす。口縁部上面はやや外傾する。胴部最大径よりやや下がったところに断面Ｍ字の突帯を貼り付ける。内器面において底部と胴部は明瞭に区別されるものの、稜は持たない。焼成は硬質で、色調は黄褐色を呈する。

ＳＪ047甕棺（189・190）

上甕(189)・下甕(190)共に大型の埋葬専用甕を用いる。内側により長く突出するＴ字形の口縁部をなすもので、口縁部上面はやや外傾する。全体のプロポーションから見れば、上・下甕共に口径はほぼ等しいが、下甕はより器高が高く、より上位に胴部最大径があり、また底部に向かってのすぼまり具合が大きい。下甕の底面は若干上げ底になる。調整は内外器面ともに、丁寧なナデ調整を行い、焼成は良好で色調は黄褐色を呈する。

ＳＪ048甕棺（200・201）

上甕(200)には日常容器である小型の鉢、下甕(201)には埋葬専用の小型甕を用いる。鉢は口縁部が外側に水平に伸びる逆Ｌ字状を呈し、上面は平坦に仕上げられる。口縁部から胴部にかけて緩やかに湾曲し、底部はややすぼまりぎみ、底部底面は僅かに凹レンズ状になる。口縁部下に断面三角形の突帯を一条貼り付ける。焼成は硬質で、色調は赤褐色を呈する。一方、下甕は形態的にはＳＪ056下甕に類似し、上面が僅かに外傾するＴ字形口縁と丸みを帯びて大きく膨らむ胴部を持つ。胴部最大径のやや下、胴部中位にあたる位置に断面三角形の突帯を連続して二条貼り付ける。底部は平底、焼成はやや軟質。ＳＪ045下甕については、胎土の色調は褐色を呈するものの、内器面全面及び外器面のかなりの部分に黒色が認められ、黒色顔料を塗布していたものと思われる。

ＳＪ049甕棺（191・192）

上甕(191)・下甕(192)共に大型の埋葬専用甕を用いる。下甕はほぼ逆Ｌ字形口縁をなすが、上甕は内側に長く、外側に短く突出するもので、逆Ｌ字形口縁からＴ字形口縁への過渡的なものか。上甕は口縁部上面はほぼ水平、下甕はやや外傾する。上甕と下甕ではプロポーションが若干異なり、下甕の方がより上位に胴部最大径があり、ＳＪ047下甕に類似する。下甕は僅かに上げ底となる。共に内外器面はナデ調整、上甕は内器面の口縁部下にヘラ状工具による横方向のナデ調整を施す。焼成は良好で共に色調は明褐色を呈する。

ＳＪ050甕棺（202・203）

上甕(202)・下甕(203)共に小型甕を転用する。口縁部は外側に長く伸びる逆Ｌ字形口縁をなし、、端部に向かってやや厚みを増す。胴部最大径は口縁部外径を下回る。底部は緩やかにすぼまり、底面は202は平底、203は僅かに上げ底になる。器面調整は内器面はハケ目を撫で消すが、外器面はハケ目を残す。焼成は硬質で色調は橙色・黄橙色を呈する。

ＳＪ055甕棺（204・205）

上甕(204)・下甕(205)共に小型甕を転用する。上下甕共に形態は同じと思われるが、下甕は口縁部を打ち欠いて使用している。上面が内傾する逆Ｌ字形口縁をなし、胴部最大径がほぼ胴部中位付近あるいはややその上よりにあたり、器高と口径がほぼ等しい、口の大きな甕である。胴部の中位よりやや下がった所に断面三角形の突帯を一条貼り付ける。底面は僅かに上げ底ぎ

みになるが、段をもって窪むのではなく凹レンズ状になる。204は外器面、205は内外器面共にヘラミガキを施す。焼成は硬質で色調は褐色・暗褐色を呈する。

ＳＪ056甕棺（193・194）

上甕(193)に大型の鉢、下甕(194)に大型の埋葬専用甕を使用する。鉢は上面がやや外傾するＴ字形口縁をなす。胴部はほぼ直線的にすぼまり、口縁部下に断面三角形の突帯を連続して二条貼り付ける。焼成は硬質で、色調は橙色を呈する。下甕は胴上部しか残存していないが、口縁部は上面が外傾するＴ字形口縁をなし、胴部はほとんど膨らみを持たずに底部に向かって大きくすぼまる形態をなすものと思われる。内外器面ともに丁寧なナデ調整を行い、焼成は硬質で、色調は黄橙色を呈する。

ＳＪ057甕棺（206・207）

上甕(206)・下甕(207)共に小型甕を転用する。形態的にはＳＪ050甕棺と同一である。同様に口縁部は外側に長く伸びる逆Ｌ字形口縁をなし、胴部径は口縁部径より若干小さい。底部が遺存する上甕では、底面は上げ底になり凹面をなす。器面調整は内器面はハケ目後撫で消し、外器面はハケ目を残す。焼成は硬質で色調は黄橙色を呈する。

以上、甕棺墓ごとに棺体に使用された土器について述べたが、さらに時期的な位置付けについて考える。甕棺についての佐賀平野における地域的編年は未だ確立されておらず、ここでは橋口達也氏による北部九州における甕棺編年案(1979)[1]を用いる。まず埋葬専用土器については、ＳＪ039甕棺がＫⅡa式(城の越式期)に、ＳＪ043・049甕棺はＫⅡb式(城の越～汲田式期)に類似するようである。またＳＪ047甕棺・ＳＪ056下甕は、やや外傾し内外に突出するＴ字形口縁をなす他、全体的なプロポーション等から、一見、ＫⅢa式(須玖式期)の範疇に含まれるかと思われるが、突帯の形状、口縁部下に突帯を持たない点など古い要素も合わせ持ち、ＫⅡc式(汲田式期)からＫⅢa式(須玖式期)への過渡的なものと考えるのが妥当であろう。丸みを帯びた胴部を持つＳＪ045・048下甕については、口縁部の形態より前者がＫⅡc式、後者がＫⅢa式に含まれよう。一方、日常用土器を棺体に用いるものについては、まずＳＪ038甕棺がＫⅡb式並行期、ＳＪ050・056甕棺がＫⅢa式並行期にあてはめられる。また、ＳＪ055甕棺の口径の大きな小甕については、口縁部の形態・胴部突帯の位置などから、ほぼＫⅡb式に並行する時期かと思われる。さらにＳＪ044上下甕の広口壺については、胴部のプロポーション及び底部の形態からおおよそＫⅡb並行期に、ＳＪ048・056上甕の鉢は下甕とのセット関係からＫⅢa式並行期に位置づけられよう。以上のことより、それぞれの甕棺墓に時期的な位置付けを行うならば、ＳＪ039が弥生時代中期初頭に、その他のものは中期前半の範疇で捉えられるものの、より細かく見れば、ＳＪ038・043・044・045・049・055が中期前半の古い段階に、その他のものについては中期中頃までを含んだ、より新しい段階に含まれるものと考えられる。なお、甕棺

墓群と重複するＳＤ040の埋土中からは多くの埋葬専用土器の大型甕の破片が多数出土した他、甕棺墓の墓壙と思われる土壙（ＳＫ060・061）も検出されており、さらに数基以上の甕棺墓が存在していたことが窺える。

註１）横口達也『甕棺の編年的研究』「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＸI」　1979

②土壙墓

土壙墓は３基が確認されている。いわゆる横口式土壙墓と呼ばれる、一次墓壙から横穴を堀り込むもの、一次墓壙の中心に二次墓壙を掘り込む二段堀りのものの両者がある。

ＳＰ041土壙墓(Fig.38) ＳＪ038の主軸延長上、ＳＤ040を挟んで南側に位置する。すぐ西側にはＳＰ042石蓋土壙墓が並列する。現状では墓壙の平面形は、南北に長軸を持つ隅丸の五角形を呈する。西側が一段下がる段構造を持ち、もともとはこの段落ち部分は横穴状に掘り込まれていたもので、後に横穴部分の天上部が崩落したものと考えられる。長軸約2.5ｍ、短軸約2.0ｍ、墓壙の底面までの深さは最大約1.0ｍ。横穴部の底面での長軸は約1.6ｍ、短軸は約0.7ｍ、深さは墓壙底面より最大約0.4ｍである。横穴部の主軸方位はおよそＳ－10°40′－Ｅ。図示していないが弥生土器の小片が数点出土している。

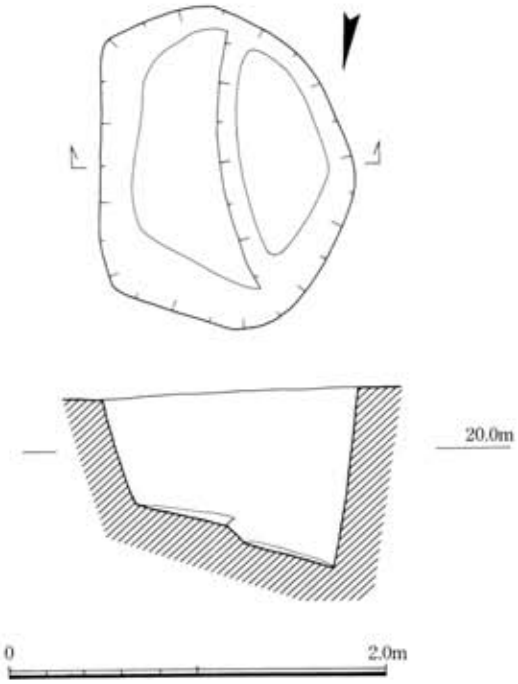


Fig.38　ＳＰ041土壙墓（1/40）

ＳＰ042石蓋土壙墓（Fig.39）ＳＰ041のすぐ西側に位置する。南辺がやや幅広になる長方形の土壙に安山岩製の板石を用いて蓋とする。おそらく二段堀りを行う形態のものであったと考えられるが、一次墓壙は完全に削平されている。蓋石は特に北側部分においては原位置より東へずれており、長さ0.7～1.0ｍ、幅0.3～0.4ｍ程度の板石８枚の他、長さ0.3ｍ程の板石数枚が蓋石として遺存している。南側の蓋石がかなり相互に重ね合って置かれていることより、もともとはさらに数枚以上の蓋石を用いていてものと思われる。墓壙の長さは約1.7ｍ、幅は北辺で約0.35ｍ、南辺0.5ｍ、深さは0.2～0.3ｍである。主軸方位はＳ－9°00′－Ｗ。

ＳＰ059土壙墓（Fig.40）ＳＪ039の主軸延長線上、ＳＤ036に墓壙北半分を削平される。墓壙底面の中央を一段堀り下げる二段堀りを行うものである。墓壙の平面形は南辺が長い台形をなし、

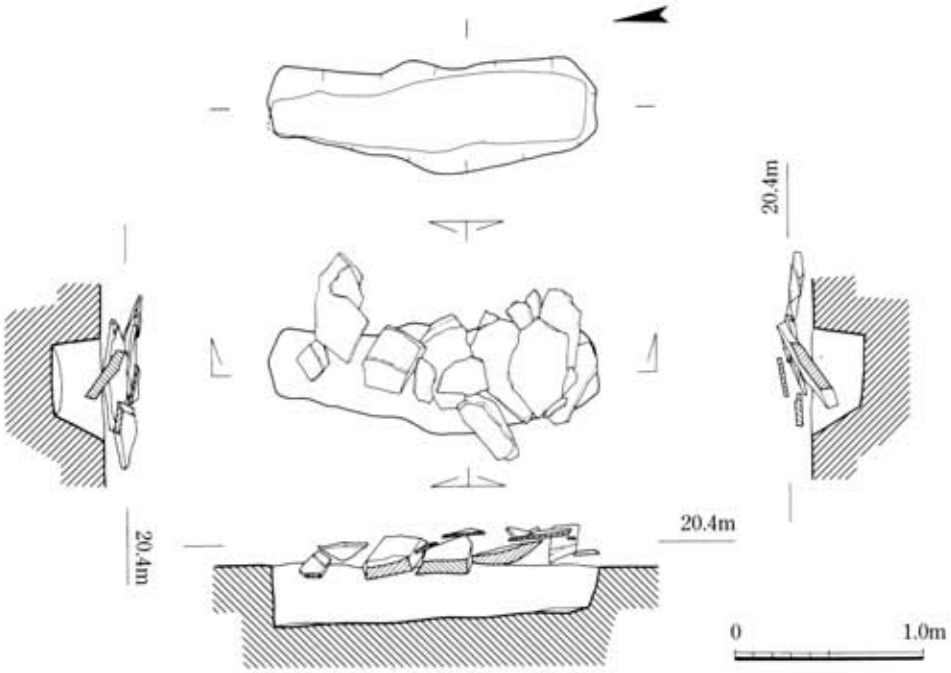


Fig.39　ＳＰ042石蓋土壙墓（1/40）

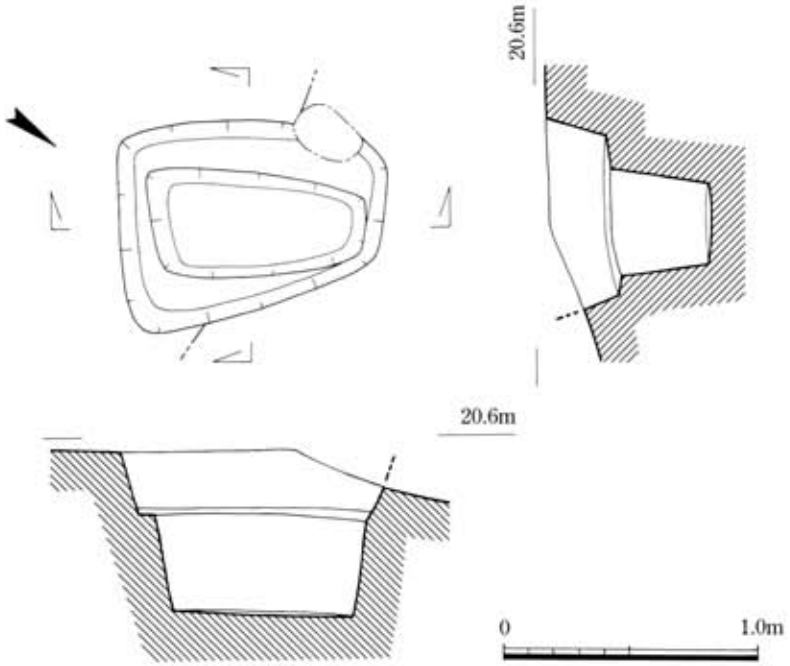


Fig.40　ＳＰ059土壙墓（1/30）

南北の長さは最大1.4m、東西の幅は最大1.0m、深さ約0.35m。二段目も南辺がより長い長方形をなし、北1.15m、南辺の幅約0.5m、北辺の幅約0.3m、深さは一段目からさらに0.5mである。主軸方位はS－2°00′－W。

(3)竪穴住居・土壙

SB031竪穴住居（Fig.41）

調査区内西側に位置し、SD035に切られる。遺構北側の一部が調査区外に含まれるため、工業団地関係の調査において検出した部分も加えて図化した。円形の竪穴住居で、直径約5.6m、深さ約0.15m程度が遺存している。主柱穴は6本からなり、直径0.2～0.35m、深さ0.2～0.25mである。主柱穴は近接して2～3基の小穴が存在しており、幾度か建て替えが行われたことが窺える。この他、遺構の中心には、平面が東西に長い楕円形を呈する土壙状の掘り込み、Pit.Aが位置し、その長軸は0.9m、短軸は0.7m、深さは0.15～0.2mである。また、Pit.Aの長軸線上、西側及び東側の壁際にそれぞれPit.B・Cが存在し、これらも平面は東西に長い楕円形をなしている。Pit.Bの長軸は0.65m、短軸は0.5m、深さは床面より0.15m、Pit.Cの長軸は0.85m、短軸は0.6m、深さは床面より0.4mである。焼土・炭の集中箇所等は認められず、炉などが備えられていたかは不明である。出土遺物は、埋土中より弥生土器片が数点検出されたのみであり、その時期幅は中期初頭～中期後半にあたる。

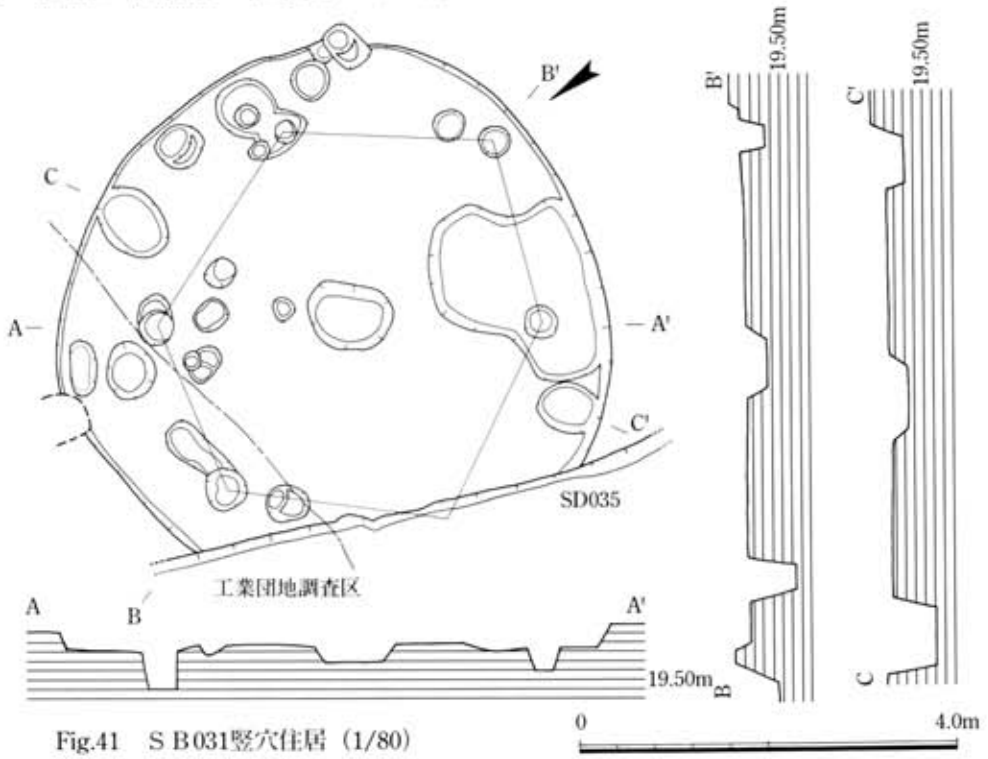


Fig.41　SB031竪穴住居（1/80）

出土遺物（Fig.42）弥生土器の甕３点、鉢１点を図示している。209～211は甕。208は口縁部がほぼＬ字状になるが、端部があまり外方へ伸びず、上面は平らに整形される。209は鋤先形口縁をなすもの。口縁部は内方へは短く突出、外方へは長く薄く伸び、端部は下方へ垂れる。210は外方へ長く直線的に伸びる逆Ｌ字形口縁をなすもの。上面は平坦に整形される。211は鉢。様に逆Ｌ字状口縁をなし、口縁下に断面三角形の突帯を一条巡らせる。

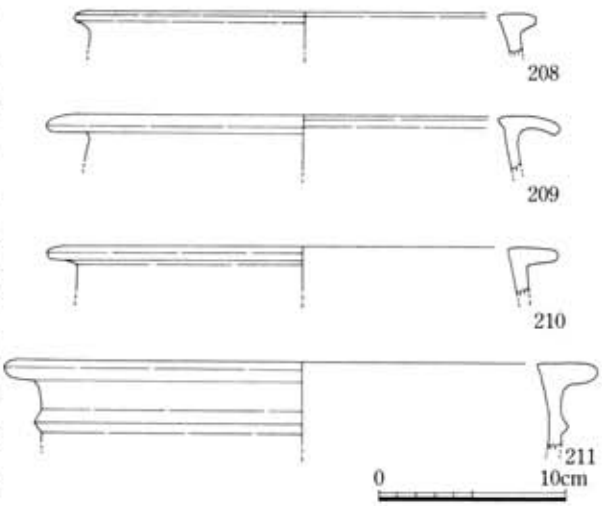


Fig.42　ＳＢ031竪穴住居出土遺物（1/4）

ＳＫ０２１（Fig.43）

調査区中央の南寄りに位置する。周辺には小穴が幾つか認められるが、その他には近接する遺構はない。平面形は北々西ー南々東方向に長軸を持つ楕円形で、長軸約1.7ｍ、短軸約1.3ｍ、深さは0.45～0.5ｍである。埋土中からは、奈良時代の須恵器坏身６点・坏蓋４点・皿２点の他、土師器の甕３点等が出土した。これらは完形に復元できるものもあるが、そのほとんどが大きめの破片であり、土壙内に廃棄されたものと考えられる。同様の遺構は、志波屋四の坪地区・志波屋三の坪(甲)地区等で多数検出されている。

出土遺物（Fig.44）須恵器の坏蓋４点・坏身６点・皿２点、土師器の甕２点の他、土製品として土弾１点が出土している。212～215は須恵器の坏蓋。212は口縁部の小片。端部が僅かに下方へ折れる。213・214もまた口縁端部が僅かに下方へ折れるものであるが、212ほど明瞭に稜を持たない。213はつまみの上端と下端の径がほぼ等しい円筒形の擬宝珠様のつまみをなす。214は口縁端部の内器面に若干平坦面を持って折れるものである。つまみは上面に僅かに凸面を持つ擬宝珠様のつまみである。

215は口縁端部の作りが214とほぼ同様で、高台状のつまみを持つ。216～221は坏身。216～220は直線的に開く体部を持つもので、法量により３種に分類される。220は口径約13.5cm、器高2.9cm、底径9.0cm、217・218は口径13.0～13.4cm、器高3.7cm、底径9.0cm、219・220は口径約14.0cm、器高4.2cm、底径

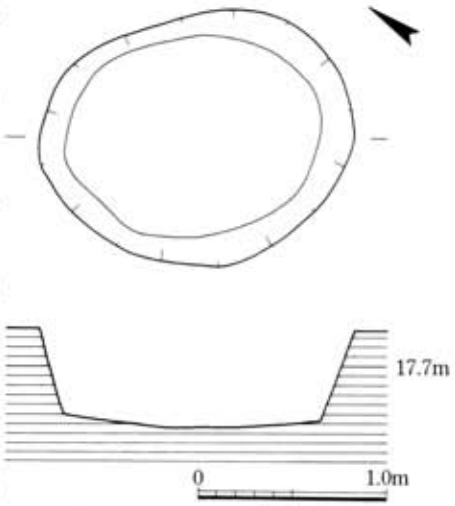


Fig.43　ＳＫ021土壙（1/40）

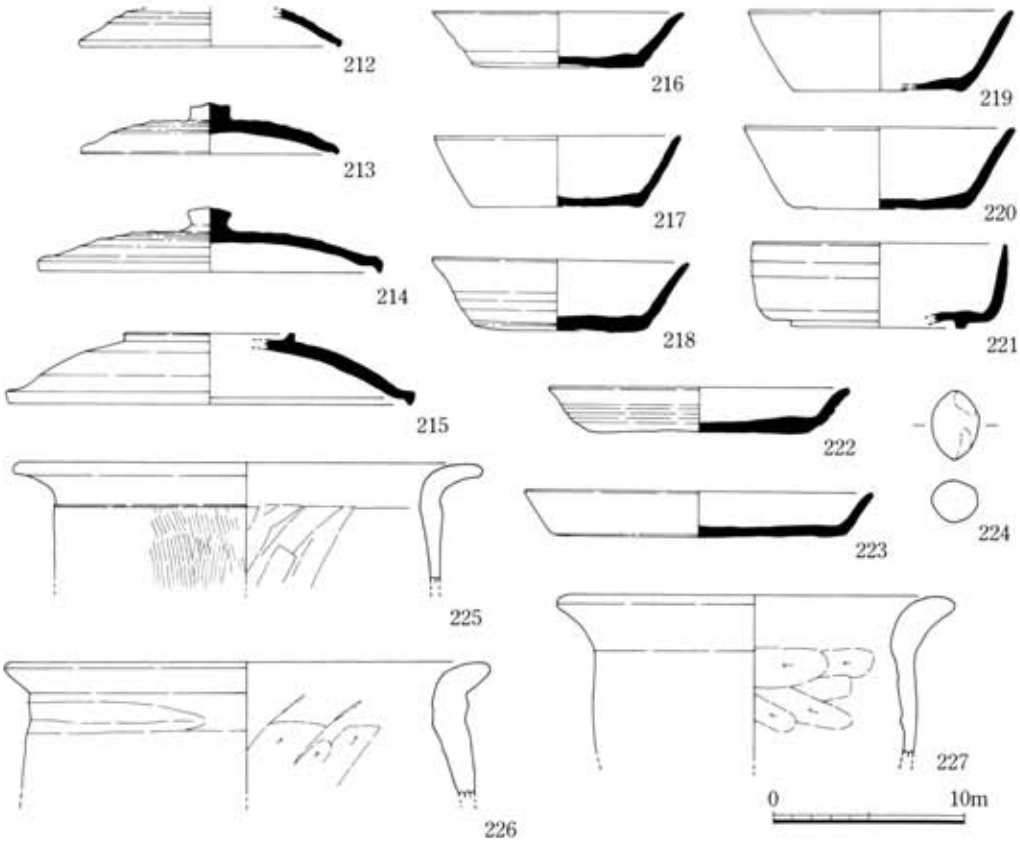


Fig.44　ＳＫ021土壙出土遺物（1/4）

9.0cmと底径は等しいが、口径・器高により法量が異なる。全て底部はヘラ切り離し後、ナデ調整を施す。221は断面方形の低い高台を持ち、直立ぎみの体部をなすものである。口径13.5cm、器高4.4cm、高台径9.2cm。222・223は体部から口縁部にかけて直線的に開く皿。222は体部と底部との境付近に一度稜を持って立ち上がるのに対し、223は底部からすぐに口縁部に向かって立ち上がるもの。底部はいずれもヘラ切り後、ナデ調整を行う。

225・226・227は土師器の甕。口縁部は大きく外反し、胴部はほとんど張らない。調整は口縁部内外器面共に横方向のナデ、胴部外器面がハケ目、内器面はヘラケズリ。いずれも胎土中に径0.5～5.0mm程度と大小様々な小石を多量に混入する。224はいわゆる土弾と呼称されるもので、混入品と思われる。

ＳＫ０２５（Fig.45）

調査区中央のやや西寄り、ＳＢ031の南東3.0m、ＳＫ030の北東2.5mに位置する。平面形はほぼ方形で、北東隅のみ、丸みを帯びる。南辺で3.4m、西辺で3.3mで、深さは約0.8m。埋土からは弥生土器の甕・壺・高坏等の破片が出土した。

出土遺物（Fig.46）弥生土器の甕４点、壺１点、高坏１点の他、土師器の高坏１点が出土しており、壺（234）以外は小片である。228～231は弥生土器の甕。228は口縁部が逆Ｌ字形をなし、残存部から推定すると胴部はほとんど膨らみを持たない。内外器面ともに丁寧なナデ調整を施す。229は口縁が断面三角形をなすもの。器面は丁寧にナデ調整が施される。223はくの字形に屈曲する口縁を持つもの。口縁部内器面は平坦に仕上げられ、端部はやや厚みを持つ。231は短く外反する口縁を持つ小型の甕。232は厚みを持って外方に水平に伸びる鋤先形口縁を持つ高坏。234は複合口縁壺の胴部から底部にかけての部分。ほぼ球形の胴部をなし、底部は短くくびれた平底になる。胴部最大径の僅かに下がったところに断面三角形の突帯を張り付ける。233は土師器の高坏で、浅い体部から長く伸びてやや外反する口縁部を持つもの。混入品と思われるが、一応図化した。いずれも胎土中に0.5

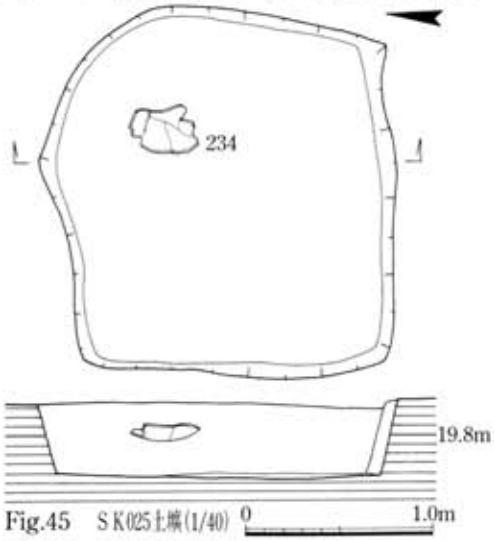


Fig.45　ＳＫ025土壙(1/40)

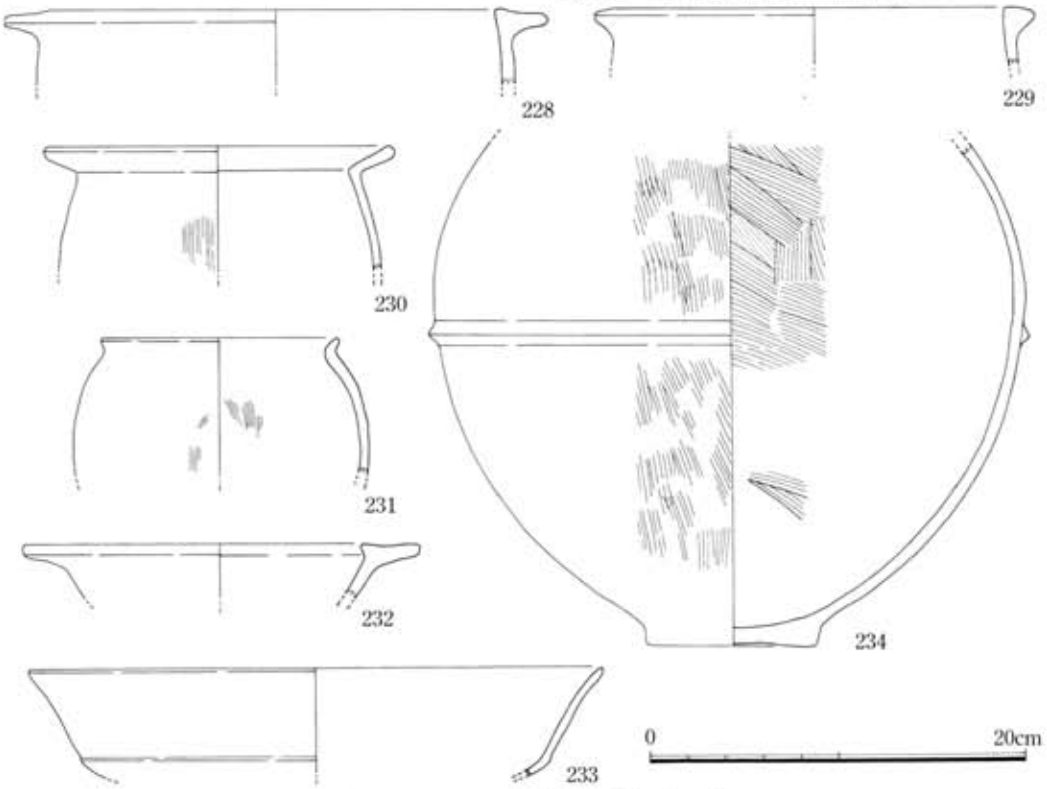


Fig.46　ＳＫ025土壙出土遺物（1/4）

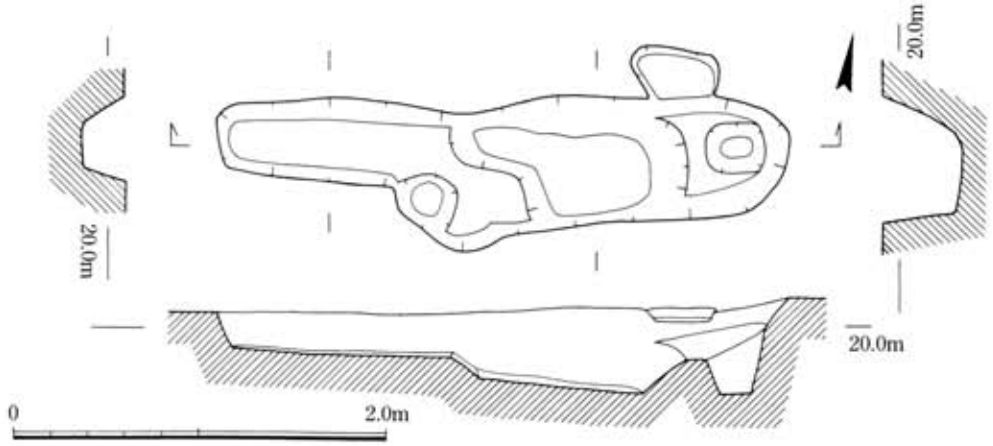


Fig.47　ＳＫ030土壙（1/40）

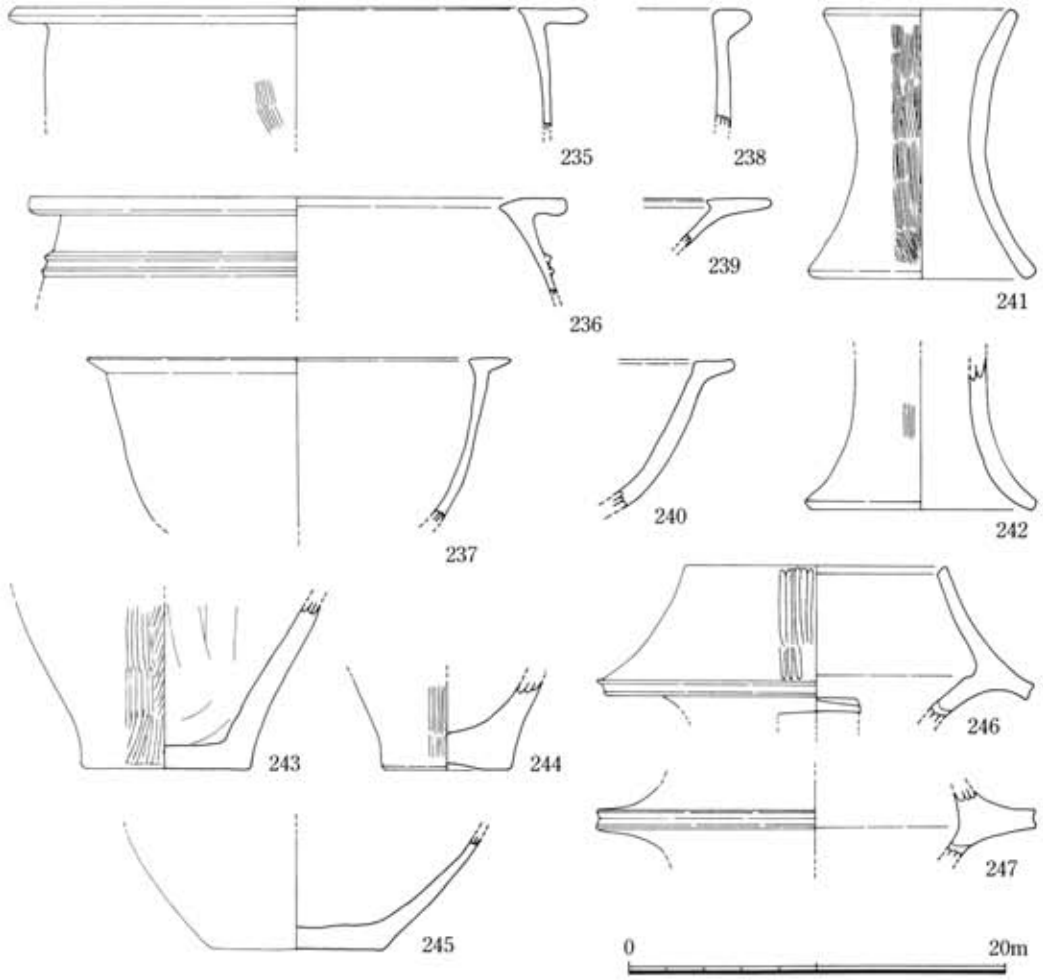


Fig.48　ＳＫ030土壙出土遺物（1/4）

～3.0cm程の小石を多量に含み、雲母片も多く含む。

ＳＫ０３０（Fig.47）

調査区中央のやや西寄り、ＳＫ025の南東2.5mに位置する。平面形はほぼ東西に長軸を持つ、溝状とも言うべき不整形の長方形をなす。中央部が一段下がる段構造をなし、西側の壁際には小穴を持つ。長さは約3.0m、幅は東端部で約0.35m、西端部で約0.65m。深さは東側段部で0.2～0.25m、西側段部で約0.3m、中央部の最も深い部分では検出面からの深さ0.35～0.45mである。埋土中からは弥生土器の甕・高坏・筒型器台等が出土した。形態及び出土遺物より甕棺墓群に伴う祭祀に係わる遺構と考えられる。

出土遺物（Fig.48）ＳＫ030からは50点あまりの土器片が出土したが、いずれも大きさ5.0～15.0cm程の小片であり、全形を復元できるものは器台(241)のみであった。これら50点あまりの破片のうち、器種の判別できるものを概観するならば、甕は最低18個体、壺は６個体、鉢は１個体、高坏２個体、器台は６個体が数えられる。ただ、個体数は多いものの、それらに接合できる、あるいは同一個体と思われる破片は少なく、遺物の多くが埋土と一緒に流れ込んだ可能性が考えられる。

235・236・238は甕。235・236は逆Ｌ字形口縁をなすもので、235は口縁部の上面が平坦で、端部は丸く仕上げられる。236はほぼ口径と等しくなるくらい膨らむ胴部を持つもので、口縁部下に断面三角形の細い突帯を２条貼りつけるもの。口縁端部には明瞭な稜を持つ。238は口縁部が断面三角形をなし、端部は丸みを持つ。237は鉢。口縁部は逆Ｌ字形を呈する。239・240は高坏。239は鋤先形の口縁を持つもの、240は湾曲する深い器形をなし、口縁部が逆Ｌ字形になるもの。241・242は器台。241は全形の1/3程度遺存しており、ＳＫ030出土遺物の中では最も残りが良い。246・247は大型の筒形器台。246は受部から鍔部にかけて緩やかに湾曲するもので、鍔部はやや下方に向かって伸びる。247は鍔部が水平に伸びるもの。鍔部での径は23.0cm。243～245は甕の底部。243は底面が平坦なくびれぎみのもの。244は同様にくびれぎみの底部であるが、底面は

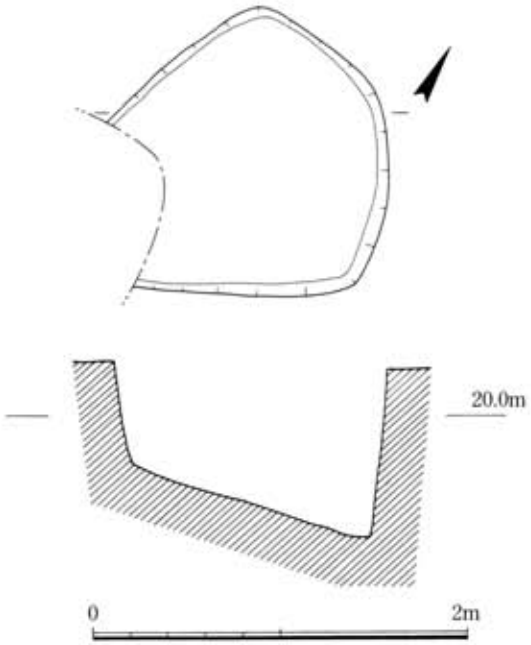


Fig.49　ＳＫ051土壙（1/40）

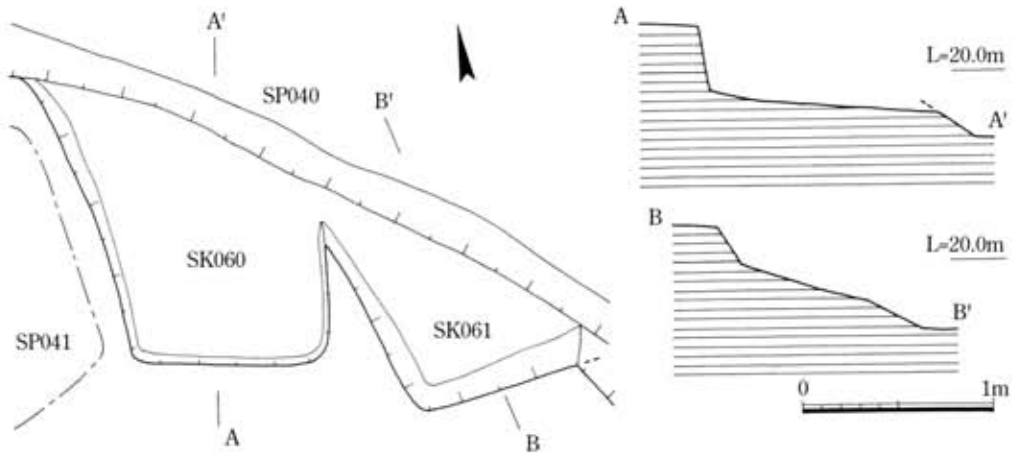


Fig.50　ＳＫ060・061土壙（1/40）

やや上げ底になるもの。内器面では底部と胴部の境は不明瞭である。245はかなり薄手の造りで、底面は平坦、内外器面共に丁寧なナデ調整が施される。236・246を除く全て胎土中に砂粒・小石を多量に含む他、雲母片を多く混入し、概ね黄橙色・橙色を呈する。一方、236・246は雲母片は混入するものの、砂粒・小石はあまり含まず精良な胎土で、色調は赤褐色を呈する。

ＳＫ０５１（Fig.49）調査区の西側、ＳＪ039甕棺墓に南西側を一部切られる。平面形は北東側が幅広く、南西に向かってすぼまる多角形をなしている。底面は南西から北東に向かって傾斜している。北西ー南東方向の最大幅約1.6ｍ、北東ー南西方向の最大残存幅は約1.6ｍ、深さは南西側で約0.5～0.6ｍ、北東側で約0.9ｍである。弥生中期初頭のＳＪ039に先行すると考えられる他、出土遺物もないため、時期・性格については不明である。

ＳＫ０６０・０６１(Fig.50)

調査区内西側、ＳＰ041の東側に接し、ＳＫ060・061双方が切り合って存在する。共にＳＤ040と遺構の北側が重複するため平面形は不明であるが、ＳＫ060は南東・南西方向にコーナーを持ち、遺存部分からは長方形プランが推定される。また、ＳＫ061は南西方向にコーナーを残すのみであるが、プラン的にはＳＫ060と類似するかと思われる。どちらも底面が北側に向かって傾斜して低くなるが、ＳＫ061の方がより傾きが大きい。遺構の遺存状態は悪いが、残存部分の形態・主軸方向あるいは周囲の状況などか

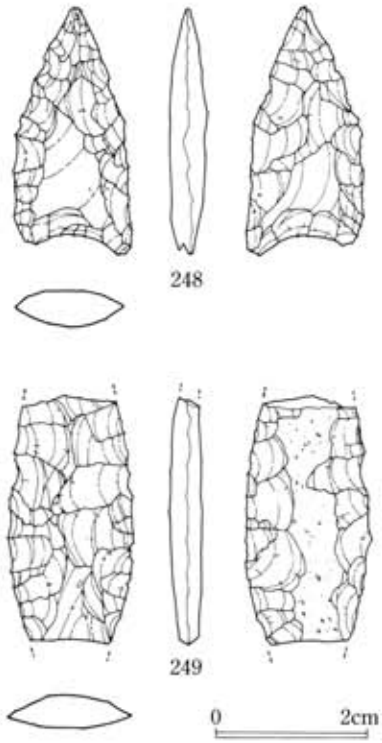


Fig.51　その他の出土遺物１(1/1)

ら甕棺墓の一次墓壙である可能性が考えられ、取りあえず土壙として報告しておく。墓壙とした場合、棺体はＳＤ040掘削の際に破壊されたものと思われ、土壙底面の状況から南側から北側に向かって棺体を挿入していたと推察される。ＳＫ060は西辺の残存長1.6ｍ、南辺1.0ｍ、東辺残存長0.7ｍ、深さは南辺付近で約0.35ｍ、北側で0.45～0.5ｍ。ＳＫ061は西辺の残存長1.1ｍ、南辺の残存長0.9ｍ、深さは南辺付近で約0.2ｍ、北側で約0.4ｍ。

(４)その他の出土遺物（Fig.51,52）

その他小穴・遺構検出面・耕作土中などから出土した遺物について、特徴的なもの、あるいは今まで述べたものとは時期的に異なるものに限って述べる。

250・251は弥生土器の甕で、小穴からの出土である。250は口縁部と体部に断面三角形の刻目突帯を貼り付けるもので前期前半の所産。摩耗のため調整は不明瞭だが、内外器面ともに横方向のナデ調整を施すようである。251はくの字形に屈曲する口縁部を持つもので、口縁は緩やかに外反しつつかなり大きく開く。胴部はほとんど膨らまず、調整は外器面がタタキの後ハケ目調整を施し、内器面については不明である。中期末～後期初頭の所産。252は土師器の甕

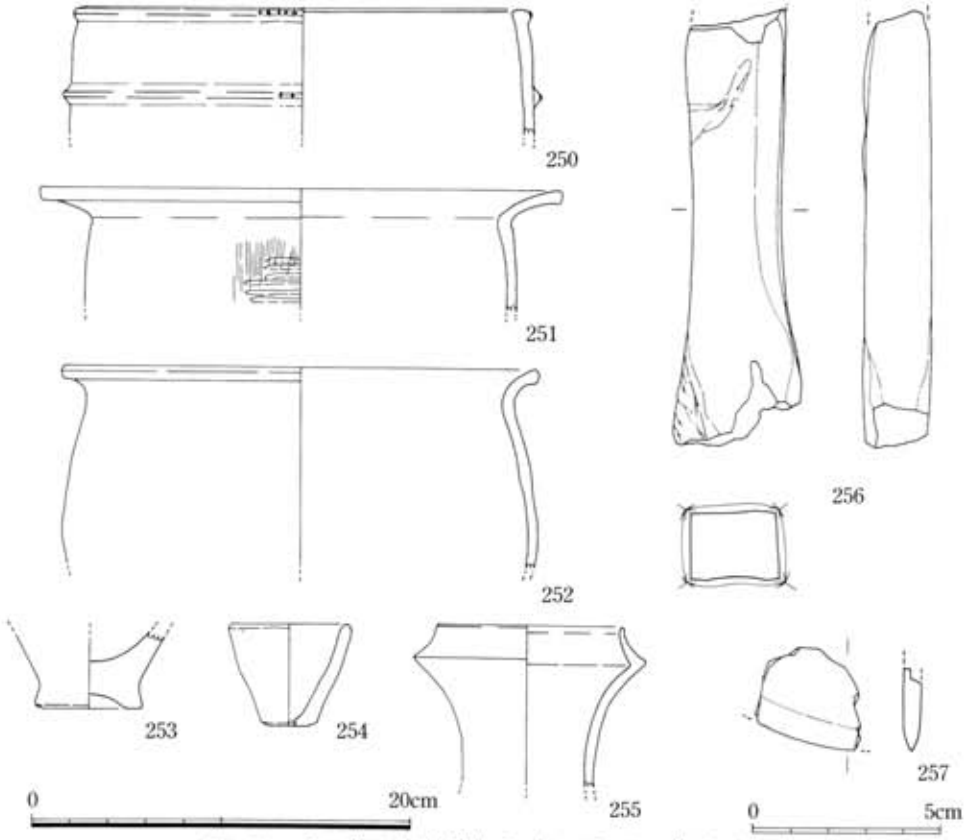


Fig.52　その他の出土遺物２（257は1/2、他は1/4）

で検出面からの出土で平安時代のもの。口縁部は内外器面ともに稜を持たずに外反し、端部は若干肥厚し丸く収める。253は弥生土器の甕の底部。短くくびれて底面は凹面をなす。前期前半。254は弥生土器の鉢。口径6.0cm、器高5.4cm程度の小型品で手捏ね風に荒く整形される。器壁は5～8mmと厚めであるが、底部の中心付近のみは2mm弱しかなく、外器面が平底になるのに対して、内器面は磨鉢状となる。後期前半か。255は小型の複合口縁壺の口縁部から頸部にかけての部分で攪乱土中からの出土。口縁部は内湾しつつ立ち上がり、不明瞭ながら端部には平坦面を持つ。口径9.7cm、後期後半の所産。

248・249・256・257は石器。248・249はサヌカイト製の打製石鏃。248は平面形がほぼ縦長の五角形となる凹基式のもので、基部には浅く抉りが入る。脚部は片方が一部欠損する。249は柳葉形のもので、先端部と基部を欠損する。248・249ともに検出面での出土である。256は砥石で耕作土中からの出土、257は石庖丁の一部分。

遺構番号	種別	形態（特徴）	規模(長さ×幅×深さ：m)	時期	備考
ＳＫ021	土壙	楕円形	長軸約1.7、短軸約1.3	奈良時代	
ＳＫ025	〃	方形	3.4×3.3×0.8	弥生後期前半	
ＳＫ030	〃	長方形	3.0×0.35～0.65×0.35～0.45	弥生中期中頃	
ＳＢ030	竪穴住居	円形、6本柱	直径約5.6	弥生前期末～中期前半	ＳＤ035に切られる。
ＳＤ035	溝跡	断面逆台形	(8.0)×3.8×1.0	弥生後期前半～後半	工業団地調査のＳＤ0651
ＳＤ036	〃	〃	(1.5～3.0)×5.0×0.3	奈良時代	〃　ＳＤ0875
ＳＪ038	甕棺墓	小児棺	(2.0)×1.5×0.5	弥生中期前半	ＳＤ040に切られる。
ＳＪ039	〃	成人棺	(1.5)×1.8×0.9	弥生中期初頭	〃
ＳＤ040	溝跡	断面逆台形	(19.0)×3.8×0.4～0.7	弥生後期前半～後半	工業団地調査のＳＤ0653
ＳＰ041	土壙墓	壁際に横穴を持つ	2.5×2.0×1.0	弥生中期	
ＳＰ042	石蓋土壙墓	長方形	2.3×0.5～0.7×0.45	弥生中期？	
ＳＪ043	甕棺墓	成人棺	？×1.1×1.1	弥生中期前半	ＳＤ040・ＳＪ044に切られる。
ＳＪ044	〃	小児棺	1.2×1.0×0.5	〃	
ＳＪ045	〃	成人棺	―	弥生中期中頃	
ＳＪ047	〃	〃	―	〃	
ＳＪ048	〃	小児棺	0.85×0.5×0.3	〃	
ＳＪ049	〃	成人棺	―	〃	ＳＤ040に切られる。
ＳＪ050	〃	小児棺	―	〃	〃
ＳＫ051	土壙	隅丸の多角形	1.6×1.6×0.9	弥生中期？	
ＳＤ052	溝跡	断面逆台形	(9.5)×0.9～1.2×0.35～0.65	弥生後期後半～終末	
ＳＪ055	甕棺墓	小児棺	―	弥生中期前半	ＳＤ040に切られる。
ＳＪ056	〃	成人棺	―	弥生中期中頃	〃
ＳＪ057	〃	小児棺	―	〃	〃
ＳＰ059	土壙墓	二段掘りを行う	1.4×1.0×0.85	弥生中期？	
ＳＫ060	土壙	長方形？	(1.6)×1.0×0.5	〃	甕棺墓の一次墓壙か？
ＳＫ061	〃	〃	(1.1)×0.9×0.4	〃	〃

Tab.1　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区遺構一覧表　　（　　）は残存値を示す。

Fig-図番号	PL番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
9-1		87003330	S D040	弥生土器	甕	(47.0)	(13.0)		砂・小石・雲母多	赤褐色	ナデ	ナデ
2		3325	〃	〃	〃	(45.5)	(19.6)		〃	橙褐色	〃	〃
3		3328	〃	〃	〃	(56.0)	(5.8)		〃	〃	〃	〃
4		3340	〃	〃	〃		(7.4)		〃	淡褐色	〃	〃
5		3342	〃	〃	〃		(8.4)		〃	赤褐色	〃	〃
6		3336	〃	〃	〃		(8.4)		〃	橙褐色	〃	〃
7		3327	〃	〃	〃	(38.0)	(8.2)		〃	〃	〃	〃
8		3333	〃	〃	〃	(32.0)	(5.8)		〃	〃	〃	〃
9		3329	〃	〃	〃	(47.0)	(6.8)		〃	淡褐色	〃	〃
10		3335	〃	〃	〃	(52.0)	(10.4)		〃	橙褐色	〃	〃
11		3326	〃	〃	〃	(74.0)	(13.0)		〃	〃	〃	〃
12		3324	〃	〃	〃	(92.0)	(10.0)		〃	〃	〃	〃
10-13		1424	S D035	〃	〃	(29.2)	(3.9)		〃	淡褐色	〃	〃
14		1425	〃	〃	〃	(30.5)	(5.8)		〃	〃	〃	〃
15		1478	S D040	〃	〃	(28.0)	(5.6)		〃	黄橙色	〃	〃
16		1472	〃	〃	〃	(32.5)	(2.7)		〃	〃	〃	〃
17		1415	S D035床	〃	〃	(34.5)	(3.3)		〃	赤褐色	〃	〃
18		1445	S D035	〃	〃	(39.0)	(2.9)		〃	褐色	〃	〃
19		1486	S D040	〃	〃	(38.0)	(7.8)		砂・小石少	橙褐色	〃	〃
20		1479	〃	〃	〃	(39.0)	(4.9)		〃	〃	〃	〃
21		1478	〃	〃	〃	(38.0)	(12.3)		〃	黄橙色	〃	〃
11-22	8-35	4008	S D035	〃	〃	(56.0)	(4.6)		砂・小石・雲母多	淡褐色	ハケメ	ハケメ
23		4011	〃	〃	〃	(54.0)	(7.0)		〃	黄橙色	ハケメ・ナデ	〃
24	8-36	4010	〃	〃	〃	(60.0)	(6.9)		〃	〃	タタキ・ハケメ	〃
25-25		1419	〃	〃	〃	(25.2)	(7.0)		〃	〃	不明	〃
26		1461	S D040	〃	〃	(27.0)	(6.6)		〃	橙褐色	ハケメ	ナデ
27		1459	〃	〃	〃	(23.2)	(9.6)		〃	褐色	〃	不明
28		1420	S D035	〃	〃	(28.0)	(9.7)		〃	黄褐色	不明	ハケメ
29		1432	〃	〃	〃	(19.5)	(7.0)		〃	赤褐色・褐色	ハケメ	〃
30		1481	S D040	〃	〃	(24.8)	(7.7)		〃	黄橙色	〃	〃
31	8-33	1159	〃	〃	〃	(23.4)	(18.0)		〃	暗褐色	〃	〃
32		1449	S D035	〃	〃	(36.2)	(11.1)		〃	黄橙色	タタキ・ハケメ	〃
33		1450	〃	〃	〃	(43.5)	(10.1)		〃	褐色	ハケメ	不明
13-34		1147	〃	〃	〃	15.5	23.7	6.0	〃	橙褐色	ハケメ・ヘラナデ	ハケメ
35		451	〃	〃	〃	(17.5)	15.5	5.5	〃	赤褐色	ハケメ	ナデ
36		1437	S D035	〃	〃	(16.5)	(9.2)		〃	黄橙色	〃	ハケメ
37	8-34	1157	〃	〃	〃	(14.8)	17.1	6.2	〃	橙褐色	ハケメ・ヘラナデ	〃
38		449	S D040	〃	〃	(15.7)	(16.3)		〃	暗褐色・褐色	ハケメ	〃
39		453	〃	〃	〃	11.3	15.5		〃	黄橙色	〃	〃

Tab.2　出土土器観察表1

口径・底径の（　）は復元径、器高の（　）は残存値を示す。

Fig-図番号	PL番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
14-40		87001515	S D040	弥生土器	壺	(25.2)	(2.5)		砂粒多	明褐色	ナデ	ナデ
41		1514	〃	〃	〃	(37.0)	(1.5)		〃	〃	〃	〃
42		1506	〃	〃	〃	(36.5)	(3.5)		〃	〃	〃	〃
43		1505	〃	〃	〃	(38.5)	(4.5)		〃	〃	〃	〃
44	9-42	409	〃	〃	〃	(20.8)	(4.2)		雲母・小石・雲母多	淡褐色	〃	〃
45		413	〃	〃	〃	(9.0)	(4.0)		〃	橙色	〃	〃
46		411	〃	〃	〃	(14.4)	(7.2)		〃	〃	ハケメ・ナデ	〃
47		1441	S D035	〃	〃	(15.2)	(9.3)		〃	褐色	ハケメ	ハケメ
48		1442	〃	〃	〃	(20.0)	(8.4)		〃	橙色	〃	〃
49	9-38	1168	〃	〃	〃	(14.0)	(23.7)		〃	〃	〃	〃
50		1148	〃	〃	〃	＊30.2	(26.8)	7.8	〃	明褐色	〃	ナデ
15-51		1174	S D040	〃	〃	(23.6)	(6.8)	7.1	〃	橙色	〃	不明
52		1173	〃	〃	〃	(21.2)	(10.3)	10.4	〃	褐色	〃	ハケメ・ナデ
53		419	〃	〃	〃	(19.0)	(6.5)		〃	明褐色	〃	ハケメ
54		1170	〃	〃	〃	(22.6)	(13.4)		〃	橙褐色	〃	〃
55		416	〃	〃	〃	(19.0)	(5.0)		〃	橙色	〃	〃
56		410	〃	〃	〃	(21.0)	(4.5)		〃	橙褐色	ナデ	ナデ
57		1175	〃	〃	〃	(25.0)	(5.0)		〃	〃	ハケメ	ハケメ
58	9-40	407	〃	〃	〃	(19.0)	(24.2)		〃	黄橙色	〃	〃
59	9-39	420	〃	〃	〃	(19.8)	35.6	8.0	〃	橙色	〃	〃
16-60		1495	〃	〃	〃	15.2	(11.2)		〃	〃	〃	ナデ
61		1492	〃	〃	〃	(17.5)	(13.5)		〃	黄橙色	〃	ハケメ
62		1434	〃	〃	〃	(20.2)	(8.3)		〃	〃	〃	不明
63		1158	〃	〃	〃	(14.0)	(22.0)		〃	明褐色	〃	ハケメ
64		1421	〃	〃	〃	(16.8)	(4.3)		〃	黄橙色	〃	ナデ
65		1496	〃	〃	〃	(17.4)	(5.5)		〃	〃	〃	不明
66		1161	〃	〃	〃	(11.3)	(14.8)		〃	橙褐色・褐色	〃	ハケメ
67		1162	〃	〃	〃	(11.3)	(13.1)		〃	〃	〃	不明
68	9-41	450	〃	〃	〃	(11.3)	(12.3)		〃	黄橙色	〃	ハケメ
69		1164	〃	〃	〃		(13.9)	6.3	〃	橙褐色・褐色	〃	〃
70	9-44	1568	S D035床	〃	〃	8.4	17.1		砂粒少	橙褐色	ハケメ・ヘラナデ	ナデ
71		434	S D040	〃	〃	9.4	(13.3)		〃	黄橙色	ヘラミガキ	ハケメ
72	9-43	436	〃	〃	〃	7.1	6.5	2.8	砂粒・小石少	〃	〃	ヘラミガキ
17-73		3346	〃	〃	甕		5.0	8.3	〃	〃	ナデ	ナデ
74		3347	〃	〃	〃		7.1	6.6	〃	〃	ハケメ	不明
75		3350	〃	〃	〃		6.8	7.2	〃	橙色	〃	ナデ
76		1406	S D035	〃	〃		(8.2)	7.8	〃	黄橙色	不明	不明
77		1513	S D040	〃	〃		(10.0)	6.4	〃	橙色	〃	〃
78		3351	〃	〃	〃		9.0	8.1	〃	橙褐色	ハケメ	ナデ

Tab.2　出土土器観察表 2

＊は胴部最大径を示す。

Fig-図番号	PL番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
79		87003355	S D040	弥生土器	甕		(8.4)	6.3	雲母・小石・砂多	橙褐色	ヘラナデ	ナデ
80		3357	〃	〃			(7.6)	7.1	〃	褐色	ハケメ	ハケメ
81	8-37	3356	〃	〃			(11.2)	5.6	〃	暗褐色	〃	ナデ
82		1407	S D035	〃			(12.2)	7.0	〃	褐色	不明	不明
83		3364	S D040	〃			(3.9)	6.8	〃	橙色	ナデ	ナデ
84		3363	〃	〃			(4.9)	(11.7)	〃	〃	ハケメ	ハケメ
85		4012	S D035	〃			(7.0)	(12.5)	〃	橙褐色	〃	〃
86		3362	S D040	〃	壺		(3.6)	6.3	〃	褐色	ナデ	ナデ
87		3358	〃	〃			(4.5)	8.4	〃	〃	〃	〃
88		3313	〃	〃			(6.1)	6.4	〃	明褐色	ハケメ	〃
89		3361	〃	〃			(5.1)	6.0	〃	〃	不明	ハケメ
90		3359	〃	〃			(7.3)	9.0	〃	褐色	ハケメ	不明
91		1167	〃	〃	蓋		(8.4)	＊6.0	〃	〃	〃	ナデ
92		1512	〃	〃			(6.9)	＊5.8	〃	〃	〃	ハケメ
18-93		447	〃	〃	高坏	(22.2)	(22.0)	7.2	砂粒・小石少	橙色	不明	不明
94		1508	〃	〃		(31.0)	(10.0)		〃	〃	〃	〃
95		1411	S D035	〃		(22.2)	(16.0)		〃	黄橙色	ナデ	ナデ
96		1502	S D040	〃		(26.0)	(11.6)		雲母・小石・砂多	橙褐色	不明	不明
97		1413	S D035	〃		(31.0)	(11.0)		〃	褐色	ナデ	ナデ
98		1503	〃	〃		(30.0)	(11.4)		〃	明褐色	〃	〃
99		1197	〃	〃		(36.4)	(6.0)		〃	橙褐色	不明	不明
100		1195	S D040	〃		(32.8)	(6.3)		〃	橙色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
101		1198	〃	〃		(32.3)	(5.5)		〃	橙褐色	不明	不明
102		427	〃	〃			(14.8)	16.8	〃	橙色	ハケメ	ハケメ
103	10-46	429	〃	〃			(15.2)	15.7	〃	黄橙色	不明	ヘラケズリ
104		423	〃	〃			(9.9)	10.0	〃	橙褐色	不明	ナデ
105		425	〃	〃			(8.3)	17.3	〃	〃	ハケメ	ハケメ
106	10-45	426	〃	〃			(17.7)	17.5	〃	黄橙色	ヘラミガキ	〃
19-107		1476	〃	〃	鉢	27.6	4.7		砂粒少	橙色	不明	不明
108		438	〃	〃		6.6	3.4		〃	褐色	ナデ	ナデ
109		1520	〃	〃		9.1	4.0		〃	橙褐色	〃	〃
110		93003614	〃	〃		(34.0)	5.4		〃	橙色	ハケメ	ナデ
111		87003609	〃	〃		(14.0)	6.5	5.3	〃	黄橙色	不明	不明
112		1160	S D035	〃		(26.6)	(14.6)		雲母・小石・砂多	褐色	ハケメ	ハケメ
113		1179	S D040	〃		(17.8)	(6.0)		〃	橙褐色	〃	〃
114	10-49	93003608	〃	〃			(6.9)		〃	茶褐色	ナデ	ヘラナデ
115		87001521	S D040	〃		(8.4)	5.7	(5.0)	〃	褐色	〃	ナデ
116		1510	〃	〃		(38.4)	(10.8)		〃	橙色	ハケメ	ハケメ
117		1490	〃	〃		(36.6)	(14.0)		〃	橙褐色	〃	不明

Tab.2　出土土器観察表３　　＊は頂部径を示す。

Fig-図番号	PL番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
118		8700441	S D040	弥生土器	鉢	(19.0)	(7.5)		礫・小石・雲母多	黄橙色	不明	不明
119		1518	〃	〃	〃	(17.0)	12.4		〃	橙褐色	〃	〃
20-120	10-50	3702	〃	〃	〃	17.3	12.4	(6.5)	〃	淡褐色	ナデ	ハケメ・ナデ
121		1156	S D035	〃	〃	20.9	11.9		〃	橙褐色	ハケメ	〃
122		445	S D040	〃	〃	(16.2)	11.9		〃	黄橙色	〃	ハケメ
123		443	〃	〃	〃	(20.8)	(6.1)		〃	暗褐色	ナデ	ハケメ・ナデ
124		1517	〃	〃	〃	(9.6)	(7.4)		〃	褐色	〃	ナデ
125		437	〃	〃	〃	(12.8)	9.6	7.5	〃	灰褐色	不明	不明
126	10-48	439	〃	〃	〃	8.2	4.3	3.8	〃	褐色	ハケメ・ヘラナデ	ハケメ・ヘラナデ
127	10-47	440	〃	〃	〃	(7.3)	6.2		〃	〃	ナデ	ナデ
128		444	〃	〃	〃	(13.8)	(6.0)		〃	橙褐色	ハケメ	〃
21-129		1439	〃	〃	器台	(14.8)	5.7		砂粒多	黄橙色	不明	不明
130		1176	〃	〃	〃	(17.2)	(5.8)		〃	橙褐色	ヘラミガキ	ナデ
131		1417	〃	〃	〃	*(18.0)	2.6		砂粒少	橙色	不明	不明
132		1416	〃	〃	〃	*(24.4)	1.9		〃	黄橙色	ナデ	ナデ
22-133		93003612	〃	〃	〃	(10.0)	11.5		砂粒・雲母多	橙色	ハケメ	〃
134		87003223	〃	〃	〃	7.7	11.9	8.0	礫・小石・雲母多	茶褐色	ヘラナデ・ハケメ	ハケメ
135	10-52	3706	〃	〃	〃	8.0	11.8	10.0	〃	赤褐色	ヘラナデ	〃
136	10-51	1574	S D035	〃	〃	13.0	7.9	14.0	〃	橙褐色	ハケメ	〃
137	10-53	3224	S D040	〃	〃	(11.5)	16.2	11.3	〃	黄橙色	ナデ	ナデ
138		1600	S D035	〃	〃		(17.5)	12.5	〃	暗褐色	ハケメ	ヘラナデ・ハケメ
139		1408	〃	〃	〃	15.4	18.4		〃	褐色	〃	ハケメ
140	10-56	430	S D040	〃	〃	12.6	18.5	13.0	〃	〃	タタキ	ナデ・ハケメ
141	10-54	435	〃	〃	〃	13.6	(13.8)		〃	黄橙色	ナデ・ハケメ	〃
142	10-57	1185	〃	〃	〃	15.2	18.6	(15.4)	〃	〃	ハケメ	ハケメ
143	10-55	1598	S D035床	〃	〃	13.6	18.7		〃	橙褐色	〃	〃
144	10-59	1186	S D040	〃	〃	15.7	19.7	18.0	〃	褐色	〃	不明
145	11-60	432	〃	〃	〃	15.0	22.4		〃	茶褐色	〃	ハケメ
146	11-58	1597	S D035	〃	〃		(20.2)	16.3	〃	褐色	ハケメ・タタキ	〃
23-147	11-61	3703	S D040	〃	支脚	6.8	9.5	12.0	〃	橙褐色	タタキ	ナデ
148		1572	S D035床	〃	〃	6.8	9.4	11.5	〃	褐色	〃	ハケメ
149		1499	S D040	〃	〃	6.0	9.2	11.9	〃	〃		
150		3704	〃	〃	〃	7.0	9.0	12.0	〃	黄橙色	タタキ	ナデ
151	11-63	3705	〃	〃	〃	7.5	10.5	10.4	〃	橙褐色	〃	〃
152	10-62	431	〃	〃	〃	8.0	12.5	10.7	〃	茶褐色	〃	〃
153		1570	S D035	〃	〃	5.2	6.9	7.5	〃	黄橙色	ナデ	〃
154		1571	〃	〃	〃	7.2	9.7	11.4	〃	褐色	ヘラナデ	〃
155		1498	S D040	〃	〃	5.0	7.6	11.0	〃	赤橙色	タタキ	ヘラナデ
156		93003615	〃	〃	〃	5.8	10.3	12.0	〃	橙色	〃	ナデ

Tab.2　出土土器観察表 4　　*は鍔部での径を示す。

Fig. 図番号	PL. 番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
157		93003611	S D040	弥生土器	支脚	7.0	9.3	(11.0)	砂粒・雲母多	黄橙色	ナデ	ヘラナデ
158		87001511	〃	〃	〃		7.4	7.4	砂粒・小石多	暗褐色	〃	ナデ
160	12-69	4006	〃	〃	〃		22.7	*1 16.0	砂粒多	橙色	〃	〃
24-161		93003603	S D036	土師器	甕	(21.0)	(5.3)		砂粒・小石多	赤褐色	不明	不明
162		3607	〃	須恵器	坏		(1.1)	(6.0)	砂粒・小石少	灰色	ナデ	ナデ
163		3605	〃	〃	〃		(2.6)	(10.6)	〃	〃	〃	〃
164		3604	〃	土師器	〃	(11.6)	2.3	(8.7)	〃	黄橙色	〃	〃
165		3606	〃	須恵器	〃		(4.0)	(7.9)	〃	灰色	〃	〃
26-166		87001592	S D052	弥生土器	甕	(30.8)	(5.0)		〃	褐色	不明	不明
167		1594	〃	〃	壺	(29.4)	(3.3)		〃	〃	ナデ	ナデ
168		1589	〃	〃	甕	(18.3)	(16.4)		砂粒・小石・雲母多	〃	ハケメ	不明
169		1193	〃	〃	〃	(25.4)	(39.0)		〃	淡褐色	〃	ハケメ
170		1192	〃	〃	〃	(22.0)	(27.0)		〃	〃	〃	〃
171	12-68	1191	〃	〃	〃		(23.0)		〃	暗褐色	不明	ハケメ
172	12-65	1582	〃	〃	鉢	(26.7)	(14.5)		〃	橙褐色	ハケメ・ナデ	〃
173	12-64	1584	〃	〃	〃	(15.0)	5.1		〃	橙色	ナデ	ハケメ・ナデ
27-174	12-67	1581	〃	〃	壺	21.6	31.7		〃	黄橙色	ハケメ	ハケメ
175	12-66	1580	〃	〃	〃	21.2	(28.0)		〃	淡褐色	〃	ハケメ・ナデ
176		1587	〃	〃	〃	(13.7)	(10.7)		〃	橙褐色	〃	ハケメ
177		1588	〃	〃	鉢	(16.5)	5.3		砂粒多	橙色	不明	〃
178		3617	〃	〃	高坏	26.8	5.0		砂粒・小石・雲母多	〃	ナデ	ナデ
179		1577	〃	〃	〃		(14.2)		〃	〃	ハケメ	〃
180		1578	〃	〃	〃		(7.7)	(4.3)	〃	褐色	〃	ハケメ
181		1596	〃	〃	器台	16.0	(9.6)		〃	淡褐色	〃	〃
33-185	6-18	93002092	S J039上	甕棺	甕	70.0	83.8	11.2	砂粒多	橙褐色	ナデ	ナデ
186	6-19	2091	S J039下	〃	〃	69.2	88.3	11.3	〃	〃	〃	〃
34-187	6-20	2087	S J043上	〃	〃	68.2	92.7	11.0	〃	黄橙色	〃	〃
188	6-21	2088	S J043下	〃	〃	69.4	86.9	10.9	〃	〃	〃	〃
189	6-22	2089	S J047上	〃	〃	64.7	(90.8)		砂粒少	淡褐色	〃	〃
190	6-23	2086	S J047下	〃	〃	64.4	100.6	10.6	〃	〃	〃	〃
35-191	7-24	2093	S J049上	〃	〃	61.0	(84.4)		〃	淡褐色	〃	ナデ・ヘラナデ
192	7-25	2090	S J049下	〃	〃	62.4	89.4	11.4	〃	淡褐色	〃	ナデ
193			S J056上	〃	鉢	(58.0)	(46.4)		砂粒多	黄橙色	〃	〃
194		2098	S J056下	〃	甕	73.0	(41.0)		〃	〃	〃	〃
195	7-28	2085	S J045下	〃	〃	46.2	79.8	11.2	砂粒少	淡褐色	〃	〃
36-196	7-26	401	S J038上	〃	〃	36.0	45.4	9.0	砂粒多	橙色	ハケメ	〃
197	7-27	402	S J038下	〃	〃	42.8	53.2	9.3	〃	〃	〃	〃
198	8-30	2095	S J044上	〃	〃	*2 44.2	28.8	7.0	〃	暗褐色	ヘラミガキ	ナデ
199	8-31	2096	S J044下	〃	壺	*3 23.2	44.0	10.3	〃	〃	〃	〃

Tab.2　出土土器観察表5

*1、は最大幅、*2、3は打ち欠き径を示す。

Fig-図番号	PL番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
200		87000403	S J 048上	甕棺	鉢	33.0	20.2	9.0	砂粒多	赤褐色	ナデ	ナデ
201	7-29	404	S J 048下	〃	甕	37.6	52.2	10.2	〃	黄橙色	〃	〃
202		406	S J 050上	〃	〃	32.0	38.0	7.6	〃	〃	ハケメ	〃
203		405	S J 050下	〃	〃	31.6	38.8	7.6	〃	〃	〃	〃
37-204		93002100	S J 055上	〃	〃	44.0	(42.2)		〃		ヘラミガキ	〃
205	8-32	2097	S J 055下	〃	〃	*1 36.1	36.5	7.0	〃	橙褐色	〃	ヘラミガキ・ナデ
206		2099	S J 057上	〃	〃	(29.0)	36.0	7.0	〃	橙色	ハケメ	ナデ
207		2451	S J 057下	〃	〃	(31.2)	(40.8)		〃	黄橙色	〃	〃
42-208		87003314	S B 031	弥生土器	甕	(20.4)	(1.9)		砂粒・小石多	〃	ナデ	〃
209		3317	〃	〃	〃	(27.2)	(2.9)		〃	〃	〃	〃
210		3315	〃	〃	〃	(27.2)	(2.5)		〃	橙褐色	〃	〃
211		3318	〃	〃	鉢	(31.3)	(4.4)		〃	黄橙色	〃	〃
44-212		3207	S K 021	須恵器	蓋	(14.0)	(1.9)		砂粒少	灰色	〃	〃
213		3209	〃	〃	〃	(13.5)	2.6		〃	〃	ヘラケズリ・ナデ	〃
214		3208	〃	〃	〃	(18.3)	3.3		〃	〃	〃	〃
215		3211	〃	〃	〃	(21.2)	3.7	*2 9.0	〃	〃	ナデ	〃
216		3205	〃	〃	坏	(13.2)	2.9	(9.0)	〃	灰黄色	〃	〃
217		3203	〃	〃	〃	(12.8)	3.7	(9.0)	〃	灰白色	〃	〃
218		3201	〃	〃	〃	(13.3)	3.7	(9.0)	〃	灰色	〃	〃
219		3204	〃	〃	〃	(14.0)	4.2	(9.0)	〃	灰白色	〃	〃
220		3202	〃	〃	〃	(13.5)	4.2	(9.0)	〃	〃	〃	〃
221		3712	〃	〃	〃	(13.0)	4.4	(9.2)	〃	灰色	〃	〃
222		3210	〃	〃	皿	(15.8)	2.4	(11.6)	〃	黄灰色	〃	〃
223		3206	〃	〃	〃	(18.2)	2.2	(15.4)	〃	〃	〃	〃
225		3215	〃	土師器	甕	(24.0)	(5.2)		砂粒・小石多	褐色	ハケメ・ナデ	ヘラケズリ・ナデ
226		3213	〃	〃	〃	(25.5)	(6.9)		〃	橙色	ナデ	〃
227		3214	〃	〃	〃	(18.0)	(8.4)		〃	〃	〃	〃
46-228		3368	S K 025	弥生土器	〃	(22.5)	(4.0)		砂粒多	橙褐色	〃	ナデ
229		3370	〃	〃	〃	(22.0)	(3.0)		〃	暗褐色	〃	〃
230		3371	〃	〃	〃	(18.5)	(6.7)		〃	淡褐色	ハケメ	不明
231		3370	〃	〃	〃	(12.5)	(7.4)		〃	褐色	〃	ハケメ
232		3366	〃	土師器	高坏	(21.0)	(2.9)		砂粒・雲母少	〃	ナデ	ナデ
233		3365	〃	弥生土器	〃	(15.0)	(5.7)		砂粒・小石多	赤褐色	不明	不明
234		3373	〃	〃	壺	*3(31.6)	(26.5)	8.8	〃	褐色	ハケメ	ハケメ
48-235		476	S K 030	〃	甕	(30.5)	(6.2)		砂粒・小石・雲母多	黄橙色	〃	ナデ
236		480	〃	〃	〃	(21.5)	(5.0)		雲母少	赤褐色	ナデ	〃
237		481	〃	〃	鉢	(18.0)	(8.6)		砂粒・小石・雲母多	橙色	〃	〃
238		3369	〃	〃	〃		(6.3)		〃	黄橙色	〃	〃
239		482	〃	〃	高坏		(4.9)		〃	橙色	〃	〃

Tab.2　出土土器観察表 6

*1は打ち欠き部の径、*2は頂部径、
*3は胴部最大径を示す。

Fig-図番号	PL番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
240		87003367	S K030	弥生土器	高坏		8.0		雲母・小石・砂多	黄橙色	ナデ	ナデ
241	12-71	470	〃	〃	器台	9.5	14.2	(11.9)	〃	〃	ハケメ	〃
242		471	〃	〃	〃		8.0	(11.5)	〃	〃	〃	〃
243		474	〃	〃	甕		8.6	9.0	〃	橙色	〃	ヘラナデ
244		472	〃	〃	〃		4.7	6.8	〃	黄橙色	〃	ナデ
245		475	〃	〃	壺		5.9	9.0	〃	橙褐色	〃	〃
246		469	〃	〃	器台		7.5	*(23.0)	雲母少	赤褐色	ヘラミガキ	〃
247		483	〃	〃	〃		3.4	*(23.0)	雲母・小石・砂多	橙色	ナデ	〃
51-250		3388	Pit.002	〃	甕		(6.8)		砂粒少	灰褐色	〃	〃
251		3396	Pit.032	〃	〃		(6.5)		〃	褐色	タタキ・ハケメ	不明
252		3374	検出面	土師器	〃		(10.5)		〃	赤褐色	不明	〃
253		3386	Pit.003	弥生土器	〃		(4.0)	5.6	〃	灰褐色	ナデ	ナデ
254		3392	Pit.027	〃	鉢		5.4	2.9	〃	褐色	〃	〃
255	12-70	455	撹乱土	〃	壺		(4.2)		砂粒多	黄橙色	〃	〃

Tab.2　出土土器観察表 7　　*は鍔部径

Fig-図番号	PL番号	県遺物登録番号	出土地点	器種	胎土	法量(cm)	色調	調整
25-159		87001182	S D040	土弾	細砂粒多	長さ4.1、径2.3	橙褐色	ナデ
27-183		1585	S D052	〃	〃	長さ4.1、径2.5	褐色	〃
184	13-79-5	1586	〃	紡垂車	〃	径4.0、厚さ0.5	暗灰色	〃
44-224	-4	3216	S K020	土弾	〃	長さ3.7、径2.4	褐色	〃

Tab.3　出土土製品観察表

Fig-図番号	PL番号	県遺物登録番号	出土地点	器種	法量(cm)	重量(g)
27-182	13-80-1	87001567	S D052	砥石	長さ(8.3)、最大幅6.0、最大厚3.6	190.3
51-254	-2	468	耕作土	〃	長さ(11.5)、最大幅3.0、最大厚1.9	108.1
255	79-3	93003613	Pit.009	石庖丁	長さ(3.8)、幅(2.7)、厚さ0.5	5.5
256	-1	3438	表採	石鏃	長さ3.25、幅1.55、厚さ0.5	2.3
257	-2	3437	撹乱土	〃	長さ(3.25)、幅1.7、厚さ4.5	2.7

Tab.4　出土石製品観察表　　(　　)は残存値

2．吉野ヶ里地区Ⅴ区(馬郡遺跡４区)の遺構と遺物

吉野ヶ里地区Ⅴ区(馬郡遺跡４区)は神埼町大字鶴字下ノ辻に位置する。佐賀県教育委員会調査の馬郡遺跡１～４区の中で、４区は最も東に位置し、吉野ヶ里段丘西側裾部にあたる(Fig.5)。４区の西側に近接して順に東より１・２・３区と続くが、１区及び２区の東側は粘質土からなる遺物包含層の堆積する湿地帯となっている[1]。この包含層は馬郡遺跡１～３区の調査において東西幅約50ｍ、深さ最大0.8ｍで確認されており、多くの植物遺体と共に弥生時代～鎌倉時代にかけての遺物が多量に出土した。一方、この包含層を挟んで西側にあたる２・３区では平安時代の井戸の他、土壙・小穴等が検出されており、若干の微高地が存在し、生活が営まれていたことが窺える。また、２・３区の北200ｍには、神埼町教育委員会調査の馬郡遺跡Ａ区が位置しており、多数の甕棺墓をはじめとする弥生時代・古墳時代・平安～鎌倉時代の遺構が検出されている[2]。おそらく馬郡遺跡の中心部は現在の馬郡集落及びその南側付近であり、吉野ヶ里丘陵とは浅い谷状地形を挟んで対峙しているものと把握されよう。これに対し調査区を含む吉野ヶ里地区Ⅴ区は、弥生時代後期に大規模な外濠(ＳＤ0925)・内濠(ＳＤ0831・0833・0832)を含む環濠集落が営まれており、吉野ヶ里丘陵遺跡群の中核の一部をなしている。この他弥生時代以降には、古墳時代中期～後期にかけての住居址が、また平安時代には掘立柱建物と井戸が検出されているが、遺構の密度はまばらで、やはり主体となる時期は弥生時代後期に限られる。このうち、物見櫓等を含む環濠部分は段丘頂部付近に、高床倉庫等を含む掘立柱建物群は段丘西側の緩斜面上に立地しているが、導水路調査区の位置するより西側の低位段丘上は、確認調査は行われているものの[3]、ある程度の広さを持った面的な調査は本調査区のみである。本調査区では弥生時代～古墳時代・平安時代にかけての遺構が高い密度をもって検出され、各時代にわたって吉野ヶ里丘陵の裾部まで居住域が広がっていたことが明らかにされた。なお、調査区は4.0×4.0ｍを一区画として任意に区割りを行い、北から南へＡ,Ｂ,Ｃ･･･区、西から東へ１,２,３･･･区とした。

註　1）森田孝志『馬郡遺跡』「筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書２」佐賀県文化財調査報告書第93集　佐賀県教育委員会　1989

2）八尋　実『馬郡遺跡』神埼町文化財調査報告書第７集　神埼町教育委員会　1981

3）「吉野ヶ里遺跡-佐賀県神埼郡三田川町・神埼町に所在する吉野ヶ里遺跡の確認調査報告書-」佐賀県文化財調査報告書第100集　佐賀県教育委員会　1990

(１) 遺　構

吉野ヶ里地区Ⅴ区で検出された遺構には、竪穴住居２棟・掘立柱建物４棟・土壙11基の他、多数の小穴が挙げられる。これらは時期的には、弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代後期

～鎌倉時代の大きく三時期に区分されるようである。調査面積に対して遺構の密度は高く、ほぼ調査区全面において確認されているが、調査区東側は西側に比べ遺構の残存状況が良好ではなく、削平が著しい。このことは検出面の標高が調査区全面においてほぼ一定(標高6.7～7.0m)であることを考えると、旧地形が東から西に向かって若干の斜面となっていたことを想定させる。よって性格を把握し得た遺構は調査区西側を中心とするが、この他にも帰属不明の多数の小穴が認められることより、特に掘立柱建物などについてはさらに相当数の存在が予想されよう。以下に遺構ごとの概要を述べる。

遺構番号	種　別	形　態	規　模(m)	時期	備考
SK001	土　壙	隅丸方形？	1.6×(1.3)	弥生時代後期	弥生土器壺の小片出土。
SK002	〃	隅丸方形	1.3×1.3	不明	横穴を持つ。
SK003	〃	隅丸三角形	1.2×1.3	〃	
SK004	〃	楕円形	2.0×1.5	弥生時代後期初頭	弥生土器甕・鉢が出土。
SK005	〃	隅丸長方形	2.5×1.0	不明	
SK006	〃	〃	2.5×1.1	古墳時代後期	須恵器坏身の小片出土。
SK007	〃	楕円形	1.8×1.5	平安時代後期	土師器皿・椀、瓦器椀出土。
SK008	〃	長楕円形？	1.9×(0.65)	不明	柱穴か？
SK009	〃	隅丸長方形	2.2×0.7～0.9	不明	SB012を切る。土壙墓か？
SK010	〃	〃	1.4×0.85	**鎌倉時代**	土壙墓か？
SK011	〃	歪な長方形	2.5×0.8～1.4	不明	
SB012	竪穴住居	方形	3.7×4.2	不明	2本柱か？
SB013	〃	方形か？	5.6×(4.8)	古墳時代後期？	4本柱、カ跨を持つ。
SB014	掘立柱建物	方形(2間×2間)	4.6×4.3	不明	柱穴より須恵器・土師器の細片出土。
SB015	〃	長方形(〃)	3.8×3.3	〃	柱穴より須恵器の細片出土。
SB016	〃	〃	4.9×4.2	〃	SB015を切る。柱穴より須恵器細片。
SB017	〃	長方形(2間×1間)	2.7×2.4	〃	

Tab.5　吉野ヶ里区Ⅴ区遺構一覧表

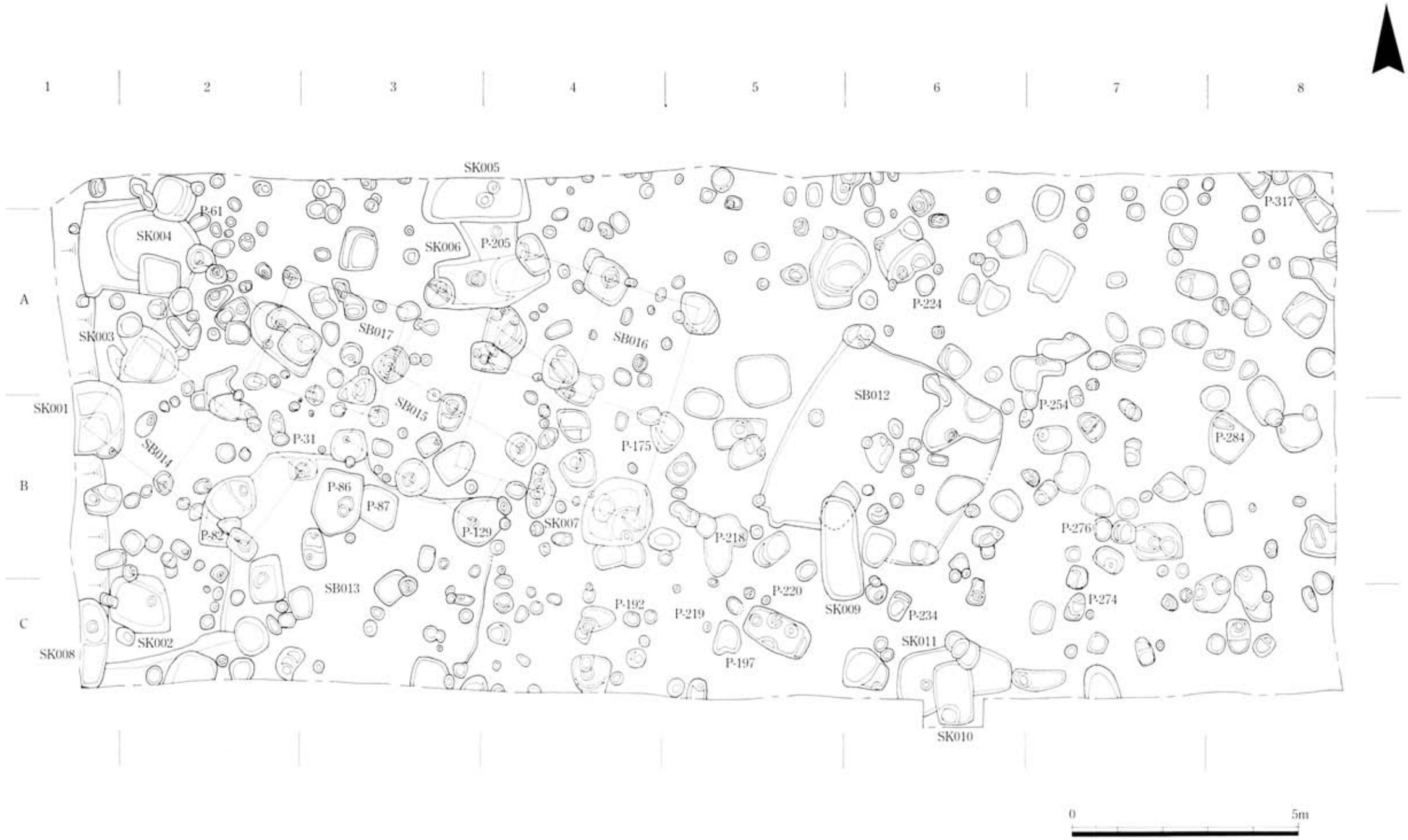
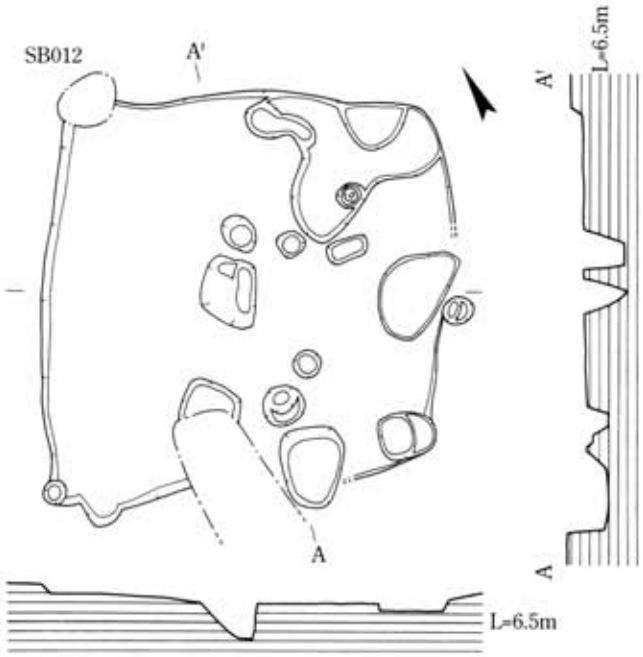


Fig.53　吉野ヶ里地区Ⅴ区遺構配置図（1/100）



① 竪穴住居

ＳＢ012

位置：調査区中央東よりに位置する。

形態：平面形は歪な正方形。Pit.Ｂ・Ｃを主柱穴とする二本柱。

規模・床面積：3.7×4.2m、4.6m²

備考：焼土・炉跡等を持たない。確実に遺構に伴う遺物なし。南東壁を一部ＳＫ009によって切られる。

ＳＢ013

位置：調査区の南西に位置する。

形態：南側約1/4が調査区外に含まれるが、主柱穴の位置関係より平面形はほぼ方形か。主柱穴はPit.Ａ～Ｃ・調査区外の一つからなる四本柱。

規模・床面積：約5.6×5.6m、約11.2m²。

備考：主柱穴はいずれも南北に長軸を持つ方形あるいは楕円形。北壁よりに焼土を伴う浅い掘り込みを持つ。焼土中より土製支脚と土師器甑の口縁部片が出土。ＳＢ014・ＳＢ015の柱穴により北壁及び西壁を切られる。

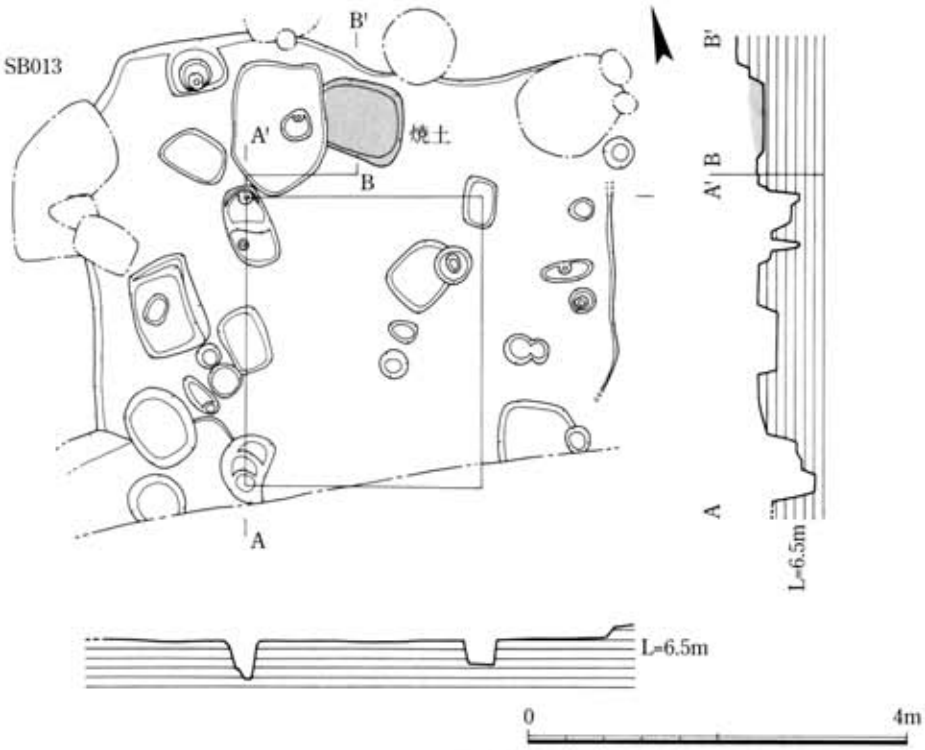


Fig.54　ＳＢ012・013竪穴住居（1/80）

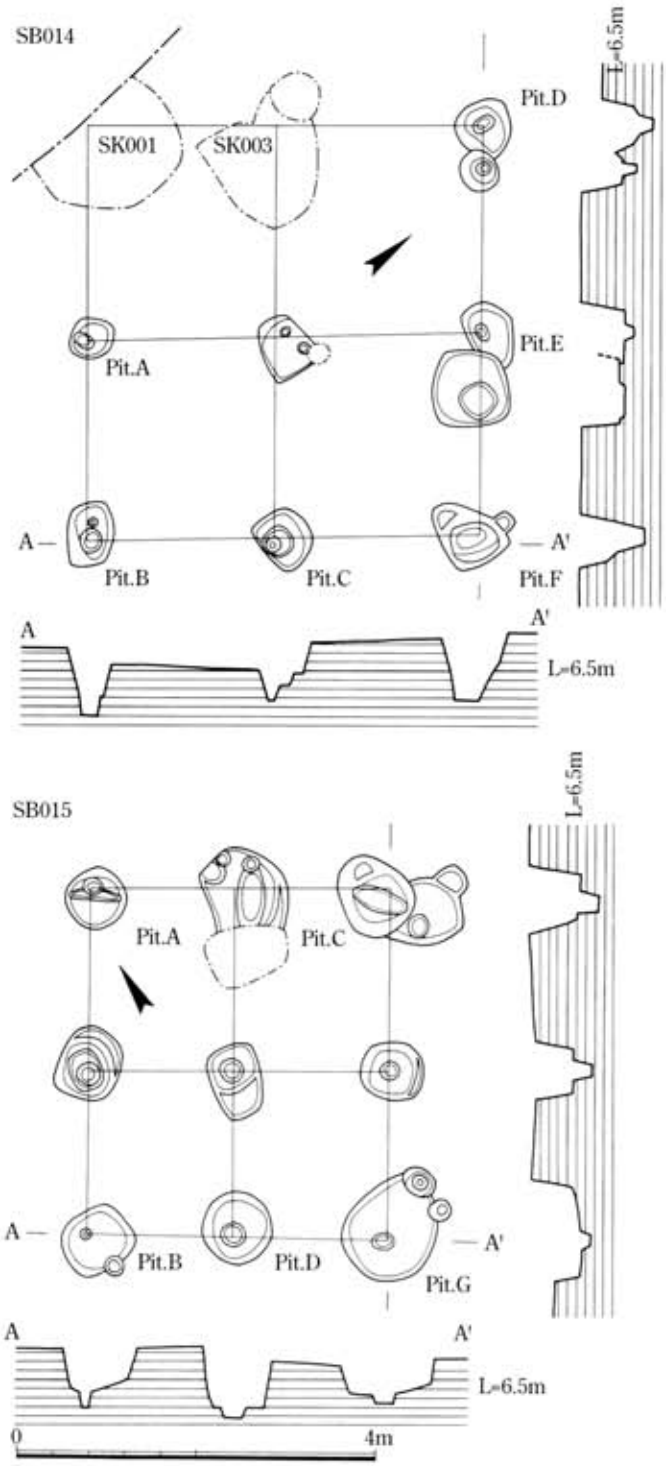


Fig.55　ＳＢ014・015掘立柱建物（1/80）

② 掘立柱建物

ＳＢ014

位置：調査区の西端に位置する。

形態：西側にＳＫ001・003が重複しておりを柱穴を検出できなかったが、２間×２間の総柱建物と考えられる。

規模及び床面積：4.3ｍ（Pit.Ｂ－Ｆ）×4.6ｍ（Pit.Ｄ－Ｆ）。平面形はほぼ方形で床面積19.8m²。

方位：Ｎ－38°40′－Ｅ

備考：柱掘方は不整形の円または楕円形を平面形とし、円錐形に深く掘り下げた後、柱部分をさらに一段掘り込む。遺物としては、Pit.Ｅより６世紀後半代の須恵器坏蓋が、またPit.Ａ・Ｃからは同じく６世紀後半代の土師器坏身が出土しているがいずれも小片。

ＳＢ015

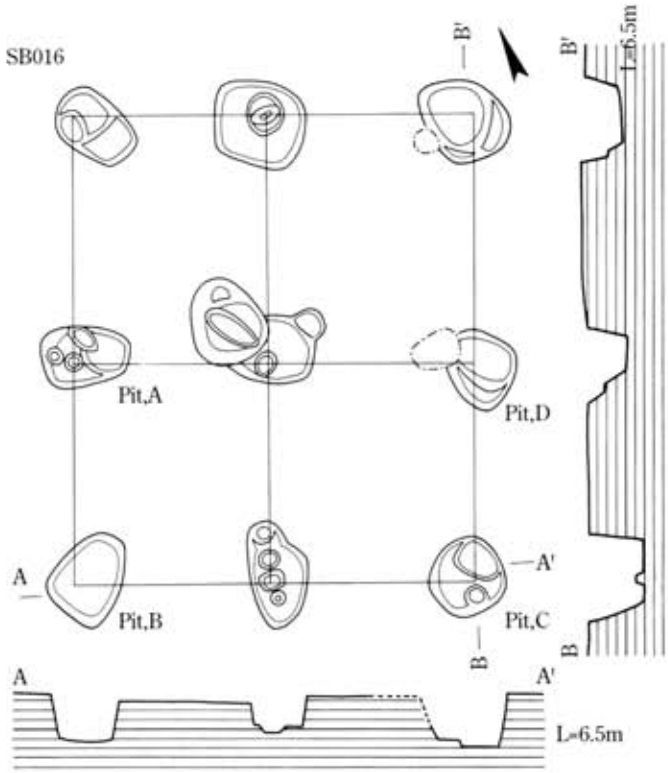
位置：調査区西側、ＳＢ014のすぐ東側に接する。

形態：２間×２間の総柱で長方形。

規模及び床面積：桁行3.8m、梁行3.3m、延面積約12.5m²。

方位：Ｎ－33°40′－Ｅ

備考：柱掘方の平面形は円形・及び隅丸方形で二段堀りを行う。柱部分の堀込みはPit.Ｇを除けば径約0.25ｍ程度に収まる。Pit.Ａには、柱の沈下防止のためと思われる横木を置いた痕跡が認められる（ＰＬ.16-7）。Pit.Ｂ・Ｄ・ＧがＳＢ013を切り、Pit.ＣがＳＢ016によって切られる。Pit.Ｂ・Ｄから須恵器の小片が出土。



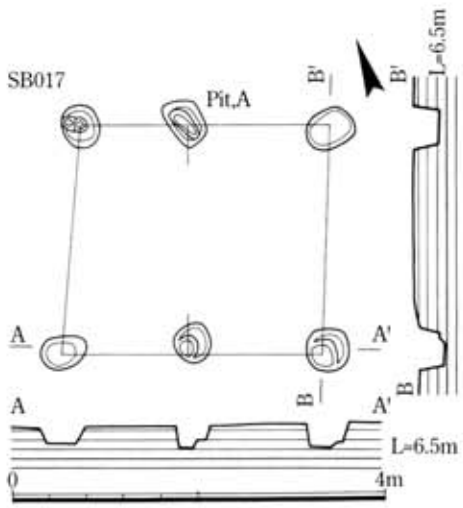


Fig.56　ＳＢ016・017掘立柱建物（1/80）

ＳＢ016

位置：ＳＢ015の東側で重複する。

形態：２間×２間の総柱建物。平面形は長方形。

規模及び床面積：桁行約4.9ｍ、梁行約4.2ｍ。床面積約21.0ｍ。

方位：Ｎ－20°40′－Ｅ

備考：柱堀方の平面形は、隅丸方形・楕円形・歪な円形と一定しておらず、断面形においても二段掘りを行うものと行わないものがある。Pit.ＡがＳＢ015を切り、Pit.Ｃが平安時代後期の土壙ＳＫ007によって切られる。Pit.Ｂより須恵器の小片が、またPit.Ｄよりミニチュア土器(48)が出土している。

ＳＢ017

位置：ＳＢ014・015と重複する。

形態：２間×１間で平面形は長方形。

規模及び床面積：桁行約2.7ｍ、梁行約2.4ｍ。床面積約6.5ｍ。

備考：柱掘方は、平面形が円あるいは楕円形を主体とし、Pit.Ａのみ隅丸方形である。断面形は二段掘りを行うものと行わないものの二通りがあるが、段掘りを行うものも、柱部分の掘り込みは5cm程度と浅い。

③土　壙（Fig.57～59）

ＳＫ００１　調査区の西側Ｂ－１区に位置しており、北東側でＳＫ003と近接し、ＳＢ014と重複する。西側部分は削平されて失われているが、残存部分から推測すると、平面形は隅丸の方形をなす。南北約1.6ｍ、東西の残存長約1.1ｍの規模を持つ。南側が一段下がる段構造をなし、段部までの深さは約1.0ｍ、底部までは深さ約1.3ｍである。弥生土器鉢・甕の小片が出土して

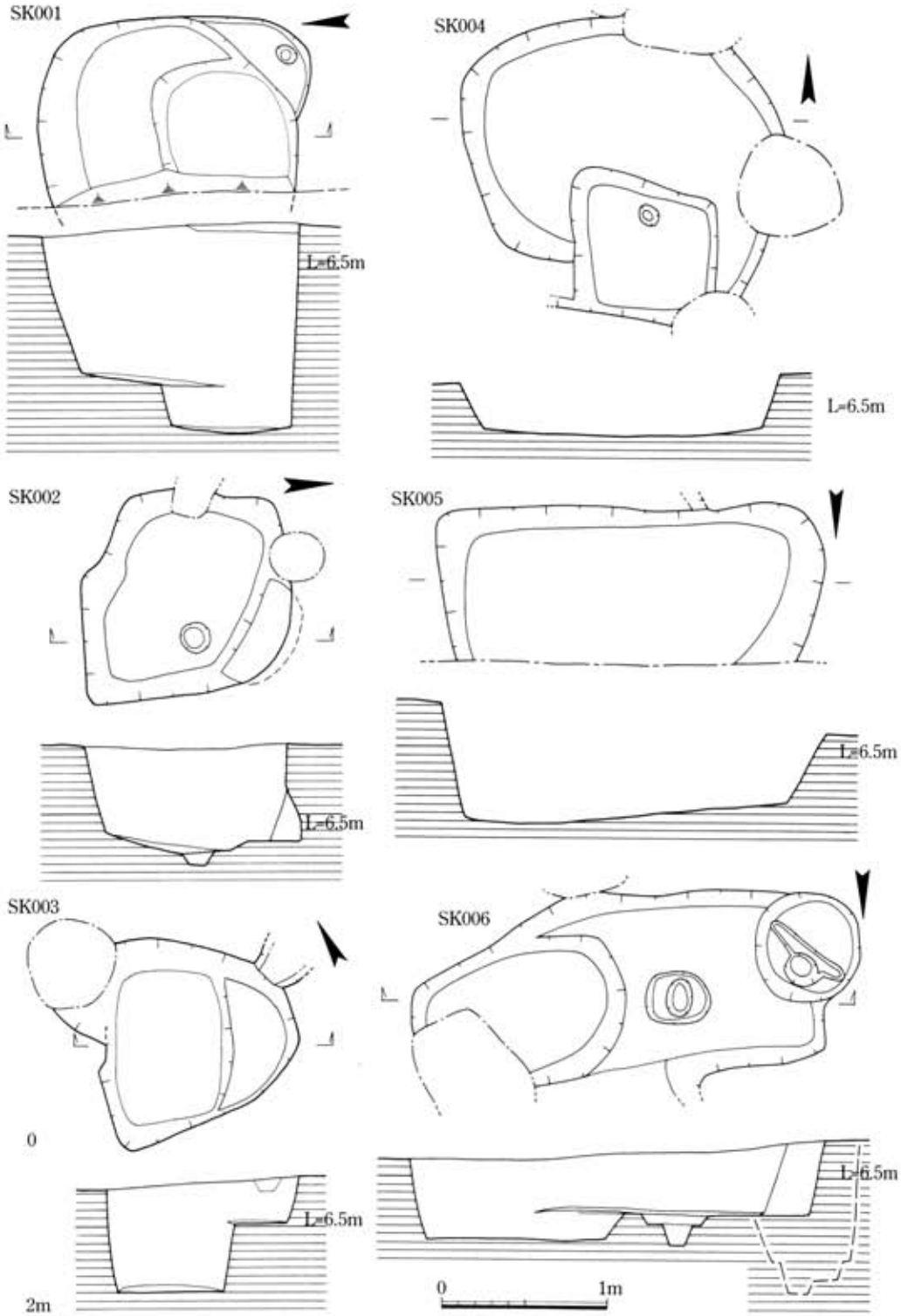


Fig.57　ＳＫ001・002・003・004・005・006土壙（1/40）

いる。ＳＢ014の柱穴と重複するが新旧関係は不明である。

ＳＫ００２　調査区の南西端に位置し、西側にＳＫ008が接している。平面形はほぼ隅丸の方形をなし、東西・南北方向共に長さ1.3ｍ、深さ約0.7ｍである。北東方向に幅0.6ｍ、奥行き0.1ｍ程度の横穴を持つ。

ＳＫ００３　調査区の西端に位置し、北側にＳＫ004、南西側にＳＫ001と接する。平面形は隅丸の三角形をなし、三角形の一辺の長さは約1.3ｍである。断面形は北東側が一段下がる段構造を持ち、段部までの深さは0.3ｍ、底面までの深さは0.7ｍである。ＳＢ014の柱穴と重複するが新旧関係は不明である。

ＳＫ００４　ＳＫ003の北側、調査区の北西隅にあたる。幾つかの小穴によって切られるが、平面形は長軸2.0ｍ、短軸1.5ｍの楕円形、深さは約0.4ｍである。出土遺物としては、弥生後期初頭に位置付けられる甕１個体、鉢３個体が出土している。

ＳＫ００５　調査区中央のやや西よりに位置し、遺構の北側半分は調査区外に含まれる。現状では、平面形は東西に長軸を持つ長方形であり、東西の長さ約2.5ｍ、南北約1.0ｍの規模を持つ。底面は西から東に向かってやや傾斜しており、東側の最も深いところでは、深さ約0.7ｍである。弥生土器・土師器・須恵器片が出土しているがいずれも小片である。

ＳＫ００６　ＳＫ005の南側約1.0ｍ離れてほぼ並行に位置する。東端部はＳＢ016によって切られ、西端部はＳＢ015と重複し

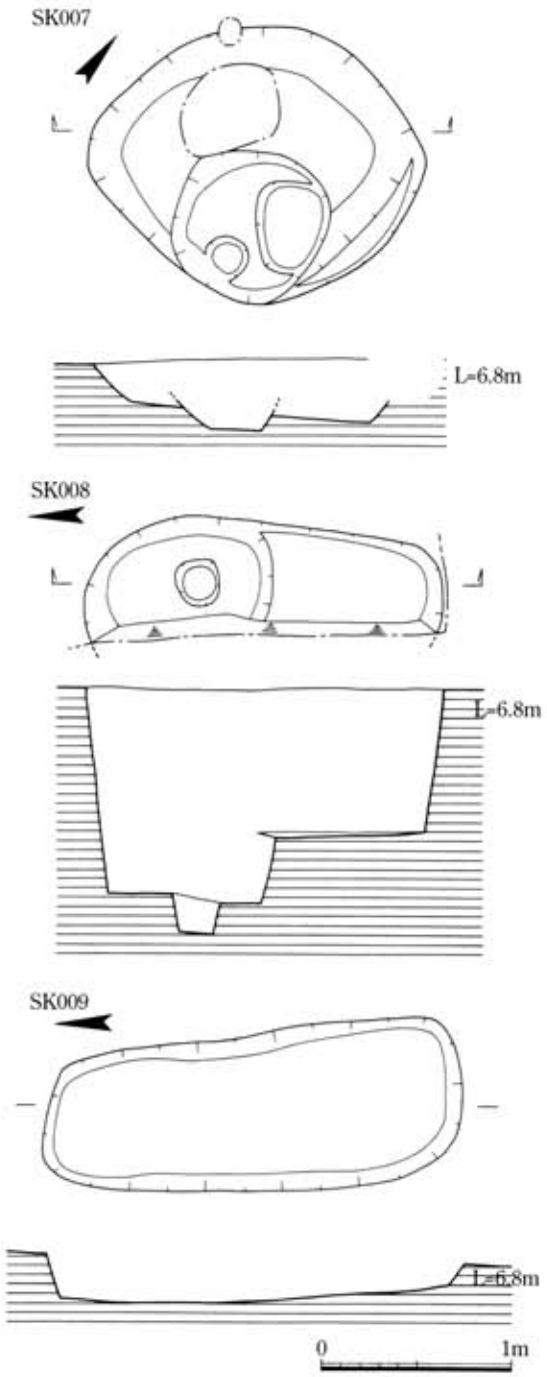


Fig.58　ＳＫ007・008・009土壙（1/40）

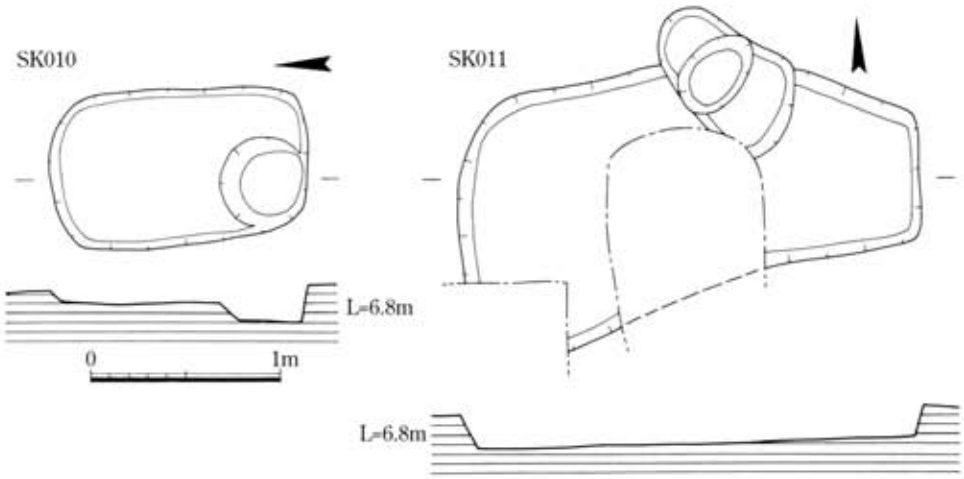


Fig.59　ＳＫ010・011土壙（1/40）

ており新旧関係は不明である。平面形は東西に長軸を持つ長方形をなしており、長軸2.5ｍ、短軸1.1ｍの規模を持つ。断面形は、ほぼ東側半分が一段下がる段構造をなし、段部には径0.4ｍ、深さ0.2ｍの段堀りの小穴を持つ。土壙の段部までの深さは約0.45ｍ、底面までの深さは約0.6ｍである。須恵器坏身の小片が１点出土している。

ＳＫ００７　調査区中央のやや南よりに位置する。平面形は北東ー南西方向に長軸を持つ楕円形であり、長軸1.8ｍ、短軸1.5ｍの規模を持つ。断面形は南西から北東に向かって傾斜しており、北東隅では深さ0.3ｍである。埋土中から平安時代後期の土師器皿・椀及び瓦器椀が出土しており、いずれも残存状況は良好で、遺構に伴うものと考えられる。

ＳＫ００８　調査区南西隅、ＳＫ002の西側に接する。遺構の西側は削平されて既に失われており、残存部分から平面形を推測すると南北に長軸を持つ楕円形と考えられる。南北1.9ｍ、東西の残存長は0.65ｍである。断面形は北側半分が一段下がる段構造をなし、段落ち部分のほぼ中央には深さ0.2ｍ程度の小穴を持つ。土壙の段部までの深さ約0.8ｍ、底面までは約1.1ｍである。形態より竪穴住居等の柱穴の可能性がある。

ＳＫ００９　調査区中央のやや東よりに位置し、ＳＢ012の南壁を切る。平面形は南北に長軸を持つ隅丸の長方形であり、長軸2.2ｍ、短軸は南側が約0.9ｍ、北側が約0.7ｍと北側がやや狭く、深さは約0.2ｍである。形態から土壙墓の可能性がある。

ＳＫ０１０　ＳＫ009の南東側に位置し、ＳＫ011を切る。南北に長軸を持つ隅丸長方形の平面形をなし、南西側に直径約0.5ｍの小穴を持つ。長軸1.4ｍ、短軸0.85ｍ、深さ約0.1ｍ、小穴の底面までは約0.2ｍである。鎌倉時代の瓦器椀４点(内１点は完形)、土師器鍋１点が出土している。ＳＫ009と主軸方向がほぼ等しく、同様に土壙墓の可能性が考えられる。

ＳＫ０１１　ＳＫ010によって切られ、遺構の南西隅が一部調査区外に含まれる。平面形は東西に長軸を持ち、西側がやや幅広になる歪な長方形をなす。長軸2.5ｍ、短軸は西側で約1.4ｍ、

東側で約0.8m、深さは約0.2mである。

(2) 遺　物

吉野ヶ里地区Ⅴ区における出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器の他、砥石等の石器、ガラス小玉がある。出土した土器片は量にして約コンテナ20箱分であるが、ほとんどが小片及び細片で図示できるものは少ない。時期的には、弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代後期～鎌倉時代の大きく三時期に区分される。

①土壙出土遺物(Fig.60,61)

ＳＫ００１出土遺物　弥生土器の小片が２点出土している。１は壺の底部と思われる。外面をヘラ状工具によるナデを行う。２は甕の口縁部。くの字形に屈曲し、口径に比して肩部の張りが大きい。

ＳＫ００４出土遺物　弥生土器の甕が１個体、鉢が３個体出土している。各個体とも全形の3/4程度遺存していた。５は小型の甕。外反する口縁を持つもので、外反の度合いは大きく、逆Ｌ字形口縁に近い。底部は平底で若干のくびれを持つ。３・４・６は鉢。３は若干小型で緩やかに外反する口縁をなす。４・６は強く外反する口縁と膨らみぎみの胴部を持つものである。６は底部が若干すぼまり、底面は僅かに上げ底になる。

ＳＫ００５出土遺物　弥生土器の壺の口縁部片１点、土師器甕・甑の把手・手づくね土器各１点、須恵器甕の小片が１点出土している。９は袋状口縁壺の口縁部片。８は緩く外反する口縁を持つ土師器の甕である。11は土師器甑あるいは甕の把手。10は須恵器甕の頸部である。外器面はカキ目調整、内器面は横ナデ。12は手づくね土器。内面に指押さえの痕跡を残す。

ＳＫ００６出土遺物　須恵器坏身と思われる小片(12)が１点出土している。立ち上がりがやや内傾し、口唇部には不明瞭ながら段を有する。

ＳＫ００７出土遺物　土師器小皿が８個体、椀が１個体、瓦器椀が１個体出土している。13～20は土師器の小皿。13・14・16・17は口径の平均8.2cm(7.8～8.6cm)、器高の平均0.88cm(0.85～0.95cm)、底径6.3cm。19は口径9.1cm、器高1.2cm、底径7.3cm、20は口径13.0cm、器高2.1cm、底径9.8cm。15・18は底部が若干丸みを帯びるもの。16は口径10.0cm、底径8.0cm、器高1.8cm、19は口径9.2cm、底径7.0cm、器高1.8cm。土師皿はすべて底部はヘラ切り離しで、16・19は底面に板状圧痕が認められる。21は土師器の椀。器高の割に口径が大きく、高台は低い薄い。底部ヘラ切り、口径は17.0cm、底径8.2cm、器高は4.8cm。22は瓦器椀。底部から胴下半部にかけては内湾し、胴上半部から口縁にかけてはほぼまっすぐに立ち上がる。高台は断面三角形、黒化処理は外器面全体及び口縁部内器面に施される。口径は14.8cm、底径6.0cm、器高6.1cm。

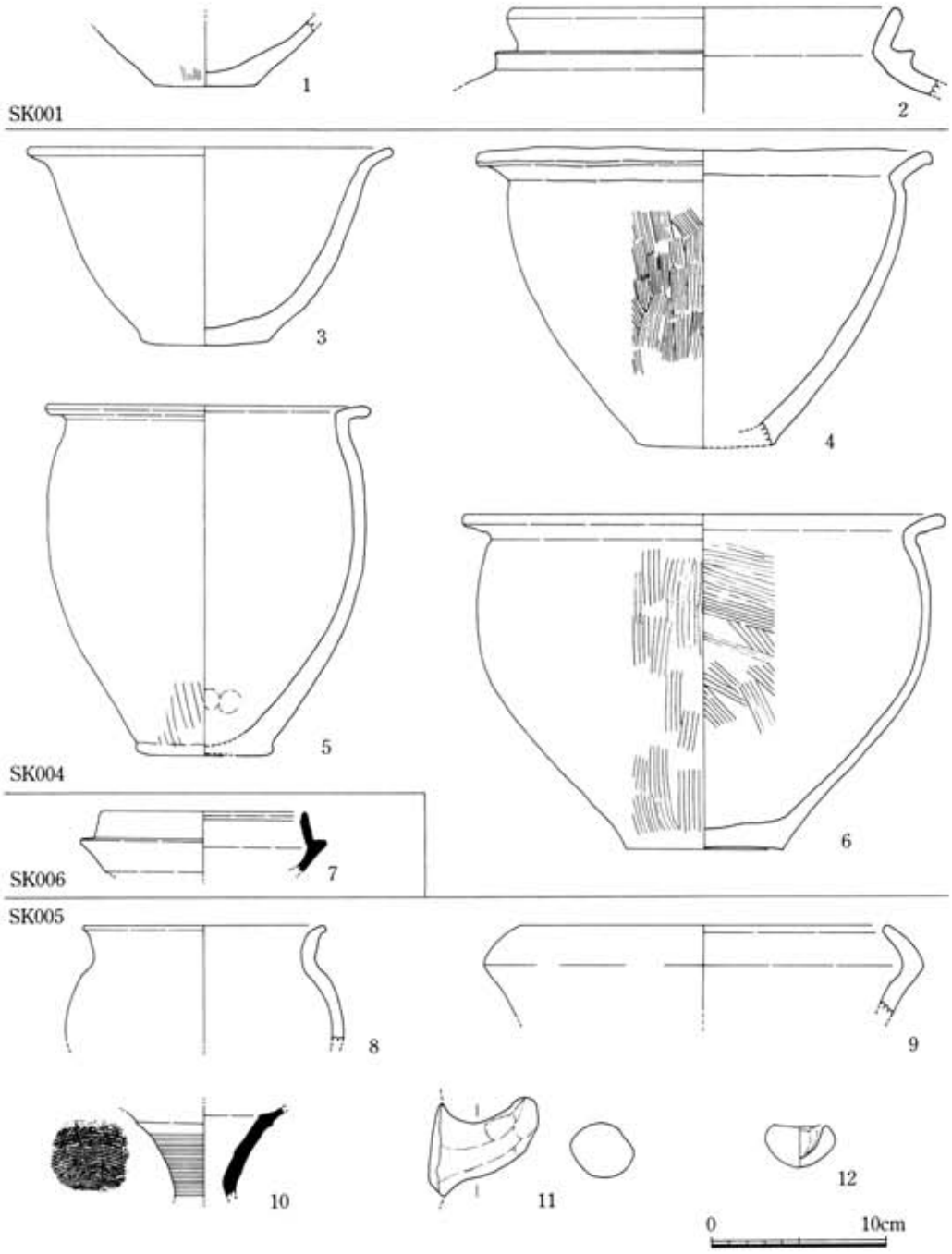


Fig.60　土壙出土遺物１（1/4）

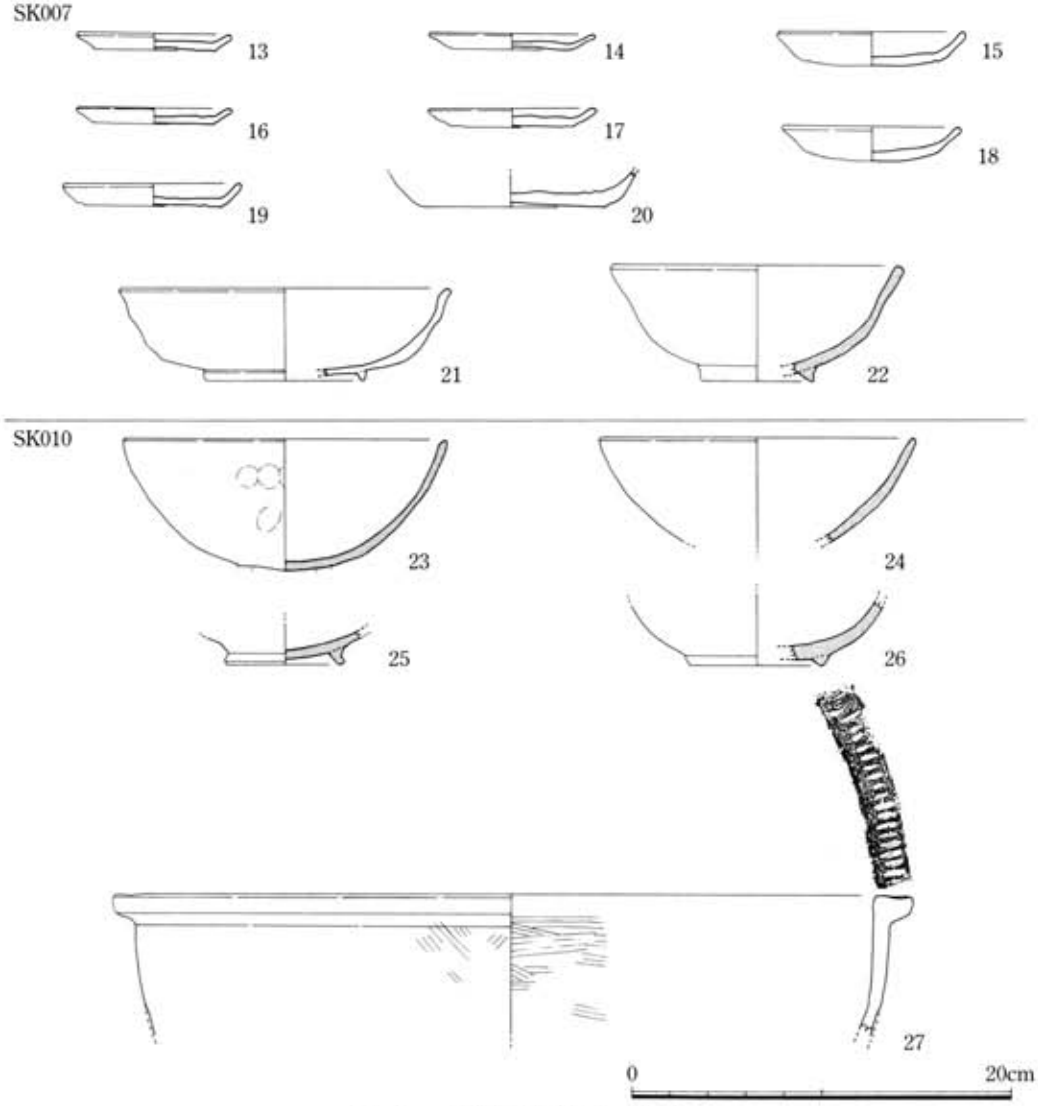


Fig.61　土壙出土遺物２（1/4）

ＳＫ０１０出土遺物　瓦器椀が４点、土師器鍋１点が出土している。23のみほぼ完形で他３点は小片である。23は底部から口縁部に向かって緩やかに湾曲する半球状の体部を持つものである。底部に外径5.0cm、内径4.0cm程の円形の黒変化した部分が認められ、高台の剥離痕と思われる。内器面底部付近、外器面口縁部の一部が黒変化する。口径17.2cm、器高7.0cm。24は同じく湾曲する体部を持つものであるが、24より若干口縁の開きが大きい。口径16.6cm。25・26は底部片。25は丸底の底部に外側に踏ん張りぎみの高台を持つもの、26は平底の底部に断面三角形の低い高台を持つものである。25は高台径6.0cm、26は高台径7.0cm、内器面に黒化処理を行う。27は土師器の鍋。口縁上部に植物の茎状のものによる押圧痕が残る。外器面は斜め方向、内器面は横方向のハケ目調整を行う。

②小穴出土遺物 (Fig.62,63)

小穴出土遺物について主なものだけ取り上げる。28～35は弥生土器。28は長頸の袋状口縁壺。頸部に断面三角形の突帯を張り付け、外器面には丹を塗布する。29・30・32・35は甕。29は屈曲する口縁を持ち、口縁上部はほぼ水平に近く、端部は若干垂れぎみになる。30は外反する口縁を持つもの。32は大型でくの字形口縁を持つもの。頸部に断面三角形の突帯を張り付け、胴部の膨らみは口径を若干上回る程度と考えられる。外器面に縦方向のハケ目調整を行う。36は甕の底部。底面はほぼ平底で僅かに凹面をなす。31・34は鉢。31は強く外反する口縁を持つもので、膨らんだ胴部から底部に向かってすぼまり気味になる器形と考えられる。内外器面ともにハケ目調整を行う。34は素口縁の鉢。33は壺の胴下半部。胴部の最大径に断面三角形の突帯を巡らす。底部は僅かにすぼまり、底面は平坦、内器面において胴部と底部の境に明瞭に稜を持つ。弥生土器はいずれも0.5～2.0mm程度の砂粒の混入が顕著であり、28・31以外にはかなりの雲母片が認められる。37は砂岩製の砥石。端部以外の各面を研磨面として用いている。

40～42・47・50～52・54・55・57は土師器。40～42は坏。40は体部から口縁部に向かって内湾するもの。口径12.2cm。41は口縁の立ち上がりが垂直になるもの、口径12.4cm。42は内傾するもので、立ち上がりは短い。口径13.0cm。47は高坏の坏部。器壁は薄く口径の割りに深い器形である。50は小型の甕。やや外傾する口縁をなし、胴部は膨らみを持たず直線的である。51・52は緩やかに外反する口縁と肩の張らない胴部を持つ壺。頸部から胴部中央にかけてはかなり直線的で、くびれ部分の内器面には明瞭な稜を持たない。いずれも器壁は厚く、胎土中に0.5～3.0mm程度の砂粒・小石と雲母片を多量に含む。54・55は小皿。54は口径9.2cm、器高1.4cm、55は口径8.4cm、器高1.1cm。共に褐色を呈し、底部はヘラ切り離しで55には板状圧痕が残る。胎土は精良だが雲母片が多く混入する。57は高台付きの椀。口縁はやや直線的に開くが、体部は緩やかに湾曲する。端部が内傾する断面三角形の低い高台を持つ。口径は16.5cm、器高は6.2cm。小皿同様、精良で雲母片を多く含む胎土である。

43～46は須恵器。43～45は坏蓋で、43は口縁部と体部との境に沈線を持つもの、44は段を持つもので、44は口縁端部の内器面にも段を有する。45は口縁部と体部との境がより不明瞭になったもので、天井部は全体の2/3程度をヘラケズリする。それぞれ、43は口径11.4cm、44は口径10.6cm、45は口径11.6cm、器高3.8cm。46は坏身あるいは高坏の坏部。口縁部はやや内傾しつつ直線的に立ち上がり、端部に平坦面を持つ。口径11.2cm。

56は瓦器の小皿。底部は糸切り後、ナデを行う。口縁端部の内外器面のみ黒化処理を施す。口径9.4cm、器高2.0cm。58～60は瓦器椀。58・60は底部から口縁部にかけて湾曲する体部を持ち、外側に踏ん張りぎみの高台を貼り付ける。60は底部の内外器面以外に黒化処理を行う。59の高台径6.2cm、60は8.3cm。58は体部と底部との境が若干明瞭であり、口縁端部が僅かに外側へ折れるもの。口径15.5cm、高台径5.6cm、器高5.2cm。

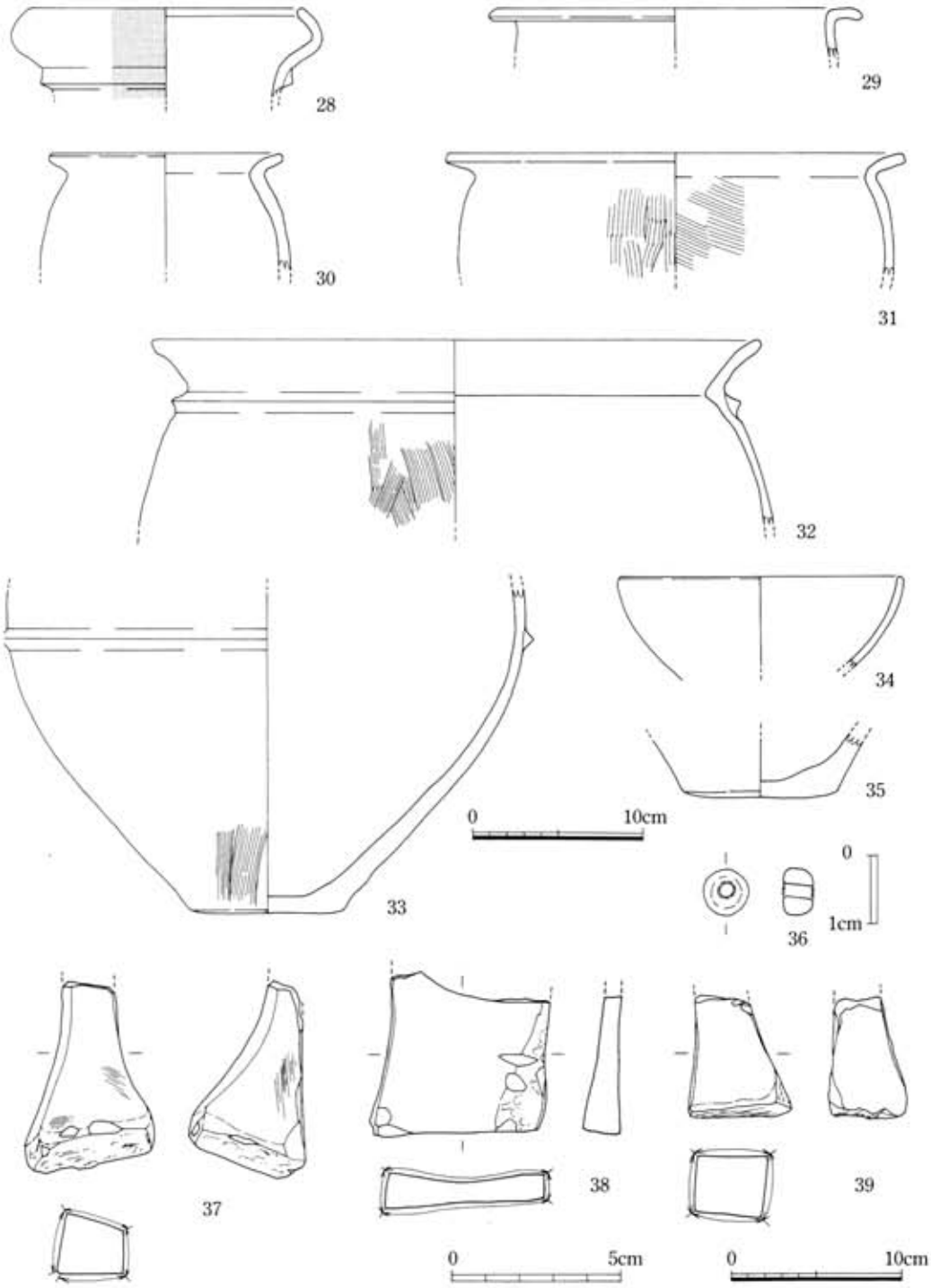


Fig.62　小穴及び検出面出土遺物（36は1/1、37・38は1/2、他は1/4）

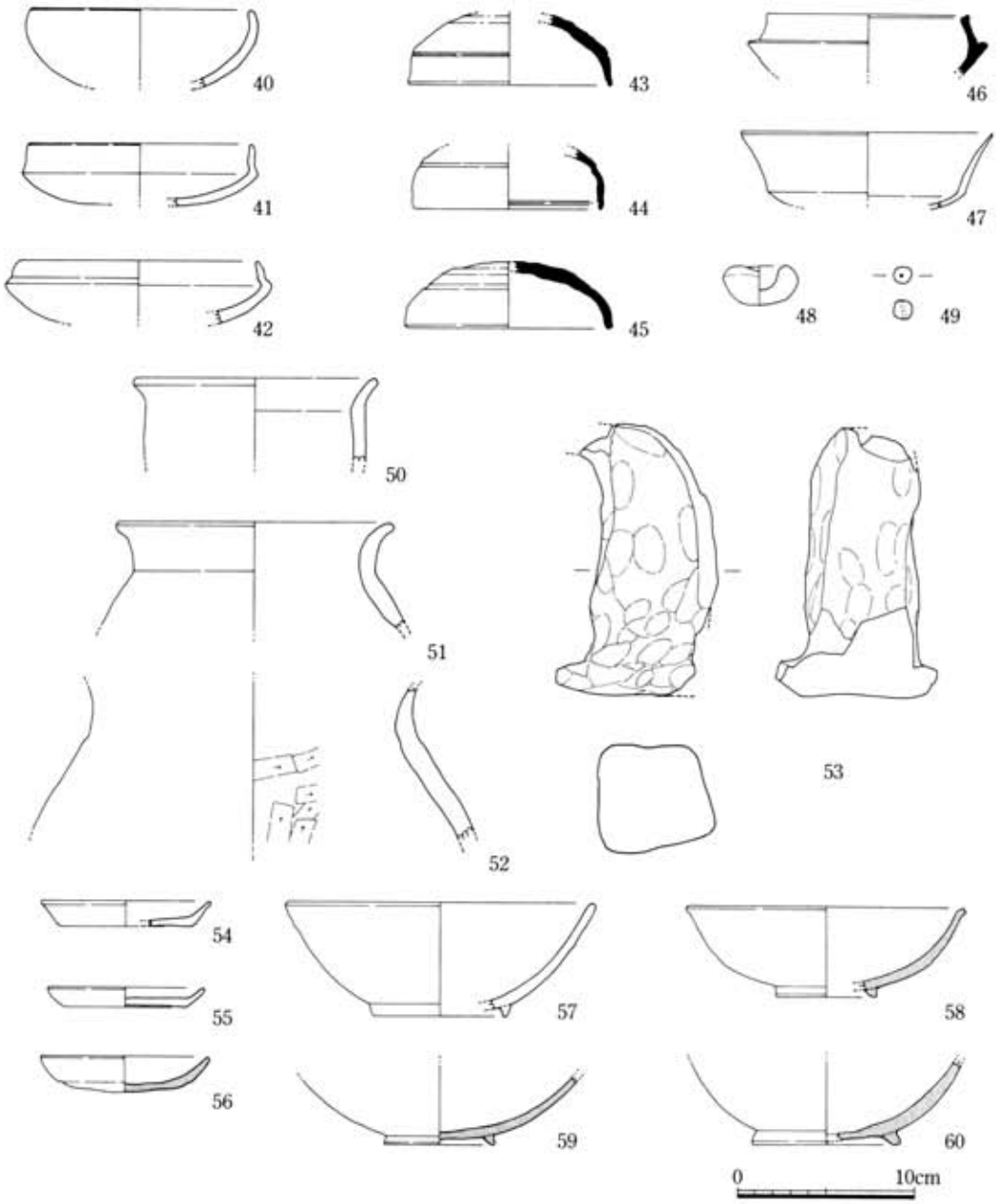


Fig.63　小穴出土遺物（1/4）

48は手づくねのミニチュア土器。49は土製丸玉。球形というよりもむしろ円筒形に近い。褐色を呈し、直径1.0cm程度。53は支脚。先端が折れ曲がる断面方形の支柱に、方形の粘土板を貼り付けて土台としている。大きめの粘土塊をつなぎ合わせて成形されているが、剥離痕が明瞭に残り、やや無造作な造りである。橙褐色を呈し、強い火を受けたような色調の変化等は認められない。高さ約15.0cm、土台部分の一辺は約8.5cm。

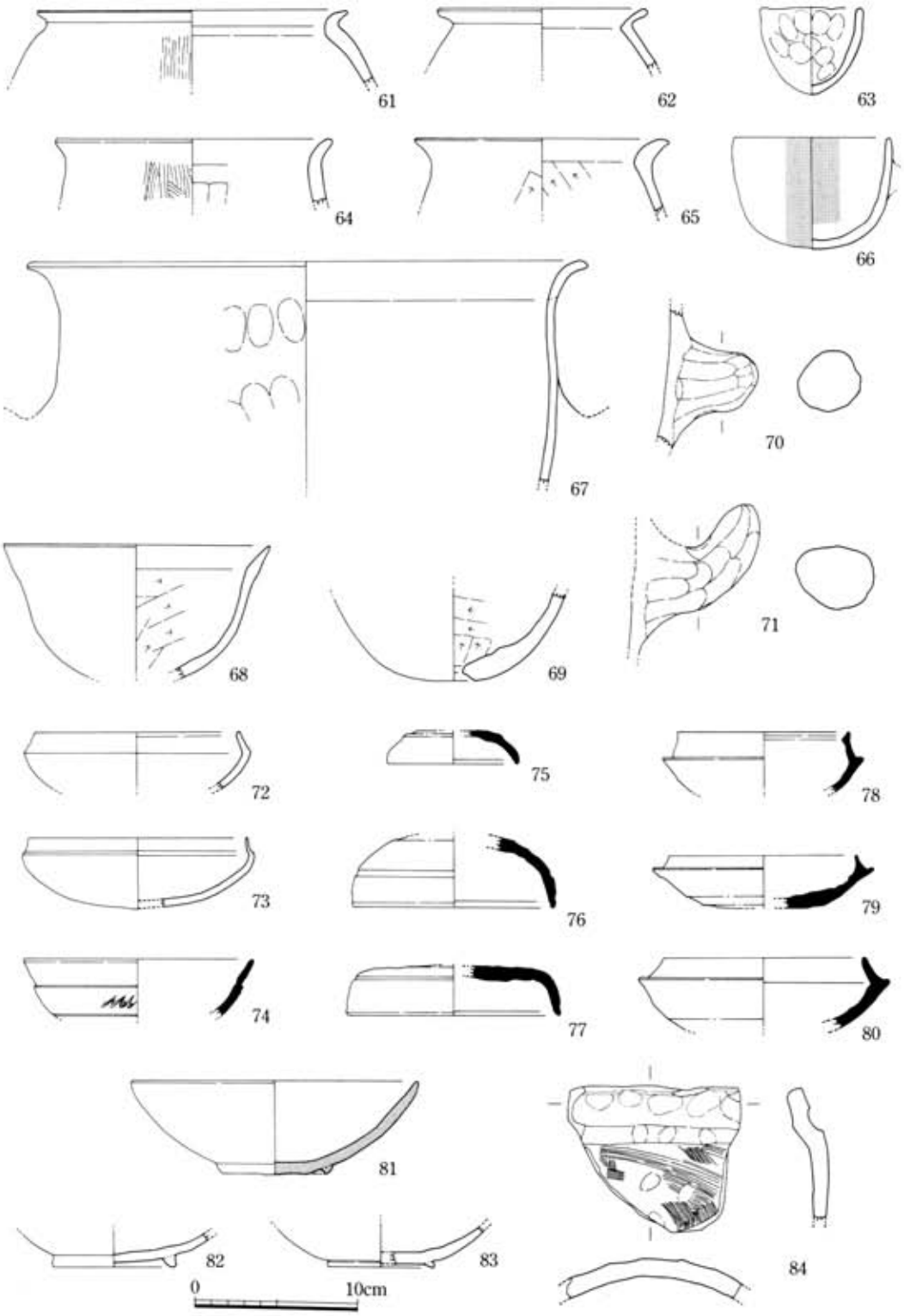


Fig.64　検出面出土遺物（1/4）

③検出面出土遺物（Fig.62,64）

61・62・63は弥生土器。61は短く屈曲する口縁と強く張る肩を持つ甕。胎土は緻密でかなり重量感がある。62はくの字形口縁を持つ甕。63は鉢。手づくね風で内外器面に指頭による圧痕が明瞭に残る。

64～73、82は土師器。64・65は甕で、64は口縁部が短く緩やかに外反するもの、65は内器面に稜を持って屈曲ぎみに外反するものである。66は椀形をなすもの。胴部上位の一か所に、径1.5cm程度の円形に粘土を貼り付けた痕跡が認められる。反対側が若干欠損しているため、対になっていたかどうかは明らかではないが、おそらく片側のみに貼り付けていたものと思われる。小石は若干量混入するものの、胎土は精良で内外器面に丹を塗布する。67・69～71は甑。67は口縁部から胴部にかけての部分。口縁は緩やかに外反し、胴部はほとんど張らない。79は底部片で、一ヶ所のみ穿孔が施される。70・71は把手。共に内器面は縦方向のヘラケズリを行う。68は内器面に稜を持って僅かに外反する鉢。土師器甕・甑・鉢の胎土については、67・68・69・71が0.5～3.0mm程度の砂粒・小石を多量に含み、相当量の雲母片を混入する一方、64・65・70は若干の小石を含むのみで、精良かつ緻密な胎土を持ち、重量感がある。72・73は坏身。72は立ち上がりが内傾し口縁部と体部の境に稜を持つもの、73は立ち上がりがほぼ垂直になり口縁部と体部との境に段を持つものである。72は口径12.5cm、73は口径13.5cm。82・83は椀の底部。共にヘラ切りで高台の退化が著しい。82は高台径7.4cm、83は高台径6.4cm。

74～80は須恵器。74は高坏の坏部で、外器面の口縁部下に段を持ち、体部に櫛描文を施す。口径14.0cm。75は短頸壺の蓋か。口径10.0cm。76は坏蓋。口縁と体部の境に凹線を持ち、口唇部内器面には不明瞭ながら段を有する。口径12.0cm。77は短頸壺の蓋であろう。天井部は平坦でほぼ全面にヘラケズリが施される。口径13.0cm。78～80は坏身。78は立ち上がりが内傾しつつ直線的にのびるもので、口唇部に平坦面を持つ。口径10.3cm。79は立ち上がりが短く断面三角形になるもの。口径11.5cm、器高2.2cm。80は立ち上がりが強く内傾し、かつ長くのびるもの。口径12.1cm。

81は瓦器椀。体部は緩やかに湾曲、高台は断面三角形で著しく退化しており、底部底面自体が接地している。底部ヘラ切り、口径17.0cm、器高5.8cm、高台径6.3cm。84は瓦か。内外器面共に斜め方向のハケ目調整を行う。黒褐色を呈する。

この他、石器・ガラス製品が出土している。36はガラス製の小玉。明るい青色を呈し、径約6.0mm、厚さ4.5mm。38・39は砥石、38は薄手で板状をなす。残存長4.0cm、最大幅6.0cm、最大厚1.1cm。39は残存長6.9cm、最大幅5.9cm、最大厚3.6cm。

Fig-図番号	PL番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
60-1		93002188	SK001	弥生土器	壺		(5.8)	(5.4)	砂粒多	橙色	ヘラナデ	ナデ
2		2187	〃	〃	〃	(21.6)	(4.9)		〃	黄橙色	ナデ	〃
3	17-14	2184	SK004	〃	鉢	(20.2)	11.4	7.2	〃	〃	〃	〃
4	17-15	2185	〃	〃	〃	25.0	(16.9)	7.8	〃	〃	ハケメ	〃
5		2186	〃	〃	甕	(18.6)	20.0	7.7	〃	橙色	ハケメ・ナデ	〃
6	17-16	2183	〃	〃	鉢	(27.0)	19.0	8.9	〃	〃	ハケメ	ハケメ
7		2201	SK006	須恵器	坏身	(11.5)	3.5		細砂粒多	灰白色	ナデ	ナデ
8		2202	SK005	土師器	甕	(14.0)	(6.7)		雲母・小石・雲母多	橙色	〃	〃
9		2189	〃	弥生土器	壺	(21.0)	(5.2)		砂粒多	〃	〃	〃
10		2250	〃	須恵器	甑		(5.2)		〃	灰色	カキメ	ナデ
11		2203	〃	土師器	甑	—	—	—	〃	橙色	ナデ	〃
12		2190	〃	〃	鉢	2.9	2.4		細砂粒多	黄橙色	〃	〃
61-13		2206	SK007	〃	小皿	(7.8)	0.85	(6.3)	細砂粒少	〃	〃	〃
14		2204	〃	〃	〃	(8.5)	0.85	(6.2)	〃	〃	〃	〃
15		2210	〃	〃	〃	(9.5)	1.75	(8.0)	〃	〃	〃	〃
16		2207	〃	〃	〃	(7.8)	0.85	(6.3)	〃	〃	〃	〃
17		2205	〃	〃	〃	(8.6)	0.95	(6.3)	〃	〃	〃	〃
18		2209	〃	〃	〃	(8.8)	1.8	(7.2)	〃	〃	〃	〃
19	17-10	2208	〃	〃	〃	9.1	1.2	7.3	〃	〃	〃	〃
20		2211	〃	〃	〃	(13.0)	(1.9)	9.8	〃	〃	〃	〃
21		2212	〃		椀	(17.0)	4.8	(8.2)	〃	〃	ナデ	ナデ
22		2213	〃	瓦器	〃	(14.8)	6.1	(6.0)	〃	灰白色	〃	不明
23		2214	SK010	〃	〃	17.2	(7.0)		〃	灰白色・黒褐色	〃	ナデ
24		2215	〃	〃	〃	(16.6)	(5.4)		〃	〃	〃	〃
25		2216	〃	〃	〃		(1.9)	6.0	〃	灰白色	〃	〃
26		2217	〃	〃	〃		(3.5)	7.0	〃	灰白色・黒褐色	〃	〃
27		2218	〃	土師器	鍋	(42.5)	(7.4)		砂粒多	黒褐色・黄橙色	ハケメ	ハケメ
62-28		2304	P－244	弥生土器	壺	(16.0)	(5.3)		〃	黄橙色	不明	不明
29		2195	P－61	〃	甕	(22.0)	(3.0)		〃	〃	ナデ	ナデ
30		1925	P－244	〃	〃	(13.8)	(7.1)		〃	橙色	不明	不明
31		2193	P－61	〃	鉢	(27.0)	(7.2)		〃	〃	ハケメ	ハケメ
32		1923	P－254	〃	甕	(36.0)	(11.0)		〃	黄橙色	〃	ナデ
33		2308	P－317	〃	壺		(18.9)	9.0	〃	〃	ハケメ・ナデ	〃
34		2301	P－197	〃	鉢	(16.8)	(5.6)		〃	橙色	ハケメ	不明
35		1924	P－284	〃	甕		(4.0)	(9.0)	〃	〃	ナデ	ナデ
63-40		2332	P－219	土師器	坏	(12.2)	(4.3)		〃	〃	〃	〃
41		2331	P－208	〃	坏身	(12.4)	(3.4)		砂粒少	黄橙色	ナデ	ナデ
42		2332	P－31	〃	〃	(13.0)	(3.5)		細砂粒多	橙色	〃	〃
43		2249	P－276	須恵器	坏蓋	(11.4)	(4.0)		〃	灰白色	〃	〃

Tab.6　出土土器観察表1

※法量のうち、口径・底径の（　）は復元値を、器高の（　）は残存値を示す。

Fig-図番号	PL番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
44		93002243	P－205	須恵器	坏蓋	(10.6)	(3.3)		細砂粒少	灰白色	ナデ	ナデ
45		2247	P－234	〃	〃	(11.6)	3.8		〃	暗灰白色	〃	〃
46		2244	P－218	〃	坏身	(11.2)	(3.3)		〃	灰白色	〃	〃
47		2305	P－205	土師器	高坏	(14.0)	(4.2)		〃	黄橙色	〃	〃
48		2328	P－175	〃	鉢	2.0	2.2		〃	褐色	〃	〃
50		2324	P－82	〃	甕	(13.5)	4.6		砂粒多	〃	〃	〃
51		2326	P－86	〃	壺	(15.5)	5.9		砂粒・小石・雲母多	橙色	ナデ	ヘラケズリ・ナデ
52		2333	P－219	〃	〃		(8.7)		〃	〃	〃	〃
53		2306	P－87	－	支脚	－	14.9		細砂粒多	〃	〃	ナデ
54		2327	P－129	土師器	小皿	(9.2)	1.4	(7.2)	細砂粒・雲母多	褐色	〃	〃
55		2329	P－192	〃	〃	(8.4)	1.1	(6.6)	〃	〃	〃	〃
56		2246	P－220	瓦器	〃	(9.4)	2.0	(6.6)	細砂粒少	灰褐色	〃	〃
57		2242	P－192	土師器	椀	(16.5)	6.2	(7.1)	細砂粒・雲母多	淡褐色	〃	〃
58		2248	P－274	瓦器	〃	(15.5)	5.2	(5.6)	細砂粒少	灰褐色	〃	〃
59		2241	P－192	〃	〃		(3.9)	(6.2)	〃	〃	〃	〃
60		2245	P－219	〃	〃		(4.8)	(8.3)	〃	〃	〃	〃
64-61		1922	B－6区	弥生土器	甕	(19.0)	(4.6)		細砂粒多	褐色	ハケメ	〃
62		2192	A－7区	〃	〃	(13.0)	(3.7)		〃	淡褐色	ナデ	〃
63		2220	〃	〃	鉢	(6.2)	5.3		〃	灰褐色	〃	〃
64		2317	B－4区	土師器	甕	(17.0)	(4.0)		小石少	橙色	ハケメ	ヘラケズリ
65		2309	A－4区	〃	〃	(16.0)	(4.6)		〃	〃	ヘラケズリ	〃
66	17-12	2223	－	〃	椀	(9.3)	6.8		砂粒・小石少	橙色・黄橙色	不明	不明
67		2321	B－8区	〃	甑	(34.5)	(13.7)		砂・小石・雲母多	橙色	ナデ	ヘラケズリ
68		2319	B－7区	〃	鉢	(16.5)	(8.2)		〃	〃	〃	〃
69		2315	B－3区	〃	甑		(5.4)		〃	〃	不明	〃
70		2316	B－4区	〃	〃	－	－		小石少	〃	ナデ	ナデ
71		2322	B－8区	〃	〃	－	－		砂・小石・雲母多	黄橙色	〃	〃
72		2314	B－3区	〃	坏身	(12.5)	(3.5)		細砂粒少	橙色	〃	〃
73		2312	〃	〃	〃	(13.5)	(4.2)		〃	黄橙色	〃	〃
74		2352	－	須恵器	高坏	(14.0)	(3.5)		〃	暗灰色	〃	〃
75		2236	B－8区	〃	蓋	(10.1)	2.1		〃	黄褐色	〃	〃
76		2198	A－6区	〃	坏蓋	(12.0)	4.3		〃	暗灰色	〃	〃
77		2197	A－5区	〃	蓋	(13.0)	3.0		〃	〃	〃	〃
78		2227	B－3区	〃	坏身	(10.3)	3.8		〃	〃	〃	〃
79		2239	C－6区	〃	〃	(11.5)	2.2		〃	〃	〃	〃
80	17-11	2199	A－7区	〃	〃	(12.1)	(4.4)		〃	灰褐色	〃	〃
81		2221	〃	瓦器	椀	(17.0)	5.8	(6.3)	〃	灰白色	〃	〃
82		2232	B－6区	土師器	〃		2.1	7.4	〃	褐色	〃	〃
83		2231	B－4区	〃	〃		2.6	6.4	〃	黄橙色	〃	〃

Tab.6　出土土器観察表２

Fig-図番号	PL番号	県遺物登録番号	出土地点	器種	材質・胎土	法量(cm)	色調	調整その他
62-36	17-18-1	95002027	A－7区	小玉	ガラス製	径0.62、厚さ0.43	青色	－
63-49	17-18-2	93002222	P－267	丸玉	土師質、細砂粒多	径1.0、厚さ1.0	黄橙色	－
64-84	17-13	2237	C－6区	瓦	瓦質、砂粒多	長さ(9.0)、幅(10.5)、厚さ1.1	黒褐色	内・外器面ともにハケメ

Tab.7　出土土製品・ガラス製品観察表　　（　）は残存値を示す。

Fig-図番号	PL番号	県遺物登録番号	出土地点	器種	法量(cm)	重量(g)
62-37		95002026	P－178	砥石	長さ(5.8)、最大幅3.8、最大厚3.3	57.7
38		93002318	B－6区	〃	長さ(4.0)、最大幅6.0、最大厚1.1	40.4
39	17-17	2320	B－7区	〃	長さ(6.9)、最大幅5.9、最大厚3.6	211.5

Tab.8　出土石製品観察表　　（　）は残存値を示す。

Ⅳ．結語

吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区における調査結果について以下のようにまとめる。

［吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区］ 吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区における遺構・遺物は、時期的に大きく弥生時代中期～後期、奈良時代の２時期に分けられるが、そのほとんどは弥生時代の遺構によって占められる。弥生時代の遺構には、溝３条・墳墓15基・住居址１軒・土壙３基があり、この他奈良時代の遺構として土壙１基が、また時期不明の溝１条がある。

溝　溝にはＳＤ035・036・040・052がある。この内、ＳＤ035・040は神埼工業団地開発に係わる調査で検出されたＳＤ0653・0651に相当し、二か所の出入り口を持つ一連の溝と考えられる。溝の掘削時期については、ＳＤ040が掘削時に中期中頃の甕棺墓を破壊していることより少なくとも中期後半以降と考えられる他、出土遺物の時期幅、あるいはこの甕棺墓を含む列埋葬墓群が弥生後期前半の三津式の段階まで営まれる点などより、後期前半と考えるのが適当と思われる。一方、埋没時期についてであるが、出土した多量の弥生土器が、掘削時の混入と思われるものを除けば概ね後期前半～後半の範疇に収まり、後期後半の内には埋没したものと推測される。ＳＤ035・040の性格については、同時期に存在していたと思われる環濠ＳＤ0602の南東側出入り口を防御することを目的としていたと考えられている[1]。このことは、環濠ＳＤ0602がほぼ後期後半を境に環濠ＳＤ0601へと取って替わられるのと同じく、ＳＤ035・040に替わり同様に二か所の出入り口を持つＳＤ0650が新たに掘削されることからも窺え、環濠と一連のものとして機能していた可能性が高い。ただ、吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区の南側については確認調査のみしか行っていないため、現段階では可能性を指摘しておくに止めたい。なお、ＳＤ040の出土遺物の中で特筆すべきものとして、口縁部に五条の凹線文を持つ二重口縁壺(44)がある。

口縁部の形態は瀬戸内海沿岸地域[2]のものと類似するが、頸部以下が検出されていないため、全体のプロポーションについては不明である。時期的には、口縁部の上下の拡張がよく発達している点から瀬戸内地域における弥生時代中期末～後期初頭に位置付けられるかと思われる。ただ、在地土器との共伴関係については、ＳＤ040の出土土器が弥生時代中期前半～後期後半の長い時期幅を持っているため、その時期を特定できない。胎土は肉眼観察においては在地のものとほとんど違いが認められず、搬入品とするよりも、在地で製作された可能性が高いと思われる。佐賀平野においては弥生時代後期終末～古墳時代初頭にかけ城原川・田手川下流域を中心として、瀬戸内系土器が畿内系、東海系、山陰系の土器と共に認められるようになり[3]ひとつの画期としてとらえられているが、弥生時代中期から後期初頭まで溯るものとしてはこの他に吉野ヶ里段丘西方約1.7kmに位置する神埼町川寄吉原遺跡[4]出土の凹線文を持つ甕（中期末～後期初頭）が、また南方5kmに位置する千代田町託田西分貝塚[5]では内面ヘラ削りを施す甕

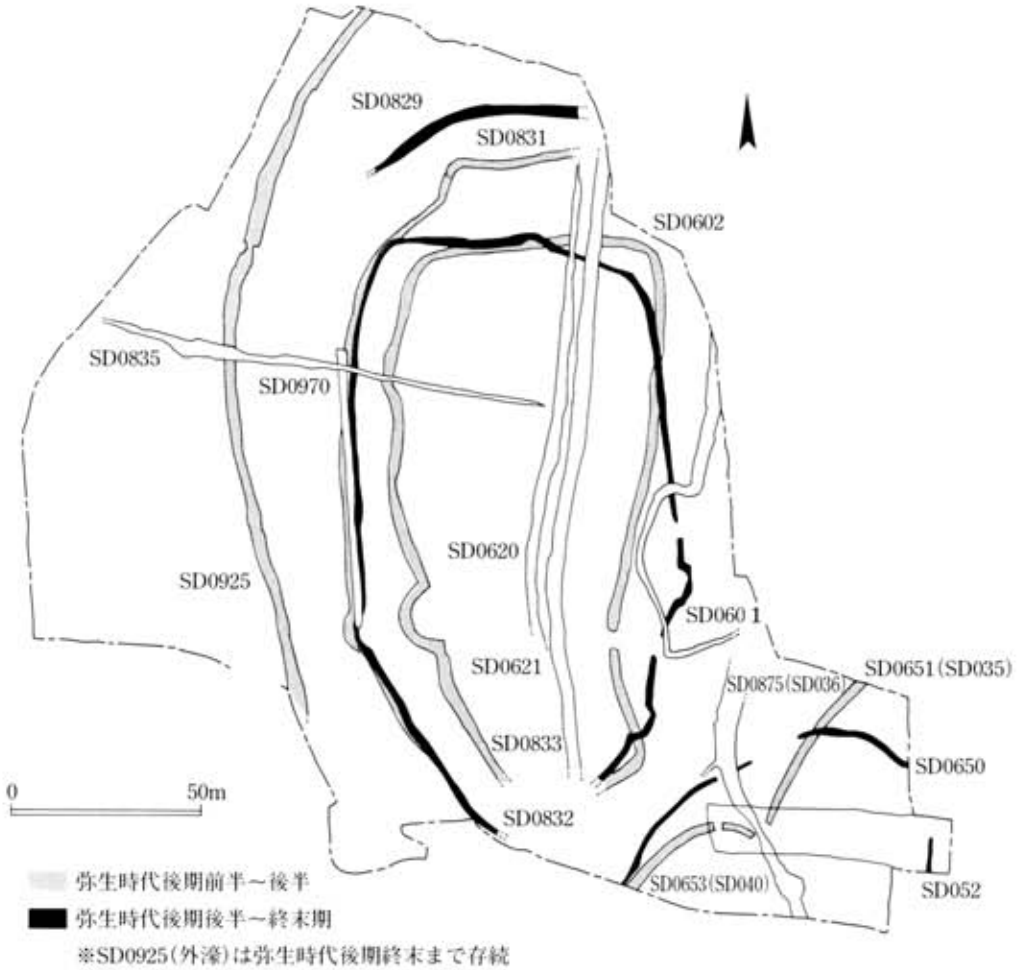


Fig.65　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区溝遺構配置図

(中期中頃)が出土している。川寄吉原遺跡・託田西分貝塚もまた、大きくは吉野ヶ里遺跡と同じ城原川・田手川流域の範疇と考えられ、当該流域が弥生時代後期終末以前から瀬戸内地域と何らかの接触があったことの示唆と言えよう。

弥生時代の溝跡としてはこの他ＳＤ052が挙げられる。埋土中から出土した弥生土器は、概ね後期後半～終末に位置付けられ、ＳＤ035・040より時期的に新しい。調査区内で検出された部分が短いため、その性格については明らかにし難いが、規模・断面形・出土遺物の時期幅などから、工業団地調査区におけるＳＤ0650へと連続する可能性がある。

この他、時期不明の溝跡としてＳＤ036がある。幅は広いがかなり浅く、溝というより通路的な性格を持つものかもしれない。出土遺物は奈良時代から平安時代前期にあたるが、いずれも小片のため確実性を欠く他、工業団地調査区においても完掘はされておらず、時期について特定できるには至っていない。

墳墓　墳墓は甕棺墓12基・土壙墓３基・石蓋土壙墓１基が検出されており、全て弥生時代のものである。これらは吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区の北部から南端まで延々150ｍが検出されている列埋葬墓に含まれている。Fig.66は導水路調査区周辺で検出された甕棺墓・土壙墓の分布状況であるが、墳墓群が南北方向を主軸として帯状に並んでいるのが窺える。この内、導水路調査区内で検出された墳墓群は、平面分布上ではＳＤ040の西側の陸橋部を挟んで西側のグループと東側のグループに二分される。西側のグループは導水路調査区外の２基を加えた９基からなり、これらには、墓列に沿った主軸を持つ

Fig.66　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区調査区周辺甕棺墓・土壙墓配置図

もの3基、直交する主軸を持つもの5基の他、斜め方向に埋置されるものが1基があり、墓壙同志を切り合う程近接している。一方、東側のグループは甕棺墓4基、土壙墓3基の他、甕棺墓の墓壙と思われる土壙2基もこのグループに含まれよう。これらは甕棺墓1基(ＳＪ044)以外は南北方向に主軸を持ち、列状に配置されている。Fig.7によればこのグループはさらに南方へと続いており、密集して一群をなす西側のグループとは分布状況が異なる。また、甕棺墓の時期については、西側のグループは汲田式期(弥生時代中期前半)の古段階・新段階の二時期に分けられ、古い段階のものは墓列に沿った主軸を持ち、新しいものは墓列と直交するものが多くなる。一方、東側のグループは、墓列と主軸を同じくする4基の内、1基が中期初頭の城の越式期に、残り3基が汲田式期の古段階に、また墓列に直交する小児棺1基についてもほぼこれと同時期と考えられ、西側のグループに比べ、より古い様相を示す。このような帯状をなす甕棺墓群が幾つかの小グループに分けられる点、また墓列と同じ南北方向の主軸を持つものが中期前半の中でも古くに位置づけられ、また墓列と直交するものがより新しくなる点など、志波屋四の坪地区・吉野ヶ里地区Ⅰ～Ⅲ区の列埋葬との類似点が認められる一方、その分布状況は明確な二列埋葬とはならず規則性に乏しいと言える。この他、土壙墓については、甕棺墓との前後関係は明らかではないが、同様に列状をなすものの、形態的には中期後半以降の様相を呈しており、やや時期的な隔たりを持つものと考えられる。

住居跡・土壙　円形住居ＳＢ031は出土遺物は少ないものの、形態・規模から弥生前期末～中期前半と考えられる。当該期の住居はこの他、ＳＢ031の北側約30ｍに1基存在する以外は、吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区では検出されていない。弥生前期末～中期前半の集落は、志波屋四の坪地区・志波屋三の坪地区で10基前後が検出されている他は、1～4基程度の単位で丘陵上に散在することが多い。おそらく数軒程度のまとまりを一つの単位とし、その単位群を包括して広範囲な集落が形成されていたものと思われる。土壙の内、ＳＫ025・030は弥生時代の所産である。前者は出土遺物に時期幅があり確定的なことは言えないが、比較的の残存状況の良い壺(234)から判断すれば、後期前半に位置付けられよう。一方、後者は中期中頃と考えられ、埋土中から広口壺・高坏・筒型器台などの祭祀的な土器が出土している。同時期の列埋葬に伴う祭祀土壙と思われるが、その形態は溝状を呈しており、墓域を区画する溝としての性格も推定される。ＳＫ020は奈良時代のもので、8世紀後半に位置付けられる。このように平面円形・楕円形あるいは長方形を基調とし、完形品を含む比較的残りの良い土師器・須恵器を出土するこの種の土壙は、志波屋三の坪甲地区において180基あまりが検出されている。これらは奈良～平安時代初頭の所産であり、建物群とは別に群をなして密集するが、その性格については明らかではない。ただ、出土した土器は日常容器から硯・水滴などの文房具に至るまで多岐にわたり、生活用具の廃棄を目的としていた可能性が考えられる。

[吉野ヶ里地区Ⅴ区] 吉野ヶ里地区Ⅴ地区で検出された遺構・遺物は、大きく弥生時代中期末～後期初頭、古墳時代後期、平安時代後期～鎌倉時代の3時期に分けられる。しかし、検出された遺構のうち確実にこれに伴う遺物が検出されたものは限られており、時期的な位置付けが不明確なものが多い。

2間×2間の総柱を持つ掘立柱建物ＳＢ014・015・016は、ＳＢ014がやや柱穴掘り方が小さめではある点が指摘されるものの、掘り方の形態等には類似点が多い。また、掘り方の埋土中からは小片ではあるが古墳時代後期(6世紀代)の須恵器片が出土しており、柱穴の形態から見ても、当該期の所産と考えたい。2間×1間の掘立柱建物ＳＢ017については、出土遺物もなく、時期を特定することは困難である。しかし、ＳＢ016と主軸方位がほぼ等しく、その位置関係からもＳＢ016に付属する施設であったと考えたい。これら4基の前後関係については、ＳＢ016がＳＢ015を切っている点からＳＢ015→ＳＢ016・017となり、ＳＢ014についてはＳＢ015の主軸がほぼ等しいことより、併存はせずとも極めてそれと近い時期に位置付けられよう。竪穴住居ＳＢ012・013については、明確に遺構に伴う遺物がほとんどないため、形態等からしか時期については判断できない。ＳＢ013は、平面形がほぼ方形と推定され、住居の北壁に近接してかあるいは竈と思われる施設を備える四本柱のもので、出土遺物としては焼土中より土製支脚1点の他、土師器甑の小片が検出されているだけである。住居の形態等から推察すると、平面形・規模から古墳時代のものと思われ、より年代的な位置付けを述べるならば、調査区内から検出された遺物の時期幅より6世紀代と考えたい。一方、ＳＢ012も平面形は方形をなしているが、柱穴の配置は不明確で焼土等も検出されておらず、住居として使用されたかどうかも明らかでない。また、出土遺物も認められず、時期については不明である。

土壙は11基が検出されているが、時期が把握できるものとして、ＳＫ001が弥生時代後期前半、ＳＫ004が弥生時代中期末～後期初頭、ＳＫ005・006が古墳時代後期(6世紀後半)の所産である。また、ＳＫ007・ＳＫ010は平安時代後期～鎌倉時代に含まれ、より詳しく見るならばＳＫ007が12世紀前葉、ＳＫ010が13世紀前葉に位置付けられよう。この内、ＳＫ005・006は東西方向に並列する平面長方形の土壙で、形態から古墳時代の土壙墓の可能性がある。また、ＳＫ010はほぼ完形の瓦器椀を出土しており、同様に形態より鎌倉時代の土壙墓の可能性がある。これに加えて、遺物の出土は見ないものの、平面長方形を呈しＳＫ010と主軸方向を同じくするＳＫ009についても同様の性格を持つものであろう。この他、二段掘りを行うＳＫ001・003・008については、その形態から弥生時代の柱穴である可能性が高い。

以上、吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区の調査について概要を述べた。本報告は約60haに及ぶ吉野ヶ里遺跡群のほんの一部であり、その内容についても遺跡全体の分析が進められる中で再検討を要するものも多々あると思われる。特に2,200基以上に及ぶ甕棺墓は前期末の

金海式から後期前半の三津式までが確認されており、甕棺墓の一大集中域である、佐賀平野における甕棺編年の整理が待たれるところである。

註1）七田忠昭他『吉野ヶ里』神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　佐賀県教育委員会　1992

2）瀬戸内海沿岸域の中でも、どの地域のものと類似するのか筆者の怠慢・力量不足から特定できるには至っていない。川寄古原遺跡・託田西分貝塚出土の瀬戸内系土器も含めて、当該地の研究者の方々にご指導・助言を賜りたい。なお、吉備・讃岐地方における弥生土器の資料閲覧について、平井勝・宇垣匡雅(岡山県古代吉備文化センター)、山本悦世・松木武彦(岡山大学埋蔵文化財調査研究センター)、大久保徹也(財団法人香川県埋蔵文化財調査センター)の諸氏にお世話になり、記して感謝したい。

3）佐賀平野において弥生時代後期終末～古墳時代初頭の瀬戸内系土器として、城原川・田手川流域では、諸富町村中角遺跡(種浦　修『村中角遺跡』諸富町文化財調査報告書第2集　諸富町教育委員会　1985)で吉備系甕（酒津式）・鉢(才の町Ⅱ式)が、また、より東の寒水川流域の中原町原古賀三本谷遺跡(太田　睦『原古賀遺跡群(1)』中原町文化財調査報告書　中原町教育委員会　1990)で甕・特殊器台が出土している。

4）天本洋一『川寄古原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第61集　佐賀県教育委員会　1981

5）森田孝志・徳富則久『託田西分貝塚』千代田町文化財調査報告書第2集　千代田町教育委員会　1983

太田本村遺跡３区

遺跡名：太田本村遺跡３区［旧Ⅱ区］（略号ＯＨＭ－３）
所在地：佐賀郡諸富町大字大堂字太田

Ⅰ．遺跡の立地と環境

太田本村遺跡の所在する諸富町は、その全域が海抜4.0m以下の低平な沖積平野に含まれる。この沖積平野は、有明海の激しい干満差と、筑後川を始めとした河川によって運搬される土砂の堆積の連続によって形成された。現在の有明海のおおよその形は縄文時代中期(約4,000年前)の海退時にできたものであり、当時の海岸線は現在の海抜5.0m付近にあたる。弥生時代の初めには、海抜4.0m付近まで海岸線が後退し、その沿岸部には千代田町託田西分貝塚、三根町本分貝塚などが営まれている。

諸富町内において、現在までに確認された明らかな生活の痕跡は弥生時代後期中頃まで下るが、後期初頭まで溯る遺物も若干確認されている。おそらく当該期には、潮干帯に位置しつつも、河川による自然堤防上、あるいは有明海の大きな干満差によって形成された砂洲などの微高地上に居住域を見い出していたのであろう。昭和57年度より実施された農業基盤整備事業に伴う発掘調査では、徳富権現堂遺跡(4)・村中角遺跡(5)・唐人廟遺跡(6)・畑田遺跡(7)・三重礫ノ木遺跡(8)・土師本村遺跡(9)などの各遺跡で弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落の存在が明らかとなっている。これらの各遺跡では在地系土器に伴って、庄内～布留式期の畿内系土器の他、瀬戸内系・山陰系などの外来系土器が多く出土しており、内陸部の集落に較べ当該地との接触が活発であったことを示している。

古墳時代中期から後期にかけては遺跡の分布は希薄となる。このうち、集落としては村中角遺跡・太田本村遺跡１区(2)・畑田遺跡などで当該期の土壙・井戸が確認されているに過ぎないが、墳墓としては６世紀後半～７世紀にかけて石塚１号墳・２号墳(10)が築かれる。これらは標高約3.0mの微高地上に立地しており、特に石塚１号墳からは挂甲１領分の他、剣菱形杏葉などの豊富な馬具類、蓮華文を持つ金銅製装飾品など、豊富な副葬品が出土している。

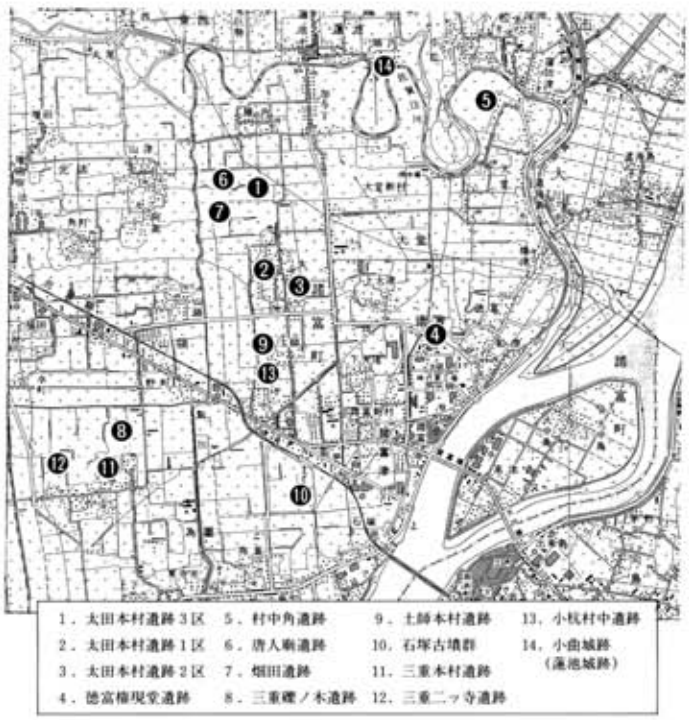


Fig.1　周辺遺跡分布図（1/50,000）

奈良時代には肥前国府の海上交通の窓口として、諸富町内に「大津」が置かれる。この時期の遺構・遺物は、村中角遺跡・三重本村遺跡(11)・三重二ッ寺遺跡(12)・小杭村中遺跡(13)・畑田遺跡などで確認されている。このうち、村中角遺跡からは「宮殿」のヘラ描き文字を持つ土師器坏や青銅製帯金具が、三重二ッ寺遺跡・三重本村遺跡・小杭村中遺跡からは墨書土器が、また唐人廟遺跡からは円面硯が出土しており、官衙的施設との関連を窺わせるものと言える。平安時代～鎌倉期にかけては、神埼庄への宋船の出入りに伴い、諸富町蒲田津あるいは大堂・徳富付近がその取引地となったと考えられる。この時期には、村中角遺跡・徳富権現堂遺跡他、多くの遺跡から宋代の輸入陶磁器が多数出土している他、宋銭の出土も知られる。平安時代末期以降、その地理的重要性から、在地あるいは下向した中世武士団が活発な動向を示した。主なものとして鎌倉期の小杭氏・諸富氏、南北朝～戦国期の小田氏、室町～戦国期の太田氏などが挙げられる。なお、太田本村遺跡１・２区の所在する太田の集落周辺は、太田氏の居城、田中城に比定されている他、本遺跡の北東1.5mの地点には、佐賀江川を天然の城堀とした小田氏・能造寺氏の居城、小曲城［蓮池城］(14)が立地する。

Ⅱ．遺跡の概要

太田本村遺跡３区は、佐賀郡諸富町大字大堂字太田に所在する。遺跡の北方約600mには江湖である佐賀江川が東西に走り、東方2.0mには城原川が北から南に流下して筑後川と合流している。調査地点は標高約2.5～3.0mの水田部にあたる。

本調査区を含む太田地区周辺では、農業基盤整備事業に伴い、諸富町教育委員会により太田本村遺跡１区[1]（昭和61年度）・２区[2]（昭和62年度）を始め、唐人廟遺跡[3]（昭和60年度）・畑田遺跡(昭和61年度)[4]などで発掘調査が行われ(Fig.2)、弥生時代後期から近世までの遺構が比較的高い密度で確認されている。このうち、太田集落の西側に位置する太田本村遺跡１区では古墳時代中期～後期の井戸・土壙の他、田中城に関連すると思われる室町～戦国期の区画溝が、さらに集落東側の太田本村遺跡２区においても同様の区画溝が検出されている。

一方、太田本村遺跡３区周辺では、調査区の南々西50mに位置する畑田遺跡において、主に弥生時代後期後半～古墳時代前期・鎌倉時代の、また、同じく北々西100mに位置する唐人廟遺跡では、主に弥生時代後期末～古墳時代前期・平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。遺構の内容としては、各時期ともに溝・井戸・土壙・小穴に限られ、調査区の狭さもあって遺跡の性格が判然としない感がある。畑田・唐人廟遺跡共に本調査区に近接しつつも、両者とも東側にいくにつれ遺構の密度が希薄になり、また、確認調査においても両者の間には遺構は検出されておらず[5]、現況では遺跡としての連続性は窺えない。このことは、太田本村遺跡３区と１・２区にも言え、両者の間には幅300m程で遺構の希薄な空間が広がる。おそらく、

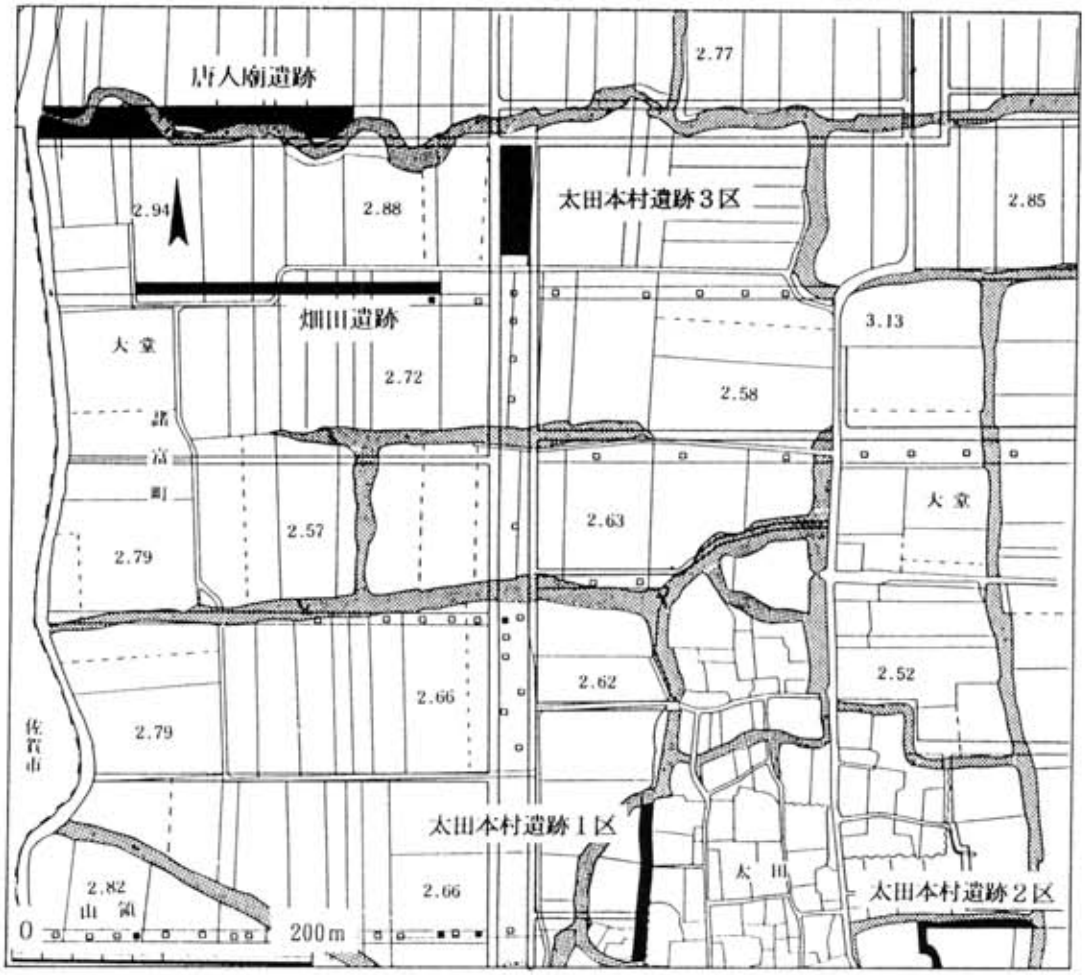


Fig.2　調査区位置図（1/5000：註５の文献より転載、一部加筆）

弥生時代後期から中世に至るまで、低湿地内に点在する狭い微高地を選んで集落の形成が行われ、かなり複雑な起伏を持つ微地形が地表面下に埋没しているものと考えられよう。

なお、発掘調査を行った段階では、本調査区は「太田本村遺跡Ⅱ区」としたが[6]、諸富町教育委員会により調査された上述の２地点が太田本村遺跡１区・２区として報告書が刊行されているため[7]、本調査区についてはこれに対応させ、「太田本村遺跡３区」として報告する。

註１）種浦 修「太田本村遺跡」諸富町文化財調査報告書第4集 1988
２）徳永貞紹・藤口健二編「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書7」佐賀県文化財調査報告書第94集 1989
３）種浦 修「唐人廟遺跡」諸富町文化財調査報告書第3集 1987
４）種浦 修「畑田遺跡」諸富町文化財調査報告書第6集 1988
５）徳富則久「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書5」佐賀県文化財調査報告書第85集 1987
６）徳永貞紹編「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書6」佐賀県文化財調査報告書第90集 1988
７）註1と同じ。

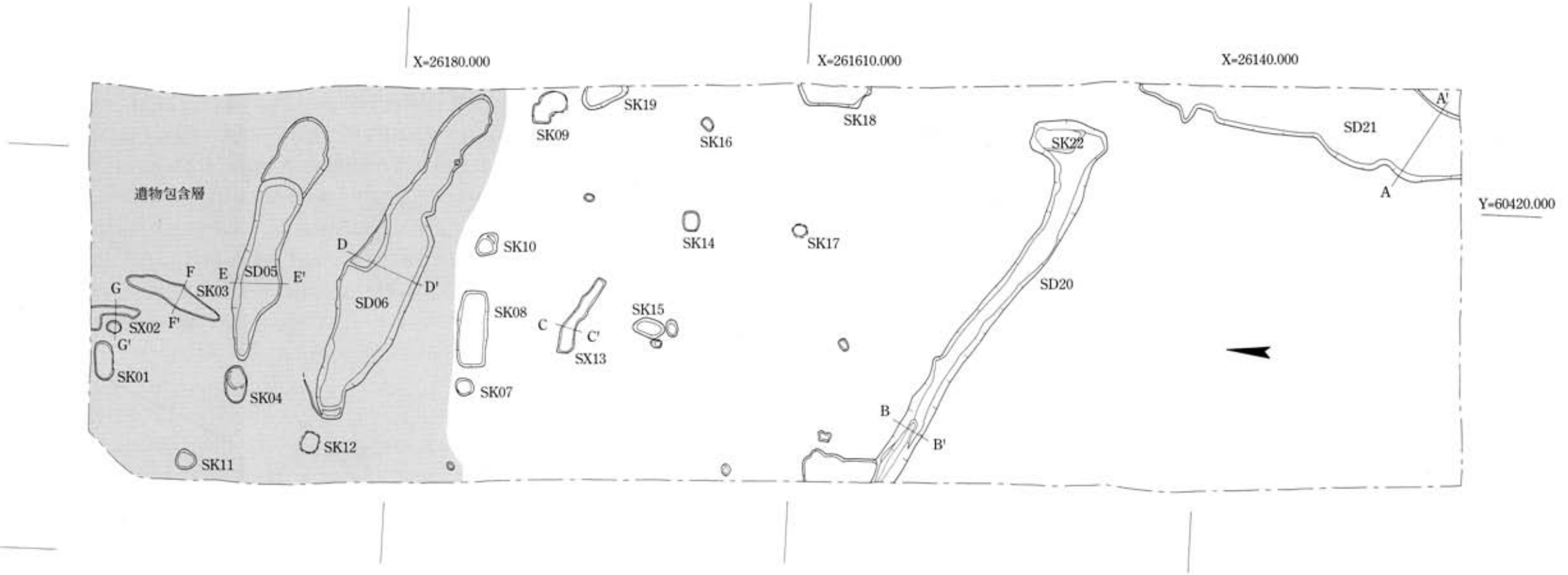


Fig.3　太田本村遺跡３区遺構配置図（1/250）

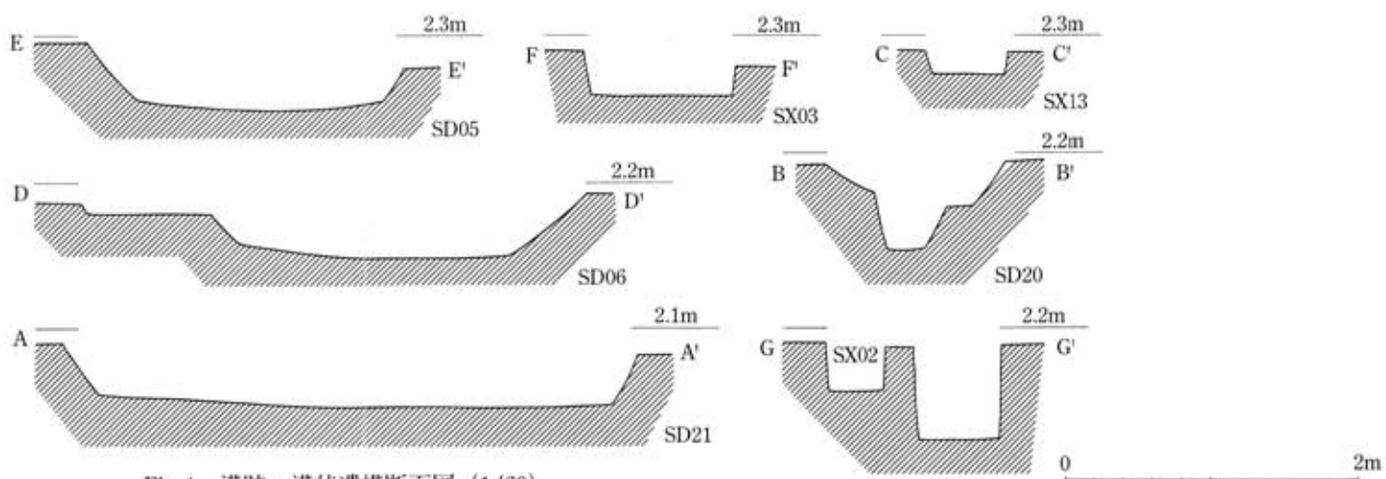


Fig.4　溝跡・溝状遺構断面図（1/60）

Ⅲ．調査の内容

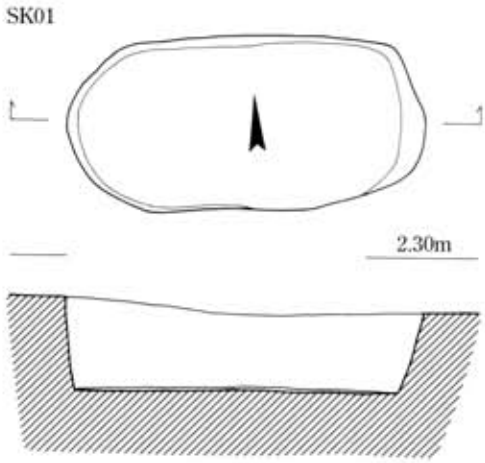
発掘調査は、導水路付設によって掘削を受ける約1,720mを対象に行われた。遺構検出面のレベルはほぼ一定で、標高2.0～2.3mである。検出された遺構は、時期的に弥生時代後期末～古墳時代初頭を主体とし、奈良～平安時代に位置付けられるものも若干みられる。遺構の内訳は溝・土壙・井戸・小穴からなり、近接する唐人廟遺跡・畑田遺跡とその様相はよく似ているが、調査面積に対して、遺構の密度はより希薄である。また、その分布も調査区内の北寄りに集中し、ＳＤ20より南側には、ＳＤ21以外には遺構は認められない。

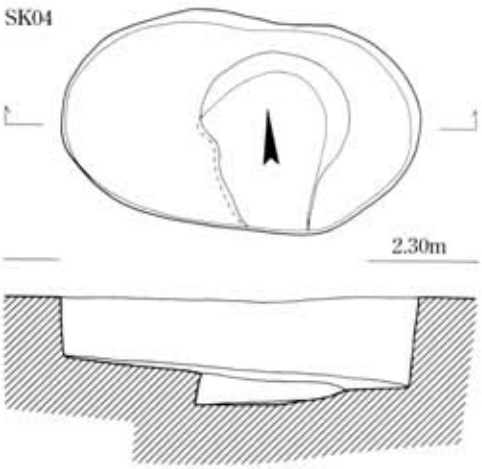
この他、調査区北端から約20mの範囲で遺物包含層が確認され、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の遺物が多く出土した他、古墳時代後期～平安時代、室町時代の遺物も検出されている。以下に遺構・遺物毎に述べる。

１．遺構

遺構番号	種別	形態(特徴)	規模(長さ×幅×深さ：m)	主軸方位	時期
ＳＤ01	土壙	長円形	1.9×0.9×0.5	N－85°－W	弥生時代後期終末
ＳＸ02	溝状遺構	断面U字形	？×0.4×0.25	――	
ＳＫ03	↓	断面逆台形	5.0×0.9×0.15～0.3	N－20°－E	古墳時代前期初頭
ＳＫ04	土壙	長円形	長軸1.9、短径1.1、深さ0.3～0.5	N－85°－W	弥生時代後期終末
ＳＤ05	溝	断面U字形	12.7×0.65～2.3×0.25～0.45	N－77°－W	
ＳＤ06	↓	〃	18.0×1.0～3.6×0.5～0.5	N－65°－W	弥生後期終末～古墳前期初頭
ＳＫ07	土壙	円形	直径0.18、深さ0.71	――	古墳時代前期初頭
ＳＫ08		長方形	3.7×1.5×0.15～0.3	N－84°－W	
ＳＫ09		不整形	2.2×1.2×0.35	N－33°－W	弥生時代後期終末
ＳＫ10		不整円形	直径0.95～1.05、深さ0.6	N－50°－E	古墳時代前期初頭
ＳＫ11	↓	円形	長軸1.0、短軸0.85、深さ0.85	N－30°－E	平安時代
ＳＥ12	井戸	井戸	長軸1.05、短軸0.9、深さ1.0＋α	N－55°－W	弥生時代後期終末
ＳＸ13	溝状遺構	断面逆台形	4.1×0.35～0.6×0.1～0.15	N－60°－W	
ＳＫ14	土壙	隅丸長方形	1.0×0.85×0.85	N－85°－W	
ＳＫ15		〃	1.5×0.8×0.6	N－21°－E	
ＳＫ16		〃	0.6×0.5×0.3	N－52°－W	
ＳＫ17		円形	0.6×0.6×0.55	――	
ＳＫ18		隅丸長方形	0.65×1.0＋α×0.5～0.6	N－5°－E	古墳時代前期初頭
ＳＫ19	↓	不整形	2.3×1.3＋α×0.4	N－35°－W	
ＳＤ20	溝	断面逆台形	21.0＋α×1.2～1.5×0.3～0.6	N－60°－W	古墳時代前期初頭
ＳＤ21	↓	〃	16.0＋α×0.87×0.2～0.3	N－15°～20°－E	奈良～平安時代
ＳＫ22	土壙	隅丸長方形	3.8×1.7×0.85	N－11°－E	古墳時代前期初頭

Tab.1　遺構一覧表



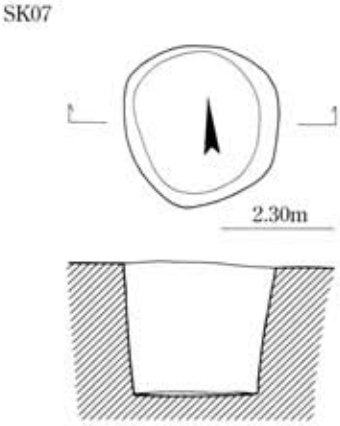


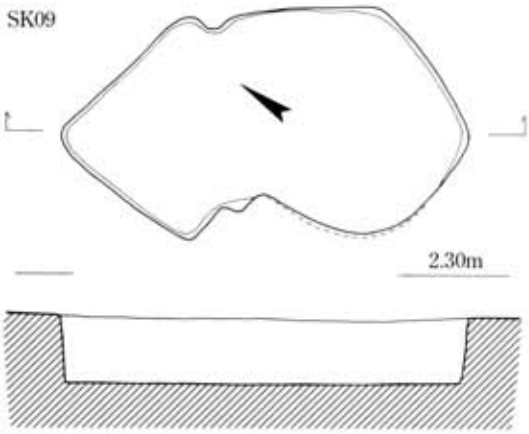
ＳＫ０１土壙

調査区北端に位置する。東側にＳＸ02不明遺構がみられる。平面形は長方形である。各壁からは、やや直に掘り下げる。底面はほぼ平坦である。長さ1.9m・幅0.9m・深さ0.5m。

ＳＫ０４土壙

調査区北側に位置する。東側にＳＤ05溝状遺構がみられる。平面形は楕円形である。各壁からは、ほぼ直に掘り下げる。底面は東側へ次第に深くなる。その中央よりやや東側に、深さ0.2mの浅い不整形な穴が掘られている。長径1.9m・短径1.1m・深さ0.3～0.5m。





ＳＫ０７土壙

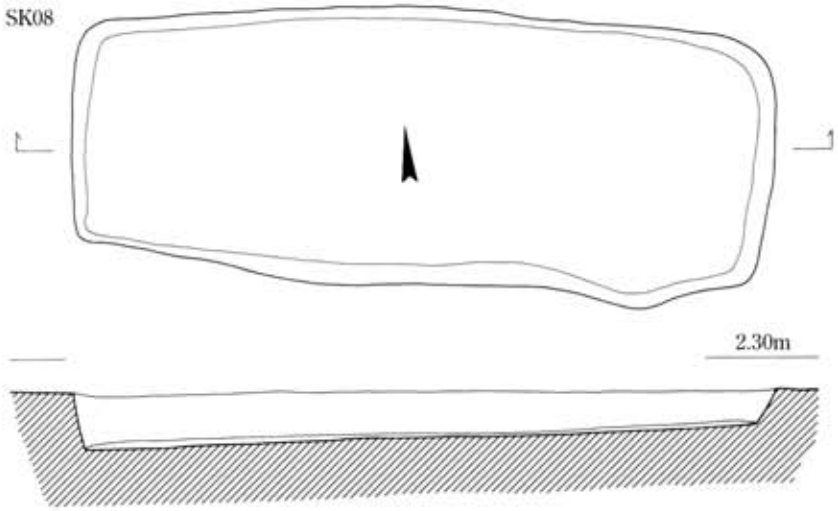
調査区東側に位置する。東側にＳＸ08・10土壙がみられる。平面形はほぼ円形である。各壁からは、やや直に掘り下げており、次第に直径は狭くなる。底面はほぼ平坦である。長径0.18m・深さ0.71m。

ＳＫ０９土壙

調査区北側の東寄りに位置する。南側にＳＫ19土壙がみられる。平面形は不整形である。各壁からは、ほぼ直に掘り下げる。底面はほぼ平坦である。最大長2.2m・最大幅1.2m・深さ0.35m。

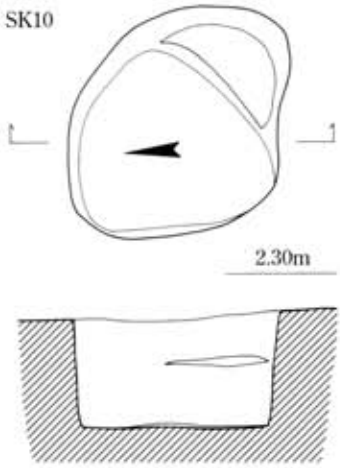
0　　2m

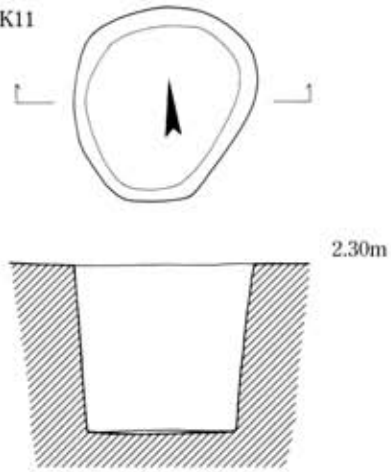
Fig.5　ＳＫ01・04・07・09土壙（1/40）



ＳＫ０８土壙

調査区北側に位置する。南側にＳＫ10土壙、西側にＳＫ19土壙がみられる。本調査区では最大規模の土壙である。平面形は南側がやや整っていないが、隅丸長方形である。各壁からは、斜めに掘り下げる。底面は西側へ向けて緩やかに深くなる。長さ3.7m・幅1.5m・深さ0.15～0.3m。





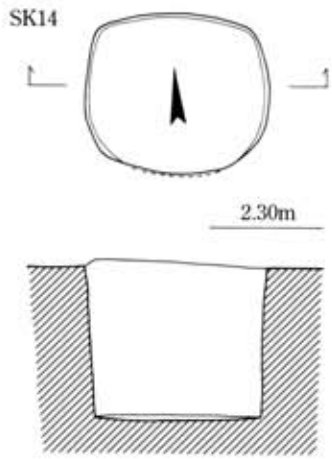
ＳＫ１０土壙

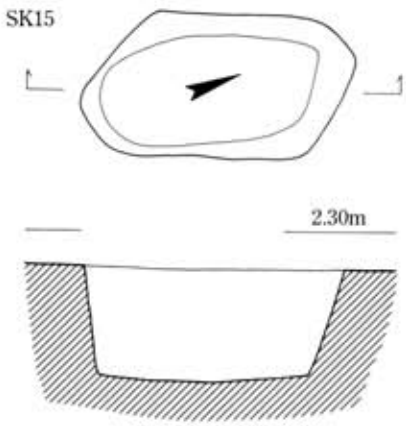
ＳＫ08土壙の東側に位置する。北側にＳＤ06溝跡がみられる。南東側に掘り込みが一箇所あるが、本土壙との関連は不明である。平面は不整な円形である。各壁からは、やや直に掘り下げており、少しずつ直径は狭くなる。底面はほぼ平坦である。直径0.95～1.05m・深さ0.6m。他の土壙に比べて深いため、井戸跡の可能性もある。

ＳＫ１１土壙

調査区の西寄りに位置している。南東側にＳＫ04土壙・ＳＤ05溝跡がみられる。平面は、全体がやや整っていないが、円形である。各壁からはやや直に掘り下げており、少しずつ直径は狭くなる。底面はほぼ平坦である。長さ1.0m・幅0.85m・深さ0.85m。

Fig.6　ＳＫ08・10・11土壙（1/40）



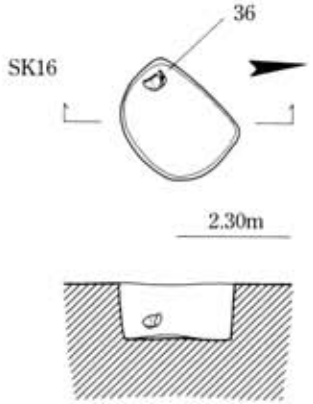


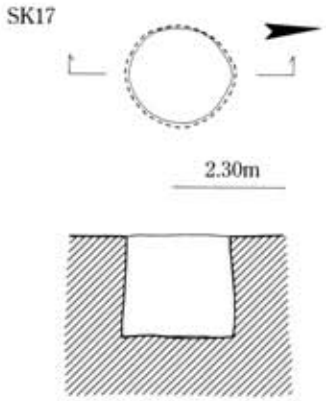
ＳＫ１４土壙

調査区中央よりや北東側に位置している。東側にＳＫ16土壙、西側にＳＫ15土壙がそれぞれみられる。平面は隅丸長方形である。各壁からはほぼ直に掘り下げている。底面はほぼ平坦である。長さ1.0m・幅0.85m・深さ0.85m。

ＳＫ１５土壙

調査区中央よりや北西側に位置している。東側にＳＫ14土壙・ＳＤ13溝跡がみられる。平面形は全体がやや歪んでいるが、ほぼ隅丸長方形である。各壁からは斜めに掘り下げている。底面は央に向けて緩やかに深くなる。長さ1.5m・幅0.8m・深さ0.6m。





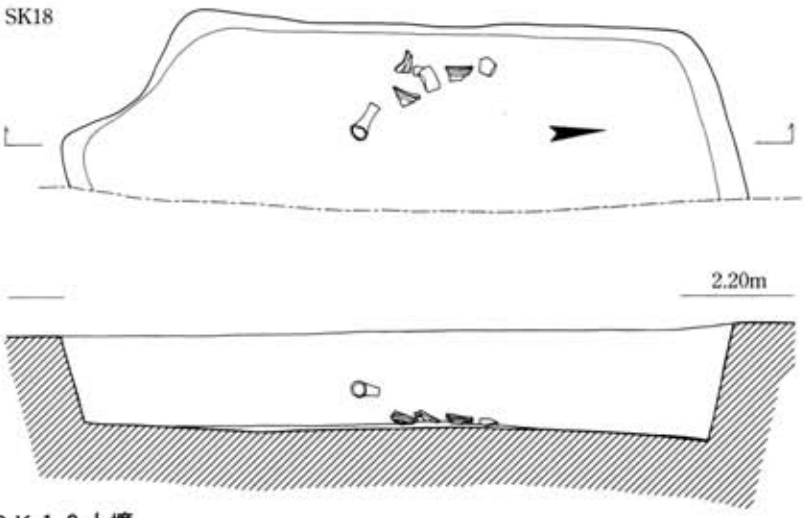
ＳＫ１６土壙

調査区中央よりや北東側に位置している。西側にＳＫ14土壙がみられる。平面形は南西部にやや丸みが強いが、ほぼ隅丸長方形である。各壁からはほぼ直に掘り下げている。底面はほぼ平坦である。長さ0.6m・幅0.5m・深さ0.3m。

ＳＫ１７土壙

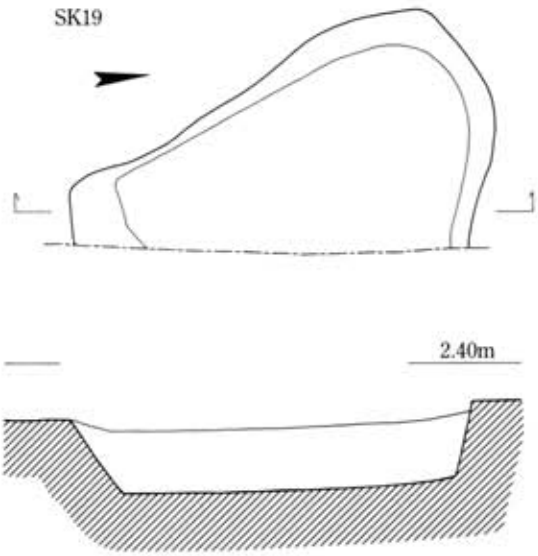
調査区中央近くに位置している。東側にＳＫ18土壙がみられる。平面形は円形である。各壁から底面に向けては、次第に直径を広げて掘り下げており、僅かに袋状をなす。底面は、ほぼ平坦である。土壙上端の直径0.6m・底面の直径0.6m・深さ0.55m。

Fig.7　ＳＫ14・15・16・17土壙（1/40）



ＳＫ１８土壙

調査区中央よりや東側に位置している。西側にＳＫ17土壙がみられる。東半部が調査区外であるため、平面形は確定できないが、隅丸長方形か。各壁からは、斜めに掘り下げている。底面は南半部はほぼ平坦であるが、北半部は北壁に向けて僅かに深くなる。長さ0.65m・幅1.0＋αm・深さ0.5～0.6m。底面及び中位付近から、弥生土器(甕・壺・高坏)の破片が出土している。

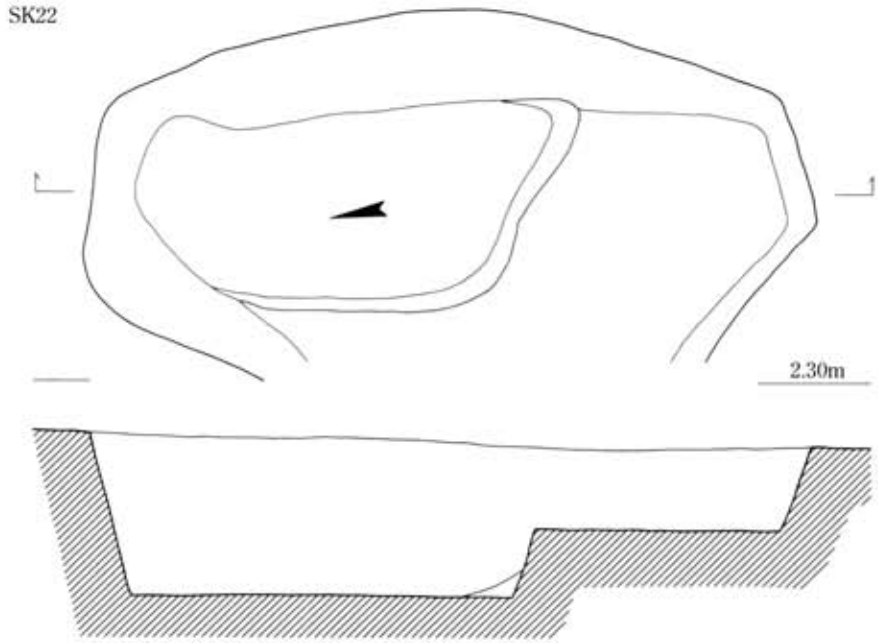


ＳＫ１９土壙

中央区北側の東寄りに位置している。北側にＳＫ０９土壙がみられる。東半部が調査区外であるため、平面形は確定できないが、不整形か。各壁からは、斜めに掘り下げているが、特に南壁側は緩やかである。底面は南側へ僅かに深くなる。長さ2.3m・幅1.3＋αm・深さ0.4m。

0　　2m

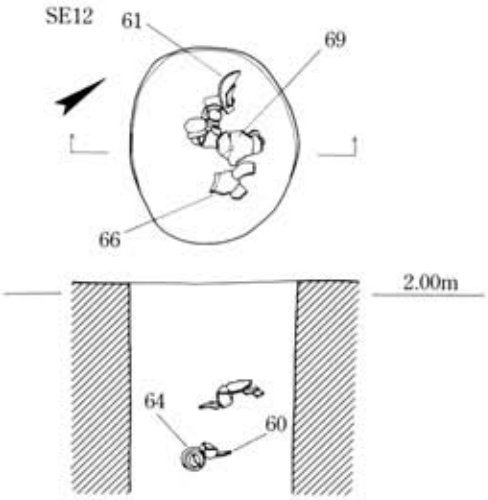
Fig.8　ＳＫ18・19土壙（1/40）



ＳＫ２２土壙

ＳＤ20溝が調査区南側を西北西から東南東方向に走り、その南東端で止まっているが、本土壙はそこに位置する。その長軸方向は、ＳＤ20溝跡とほぼ直交する。現状ではこれらの両遺構は連続するようであり、調査時にも明確に分離し得ていないが、出土遺物の状況からみると、ＳＤ20溝跡のほうに古い様相が窺えることから、本報告では区分することとしたい。

土壙は２段掘りである。１段目の平面は不整であるが、隅丸長方形か。各壁からは斜めに掘り下げる。底面もほぼ平坦であり、その北半部をさらに掘り込み、２段目をつくる。２段目についても、平面形はやはり不整形で、各壁からやはり斜めに掘り下げる。底面はほぼ平坦である。１段目の長さ3.8m・幅約1.7m・深さ0.45m、２段目の長さ2.15m・幅1.05m・深さ0.4m。



ＳＥ１２井戸

調査区北側の西寄りに位置している。東側にＳＤ０６土壙がみられる。平面形は楕円形である。各壁からは、ほぼ直に掘り下げているが、底面までは調査し得ていない。長径1.05m・短径0.9m・深さ1.0＋αm。

Fig.9　ＳＫ22土壙・ＳＥ12井戸（1/40）

ＳＤ０５溝（Fig.３，４）

調査区北側を西北西から東南東方向に走っている。南側に並行してＳＤ06溝が位置する。両端とも調査区内で途切れる。平面形はほぼ直線的であるが、幅は一定しておらず、西端部がかなり狭い。深さは、東端部が一段浅いが、他はほぼ一定しており、全体的に平坦である。横断面は、幅広のＵ字形をなす。延長12.7m・幅0.65～2.3m・深さ0.25～0.45m。

ＳＤ０６溝（Fig.３，４）

ＳＤ０５溝から３ｍ程南に位置している。ＳＤ０５溝と同様、西北西から東南東方向に走る。形態もほぼ類似しており、両端とも調査区内で途切れ、平面形はほぼ直線的であるが、幅は一定しておらず、西端部が狭くなる。深さは、東端部が最も深く、東側に進むにつれて次第に浅くなる。横断面は、幅広のＵ字形をなす。延長18.0m・幅1.0～3.6m・深さ0.2～0.5m。

ＳＤ２０溝（Fig.３，４）

調査区南側を西北西から東南東方向に走っている。溝の西側は調査区外に延びているが、東側はＳＫ２２土壙と重複したところで止まっている。この両遺構の関係については、前述のように一応区分して報告する。溝は直線的ではあるが、中途で南北方向に僅かに曲がる。溝幅はほぼ一定している。深さは調査区内西端部で一段下がる他は、概ね西から東側に進むにつれて次第に深くなる。横断面は逆台形である。延長21.0＋αｍ・幅1.2～1.5m・深さ0.3～0.6m。

ＳＤ２１溝（Fig.３，４）

調査区南東隅で一部を確認している。ほぼ南北方向に走っている。深さは北側がやや浅いが、他はほぼ一定しており平坦である。横断面は幅広で逆台形である。延長16.0＋αｍ・最大幅0.87m・深さ0.2～0.3m。

ＳＸ０２溝状遺構（Fig.３，４）

調査区北側に位置している。遺構はさらに北側の調査区外に延びており、全体の形状は不明。現状では、その南西方向にみられる１基の小穴を囲むように鉤状に折れている。横断面は逆台形をなす。幅0.4m・深さ0.25m。

ＳＸ０３溝状遺構（Fig.３，４）

調査区北側に位置している。ほぼ南北方向に延びている。南端部はＳＤ０５溝よりやや北側で止まっているが、その方向はＳＤ０５溝とほぼ直交する形になる。平面形は中央部でやや幅広となり、両端部はいずれも先細りとなって終わる。深さはほぼ一定で、底面は平坦である。横断面は、浅い逆台形をなす。延長5.0m・幅0.9m・深さ0.15～0.3m。

ＳＸ１３溝状遺構（Fig.３，４）

調査区中央よりやや北側に位置している。西北西より東南東に延びている。溝幅は東端でやや狭くなるが、他はほぼ一定している。深さはほぼ一定で、底面は平坦である。横断面は、浅い逆台形をなす。延長4.1m・幅0.35～0.6m・深さ0.1～0.15m。

２．遺物

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・磁器の他、ミニチュア土器・土錘などの土製品、石錘・砥石などの石製品があり、また、木製品として鍬先の一部が検出されている。時期的には弥生時代終末～古墳時代前期初頭のものが出土量の大半を占め、一部弥生時代後期後半、古墳時代前期・後期、奈良～平安時代、室町時代のものも含む。

ＳＫ０１出土遺物（Fig.10：１～５）

１～４は甕。１は胴部に比べて頸部が締まるもので、口縁部が短いことより甕に含めた。４の底部はレンズ状をなす。５は高坏、大きく外反する口縁部をなすが、屈曲部はまだ明瞭に綾を持つ。

ＳＫ０３出土遺物（Fig.11：17～31）

17は鉢。単口縁をなし、厚みのある球形の体部を持つ。18・19は二重口縁壺の口縁部。19は下端部には刻み目を施す。20～26は高坏。20～22・24は口縁部と体部の屈曲が緩やかになり、口縁部の長伸化の傾向を示すもの。26はこれに比べ口縁部が明瞭に屈曲し、短く外反するもので、時期的に異なる。混入品か。27～32は甕。27～31はいずれも僅かに外反する、立ち上がりぎみの口縁部をなす。口径30cm程度の中型品となる28・30・31のうち、28・30は頸部に断面三角形の凸帯を貼り付ける。32は内湾する口縁部を持つ畿内系の布留式甕。調整は、外面は不明瞭であるが、口縁部内面は横方向のハケ目、体部内面は横方向のヘラケズリを施す。

ＳＫ０４出土遺物（Fig.10：６・９）

６は甕。口縁部はかなり立ち上がり、直線的に伸びる。９は高坏。浅い体部から大きく開く口縁部を持つ。

ＳＫ０７出土遺物（Fig.10：７・８・12）

７は甕。直線的に開く口縁部を持ち、口縁部端部は面取りを施し平坦である。頸部付近で強い横ナデを行うことにより、やや二重口縁ぎみに見える。布留式甕と思われる。８は畿内系小型丸底鉢。12は壺の口縁部片。口縁端部に僅かに凹面を持つ。

ＳＫ０９出土遺物（Fig.12：33・34・37・38）

33は甕。体部外面にタタキ目を残す。34は直に立ち上がる口縁部を持つ短頸壺。37・38は高坏の脚部。

ＳＫ１０出土遺物（Fig.10：10・11・13～16）

10・11は鉢。10はつぶれぎみの浅い体部から屈曲して直線的に立ち上がる口縁部を持つもので、８と同じく畿内系。13は広口壺の口縁部。13の端部はやや二重口縁状をなし、下端部には刻み目を施す。14は高坏の口縁部。15・16は甕。16は口径40cm以上になる大型品。やや外傾しつつ直線的に伸びる口縁部を持ち、頸部には断面三角形をなすつぶれぎみの凸帯を貼り付ける。

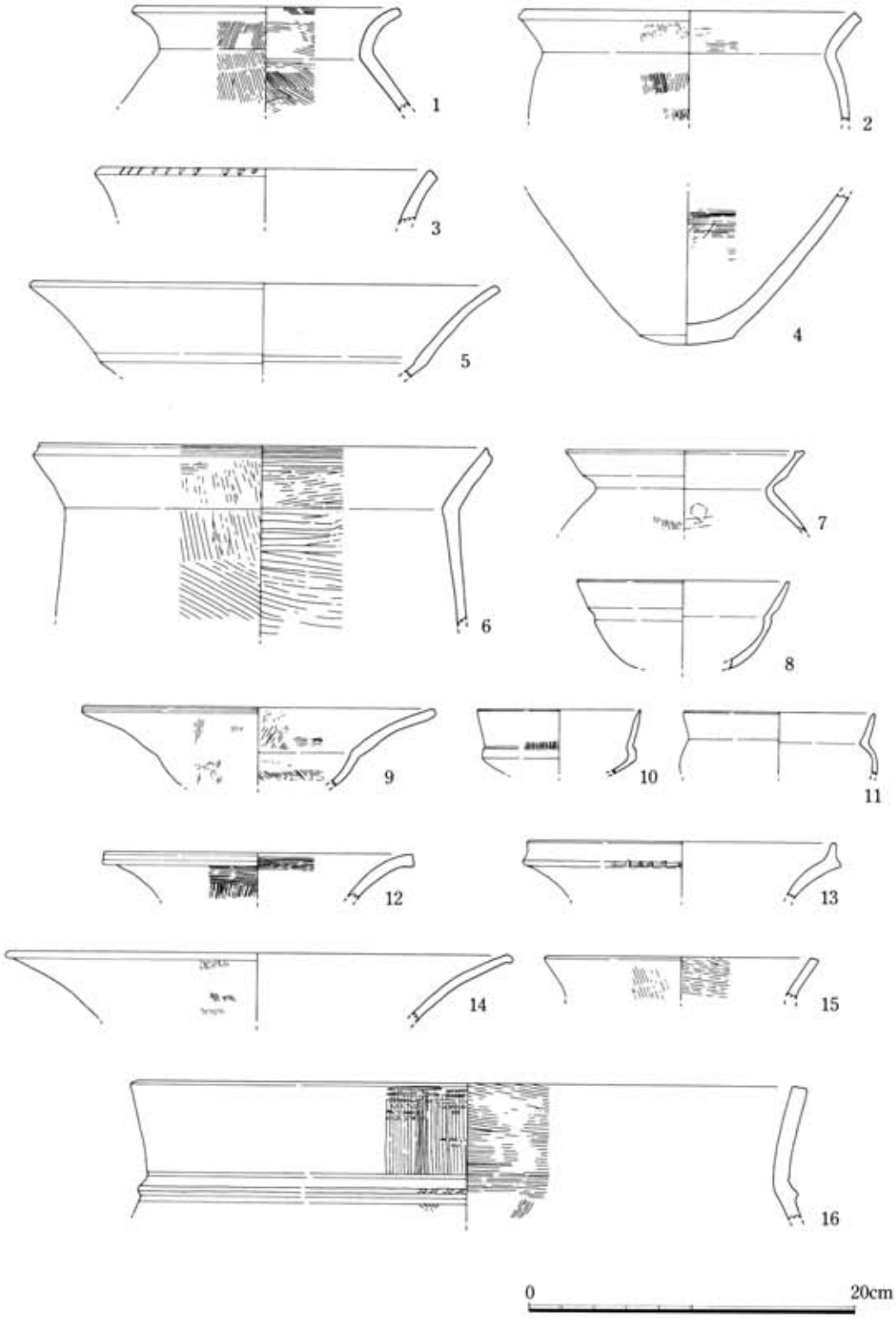


Fig.10　ＳＫ01・04・07・10出土遺物（1/4）

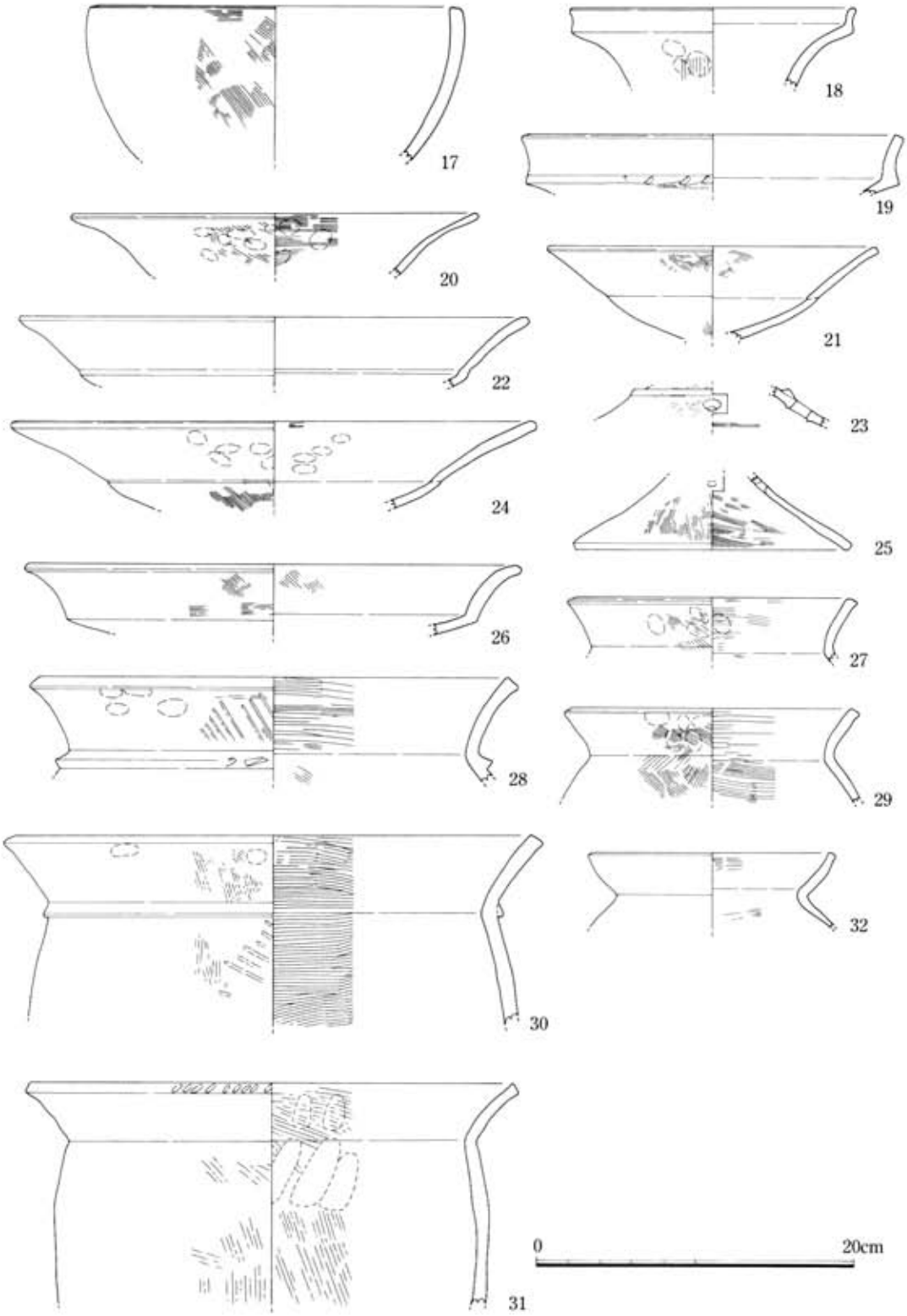


Fig.11　ＳＫ03出土遺物（1/4）

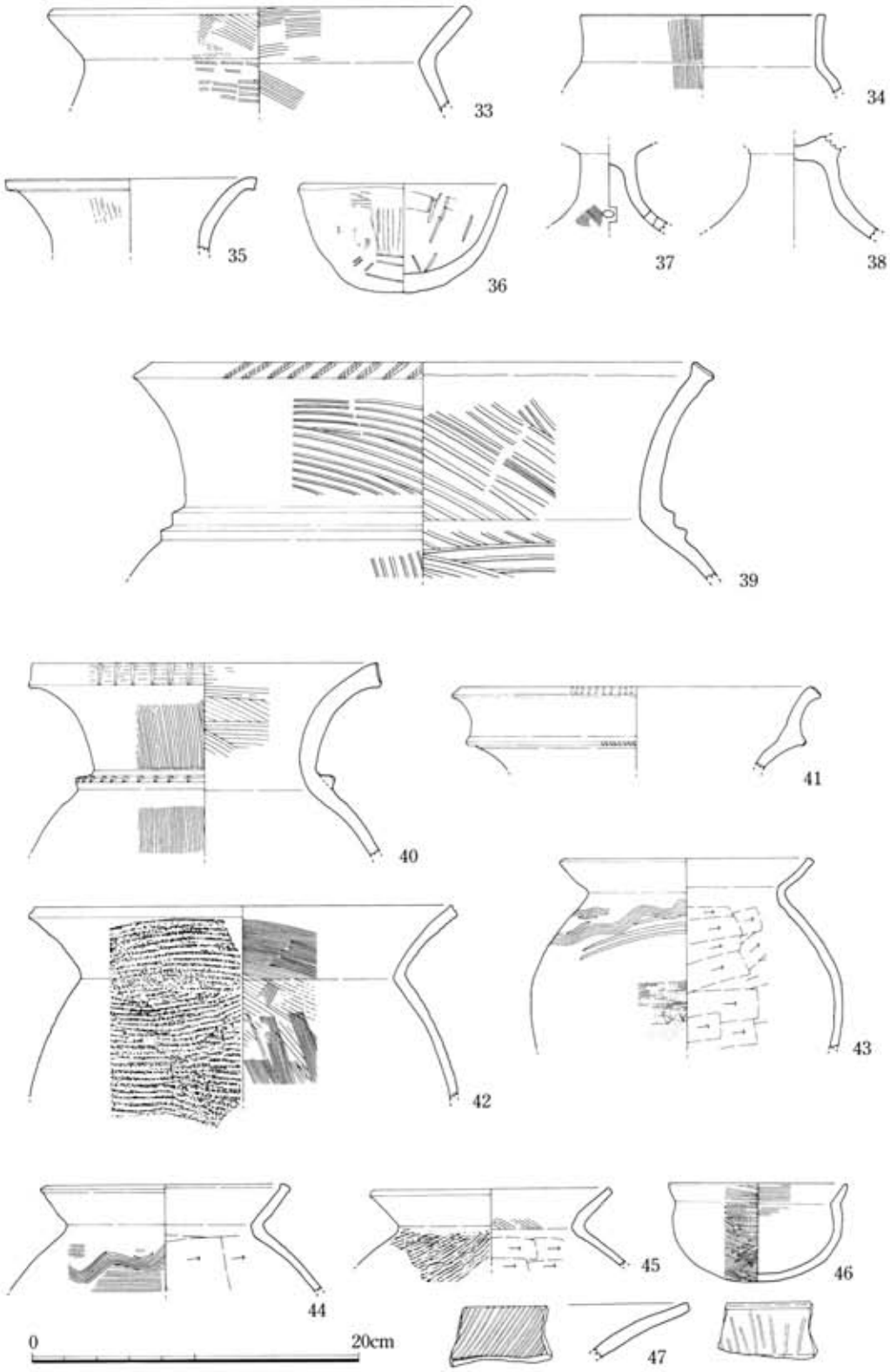


Fig.12　ＳＫ09・14・16・18・22出土遺物（1/4）

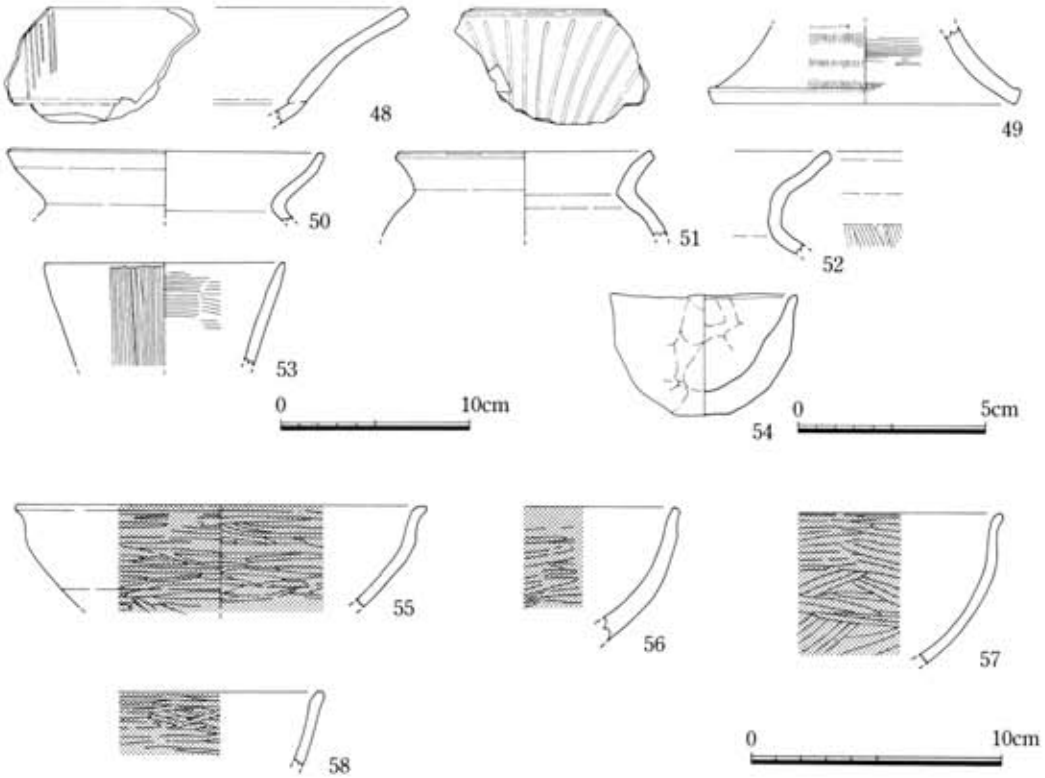


Fig.13　ＳＫ11出土遺物（48～53は1/4、54は1/2、55～58は1/3）

ＳＫ１１出土遺物（Fig.13：48～58）

48・49は高坏の口縁部片と脚部片。50～52は甕。50は頸部くびれ部から外反し、さらに内湾する口縁部を持つもの。布留式甕でもやや新しいものか。53は長頸壺の口縁部片。外面は縦方向の、内面は横方向のハケ目を施す。54は鉢形のミニチュア土器。厚手で内外面に荒い整形痕が残る。55～58は黒色土器の椀。55・57・58は口縁端部が僅かに外反し、56は直線的に伸びる。いずれも内外面は横方向の丁寧なヘラミガキを施す。55・56・57は内外面に黒化処理を施す黒色土器Ｂ類であり、58は内面のみ黒化させるＡ類である。

ＳＥ１２出土遺物（Fig.14：59～72）

59～61は広口壺。いずれも口縁端部に刻み目を施し、59は櫛状工具を、60・61はヘラ状工具を用いる。69は壺の底部。底面は丸みのある平底となる。62～65は鉢。62～64は直線的に伸びる口縁部を持つもので、62・63はほぼ直立、64はやや外傾する。65は単口縁を持つもの。66～68・70は甕。70は頸部くびれ部から外反し、さらに直線的に伸びる口縁部を持つもの。内面は頸部くびれ部のやや下まで横方向のヘラケズリを施す。布留式甕の範疇に含まれるものと思われる。71・72は口径7.5cm程度の鉢形のミニチュア土器。手捏ねによる荒い整形痕が残る。

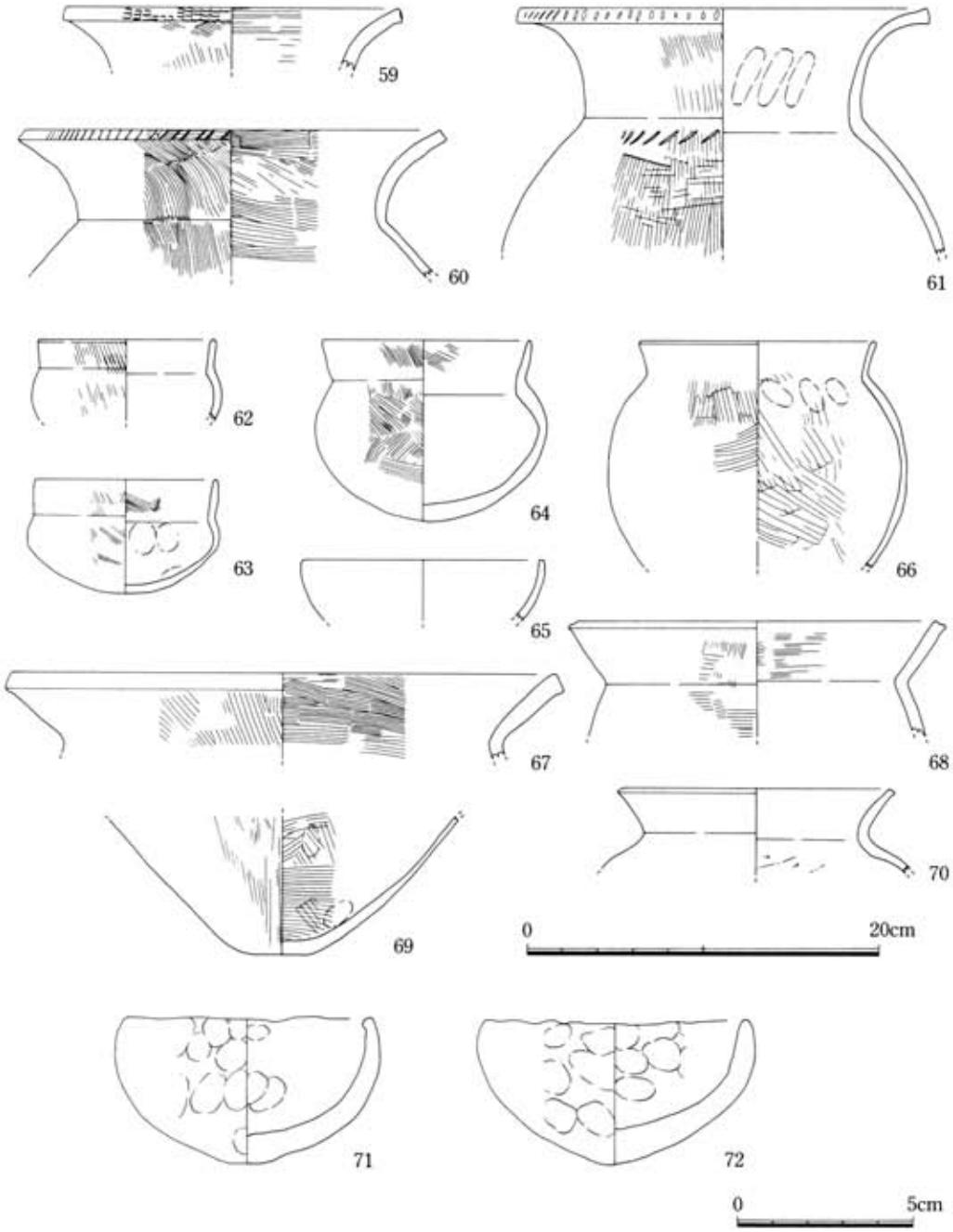


Fig.14　ＳＥ12出土遺物（71・72は1/2、他は1/4）

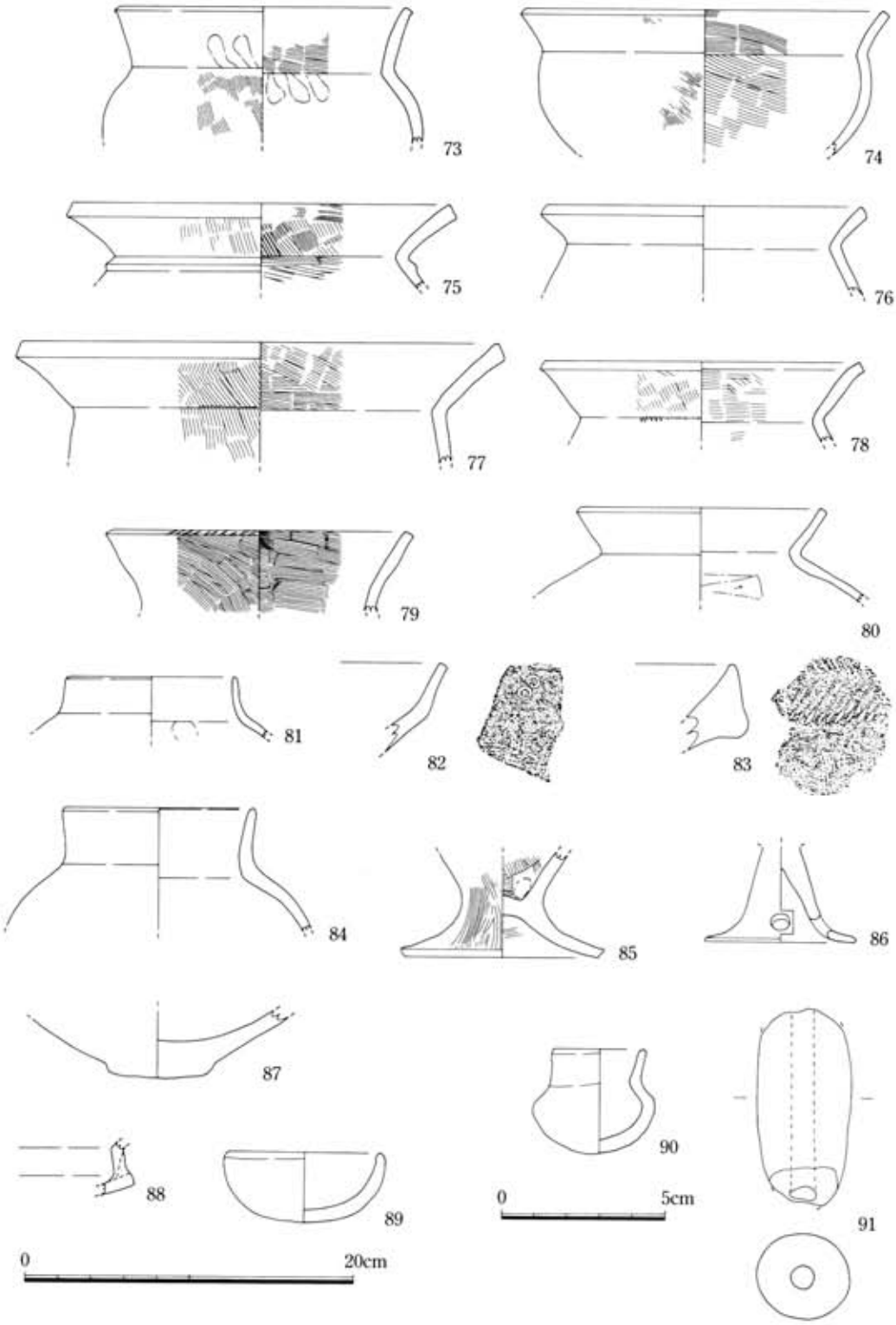


Fig.15　ＳＤ06出土遺物（90・91は1/2、他は1/4）

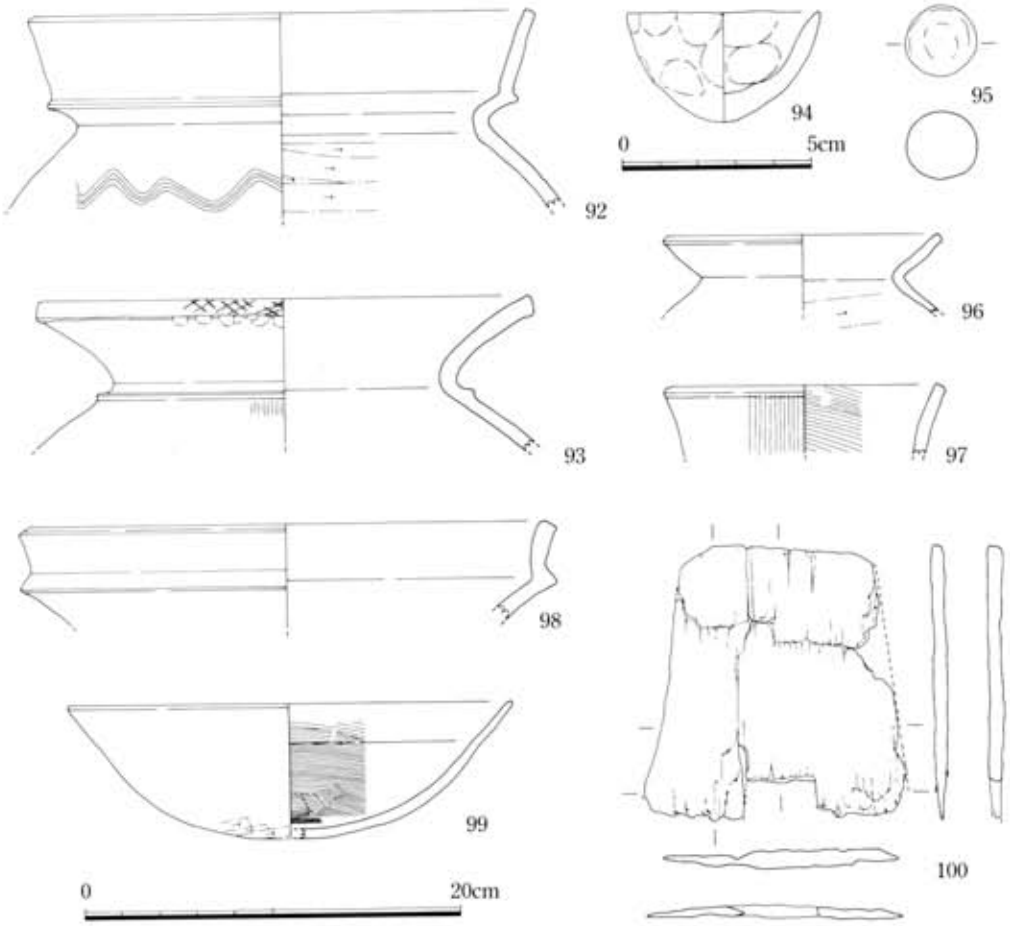


Fig.16　ＳＤ20出土遺物（94・95は1/2、他は1/4）

ＳＫ１４出土遺物（Fig.12：35）

35は器台の口縁部。器壁はかなり厚めで端部は明瞭に角を持つ。

ＳＫ１６出土遺物（Fig.12：36）

36は鉢。単口縁をなし、底部は丸底である。調整は、外面がハケ目、内面はヘラ状工具による荒いナデを施す。

ＳＫ１８出土遺物（Fig.12：39～41）

39・40は広口壺。いずれも口縁端部はやや肥厚し、端面には刻み目を施す。また、頸部には断面三角形の凸帯を、39は２条、40は１条貼り付ける。41は二重口縁壺。口縁上端部は下端部より大きく広がり、上下端とも刻み目を施す。

ＳＫ２２出土遺物（Fig.12：42～47）

42～45は甕。42は口縁部外面から体部外面にかけてタタキ目を明瞭に残す。43・44は布留系甕。43は口縁部がやや内湾、44はほぼ直線的になり、端部はいずれも明瞭に角を持つ。また、

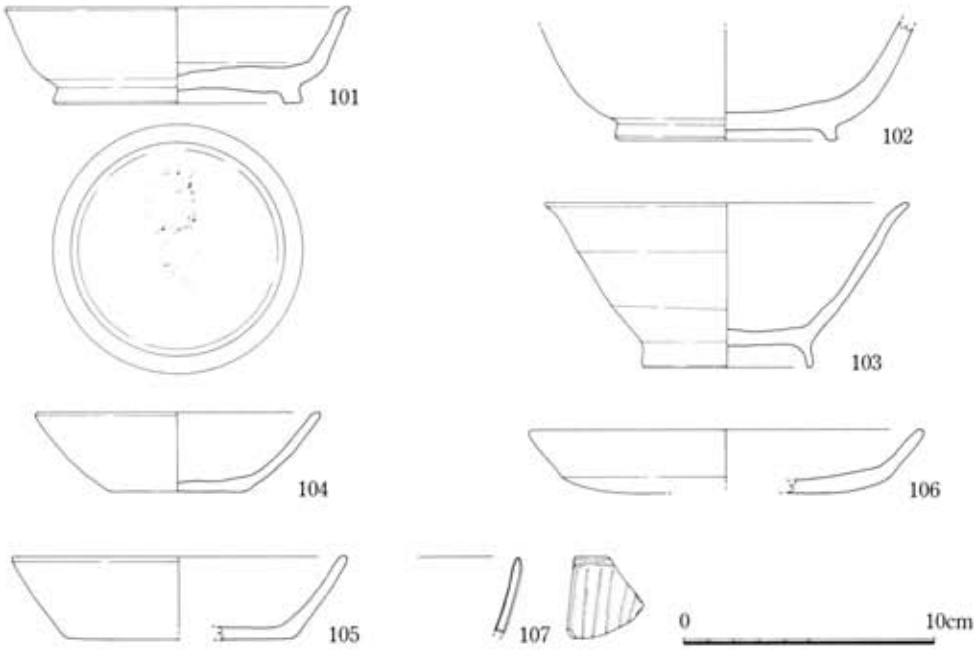


Fig.17　ＳＤ21出土遺物（1/3）

外面の肩部には波状文を巡らし、調整は外面がハケ目、内面は頸部くびれ部のやや下まで横方向のヘラケズリを施す。45は頸部くびれ部から外反し、さらに直線的に伸びる口縁部を持つもの。体部外面には右上がりのタタキ目を残し、内面は頸部くびれ部のやや下まで横方向のヘラケズリを施す。河内型の庄内式甕と思われる。46は外反する口縁部を持つ鉢。底部は丸底で、調整は内外面共にハケ目後に細かいヘラミガキを施す。47は高坏の口縁部片。

ＳＤ０６出土遺物（Fig.15：73～91）

73・74は鉢、75～80は甕。75～78は頸部で綾を持って屈曲し、直線的に伸びる口縁部をなす。80は布留式甕。内湾する口縁部をなし、内面は頸部くびれ部のやや下まで横方向のヘラケズリを施す。81～84・87・88・89は壺。81・84は短頸壺。いずれも直線的に立ち上がる口縁部をなし、81は内傾、84は外傾する。82・83・88は二重口縁壺。82は外面に竹管文状の刺突を施す。83は上下に肥厚するもので、端面には綾杉文を施す。畿内系か。88は口縁部が断面Ｓ字状をなすもの。87は底部片。ややくびれぎみに下方に突出し、底面はレンズ状をなす。85は台付甕、86は高坏の脚部である。89は単口縁の鉢。90は口径2.7cm程度のミニチュア土器。プロポーションは短頸壺である。91は土錘。両端部を欠損し、残存長約6.0cm、最大径2.8cm。

ＳＤ２０出土遺物（Fig.16：92～100）

92・93・97・98は壺。92は二重口縁を持つ山陰系の甕。外面肩部には波状文を巡らし、内面は頸部くびれ部のやや下まで横方向のヘラケズリを施す。93は広口壺。口縁部端面には斜格子状に刻み目を施す。97は長頸壺の口縁部片。99は大きく開く体部をなす鉢。底面はヘラケズリ

を行う。96は布留式甕の口縁部片。94は口径5.0cm程度の鉢形のミニチュア土器。95は土製丸玉。直径約1.8cm。100は鍬先と思われる木製品。刃部が欠損しているため、平鍬となるか又鍬となるかは不明である。

ＳＤ２１出土遺物（Fig.17：101～107）

101～106は土師器。101～103は高台付坏。101は底面に「門守」の墨書を描く。104・105は無高台の坏、106は皿である。いずれも底部ヘラ切り。107は青磁碗の口縁部片。外面には沈線を蓮弁文風に描く。室町時代のものであり、小片であることから、ここでは混入品とみなす。

包含層出土遺物

包含層出土遺物について一括して述べる。このうち、弥生時代後期～古墳時代前期のものについては、器種毎に説明する。

弥生時代後期～古墳時代前期の土器

［甕］（Fig.18，19：113～116）108～114は在地系のもの。108・109は口径40cm程度の中型品、110・111は55cm程度の大型品。器壁は厚さ1.0～1.5cmとかなり厚めである。112～114は口径25cm程度のもの。112は外面はハケ目調整を施し、底面はレンズ状をなす。113・114は外面にタタキ目を残す。

115・116は外来系のもので布留式甕と思われる。115は頸部くびれ部から直線的に伸びる口縁部を持ち、口縁端部は明瞭に綾を持つ。肩部には波状文を巡らす。116は口縁部が内湾し、

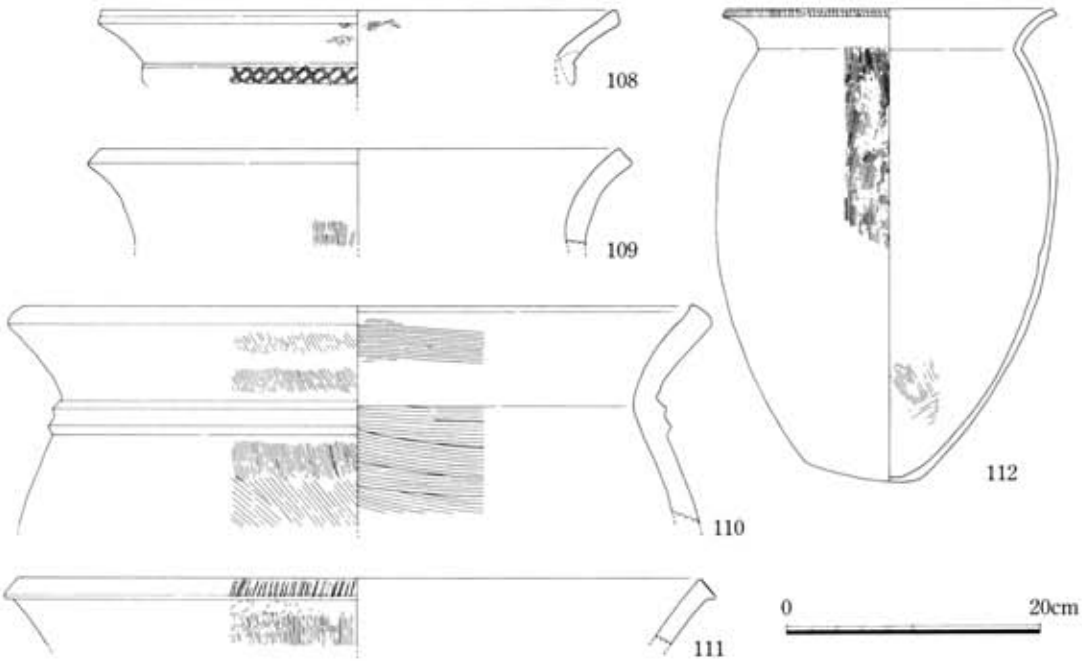


Fig.18　遺物包含層出土遺物１（1/6）

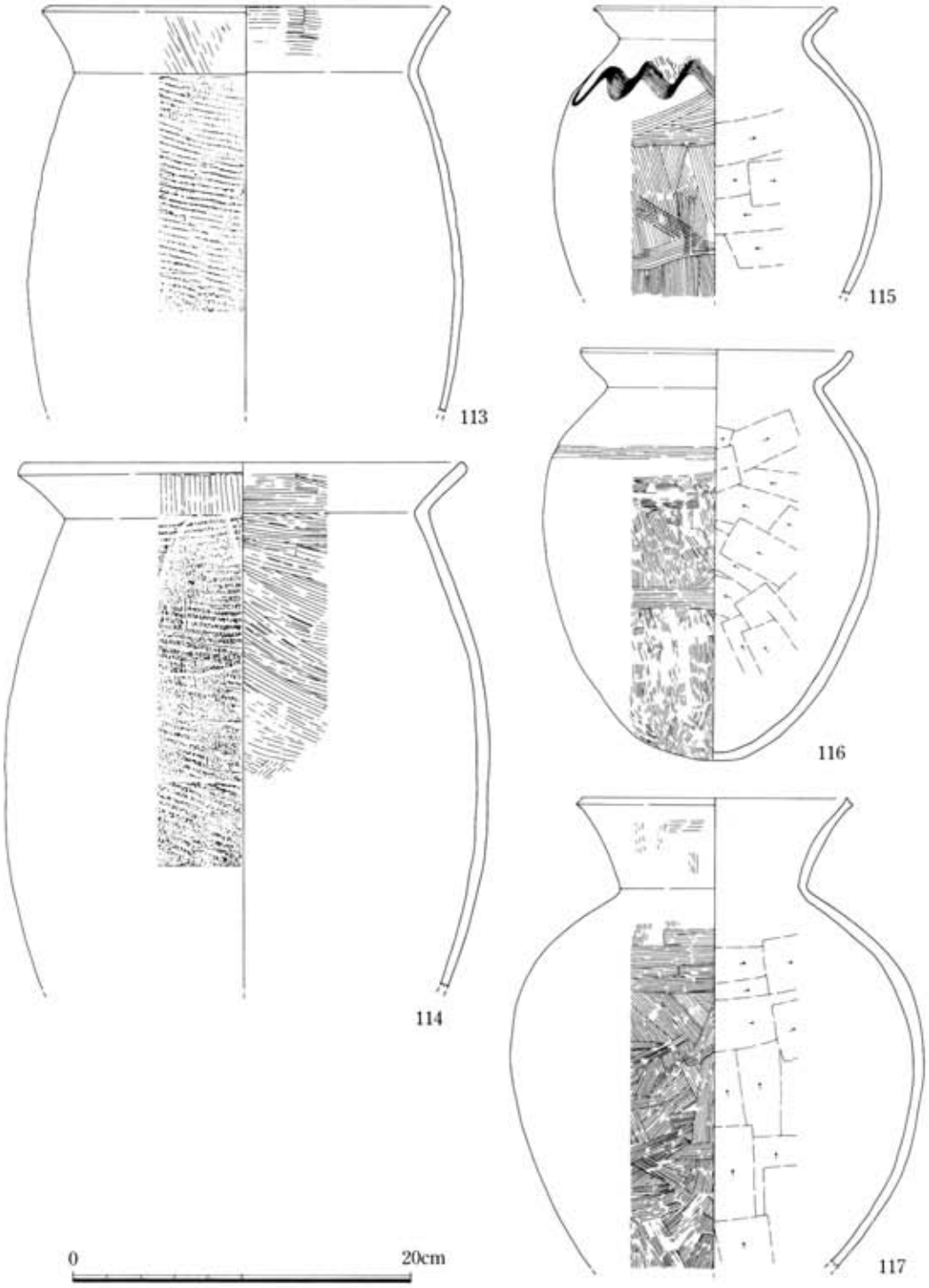


Fig.19　遺物包含層出土遺物２（1/4）

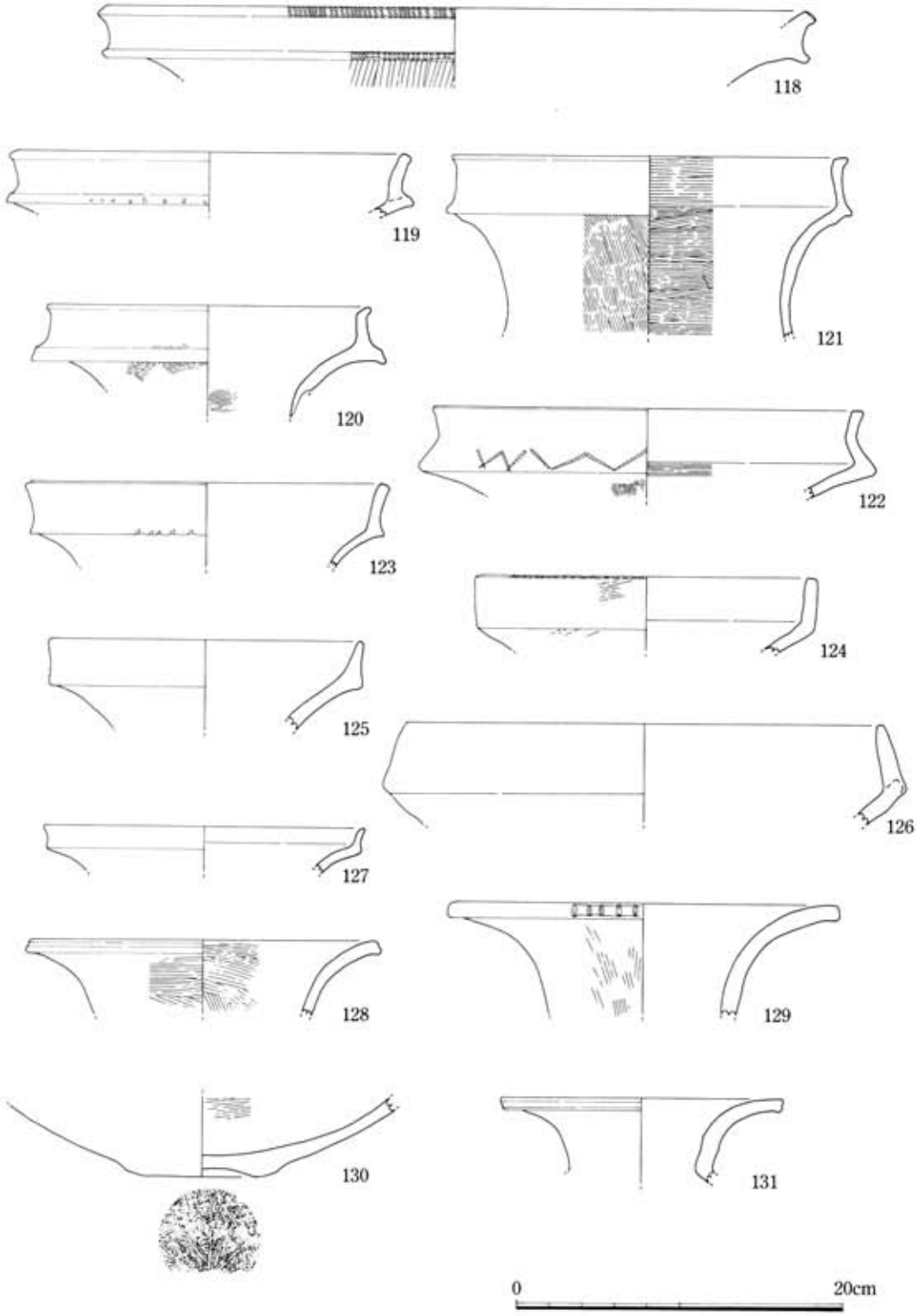


Fig.20　遺物包含層出土遺物３（1/4）

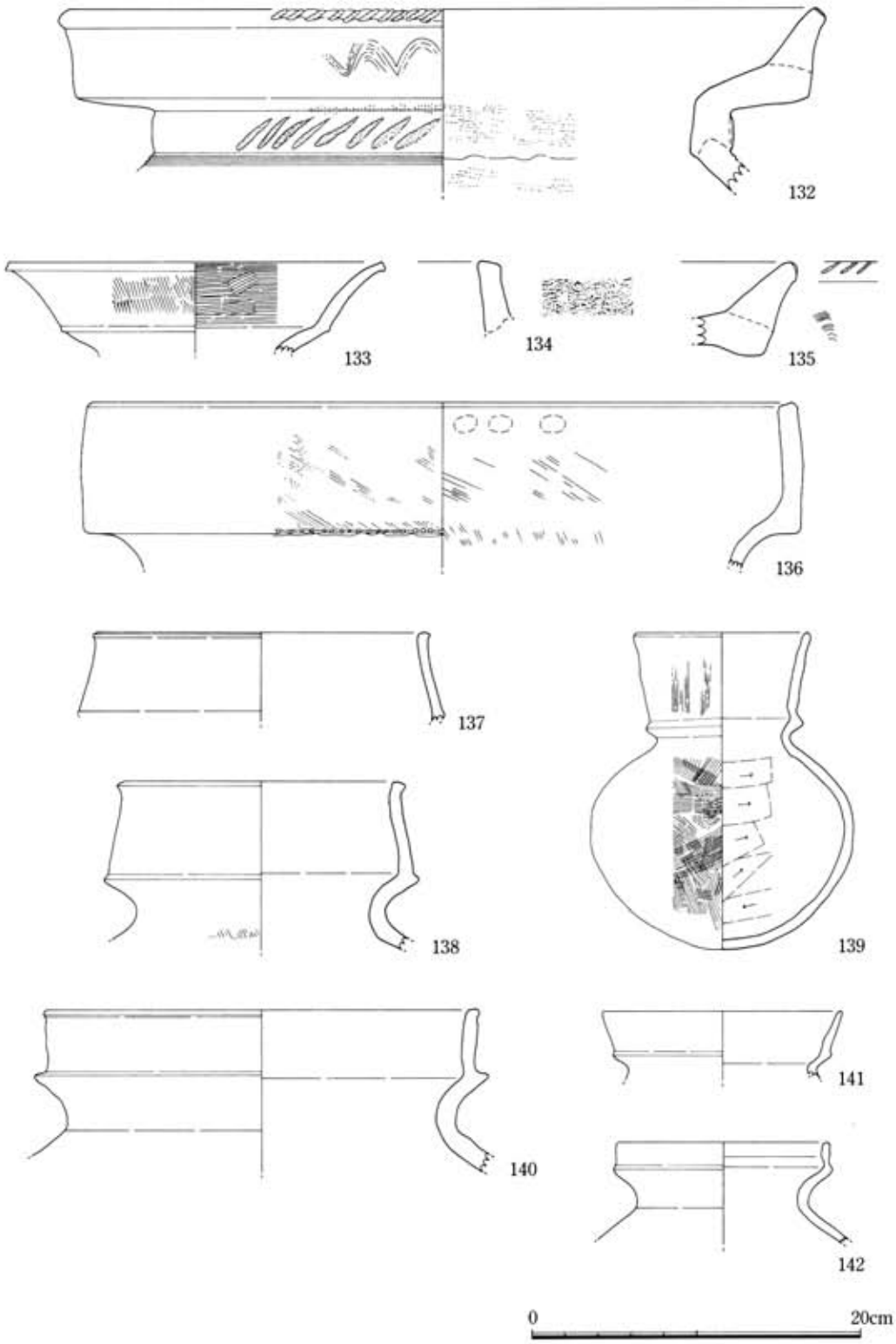


Fig.21　遺物包含層出土遺物４（1/4）

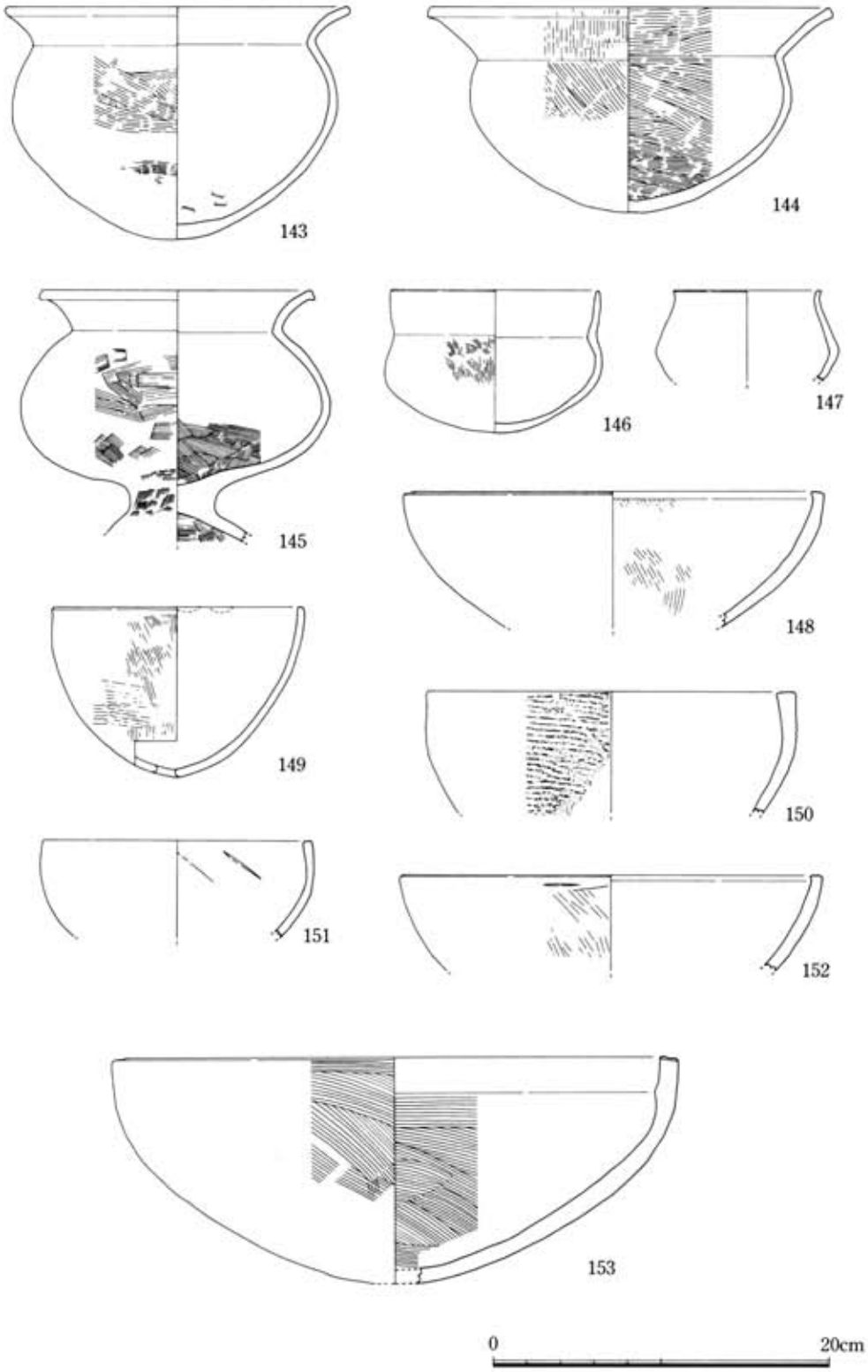


Fig.22　遺物包含層出土遺物５（1/4）

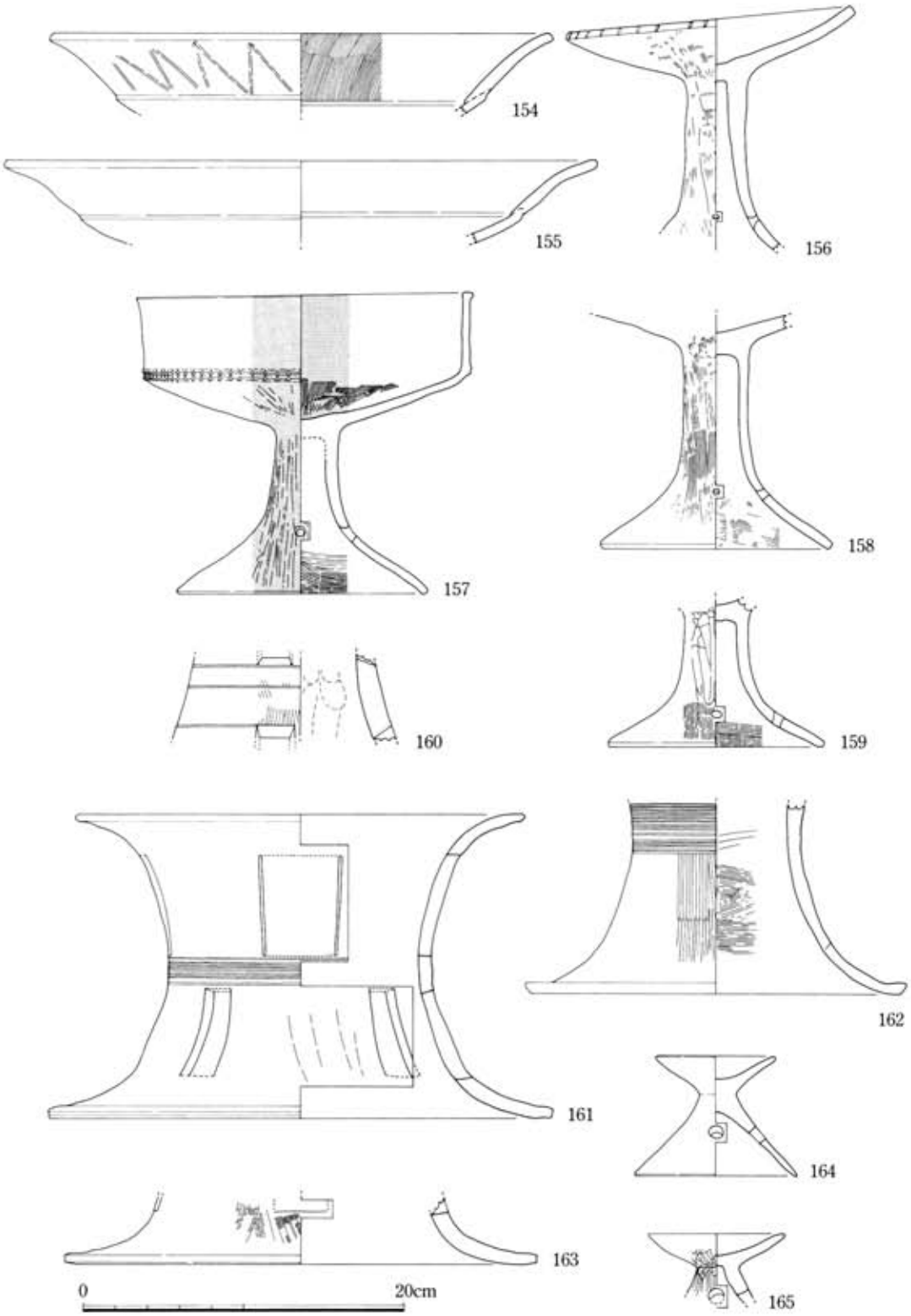


Fig.23　遺物包含層出土遺物６（1/4）

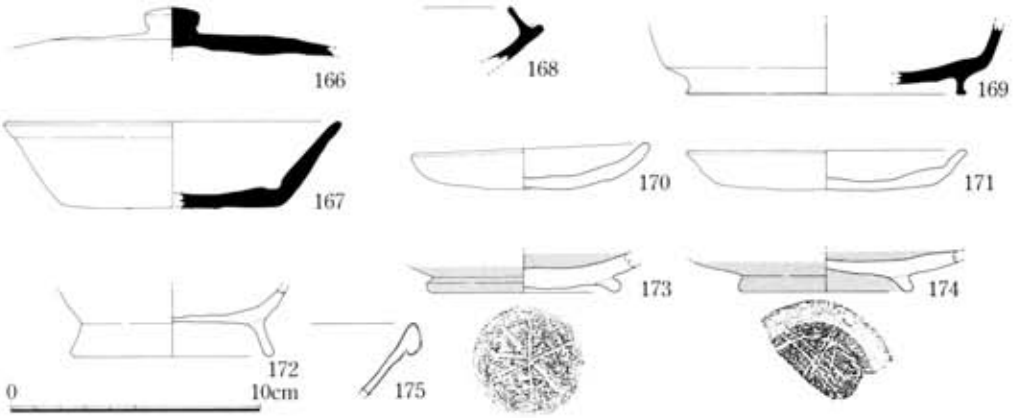


Fig.24　遺物包含層出土遺物７（1/3）

端部はやや丸みを帯び、胴部は球形である。肩部には沈線を巡らす。いずれも調整は体部外面はハケ目、体部内面はヘラケズリを施す。

［壺］（Fig.19：117，Fig.20，21）　118～130・134は在地系のもの。118～127・134は複合口縁壺。このうち、118～123・125・127などの二重口縁状をなすものの他、124・126はいわゆるくの字形口縁をなし、より古い様相を示す。134は小片のため不明確であるが、くの字形口縁か。外面に櫛描波状文を描く。128・129・131は広口壺の口縁部片。

117・130・132～133・135～142は外来系のもの。117は広口壺。プロポーション、及び体部外面をハケ目、体部内面にはヘラケズリを施すなどの調整技法の特徴より、畿内系、あるいはその影響下にあるものかと思われる。132・135は畿内系の二重口縁壺。132は口縁部外面には櫛描波状文を描き、口縁部端面・頸部外面には刻み目を施す。また、130の底部片は畿内系二重口縁壺の可能性がある。底面には木の葉の圧痕が残る。136～142は山陰系二重口縁壺。直線的に伸びる口縁部は、内傾するもの（137・138）、直立するもの（136・140）、内傾するもの（139・141・142）と様々である。139はほぼ完形の長頸壺。諸富町域では類例はないが、久保田町上恒安遺跡[1]・牛津町生立ヶ里遺跡[2]などで出土例が知られる。136は口径約43cmの大型品であるが、口縁下端は突出せず、在地のものとの折衷タイプか。

［鉢］（Fig.22）

143～145はくの字形に屈曲して外反する口縁部を持つもの。143・144の底部はややすぼまりぎみの丸底となり、145には脚台がつく。146は小型丸底鉢。147は口縁部に向かってすぼまりに内傾するもので、端部は僅かに外反する。148～153は単口縁のもの。148はやや深め器形をなし、底部に穿孔を施す。150は外面の口縁部端部付近までタタキ目が残る。

［高坏］（Fig.23：154～159）

154は浅い体部から大きく開くもの。154は体部と口縁部の境が明瞭であるが、155はやや曖昧になり、より新しい傾向を示す。154は口縁部外面に鋸歯文風の暗文を施す。156は単口縁を

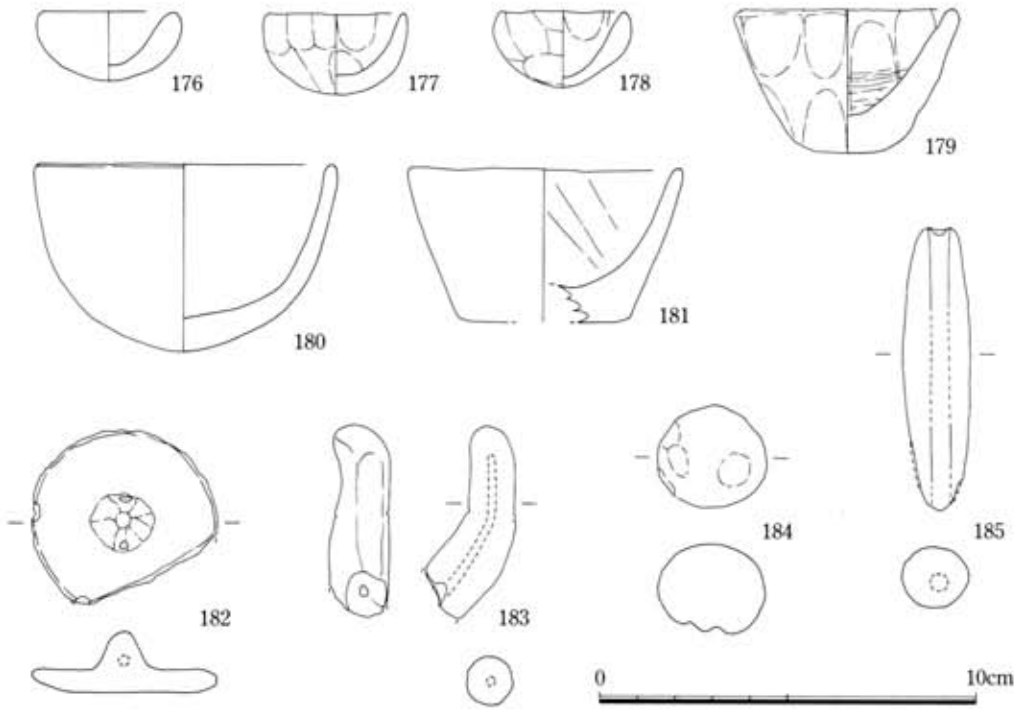


Fig.25　遺物包含層出土遺物８（1/2）

なすもので、端面には刻み目を施す。器壁はかなり厚めである。現在のところ、類例を見い出せてない。157は浅い体部から直立する口縁部を持つもの。口縁端部は平坦で、体部との変化点には二条の細く低い凸帯を巡らし、刻み目を連続させる。坏部内底面は中心より放射状にハケ目を施し、さらに中心部分にヘラミガキを施す。また、坏部内面より外面全体に丹を塗布する。類例には大和町惣座遺跡ＳＢ2741[3]出土例などがあるが、惣座遺跡出土例の口縁端部が若干外反することより、本例はこれにやや先行するものかと思われる。

［器台］（Fig.23：160～165）

160～163は瀬戸内系器台に系譜を持つ在地の大型器台。160～162は体部中央に沈線による文様帯を持つ。161は四方向に方形透しを持つようである。164・165は畿内系小型器台。164の脚部はくびれ部から僅かに外反しつつ、直線的に伸びる。

古墳時代後期以降の土器（Fig.24）

166～169は須恵器。168は坏身あるいは高坏の坏部。166は宝珠つまみを持つ坏蓋。体部はかなりつぶれて平坦である。169は高台付坏、171は無高台の坏身。170～172は土師器。170・171は皿、172は高台付坏身。いずれも底部ヘラ切り離しである。173・174は黒色土器Ｂ類の椀。底面にはヘラ記号風に沈線を刻む。175は玉縁口縁をなす白磁の口縁部片。

土製品・石製品（Fig.25・26）

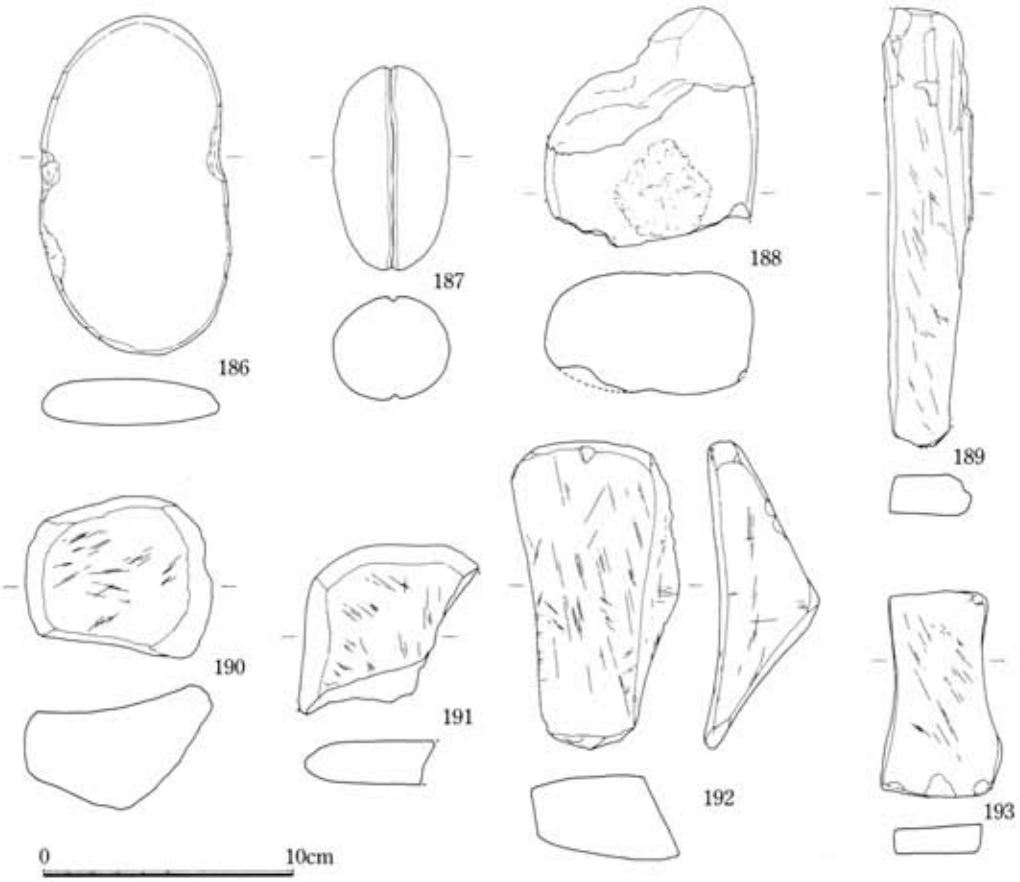


Fig.26　遺物包含層出土遺物９（1/3）

176～181は鉢形のミニチュア土器。176～178は口径3.5cm程度のもの。179～181は口径5.5～7.0cm程度のもの。底部の作りは様々で、179はやや丸みを帯びた平底、180は尖底ぎみの丸底、181は明瞭な平底をなす。182は鏡の土製模造品。同様のものは太田本村遺跡１区[4]でも５～６世紀の遺構（ＳＸ65・ＳＫ100・ＳＫ131）より出土している。183は棒状の不明土製品。内部には径2.0cm程の穴があるが、成形時の心棒の痕跡と思われる。184は土製丸玉。一部欠損するが、直径は約2.5～3.0cm程である。185は土錘。ほぼ完形で、長さ6.5cm、最大径1.9cm。

186・187は石錘、186は両側縁に切り目を入れるもの、187はいわゆる有溝石錘である。188は敲石。表裏面の中央部及び側面に敲打痕が認められる。189～193は砥石。

註１）小松 譲「上恒安遺跡」久保田町文化財調査報告書第1集 久保田町教育委員会 1993
２）大橋隆司「生立ヶ里遺跡Ⅰ」牛津町文化財調査報告書第4集 牛津町教育委員会 1993
３）田平徳栄編「惣座遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(11) 1990
４）種浦 修「太田本村遺跡」諸富町文化財調査報告書第4集 諸富町教育委員会 1988

Fig-図番号	ＰＬ番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
10- 1		87004938	ＳＫ01	弥生土器	甕	(16.6)	(6.4)		細砂粒含む	灰褐色	ハケメ	ハケメ
2		4939	〃	〃	〃	(21.0)	(6.8)		〃	〃	〃	ハケメ･ナデ
3		4940	〃	〃	〃	(21.1)	(3.4)		砂粒含む	〃	ヨコナデ	ヨコナデ
4	25-21	4944	〃	〃	高坏	(29.0)	(5.7)		砂粒多く含む	灰白色	ナデ	ハケメ･ナデ
5		324	〃	〃	甕		(9.4)	(5.8)	〃	灰色･暗灰色	ナデ	ハケメ
6		417	ＳＫ04	〃	〃	(28.3)	(11.0)		砂粒･雲母含む	黄橙色	ハケメ	ハケメ･ヘラナデ
7		409	ＳＫ07	土師器	〃	(14.6)	(5.0)		〃	灰白色･淡黄色	〃	ヘラケズリ
8		413	〃	〃	鉢	(13.0)	(5.4)		細砂粒含む	黄橙色･褐灰色	ナデ	〃
9		418	ＳＫ04	〃	〃	(22.0)	(4.8)		細砂粒･雲母含む	灰白色	ハケメ･ナデ	ハケメ･ナデ
10		422	ＳＫ10	〃	〃	(10.1)	(4.0)		〃	黄橙色･灰色	ハケメ･ヨコナデ	ヨコナデ
11		421	〃	〃	〃	(11.7)	(4.0)		〃	黄橙色･褐灰色	ナデ	ナデ
12		411	ＳＫ07	〃	壺	(19.3)	(2.9)		砂粒含む	灰白色	ハケメ	ハケメ･ナデ
13		424	ＳＫ10	〃	〃	(19.5)	(3.6)		砂粒･雲母含む	灰白色･黒褐色	不明	不明
14		426	〃	〃	高坏	(31.4)	(4.2)		細砂粒含む	灰白色	〃	〃
15		425	〃	〃	甕	(16.9)	(2.6)		砂粒･小石含む	淡赤橙色	ハケメ	ハケメ
16		427	〃	〃	〃	(41.7)	(8.3)		〃	黄橙色･褐灰色	タタキ･ハケメ	ハケメ
11-17		88005104	ＳＫ03	弥生土器	鉢	(23.2)	(9.7)		砂粒･雲母含む	黄橙色	ハケメ	ヘラナデ
18		598	〃	〃	壺	(18.0)	(5.0)		砂粒含む	〃	ハケメ･ナデ	ヨコナデ
19		5105	〃	〃	〃	(24.2)	(3.7)		砂粒･雲母含む	橙色	〃	〃
20		5103	〃	〃	高坏	(25.4)	(3.9)		砂粒含む	橙色･灰白色	〃	ハケメ
21		5101	〃	〃	〃	(20.9)	(5.8)		〃	橙色	ハケメ	〃
22		5102	〃	〃	〃	(31.8)	(4.4)		〃	橙色･灰白色	不明	不明
23		596	〃	〃	〃		(2.5)		〃	黄橙色･灰白色	ヘラミガキ	ハケメ
24		600	〃	〃	〃	(32.8)	(5.5)		〃	灰白色	ハケメ	不明
25		599	〃	〃	〃		(4.6)	(17.6)	〃	〃	〃	ハケメ
26		597	〃	〃	〃	(31.0)	(4.4)		〃	黄橙色	〃	〃
27		5108	〃	〃	甕	(18.2)	(4.0)		〃	黄橙色･灰褐色	〃	〃
28		5110	〃	〃	〃	(30.4)	(6.7)		砂粒多く含む	灰白色	〃	〃
29		5111	〃	〃	〃	(18.6)	(6.0)		砂粒･雲母含む	黄橙色	〃	〃
30		5112	〃	〃	〃	(33.6)	(11.9)		〃	灰色	〃	〃
31		5113	〃	〃	〃	(30.7)	(14.0)		〃	橙色	〃	〃
32		5106	〃	土師器	〃	(15.6)	(4.8)		砂粒多く含む	黄橙色	不明	ハケメ･ヘラケズリ
12-33		140	ＳＫ09	〃	〃	(25.6)	(6.5)		砂粒含む	灰白色	ハケメ･タタキ	ハケメ
34		141	〃	〃	壺	(14.8)	(4.5)		〃	黄橙色	ハケメ	不明
35		420	ＳＫ14	弥生土器	器台	(15.4)	(4.6)		砂粒･雲母含む	〃	〃	ナデ
36	25-22	87000325	ＳＫ16	〃	鉢	12.7	6.7		細砂粒多く含む	〃	〃	ヘラナデ
37		90000143	ＳＫ09	〃	高坏		(4.8)		砂粒含む	橙色	〃	ハケメ
38		144	〃	〃	〃		(5.7)		砂粒多く含む	〃	不明	不明
39	25-23	87000335	ＳＫ18	土師器	壺	(32.8)	(13.3)		砂粒･石含む	橙色･黄橙色	ハケメ	ハケメ

Tab.2　出土土器観察表１

口径・底径の（　）は復元径，器高の（　）は残存値を示す．

Fig-図番号	ＰＬ番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
12-40		90000152	ＳＫ18	土師器	壺	(21.6)	(11.5)		砂粒含む	橙色	ハケメ	ハケメ
41		153	〃	〃	〃	(22.4)	(5.0)		〃	灰白色	不明	不明
42	25-24	87000326	ＳＫ22		甕	(26.2)	(12.1)		〃	灰黄褐色･黄橙色	タタキ	ハケメ
43	25-28	90000160	〃	〃	〃	(7.7)	(11.6)		〃	黒色･褐灰色	ハケメ	ヘラミガキ
44		161	〃	〃	〃	(15.3)	(6.4)		〃	黒色･灰色	〃	〃
45		162	〃	〃	〃	(14.9)	(4.5)		〃	〃	タタキ	〃
46		166	〃	〃	鉢	(10.8)	(6.0)		〃	黄橙色	ハケメ･ヘラミガキ	ハケメ･ヘラミガキ
47		165	〃	〃	高坏		(3.3)		砂粒･雲母含む	灰白色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
13-48		151	ＳＫ11	弥生土器	〃		(6.1)		砂粒含む	灰白色･橙色	〃	不明
49		145	〃	〃	〃		(16.0)	(4.2)	細砂粒含む	黄橙色	ハケメ	ハケメ
50		147	〃	土師器	甕	(16.6)	(3.5)		〃	灰白色	ヨコナデ	不明
51		146	〃	〃	〃	(13.2)	(4.5)		砂粒含む	橙色	ヨコナデ	ヘラミガキ
52		148	〃	〃	〃		(5.0)		〃	灰白色･灰白	ハケメ	ナデ
53		149	〃	〃	壺	(12.7)	(5.5)		砂粒･雲母含む	橙色	ヘラミガキ	ハケメ
54		150	〃	〃	鉢	(4.9)	3.2		細砂粒含む	灰白色	ナデ	ナデ
55		219	〃	黒色土器B	椀	(16.2)	(4.0)		〃	黒灰色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
56		218	〃	〃	〃		(3.0)		〃	褐色･黒灰色	〃	〃
57		220	〃	〃	〃		(6.0)		〃	黒色	〃	〃
58		221	〃	黒色土器A	〃		(5.3)		〃	黒灰色･黒色	〃	〃
14-59		87004952	ＳＥ12	弥生土器	壺	(19.5)	(3.6)		砂粒多く含む	橙色	ハケメ	ハケメ
60	25-25	334	〃	〃	〃	(24.5)	(8.4)		砂粒含む	灰白色	〃	〃
61		321	〃	〃	〃	(23.5)	(14.1)		砂粒多く含む	〃	〃	ナデ
62		4947	〃	〃	鉢	(10.0)	(4.7)		〃	黄橙色	〃	〃
63	25-26	320	〃	〃	〃	10.6	6.5		砂粒含む	灰黄色	〃	〃
64	25-27	333	〃	〃	壺	11.9	10.3		〃	黄橙色	〃	〃
65		4946	〃	〃	鉢	(13.6)	(3.5)		細砂粒含む	灰黄褐色	ナデ	〃
66		323	〃	〃	甕	(13.4)	(13.0)		砂粒含む	灰白色	ハケメ	ハケメ
67		4948	〃	〃	〃	(30.9)	(4.9)		砂粒多く含む	灰白色･褐灰色	〃	〃
68		4951	〃	〃	〃	(21.4)	(6.6)		砂粒含む	灰白色･黄橙色	〃	〃
69		322	〃	〃	〃		(8.0)		砂粒多く含む	灰白色	〃	〃
70		4949	〃	土師器	〃	(15.0)	(4.8)		〃	黄橙色	ヨコナデ	ヘラミガキ
71		331	〃	弥生土器	鉢	7.3	3.7		細砂粒含む	褐灰色	ナデ	ナデ
72		332	〃	〃	〃	7.6	3.8		〃	黄橙色	〃	〃
15-73		4904	ＳＤ06			(18.2)	(8.3)		砂粒含む	灰白色	ハケメ	ハケメ
74		4917	〃	〃	〃	(22.7)	(8.8)		砂粒多く含む	灰白色･黒褐色	〃	〃
75		4918	〃	〃	甕	(23.8)	(5.2)		砂粒含む	灰白色	〃	〃
76		4907	〃	〃	〃	(20.0)	(5.4)		〃	灰白色･黒褐色	ナデ	ナデ
77		4919	〃	〃	〃	(29.8)	(7.4)		砂粒多く含む	黄褐色	ハケメ	ハケメ
78		4911	〃	〃	〃	(20.0)	(4.9)		砂粒含む	灰白色	〃	〃

Tab.2　出土土器観察表２

Fig-図番号	ＰＬ番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
15- 79		87004912	ＳＤ06	弥生土器	甕	(18.8)	(5.0)		砂粒多く含む	灰褐色･黄橙色	ハケメ	ハケメ
80		4906	〃	土師器	〃	(15.4)	(5.7)		〃	褐灰色	ナデ	ヘラケズリ
81		4914	〃	弥生土器	壺	(10.4)	(3.7)		〃	灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ
82		4922	〃	〃	〃		(5.5)		〃	〃	〃	〃
83		4925	〃	〃	〃		(5.3)		〃	褐灰色	〃	〃
84		4905	〃	〃	〃	(11.8)	(7.5)		砂粒含む	橙褐色	ナデ	ナデ
85		336	〃	〃	甕		(6.4)	12.4	砂粒多く含む	〃	ハケメ	ハケメ
86		4929	〃	土師器	高坏		(5.8)	9.3	砂粒含む	〃	ナデ	ヘラナデ
87		4936	〃	弥生土器	甕		(4.2)	5.9	砂粒多く含む	橙褐色･褐灰色	〃	ナデ
88		4926	〃	〃	壺		(3.3)		〃	灰白色	〃	〃
89		4924	〃	〃	鉢	(9.8)	4.3		砂粒含む	褐灰色	〃	〃
90		4961	〃	〃	壺	2.9	3.2		細砂粒含む	淡褐色	ヘラケズリ	ナデ
16- 92		90000154	ＳＤ20	土師器	〃	(27.0)	(10.1)		砂粒多く含む	灰白色	ナデ	ナデ･ヘラケズリ
93		156	〃	〃	〃	(26.3)	(7.8)		砂粒含む	〃	ハケメ	不明
94	27-39	87000327	〃	〃	〃	5.1	2.9		〃	〃	〃	〃
96	27-45	90000157	〃	〃	甕	(12.2)	(4.1)		砂粒･雲母含む	〃	ナデ	ナデ･ヘラケズリ
97		158	〃	〃	壺	(14.8)	(3.7)		砂粒含む	〃	ハケメ	ハケメ
98		155	〃	〃	〃	(28.6)	(5.2)		精良	〃	ヨコナデ	ヨコナデ
99		337	〃	〃	鉢	(25.8)	8.0		砂粒含む	〃	不明	ハケメ
17-101	26-29	172	ＳＤ21	〃	坏	(13.6)	3.8	9.8	〃	橙色	ナデ	ナデ
102		171	〃	〃	〃		(4.4)	(8.8)	〃	〃	〃	〃
103		173	〃	〃	椀	(14.4)	6.5	(6.8)	〃	淡橙色	〃	〃
104		169	〃	〃	坏	(11.2)	3.2	(5.3)	細砂粒含む	灰白色	〃	〃
105	26-30	170	〃	〃	〃	(13.2)	3.3	(8.8)	〃	〃	〃	〃
106		168	〃	〃	皿	(15.5)	2.5	(13.0)	〃	〃	〃	〃
107		174	〃	青磁	椀		(3.0)		精良	釉調:オリーブ灰色 胎土:灰白色	―	―
18-108		88000402	包含層	弥生土器	甕	(41.5)	(5.8)		砂粒･小石含む	灰白色	ハケメ	ハケメ
109		404	〃	〃	〃	(43.3)	(7.7)		〃	〃	〃	不明
110		407	〃	〃	〃	(55.9)	(17.4)		〃	黄橙色	〃	ハケメ
111		401	〃	〃	〃	(56.6)	(5.4)		〃	灰白色	〃	〃
112	26-33	87000274	〃	〃	〃	26.7	37.6	9.0	砂粒含む	褐灰色	〃	ナデ
19-113		272	〃	土師器	〃	(24.3)	(24.2)		〃	黄橙色･褐灰色	タタキ	〃
114		273	〃	〃	〃	26.7	(31.3)		〃	〃	〃	ハケメ
115		263	〃	〃	〃	14.6	(17.1)		〃	黄橙色	ハケメ	ヘラケズリ
116	26-34	262	〃	〃	〃	16.3	24.5		〃	橙褐色	〃	〃
117		264	〃	〃	壺	(16.6)	(28.0)		〃	黄橙色･褐灰色	〃	〃
20-118		4735	〃	弥生土器	〃	(44.1)	(4.4)		〃	橙色	〃	不明
119		4732	〃	〃	〃	(24.8)	(3.8)		〃	〃	ナデ	ナデ
120		4726	〃	〃	〃	(20.0)	(6.8)		砂粒･雲母含む	橙褐色	ハケメ･リナデ	〃

Tab.2　出土土器観察表３

Fig-図番号	ＰＬ番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
20-121		87004730	包含層	弥生土器	壺	(44.1)	(4.4)		砂粒含む	橙褐色	ハケメ	不明
122		4731	〃	〃	〃	(26.3)	(5.4)		〃	黄橙色	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ
123		4722	〃	〃	〃	(22.4)	(5.2)		細砂粒・雲母含む	橙褐色	不明	不明
124		4489	〃	〃	〃	(21.0)	(4.6)		砂粒含む	橙色	ハケメ・ナデ	ヨコナデ
125		4720	〃	〃	〃	(19.5)	(5.5)		〃	〃	不明	不明
126		4728	〃	〃	〃		(5.7)		〃	灰白色・橙色	〃	〃
127		4457	〃	〃	〃	(19.8)	(2.9)		細砂粒含む	灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ
128		4698	〃	〃	〃	(22.0)	(4.6)		砂粒含む	橙褐色	ハケメ	ハケメ
129		4700	〃	〃	〃	(24.1)	(6.9)		砂粒・雲母含む	灰白色	ハケメ	不明
130	26-35	4738	〃	土師器	〃		(4.2)	(9.4)	砂粒含む	〃	不明	不明
131		4699	〃	弥生土器	〃	(17.4)	(5.2)		〃	〃	ナデ	ナデ
21-132		4727	〃	土師器	〃	(50.0)	(11.0)		〃	〃	ハケメ・ナデ	ハケメ・ヘラナデ
133		4451	〃	〃	〃	(23.0)	(5.5)		〃	黄橙色	ハケメ	ハケメ
134		4723	〃	〃	〃		(4.3)		〃	灰白色	ナデ	ナデ
135		4728	〃	〃	〃		(5.7)		砂粒・雲母含む	灰白色・黒褐色	ハケメ	〃
136		4450	〃	〃	〃	(43.2)	(10.1)		砂粒含む	黄橙色	〃	ハケメ
137		4902	〃	〃	〃	(20.4)	(5.4)		〃	〃	ナデ	ナデ
138		4449	〃	〃	〃	(17.5)	(10.3)		砂粒多く含む	〃	〃	〃
139	26-36	259	〃	〃	〃	10.8	19.2		砂粒含む	〃	ハケメ	ナデ・ヘラケズリ
140		4448	〃	〃	〃	(26.3)	(9.9)		砂粒多く含む	灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ
141		4453	〃	〃	〃	(14.6)	(4.2)		〃	橙色	〃	〃
142		4447	〃	〃	〃	(13.1)	(6.2)		砂粒含む	褐灰色	〃	〃
22-143		265	〃	弥生土器	鉢	(20.7)	13.8		〃	淡褐色	ハケメ	不明
144	27-37	268	〃	〃	〃	(24.2)	12.3		砂粒多く含む	黄橙色	〃	ナデ
145	27-38	260	〃	〃	〃	16.5	(15.0)		砂粒含む	〃	〃	ハケメ
146		269	〃	〃	〃	12.5	8.5		〃	褐灰色	〃	ナデ
147	27-39	266	〃	〃	〃	(8.8)	5.5		〃	黄橙色	ナデ	〃
148	27-40	270	〃	〃	〃	15.2	10.2		〃	橙褐色	ナデ	タタキ・ハケメ
149		4688	〃	〃	〃	(25.1)	8.2		砂粒・小石含む	黄橙色	〃	ハケメ
150		4719	〃	〃	〃	(22.1)	7.3		砂粒・雲母含む	〃	タタキ	ナデ
151		4690	〃	〃	〃	(16.2)	(5.8)		砂粒含む	〃	不明	ヘラナデ
152		4689	〃	〃	〃	(25.2)	(5.8)		砂粒・小石含む	〃	ハケメ	ナデ
153		89007329	〃	〃	〃	(33.8)	13.4		砂粒含む	灰白色	〃	ハケメ
23-154		87004490	〃	〃	高坏	(31.4)	(5.0)		〃	淡褐色	ナデ	ハケメ
155		4491	〃	〃	〃	(37.0)	(5.2)		砂粒多く含む	黄橙色	〃	ナデ
156		4472	〃	〃	〃	18.3	(15.3)		砂粒含む	〃	ハケメ	〃
157	26-31	271	〃	〃	〃	21.1	18.6	15.2	〃	橙色	ヘラミガキ	ハケメ・ヘラミガキ
158		4471	〃	〃	〃		(14.6)	(14.2)	〃	〃	ハケメ	ハケメ・ナデ
159		4438	〃	〃	〃		(9.1)	(13.6)	〃	灰白色	〃	ハケメ・ヘラミガキ

Tab.2　出土土器観察表４

Fig-図番号	ＰＬ番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	調整 外器面	内器面
23-160		87004702	包含層	弥生土器	器台		(5.2)		砂粒含む	橙褐色	ヘラナデ	ナデ･ハケメ
161		4708	〃	〃	〃	(28.0)	(19.0)	(31.6)	砂粒･石含む	灰白色	〃	ヘラナデ
162		4707	〃	〃	〃		(11.9)	(24.0)	砂粒･雲母含む	黄橙色	ハケメ	ハケメ･ナデ
163		267	〃	〃	〃		(4.2)	(29.5)	砂粒含む	〃	ハケメ	ヨコナデ
164	26-32	261	〃	〃	〃	7.6	7.5	(10.2)	〃	赤橙色	ヘラミガキ	ヘラナデ･ナデ
165		4427	〃	〃	〃	8.6	(4.3)		〃	灰褐色	〃	ナ デ
24-166		4709	〃	須恵器	蓋		(1.9)		〃	〃	ナデ	〃
167		4713	〃	〃	坏	(13.4)	8.5	(3.5)	砂粒･石含む	灰白色	〃	〃
168		4697	〃	〃	〃		(2.6)		砂粒含む	灰 色	〃	〃
169		4711	〃	〃	〃		(2.9)	(11.0)	〃	灰褐色	〃	〃
170		4444	〃	土師器	皿	9.4	1.8		〃	橙 色	〃	〃
171		4710	〃	〃	〃	(11.0)	1.6	(8.7)	細砂粒含む	黄橙色	〃	〃
172		4712	〃	〃	〃		(2.7)	(8.1)	砂粒･雲母含む	〃	〃	〃
173		4715	〃	黒色土器B	椀		(1.5)	(7.6)	〃	黒 色	ヘラミガキ	ヘラミガキ
174		4714	〃	〃	〃		(1.6)	(6.9)	〃	〃	〃	〃
175		4716	〃	白磁	〃		(2.9)		精 良	釉調:オリーブ灰色 胎土:灰白色	―	―
25-176		4718	〃	弥生土器	鉢	(3.8)	1.8		細砂粒含む	灰褐色	ナ デ	ナ デ
177	27-42	329	〃	〃	〃	(3.8)	2.2		砂粒含む	灰白色	〃	〃
178	27-43	330	〃	〃	〃	(3.4)	2.0		〃	〃	〃	〃
179		328	〃	〃	〃	6.0	3.8		細砂粒含む	〃	〃	〃
180		4694	〃	〃	〃	(8.1)	5.0		砂粒･石含む	黄橙色	〃	〃
181		4696	〃	〃	〃	(7.3)	4.6		砂粒含む	〃	〃	〃

Tab.2　出土土器観察表５

Fig-図番号	ＰＬ番号	県遺物登録番号	出土地点	器種	胎土	法量(cm)	色調	焼成	調整
15-91		87004937	ＳＤ06	土 錘	砂粒少し含む	長さ(6.0)､径2.9	灰白色	善	ナ デ
16-95		89007231	ＳＤ20	丸 玉	細砂粒含む	径1.9	黒 色	〃	〃
25-182		87004717	包含層	鏡模造品	〃	径4.8、厚さ1.7	黄橙色	良	〃
183		89007232	〃	不明土製品	〃	長さ(5.1)､径1.1～1.6	黄褐色	善	〃
184	27-44	7230	〃	丸 玉	〃	径2.7～2.9	灰白色	〃	〃
185		7227	〃	土 錘	〃	長さ(7.5)､径1.8	〃	〃	〃

Tab.3　出土土製品観察表

Fig-図番号	ＰＬ番号	県遺物登録番号	出土地点	器　種	法　量（cm）	重　量（g）
16-100		89007511	ＳＤ20	木製品（鋤）	長さ（14.5）、最大幅（13.9）、厚さ0.8	―
26-186	28-46	87004294	包含層	石錘	長さ13.4、幅7.5、厚さ2.0	310
187	28-47	89007418	〃	〃	長さ8.0、幅4.6	190
188		87004293	〃	敲石	長さ（9.4）、幅8.3、厚さ4.8	415
189	28-48	4289	〃	砥石	長さ（17.3）、幅3.4、厚さ1.9	155
190		4292	〃	〃	長さ7.4、幅6.4、厚さ3.9	265
191		4295	〃	〃	長さ（6.7）、幅（7.2）、厚さ1.8	102
192		4290	〃	〃	長さ12.0、幅6.0、厚さ3.8	262
193	28-49	4291	〃	〃	長さ8.2、幅4.7、厚さ1.6	90

Tab.4　出土木製品・石製品観察表

Ⅳ．結語

本調査区では、主な遺構として溝跡４条・溝状遺構３条・土壙14基・井戸１基が検出され、遺構の時期としては、弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭と奈良～平安時代の二時期に分かれる。このうち、出土遺物より弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭に位置付けられるものとして、ＳＤ06・20、ＳＫ01・03・04・07・09・10・14・16・18・22、ＳＥ12がある。また、出土遺物はないものの、ＳＤ05はＳＤ06と形態・主軸方位に類似点があり、ほぼ同時期と考えられる。弥生時代後期終末～古墳時代前期の土器編年について、諸富町域については種浦修[1]、佐賀平野東部域については蒲原宏行[2]の研究成果がある。本調査区における当該期の遺構出土土器は、概ね種浦編年の諸富Ⅲ期ａ・Ⅲ期ｂ（蒲原編年の惣座１式）[3]から諸富Ⅳ期ｃ（夕ヶ里式）相当するものと思われるが、遺構出土遺物の多くが小破片である上、遺物包含層と重複することによる混入品の存在も予想され、遺構毎の細かな時期決定は困難である。この点を踏まえた上で、出土遺物のうち、時期的に主体を占めるものから判断するとすれば、弥生時代後期終末のものとしてＳＫ01・03・04・09・12・14・16、古墳時代前期初頭のものとしてＳＫ07・10・18・20・22が挙げられ、ＳＤ05・06については弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭の時期幅を考えたい。

奈良～平安時代に位置付けられるものとしては、ＳＫ11・ＳＤ21がある。ＳＫ11からは黒色土器Ａ・Ｂ類の小片が出土しており、ほぼ10世紀代、またＳＤ21は出土土師器より８世紀前半から９世紀前半と考えられる。

出土遺物のうち、弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭については、遺構・遺物包含層より畿内系、山陰系などの外来系土器が出土している。このうち、主体を占めるのは畿内系土器の一群である。器種の内訳としては、畿内系土器は甕（７・32・43～45・50・80・96・115・116）、

壺(117・132～135)、鉢(８・10・11)、高坏(23)、器台(164・165)に分かれる。また、山陰系土器は甕(92)、壺(136～142)がみられる。この他、特徴的な遺物としてＳＫ11出土の墨書土器がある。本例は８世紀前半に位置付けられる土師器坏身であり、底面に「門守」の字が描かれる。近隣での類例として、「門」の字については、太宰府史跡第87次調査ＳＤ2340[3]出土土師器坏蓋、「守」については筑後国府第44次調査ＳＤ19804[5]出土の須恵器鉢に「守第」の字がみられる。

今回の調査では弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭、奈良～平安時代の生活の痕跡が確認されたが、古墳時代中期～後期にかけては空白期と言える。このことは、現在までに発掘調査が行われた諸富町内における各遺跡の状況とほぼ合致している。しかしながら、当調査区では近接する畑田遺跡・唐人廟遺跡に比べ遺構の密度も希薄であることから集落の縁辺部の感があり、遺跡の性格を把握し得たとは言い難い。調査区内の遺構の分布状況からも、遺跡の主体はより北側にあるものと考えられよう。

註１）種浦修「土師本村遺跡」諸富町文化財調査報告書第7集 諸富町教育委員会 1989
２）蒲原宏行「古墳時代初頭前後の土器編年」佐賀県立博物館･美術館調査研究書第16集 佐賀県立博物館･美術館 1991
３）蒲原氏は種浦編年のⅡ期の一部からⅢ期bまでを同一様式とし、惣座1式に対応するとしている(蒲原1991同上)。
４）石松好雄他「大宰府史跡」昭和59年度発掘調査概報 九州歴史資料館 1985
５）松村一良「筑後国府跡」昭和55年度発掘調査概報 久留米市文化財調査報告書第26集 1981

原の町西遺跡

遺跡名：原の町西遺跡（略号ＨＮＭ）
所在地：神埼郡千代田町大字境原字七本松

Ⅰ．遺跡の立地と環境

原の町西遺跡が位置する千代田町は、広大な沖積層地帯である佐賀平野に含まれ、町全域が標高4.0m前後の平坦低地となっている。縄文時代中期より始まった有明海の海退作用は、縄文時代晩期末～弥生時代初頭頃には標高4.0m付近まで海岸線を後退させており、千代田町域における生活の痕跡もほぼ当該期を初現とする。

縄文時代晩期末まで溯るものとして、託田西分貝塚・上黒井貝塚(2)において夜臼式土器が出土しているが、本格的な集落の出現は弥生時代に入ってからである。弥生時代には城原川・田手川など河川の自然堤防上、あるいは潮干帯の砂州上に貝塚を中心とした集落が形成される。このうち、弥生時代前期のものとして託田西分貝塚・託田上地貝塚・上黒井貝塚・貴別当神社遺跡(3)が挙げられる。弥生時代中期から後期にかけても貝塚主体の集落形成は継続し、中期には高志神社遺跡・大石貝塚(4)・姉遺跡(7)が、また後期には下直鳥貝塚(5)が営まれる。特に姉貝塚では中期前半に溯る遺構から銅鉾・銅剣鋳型が出土している。弥生時代後期～古墳時代前期にかけては、黒井遺跡(6)・黒井八本松遺跡(8)で後期の溝跡・土壙が検出された他は集落の数も減少し、柴尾遺跡(9)・佐賀市柴尾橋下流遺跡(10)など、より南に集落の分布が移るようである。この時期は南方の諸富町域において多くの集落が形成され始める頃にあたり、当該地への集落の移動も十分考えられよう。

古墳時代中期から奈良時代、平安時代前期にかけては遺跡の密度は希薄になり、断片的に遺構・遺物が確認されているに過ぎない。

中世には周囲に濠を巡らせた環濠集落が各所に形成される。当該期の調査例は比較的多く、姉遺跡・黒井遺跡・黒井八本松遺跡・崎村遺跡・余江西二本松遺跡(11)他各遺跡で平安時代後期から鎌倉時代の溝・井戸等が検出されているが、集落の全容を明らかにするまでは至っていない。このうち余江西二本松遺跡では、多くの大陸系青磁・白磁の他に神出窯・魚住窯系の須恵質片口鉢が多量に出土し、北方の神埼町荒堅目遺跡、三田川町下中杖遺跡と共に、当地の交易

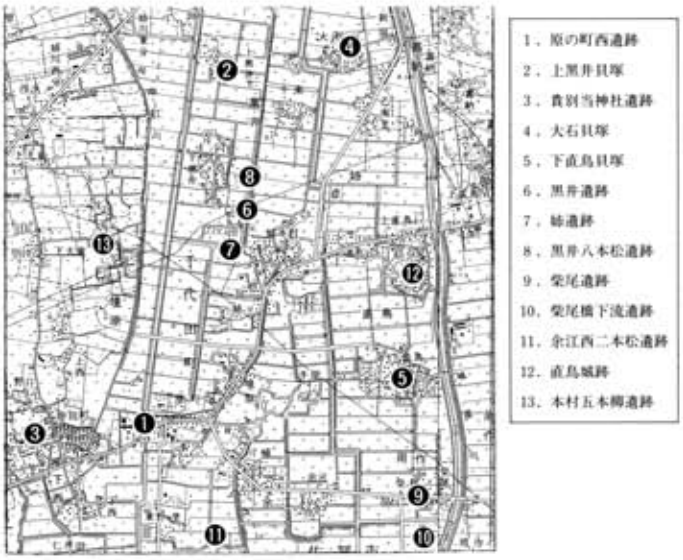


Fig.1　周辺遺跡分布図（1/50,000）

の活発さが窺える。南北朝期にはこれらの環濠集落は城郭としての機能を有し、犬塚氏の居城である直鳥城(12)・崎村城などが築かれる。

近世には、町南部の一部が蓮池藩に含まれる他は、全域が佐賀藩の所領となる。原の町西遺跡の所在する境原の集落は、長崎街道の境原宿にあたるともに、「佐嘉駅」への本街道と「寺井津(佐賀郡諸富町)」への脇往還との分岐点にあたる。この時期に関しての遺構・遺物は、本遺跡の他、余江西二本松遺跡・本村五本柳遺跡(13)などで若干確認されているのみである。

原の町西遺跡は神埼郡千代田町大字境原字七本松に所在する。調査区は周囲をクリークに隔てられた島状地の西端部にあたり、現況では標高約3.0mの水田となっている(Fig. 2)。調査区の北にはクリークを挟んで南北60m、東西50m程の島状地があるが、明治21年に調整された地籍図[1]上ではこの南北の島はもともとひとつであり、調査区南側付近で橋を渡して繋がっていたことが窺える。この島状地のすぐ南東は、東方から延びてきた長崎街道が直角に折れて南下する部分にあたり、調査対象地はほぼ境原宿に含まれる。

註1）徳富則久 編「佐賀県地籍図集成(三) 肥前国 神埼郡二」佐賀県文化財調査報告書第109集 1992

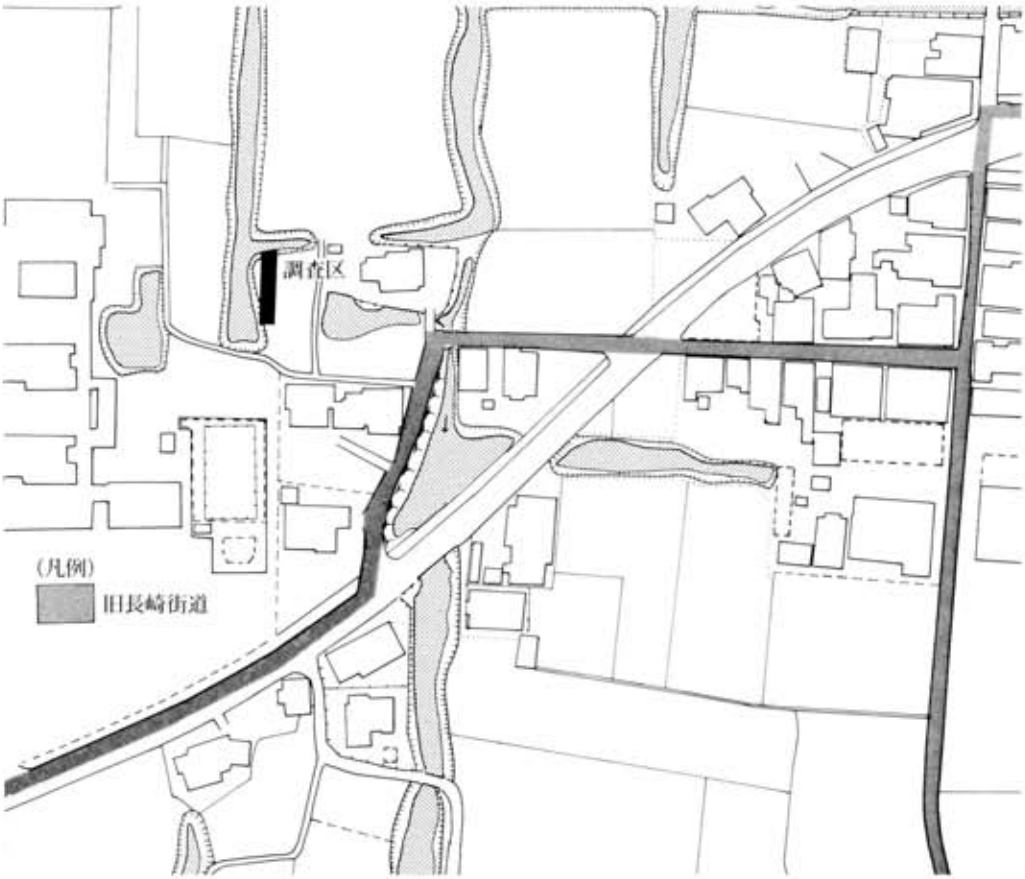
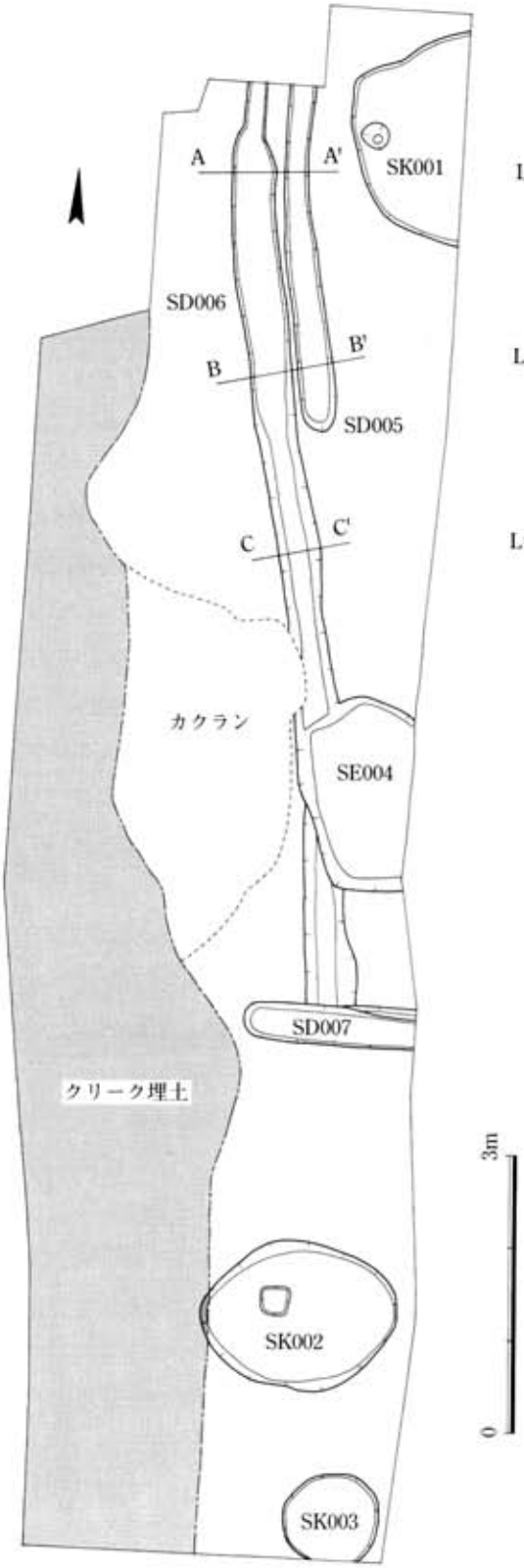
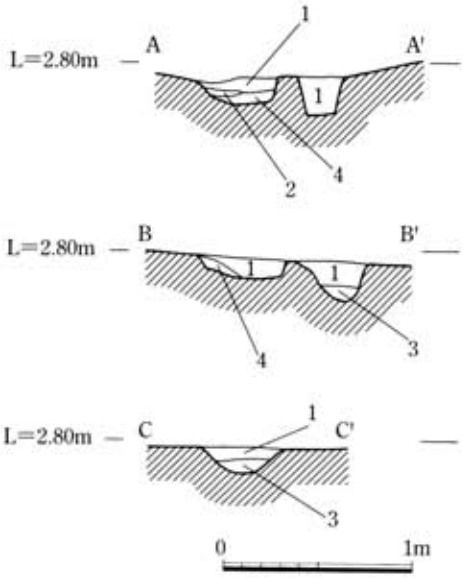


Fig.2　調査区位置図（1/2,000）





1．暗灰褐色土
2．凝固した鉄分からなるブロック
3．灰黒褐色土
4．黄灰褐色土

Fig.4　SD005・006土層図（1／40）

Fig.3　原の町西遺跡遺構配置図（1/80）

Ⅱ．調査の概要

発掘調査は導水路付設によって掘削を受ける約62m²を対象に行われた。検出された遺構は溝３条、土壙３基、井戸１基、出土遺物としては近世の陶磁器・土師器・瓦質土製品がある。また、調査区内の西側約1/3では、近世以降に埋め立てたと思われるクリークの埋土が確認された。以下に遺構・遺物毎に述べる。

１．遺構 （Fig.3～8）

ＳＫ００１土壙 調査区北東隅に位置する。全体の1/2が調査区外であり、平面形は不明である。現況では、南北2.2m、東西1.1mの規模を持ち、深さは0.1mと浅い。西壁と接して、平面円形の小穴が認められる。小穴の径は約0.3m、土壙底面からの深さ0.25mである。出土遺物はない。

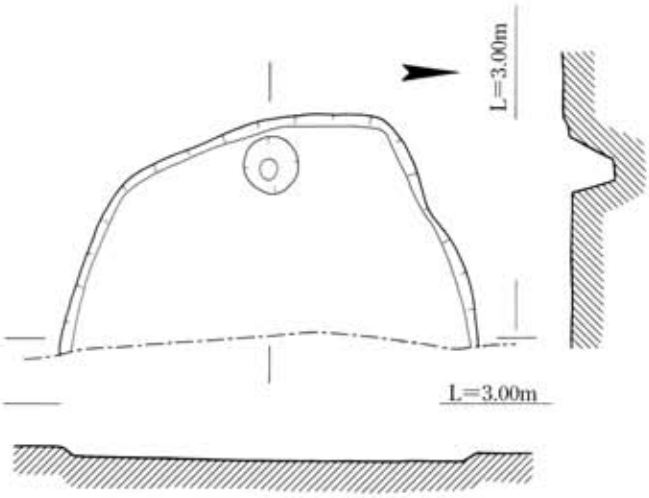


Fig.5 SK001土壙（1/40）

ＳＫ００２土壙 調査区南側に位置する。平面形は東西に主軸を持つ楕円形をなし、長軸2.1m、短軸1.6m、深さ0.2～0.25mである。中央やや西寄りに平面方形の小穴があり、小穴の一辺は約0.3m、深さは0.4mである。小穴のすぐ東側には、炭化物を含んだ焼土が0.6×0.3mの範囲で広がる。出

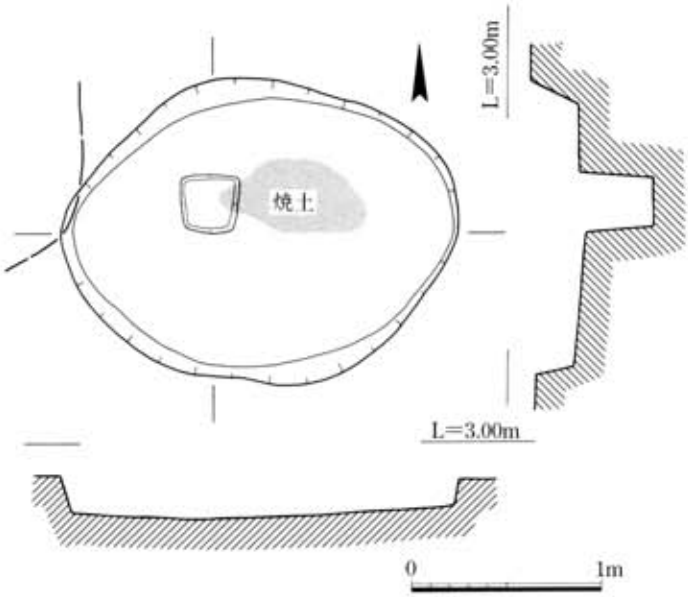


Fig.6 SK002土壙（1/40）

土遺物としては、染付・瓦質土器・土師器の小・細片が十数点出土したのみである。

ＳＫ００３土壙　調査区南東隅に位置する。南側が一部調査区外に含まれるが、平面形はほぼ正円と考えられ、直径1.0～1.1m、深さは0.05mと浅い。出土遺物としては、染付盃・青磁椀・瓦質土器・土師器の小・細片が十数点出土した。

ＳＥ００４井戸　調査区中央、東よりに位置する。ＳＤ005と重複するが前後関係は明らかではなく、併存した可能性も考えられる。遺構の東側、全体の約1/4程度が調査区外に含まれるが、平面形は南北に長軸を持つ隅丸長方形と推定される。現況で南北2.1m、東西1.3mの規模を持ち、深さ約65cm程で湧水したため、完掘はしていない。平面形・深さより、井戸と考えられる。Ⅰ層上面及びⅢ層中より、陶磁器・土師器・瓦質土製品が出土している。

ＳＤ００５，００６，００７溝　(Fig.3,4)　ＳＤ005・006は南北方向に、ＳＤ007は東西方向に伸びるもので、いずれも幅0.4～0.5mの直線的な溝である。これらは、その配置状況からも一連の遺構である可能性が高く、区画溝としての性格が考えられる。このうち、ＳＤ005は調査区内で長さ約10m程が確認されており、北側は調査区外から伸びてきて、南端はＳＤ007と直交する。また、ＳＤ006はＳＤ005と約0.05～0.1mの間隔を開けて同一方向に伸びるが、調査区北端より3.6m程で途切れている。ＳＤ007はＳＤ005を切る形で直交し、さらに東へのびるものと考えられ、調査区内では長さ約1.9mが確認されている。深さはＳＤ005が約0.15m、ＳＤ006が約0.2m、ＳＤ007が約0.1～0.3mとやや差があるものの、いずれも断面形はほぼ逆台形をなす。いずれの溝からも埋土中より多量の鉄滓が出土している。

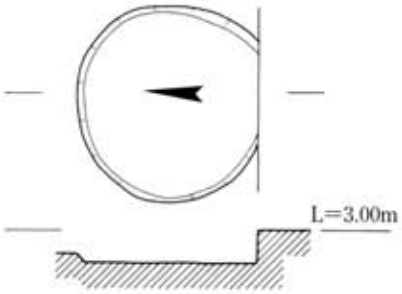


Fig.7　Sk003土壙（1/40）

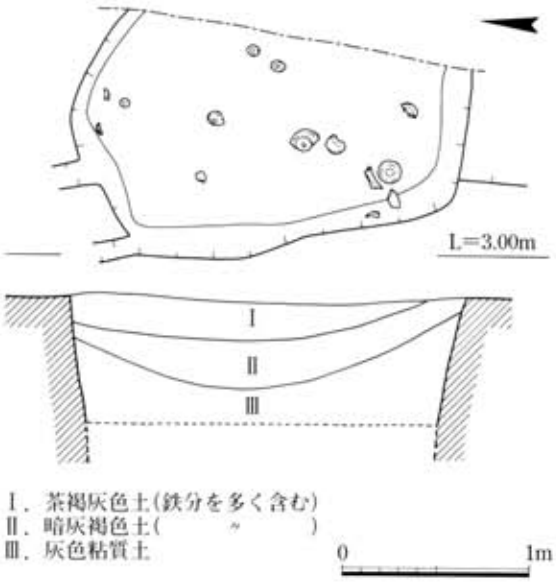


Fig.8　SE004井戸（1/40）

2．遺物（Fig. 9）

本遺跡ではＳＫ002・003土壙、ＳＥ004井戸、ＳＤ005～007溝より遺物が出土している。このうち、溝からは鉄滓のみの出土である。また、ＳＫ002・003土壙からは染付・青磁・土師器・瓦質土器等が出土しているが、いずれも小・細片であり、図化できるものは皆無であった。よ

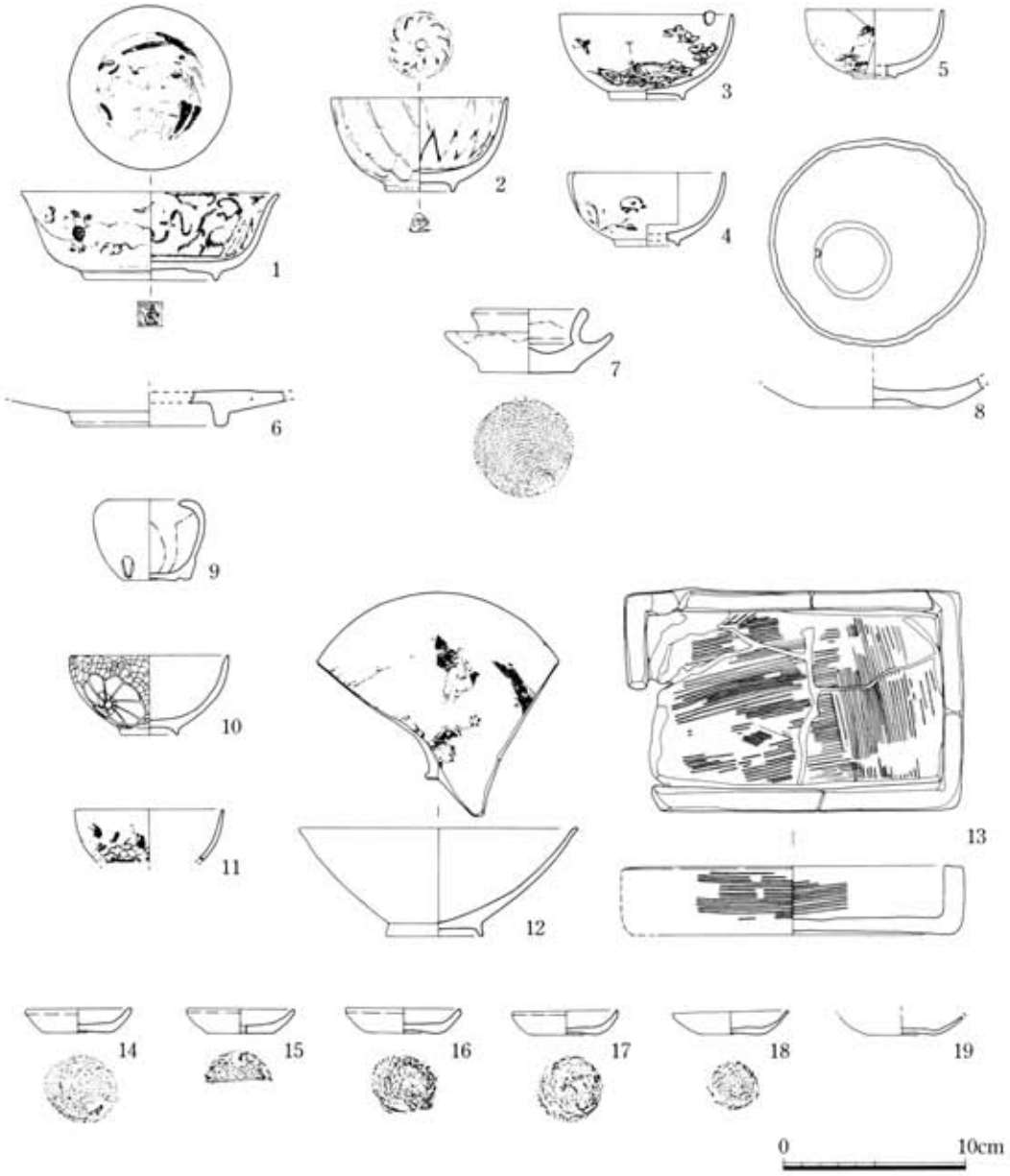


Fig.9　SE004出土遺物（1/4）

Fig-図番号	PL番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	色調 胎土	釉調	備考
9-1	30-6 8-10	93003695	Ⅰ層上面	磁器	碗	14.3	4.9	7.4*	白色	乳灰白色	1/2欠損
2	30-7 9	3698				9.7	3.8	5.1*	〃	〃	1/5 〃
3	30-11	3697				9.5	4.8	4.1*	〃	乳白色	1/4 〃
4	30-12	3696				(8.7)	4.0	3.6*	〃	〃	3/5 〃
5	30-13	3694		▼	▼	(7.4)	3.7	2.2*	〃	〃	1/2 〃
6		3693		陶器	Ⅲ		2.0	8.8*	暗茶褐色	暗緑色	1/6残存,内面に胎土目
7	30-14	3692			燭台	6.4	3.5	5.2	暗赤褐色	暗茶褐色	1/3欠損
8		3699	▼	▼	Ⅲ		(1.7)	6.9	淡赤褐色	―	底部のみ,灯明皿に転用
9	31-15	9100704	Ⅲ層	磁器	香炉	3.2	4.4	2.2	黄白色	青緑色	完形
10	31-16	703			碗	(8.7)	3.2	4.3*	乳白色	―	1/2弱欠損
11		702				(8.1)	(2.9)		白色	乳白色	1/5残存
12	31-17	701		▼	▼	(15.3)	6.0	5.4*	〃	〃	1/3 〃
14	31-22	705		土師器	Ⅲ	5.8	1.3	3.8	橙褐色	―	完形
15	31-19	706				(5.9)	1.3	3.8	〃	―	1/2弱欠損
16	31-20	707				(6.3)	1.4	3.5	〃	―	1/2残存
17	31-21	708				5.8	1.3	3.7	〃	―	口縁部1/3欠損
18		709				6.3	1.2	3.0	黄橙色	―	ほぼ完形
19		710	▼	▼	▼		1.1	3.7	灰褐色	―	1/2残存

法量のうち、＊は高台径、口径の( )は復元径、器高の( )は残存値を示す。

Fig-図番号	PL番号	県遺物登録番号	出土地点	種別	胎土	法量(cm)	色調	焼成	調整その他
9-13	31-18	9100711	Ⅲ層	瓦質土製品	砂粒少量含む	長さ18.6,幅12.3,高さ3.9	暗褐色	良	内外器面ハケメ

Tab.1　ＳＥ004出土遺物観察表

ってここでは、ＳＥ004井戸出土遺物についてのみ述べる。

ＳＥ004からはⅠ層上面及びⅢ層より、陶磁器・土師器・瓦質土製品が出土した他、紙製品(和紙)が検出されている。

１～８はⅠ層上面からの出土。１～５は磁器である。1はⅢで、胴部は開きぎみに立ち上がり、口縁部は端反りする。蛇の目高台であり、外面には二本の染付線が廻り、内面には二重方形枠に渦福字銘が入る。文様は見込みに山水文、内面には宝文、外面には葡萄文が廻る。２～５は碗である。２は胴部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。見込みには二重の染付線に区切られる形で菊文が描かれ、内外面には網目文が施される。高台内面には花押風の銘が入る。３～５は胴部から口縁部にかけて緩やかに湾曲するもので、３は外面に山水文が描かれる。また、口縁部には焼成時に溶着した破片の付着がみられる。４は外面に牡丹文が、５は山水文が描かれる。６は唐津系のⅢの底部である。削り出しの高台を持ち、緑釉がかかる。見込みには胎土目が残る。７は燭台。口縁部及び受け部に鉄釉がかかる。底部は糸切り離しである。８

は皿、一部に灰釉が残る。腰部より上を欠いているため器形は不明であるが、円形に打ち欠いて灯明皿に転用しているようである。底部には貼り付け高台の剥離痕が認められる他、内面には焼成時の重ね目と高台の溶着片が残る。

9～19はⅢ層中からの出土。9～12は磁器である。9は小型の青磁香炉でほぼ完形。腰部から口縁部にかけて開きながら立ち上がり口縁部は内湾する。10～12は碗。10は未製品で釉掛けまでで終わっている。外面には菊花散らし文が描かれる。11は口縁部から体部の一部が残るもの。外面に牡丹文が描かれる。12は漱碗である。おはぐろ用で、内面に唐児遊戯図が描かれている。13は瓦質土製品である。全体にハケ目が施されており、外面は剥離が激しい。口縁部にはミガキを施す。この瓦質土製品の本来の用途は不明であるが、全体に水漏れ防止の為と考えられる炭素吸着が認められる。14～19は土師器の小皿。法量はほぼ等しく、平均で口径6.0cm、器高1.3cm、底径3.6cmに収まる。いずれも底部は糸切りで、19のみ糸切り後ナデ消しを行う。

Ⅲ．結語

今回の調査では、溝4条、井戸1基、土壙3基が確認されたが、調査範囲が狭く、また出土遺物も少量であったため、遺跡の性格を明らかにするにはやや情報不足である。検出された遺構のうち、ＳＤ005～007は直角に折れる直線的な溝であり、北東側を意識した区画溝と考えられるが、時期については不明である。溝と重複するＳＥ004井戸からは、陶磁器、土師皿、瓦質土製品などが出土した。このうち、完形品は土師皿及び青磁香炉のみで、その他は欠損品であり、井戸内に廃棄したものと考えられる。出土遺物の時期はほぼ18世紀中頃に位置付けられ、器種の内訳は、碗・皿の他、灯明皿などの生活雑器がある他、特徴的なものとして青磁香炉(9)や燭台(7)など鎮檀具的な性格を持つものが認められる。

この他、遺跡の性格を推し量るひとつの手掛かりとして、調査区の東約十数mの地点に墓石と思われる石造物がある。前面には「中興霊樹元髓如徹主盟 墓」、南側側面には「修学門第中造建之」の銘文がみられ、戒名や「修学門第中」の文字などより寺院との関係が窺え、宗門に関係する人々によって建てられた僧侶の墓と思われる[1]。この墓石は、その形態より18世紀以降のものと考えられ[2]、時期的にＳＥ004出土遺物と関連する可能性がある。調査区及びその近辺には寺院が存在したとの所伝があり、ＳＥ004より出土した鎮檀具的性格を持つ遺物も寺院との関連性を示唆するものと言えよう。しかし、明治22年に調整された地籍図[3]中には調査区周辺に寺院の記載はなく、明治13年に編集された神埼郡村史[4]にも位置的に該当するものは見当たらない。おそらく、近世末期までに既に廃寺となっていたか、あるい境原集落の大部分が明治7年(1874年)の佐賀の乱において焼失した際に、共に失われてしまったのであろうか。

註1，2）神埼町教育委員会桑原幸則氏のご教示による。
3）徳富則久 編「佐賀県地籍図集成（三）肥前國 神埼郡二」佐賀県文化財調査報告書第109集 1992
4）抜粋「神埼郡村史」1890,「千代田町誌」千代田町教育委員会 1974

報告書抄録

ふりがな	よしのがりいせき・おおたほんむらいせき・はらのまちにしいせき
副書名	吉野ヶ里遺跡・太田本村遺跡3区・原の町西遺跡
書名	筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書4
巻次	1
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第123集
編著者名	市川浩文・川副麻理子・高瀬哲郎
編集機関	佐賀県文化財課
所在地	〒840-70 佐賀市城内一丁目一番五九号　TEL（0952）25-7232
発行年月日	西暦1994年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
吉野ヶ里 [吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区]	神埼郡三田川町 大字田手字三本杉	413232	2014 3013	33°19'14"	130°23'17"	19860414～ 19860531	900	導水路建設
[吉野ヶ里地区Ⅴ区]	神埼郡神埼町大字鶴 字馬郡	413216	2081	33°19'18"	130°23'07"	19850826～ 19851031	320	〃
太田本村3区	佐賀郡諸富町 大字大堂字太田	413038	2001	33°14'04"	130°21'02"	19860916～ 19861022	1,720	〃
原の町西	神埼郡千代田町 大字境原字七本松	413224		33°15'34"	130°21'14"	19910305～ 19910307	62	〃

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
吉野ヶ里 [吉野ヶ里丘陵 地区Ⅲ区]	集落・墳墓	弥生	溝	3条	弥生土器・石器	弥生後期の環濠集落の一部 弥生中期の列埋葬 弥生後期の瀬戸内系土器の出土
			甕棺墓	12基	甕棺	
			石蓋土壙墓	1基		
			土壙墓	2基		
			竪穴住居	1基	弥生土器	
			土壙	5基	弥生土器	
		古代	土壙	1基	須恵器・土師器	
			溝	1条	須恵器・土師器	
[吉野ヶ里地区Ⅴ区]	集落	弥生	土壙	2基	弥生土器	古墳時代後期の集落の一部
		古墳	竪穴住居	1基	土製品	
			掘立柱建物	4棟		
			土壙	1基	須恵器	
		中世	土壙	2基	土師器・瓦器	
太田本村3区	集落	弥生～古墳	溝	2条	弥生土器・土師器・木器	古墳時代初頭前後の集落の一部 「門守」の墨書土器出土
			土壙	10基	弥生土器・土師器	
			井戸	1基	弥生土器・土師器	
		古代	溝	1条	土師器	
			土壙	1基	土師器・黒色土器	
原の町西	集落	近世	溝	3条		
			土壙	3基		
			井戸	1基	陶磁器・土師器・瓦質土製品	

図　　版

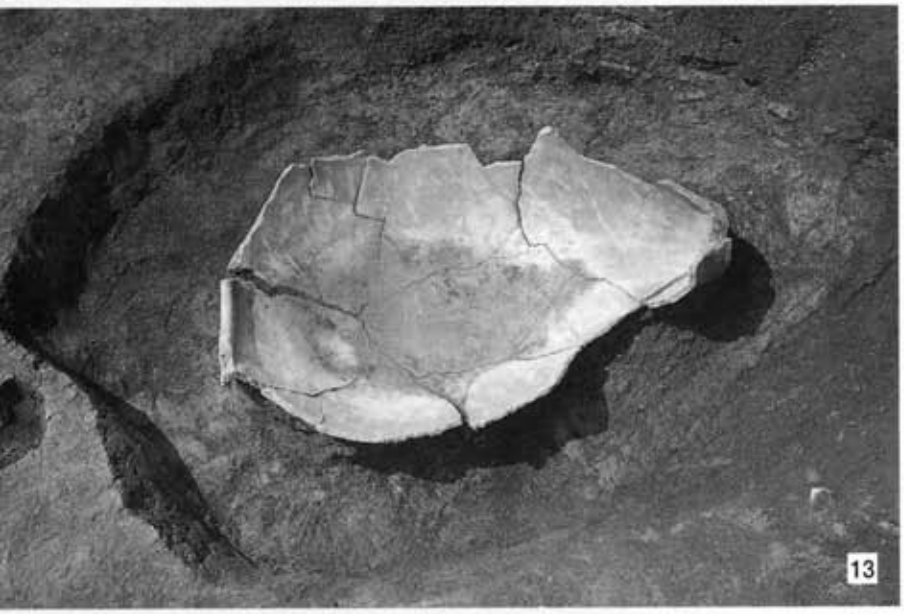
吉野ヶ里遺跡

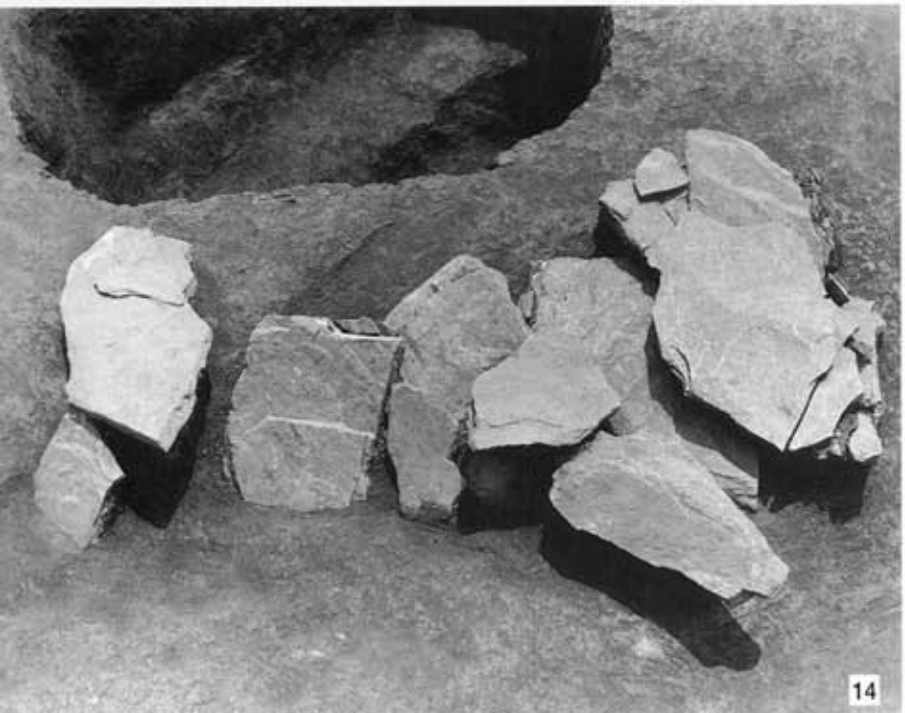
吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区（吉野ヶ里丘陵遺跡）

1．調査区全景（西より）
2．調査区西端部（北より）
3．ＳＤ040溝（西より）
4．ＳＤ040溝（北より）

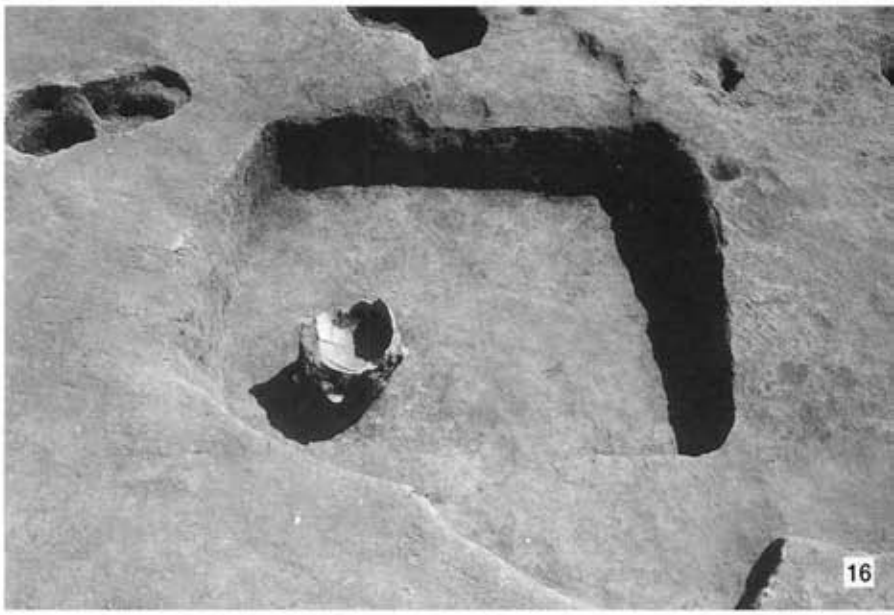
5．ＳＤ040溝
　床面直上出土遺物（南より）
6．ＳＤ035溝（南東より）
7．ＳＢ031竪穴住居（南東より）

8．ＳＤ052溝（北より）
9．ＳＪ049・050甕棺墓（北東より）
10．ＳＪ039甕棺墓（北東より）
11．ＳＪ043・044甕棺墓（南西より）





12. ＳＪ039甕棺墓（北東より）
13. ＳＪ047甕棺墓（北より）
14. ＳＰ041石蓋土壙墓（西より）



15. ＳＫ020土壙（南々東より）
16. ＳＫ025土壙（東より）
17. ＳＫ030土壙（南より）

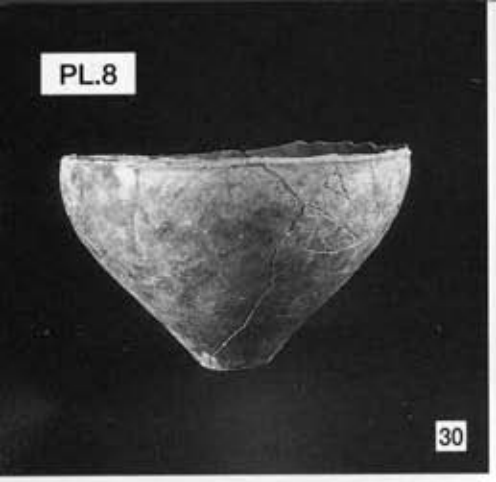
PL.6

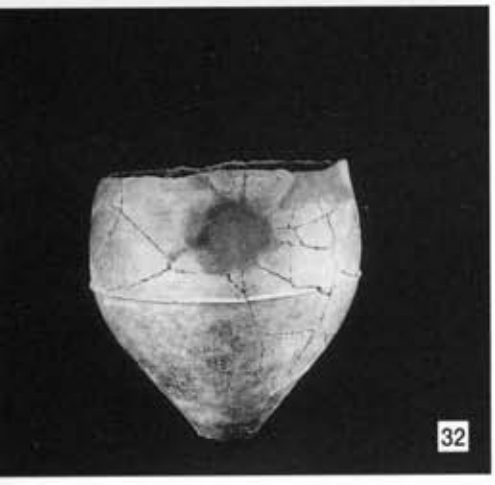
18. ＳＪ039甕棺（上）
19. 〃　（下）
20. ＳＪ043甕棺（上）
21. 〃　（下）
22. ＳＪ047甕棺（上）
23. 〃　（下）
すべて縮尺は1／18

24. ＳＪ049甕棺（上）
25. 〃　（下）
26. ＳＪ038甕棺（上）
27. 〃　（下）
28. ＳＪ045甕棺（下）
29. ＳＪ048甕棺（下）

24,25,28は１／18
26,27,29は１／15

PL.8



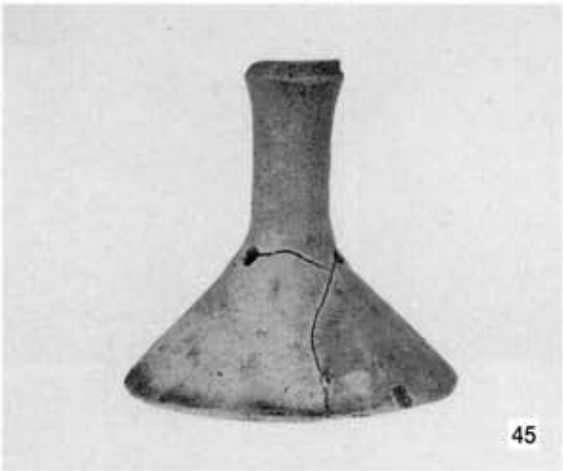


30．ＳＪ044甕棺（上）
31．　〃　（下）
32．ＳＪ055甕棺（下）
33～37はＳＤ035
040出土遺跡

33～32が１／15
33～37が１／３

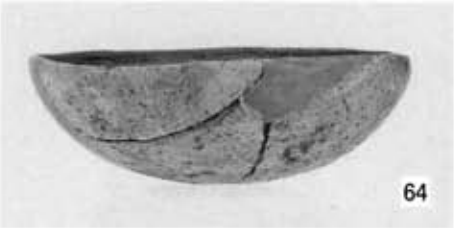
38～40・42は1／5
44は1／4
41・43は1／3

S D035・040溝出土遺物

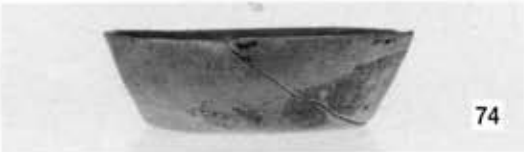


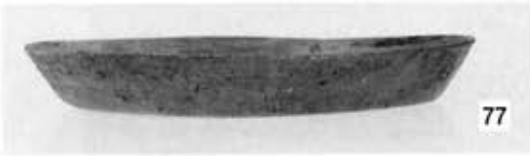
ＳＤ035・040出土遺物（45～46・50は１／４、他は１／３）

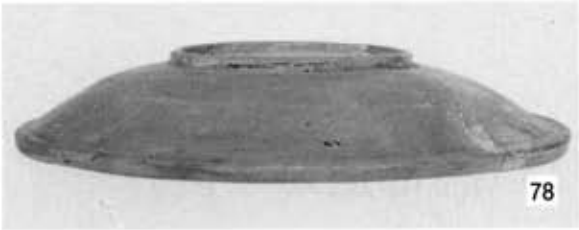
ＳＤ035・040出土遺物（すべて１／３）

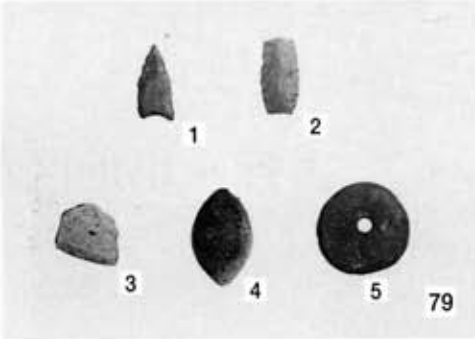


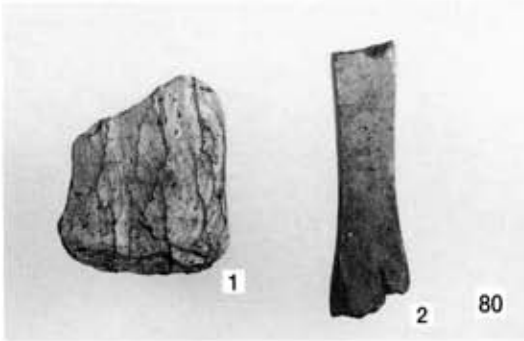
ＳＤ040・052、ＳＫ030出土遺物





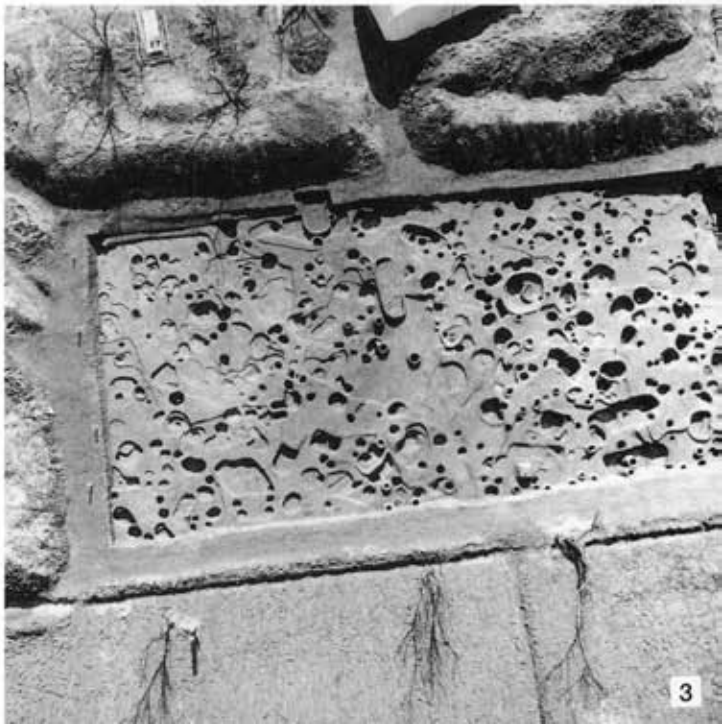




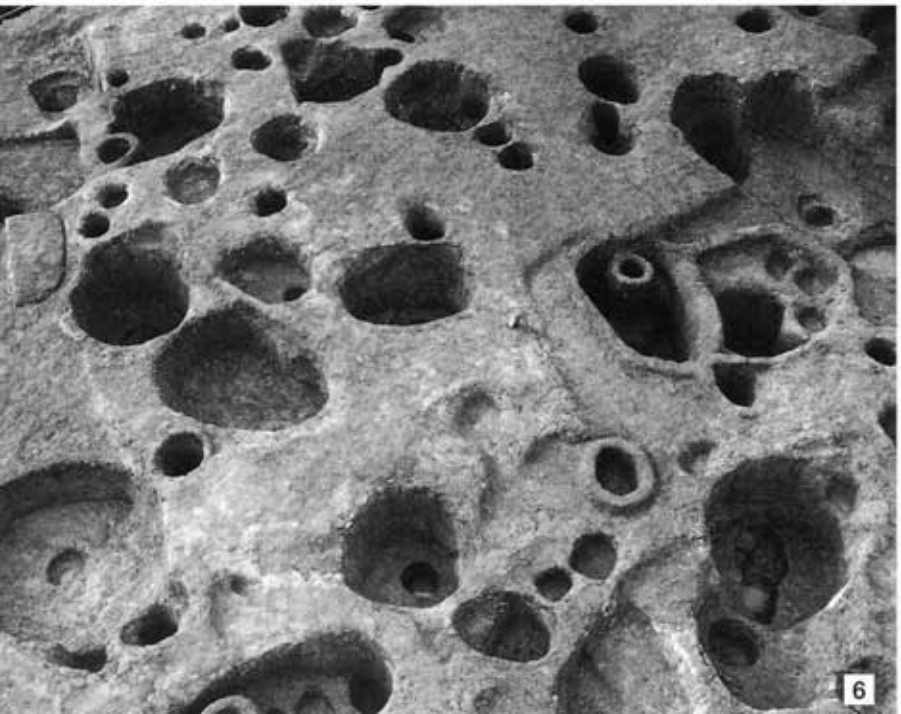


ＳＫ021出土遺物、石器・土製品

吉野ヶ里地区Ⅴ区(馬郡遺跡４区)

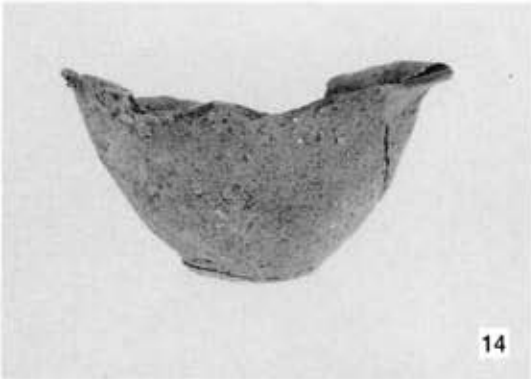


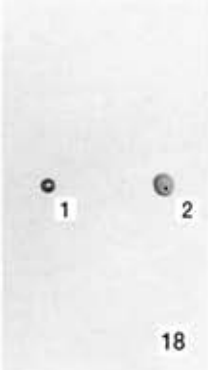
1．調査区遠景（北西より）
2．調査区遠景（南より）
3．調査区全景（上方が南）



4．調査区全景（西より）
5．調査区全景（東より）
6．ＳＢ015掘立柱建物
（北西より）

7．ＳＢ015掘立柱建物
　柱穴内横木跡（北西より）
8．ＳＫ001土壙（西より）
9．ＳＢ013竪穴住居（南より）



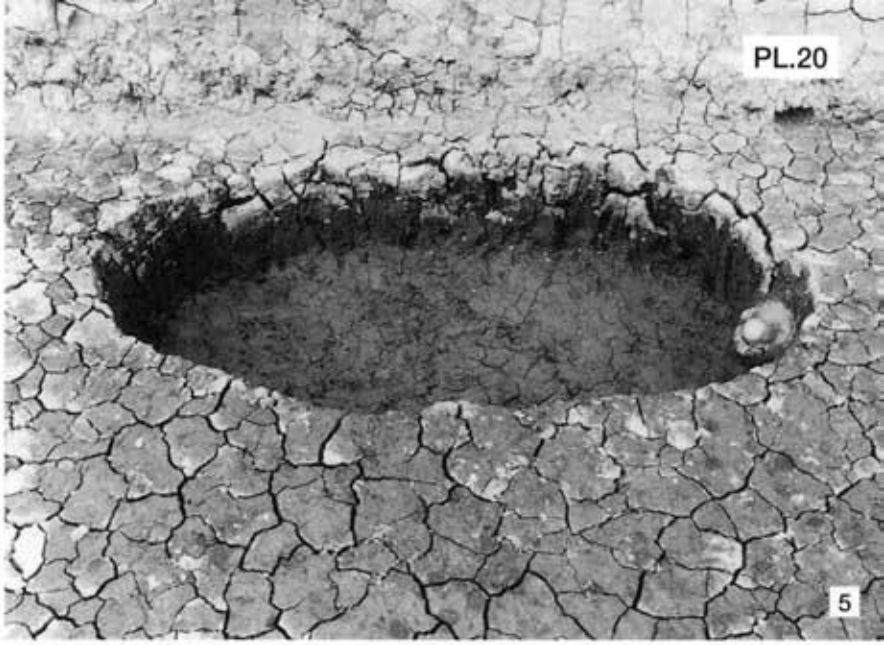


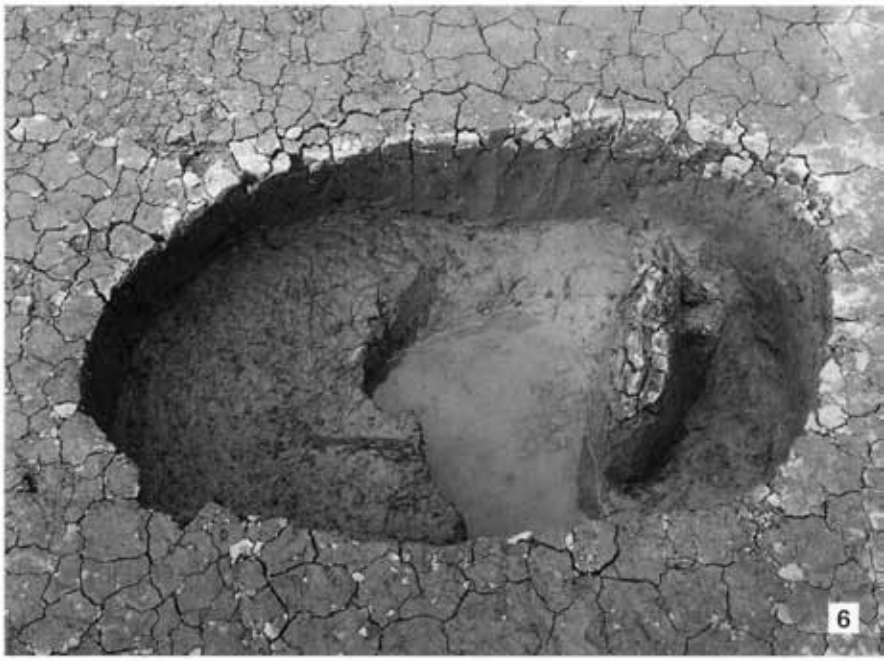
吉野ヶ里地区Ⅴ区出土遺物（14・16・17は１／４、他は１／３）

太田本村遺跡３区

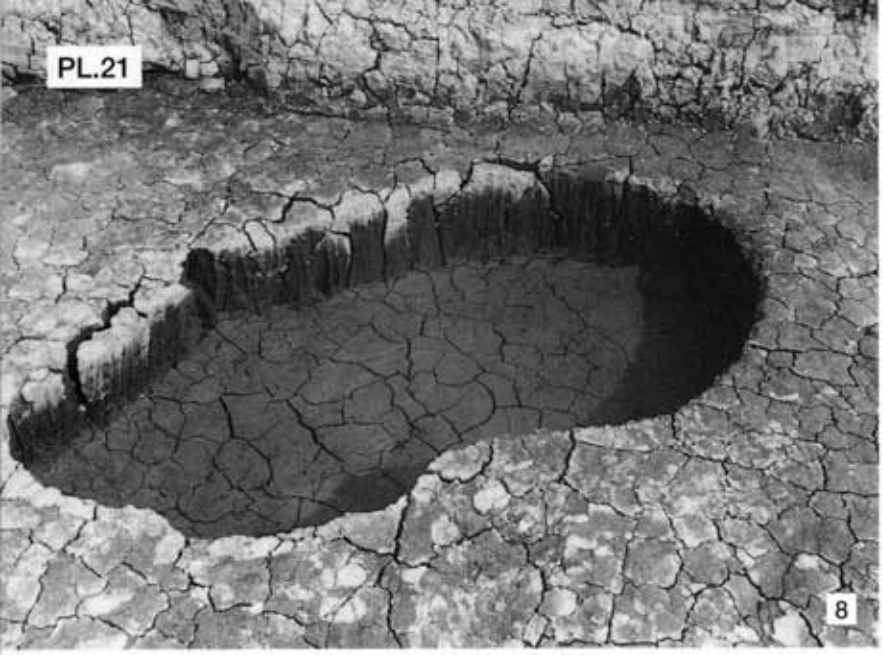
1．遺跡遠景（調査前）〈南から〉
2．　同　（調査後）〈東から〉

3．遺跡全景〈北から〉
4．　同　〈南から〉

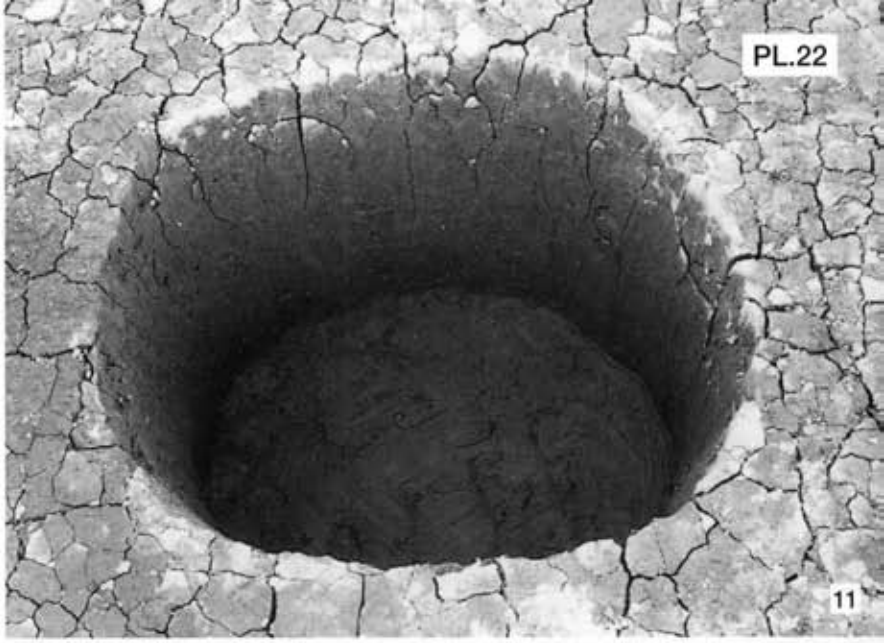


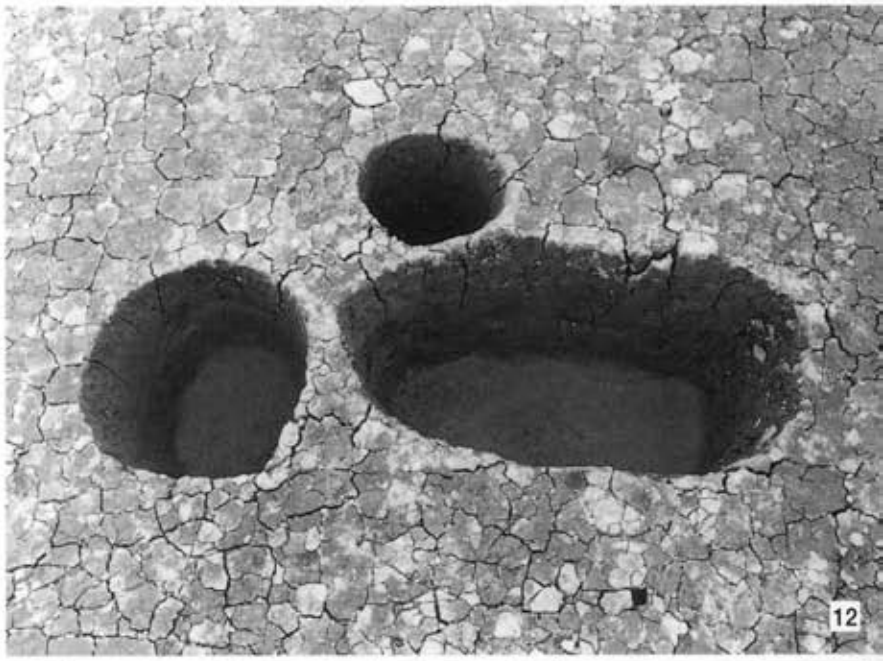


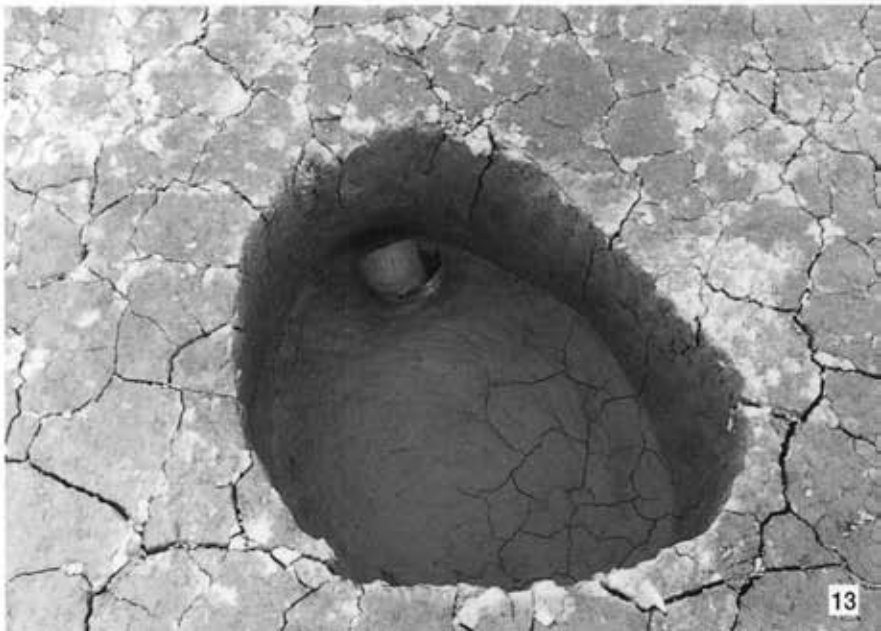
5．ＳＫ01土壙（南から）
6．ＳＫ04土壙（南から）
7．ＳＫ07土壙（西から）



8．ＳＫ09土壙（南西から）
9．ＳＫ10土壙（北東から）
10．ＳＫ11土壙（北から）

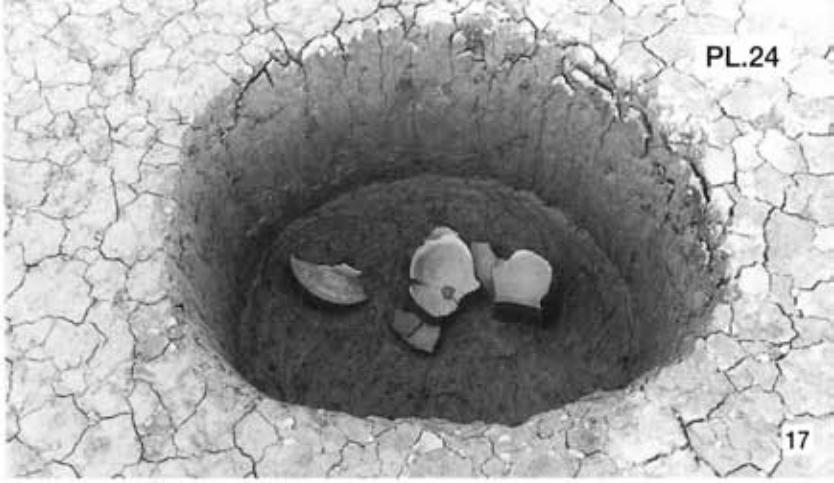




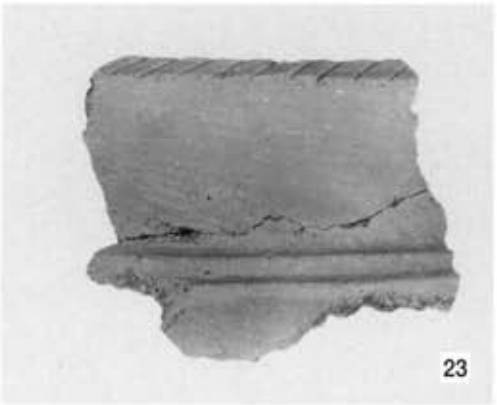


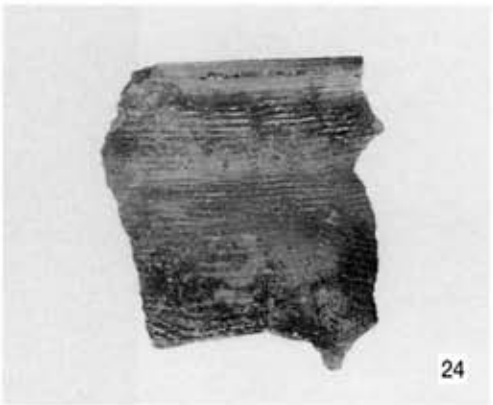
11. ＳＫ14土壙（南から）
12. ＳＫ15土壙（東から）
13. ＳＫ17土壙（東から）

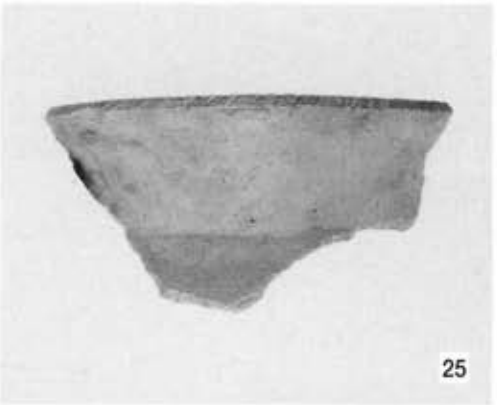
14. ＳＫ18土壙（北から）
15. ＳＫ22土壙（南から）
16. ＳＫ19土壙（西から）



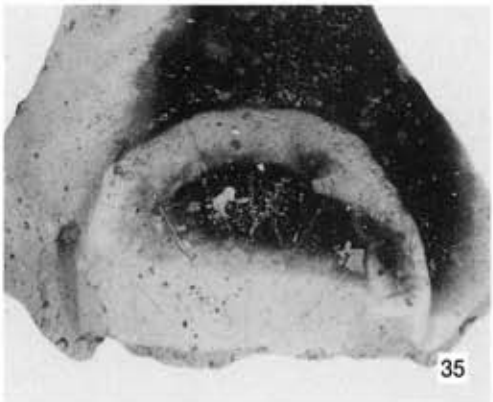
17. ＳＥ12井戸跡
（南から）
18. ＳＥ12井戸跡
（東から）
19. ＳＤ20溝跡
（西から）
20. ＳＤ20溝跡
木器出土状況



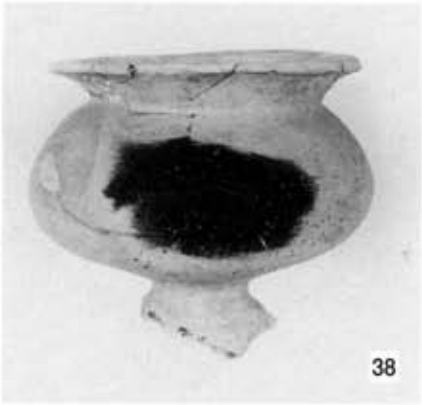


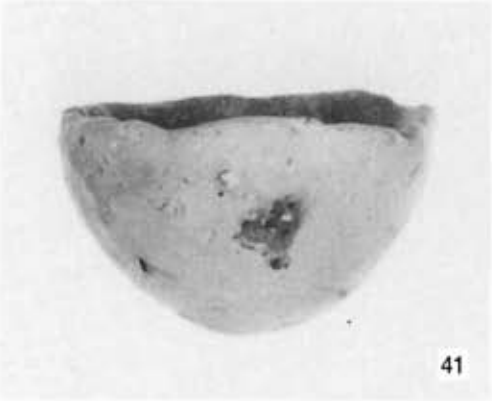


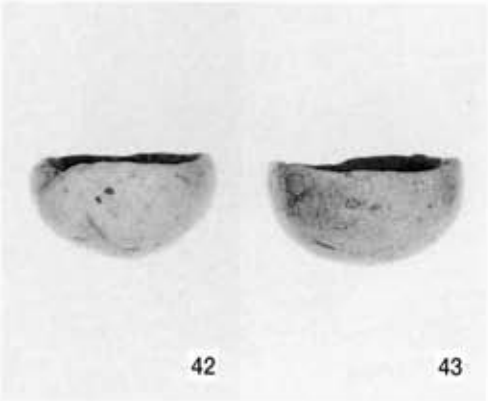
21．ＳＫ01土壙出土遺物　　22．ＳＫ16土壙出土遺物
23．ＳＫ18土壙出土遺物　　24,28．ＳＫ22土壙出土遺物
26,25,27,ＳＥ12井戸跡出土遺物

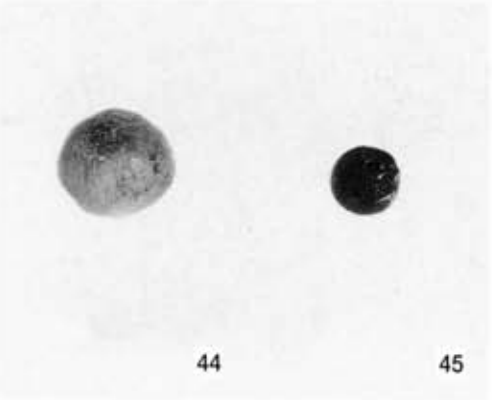


29,30．ＳＤ21溝跡出土遺物
31～36．遺物包含層出土遺物







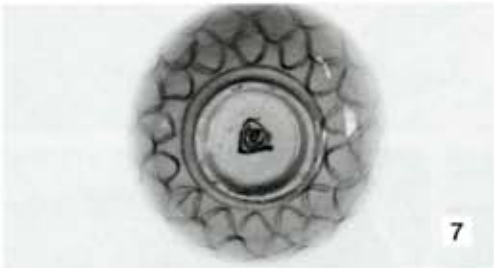


41,45．ＳＤ20出土遺物
37～40,42～45．遺物包含層出土遺物

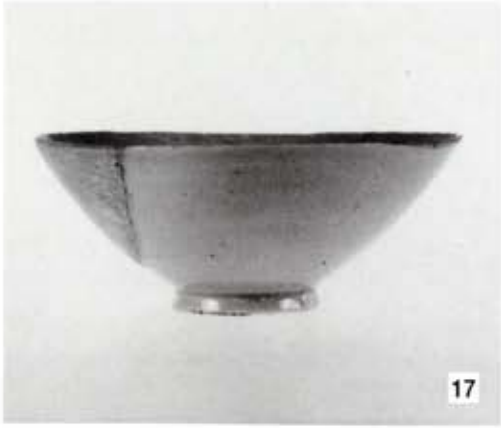
46～49
遺物包含層出土遺物

原の町西遺跡

1．遺跡全景（北東より）
2．ＳＫ01土壙（西より）
3．ＳＫ02土壙（北より）
4．ＳＥ04井戸（西より）
5．ＳＤ05・06溝（北より）



1～14．ＳＥ004出土遺物
6は10の内面、8は底面
7は9の底面



15～22. ＳＥ004出土遺物

佐賀県文化財調査報告書　第123集
筑後川下流用水事業に係る

文化財調査報告書４

吉野ヶ里遺跡
吉野ヶ里丘陵地区第Ⅱ区（吉野ヶ里丘陵遺跡）
吉野ヶ里地区Ⅵ区（馬郡遺跡４区）
太田本村遺跡３区
原の町西遺跡

平成６年３月28日印刷
平成６年３月30日発行

編集
発行　佐賀県教育委員会文化財課
佐賀市城内１丁目１－59

印刷　日之出印刷株式会社
佐賀市高木瀬西６丁目